
田中太郎 IN HUNTER×HUNTER

まめちゃたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田中太郎 IN HUNTER×HUNTER

【Nコード】

N1577V

【作者名】

まめちゃたろう

【あらすじ】

いきなりHUNTER×HUNTERの世界に飛ばされた田中太郎の物語。

へたれでチキンなヒッキー田中太郎は30才にもなるというのに友達の一人もいない。そんなダメ人間太郎がこの世界でどういう風に成長をしていくのかを描いた物語です。

作者もへたれでチキンなので合わないと思ったらブラウザバックお願いします。

活動報告のタイトルに簡単な更新予定をのせています

タイトル仮題をはずし、田中太郎 IN HUNTER×HUN
TERとしました

第一話の前書きにある注意書きを必ずお読み下さい。

第1話（前書き）

初めて投稿します。

HUNTER×HUNTERの2次ですので、いずれは流血表現などが出てくるかと思えます。

恋愛要素は後半に出てきます。

主人公は万人受けするような人格ではありません。

男らしくない所が多々あります。

読んでいて殴りたくなる、もしくは気持ち悪くなるかもしれません。

作者は基本的に、過去創作した話に手を加える事は、完結までは致しません。

手直しより、完結を目指します。

完結したら、修正を加えて行こうと考えています。

1話と最新話では多少の成長をしてるはず。たぶん。

それでは、つたない作品ですがよろしく願います。

上記の説明で嫌な予感がした方には、ブラウザバックをお勧めします。

9月6日に上記に修正を加えました。

第1話

「どーしてこーなった…」

道行く人並みを見ながら俺こと田中太郎30歳は今までの事を振り返る

いつものように朝食を食べ、弁当を作りスーツを着て仕事に向かうとドアを開けて外に出たはずだった。

何にも変わったことはなかった

なのになんで

「こんなところにいるんだ

ー!!!」

どこまでも続く草原

見渡す限り人どころか動物さえも見当たらない

ポケットに突っ込んである携帯をみてるが、アンテナは立っていない

頭が真っ白になったがとりあえず動かないと状況は変わらない

「人、人、とにかく人探してここどこか聞かないと…んで駅の間所でも聞こう」

もしかしたら北海道あたりかもしれない

太郎が住んでいた東京にこんな広大は草原があるとは思えない

ゴルフ場かもしれないという希望的観測が頭をかすめる

「ぜひ夢落ち希望。それなら寝坊無断欠勤のコンボもありにする…ん？」

ドドドドドドつと轟音が響く

その場に立ち止まり目をすつと細めて先を見つめる

「なんだあの集団…」

100人前後の男たちが必死にポールにしがみつき何かを争って

るようだ

まさに阿鼻叫喚

普段なら絶対近づきたくはないが今は絶賛迷子中なので恐る恐る近づいてみる

「あのー…すみませんってちよつ！まって！うわ！！」

声をかけると返事の代わりに半死半生の人間らしきものが吹っ飛んできた

ぴくぴくと痙攣しておりどう見ても状態がやばい

「大丈夫ですか！？しっかりして下さい！」

あわててかけより様子を見る

腕と足がありえない方向に折れ曲がっていて腹部からは血がどくどくと流れている

30から40代前後の男性のようだ

慌ててポケットからハンカチを取り出し出血した腹部を抑えて止血にかかると

「声聞こえますか？返事して返事！」

「……うあ…あ」

「ちよつとあんた」

「やばいなーこれ、救急車呼んだほうがいいですよ。おじさん携帯もってないですか？俺のつながらないんですよ」

「そののあんた！話聞きなさいよ！！」

「えっ？」

慌てて後ろをみると金髪の女性が鬼のような形相で仁王立ちしていた

「え？じゃないわよ！何しくさってんの？大事な試験の最中に。許可もなく会場に侵入して受験生助けてんじゃないわよ！」

「あ…えつと…そのすみません。でもこのおじさん死んじやいそうだし」

「そんなのかんけーないわよ！死ぬようならそいつが悪いの。ろく

に修行もせず試験受けに来るんだから」

「いや…でも…あの…」

「あのねええええええ？今は私が試験官なの！私がルールなの！分かったらそこに正座しな！！いいっていうまで動くの禁止」

「了解しました…」

なにがなんだか分からなかったが、この女性に逆らってはいけな
いそれだけは本能でわかった

とりあえず、おじさんの腹部に手を押し当てつつその場に正座する
おじさんは気を失ってしまったようだがりあえずは無事らしい
出血は止まったし、手足は相変わらずだが息はしている

視線を集団にもどすと人数はだいぶ減っていた

よく見るとポールの先に白い旗が何本か立っている

「旗取り？」

「そーよ。正解」

「えらく物騒な旗取りですね」

「これはハンター試験なのよ？物騒であたりまえ」

「ハ…ンター試験…？」

「なーにー？あんた知らずに乱入したわけ？まーいーけどあとで
色々聞かせてもらうから覚悟しておいてね」

ハンター試験とはあのハンター試験だろうか…

「ジン・フリークスさんって知ってます？」

「知ってるけど。あんたジンさん探しにきたの？あんな大物がこん
などこいるわけないじゃない」

バカなのねつと鼻で笑われたが、太郎には聞こえていなかった

『ってHUNTER×HUNTERかよ！』

思わず心の中で突っ込みつつ、これからどうすべきか考える

夢か現実かまだはつきりしないが（太郎はまだ夢落ち希望を捨て

ていない) スタート地点が東ゴールドーや流星街でなかった事に深く感謝する

あんなところでスタートしてたら1時間もしないうちに死ぬ気がする

現在地ははつきりしないが、ハンター試験という色々情報が集まりやすい場所で助かった

地べたにはいつくばって頼めば俺でもできる仕事を紹介してもらえるかもしれない

ともかくにも目の前の試験が終わるまでにでっちあげの身の上話を考えておかねばならない

いきなり異世界から着ましたとか、どこぞの夢小説みたいに言っただけで信じてもらえるわけがない

俺なら絶対信じない。こいつ頭おかしいのかと蔑みの目で見られて放り出されるのが落ちに決まっている

年齢性別名前は本当の事を言っても大丈夫だろうが、出身地などは答えられない

日本によく似たジャポンですといっても市民コードがない以上調べられれば即効ばれる

まずいとこは覚えていませんと記憶喪失のふりをしつつ、家を出て玄関開けたらここでしたと言うしかない

とりあえずこの世界には念があるし起きたことを念のような物と思っ込みませるしかない

念と真っ向から言ってしまうと何でそんな事知っているのかと突っ込まれそうだ

念は秘匿技術のはずだからそれだけ気をつけよう
後原作キャラに会っても驚かないとうにしないと…

ピ　　ーッと後ろに立つ試験官の女性が笛を吹いた

「3次試験終了!」

「あんだ。ついてきなさい」

正座をやめて立ち上がる。足がしびれる前でよかった

「はい…あの」

「なに？」

「お名前お伺いしてもよろしいですか？」

「3次試験官のダナ・コントロールマンよ。遺跡ハンターやってるわ」

「俺はタロウ・タナカと申します」

「タローね。私のことはダナでいいわファミリーネームは嫌いなもの」

「わかりました。ダナさん」

「とりあえずあの飛行船にいくわよ。そこで話聞くから。ちなみに逃げようとしたら殺すからね」

「絶対逃げません」

一般人の俺がハンターから逃げれるわけもないし、逃げるつもりもないがさらつと言われた殺すという言葉に震え上がる

人の命が紙のように軽いHUNTER×HUNTERの世界。余裕ができたなら体を鍛えないとさくつと死にそうだ

案内された部屋につくと2人の男女がいた

一人は黒髪の浅黒い肌をした男というより少年といった方がいいような男性

もう一人はダナさんと同じ金髪のぼんきゅぼんなグラマラス美女

『この人達もハンターなんだろうな』

ビクビクしながらドナさんに促され、ソファに座る

「ダナ、こいつ誰なの？」

「私の試験の最中に乱入してきた奴。話聞こうと思ってつれてきたのよ」

「ふーん」

グラマラス美女にジーツと上から下まで観察される

「弱そうね」

「私もそう思う。名前はタロー・タナカ。タローあんたどうやってここにきたの？」

「タロウであってタローではないんだけどとおもいつつ、俺はしどろもどろに説明する」

「仕事に行こうと思ってドアを開けて外に出たらあの草原にいた事今まで住んでいた場所や親の名前が思い出せない事」

「たぶんなんらかの仕事についてたと思うが、それも思い出せない事」

「すっごい怪しいわ」

「俺もそう思います」

「タロー君でしたっけ。僕はリーシャン・マートといいます。ドアを開けたら草原だったという事ですが」

「その時いつもと違う感じはしましたか？」

「よし来たとは思ったがすぐには答ええない。答えを用意していたと思われては困るので、頭を抑えつつ思い出すそぶりをしてから返答する」

「なんか…ぞわつとしたというか鳥肌が立ったというか…よく覚えてませんが」

「ふーん。アレかしら」

「アレってなんですか？」

「あなたには関係ないわ」

「グラマラス美女に一刀両断にされる。この人絶対性格悪そうだ」

「アレだとして記憶までなくなるものでしょうか」

「どうだろうね こいつ垂れ流しだし。こいつ自身のアレではなさそう」

「とりあえず市民コード検索したらどうかしら？一般市民だったらお家に帰してあげればいいし、犯罪者だったら牢にぶち込めば問題ないと思うわ」

「俺の頭上でどんどん話が進む」

「じゃあリーシャン頼む！私パソコンとかよくわかんないし！」
「いいですよ。タロー君やましい事がなければ何も心配しないでいいですよ。この機械の上に人差し指を乗せて下さい。すぐ終わりますからね」

リーシャンさんすっごいいい人だ、癒し系だ。

ダナさんもグラマラス美女も顔やスタイルはいいが性格はきつつい

「ないですね。戸籍はおるかハンターサイトでさえ情報がひっかかりません」

しばらくして検索していたリーシャンさんが顔を上げる

「なにこいつ流星街のやつなの？」

ダナさんかららみつける様な眼差しを感じ血の気が一気に下がる

「りゅ…流星街ってなんですか…？」

「あなた嘘をついてもしょうがないのよ？正直に答えなさい」

「そういわれても俺わかんないです」

ここが正念場だ

パクノダの記憶を探る様な念がなければ絶対言わなければいけない

「あんた。私らをだまそうとしたってそうはいかないんだよ？」

ダナさんに腕をつかまれギリギリと締め付けられる

「わかんないんです！わからないものはわかんないんです！！」

今まで感じたことのない痛みに耐えつつ繰り返し主張する

「ダナ、かわいそうです。僕の前でそういうことはやめて下さい」

チツとダナさんが舌打ちし、ようやく痛みから解放される

つかまれていた腕は骨折まではしてないようだがヒビくらいは入ってそうだ

動かそうとすると激痛が走る

「じゃあ、その持つてるカバンよこしな。とらないから」

「わかりました」

素直にカバンを渡すと、開けられソファの前のテーブルに逆さにしてぶちまけられた。ちょっとひどい。パソコン壊れてませんように

「これは…」

リーシャンさんが俺の持っていた本を持ち上げ中身をばらばらと見ている

入れっぱなしだった私撰和歌集いわゆる百人一首だ

俺はかなりの活字中毒でカバンの中には他にも色々本をいつも入れてある

通勤の電車の中でもご飯を食べるときも、本が手放せないし活字がなければ生きていけない

大げさだと同僚にはからかわれるが同じ活字中毒の人がいればわかってくれるはずだ

学生の頃は俺は根暗で友達はいなかった

授業中、はては休憩時間、お昼休みまで図書館で借りた本を讀んで過ごしていた

授業が終わった後も司書の先生に追い出されるまで図書館にいたほどだ

『こんな学生生活で友達ができてたらある意味すごい』

高校を卒業し、働きだしてからは生活費以外の給料は本の購入やたまに漫画の読みにいく漫画喫茶代に消えていった

とりあえずHUNTER×HUNTERを讀んでおいてよかった
…結構好きだったし何回も読み返していたから内容はかなり覚えて

いる

年代やハンター文字はうる覚えだがネットで読み漁った夢小説のおかげで原作開始時期のハンター試験が287期だった事は覚えて

いる
余裕ができたなら調べて今がどの時期か調べないと…幻影旅団や原作組みには絶対近づかないでおこう

本音を言うなら見てみたいが一般市民の俺にとって命がなによりも大事だ

原作前ならハンター試験が終わったあたりで天空闘技場のTV中継をチエックすればいいだろう

原作後なら蟻をどうかゴンが倒してくれませよつにと神頼みするしかない

「タロー君はこの本が読めるんですか？」

軽く脳内トリップしているとリーシャンさんから本を差し出されながら質問された

「読めます」

「読んでもらってもいいですか？」

開いてもらってるページから読んでいく

見開き2ページを読み終わるとリーシャンさんから質問攻めをくらった

いわくなんで読めるのか

この本はどこで手に入れたのか

他の本も読めるのか

誰かに翻訳を師事していたのか

など俺の身上調査そっちのけで本に関する質問ばかりである

ダナさんやグラマラス美女はリーシャンさんの勢いに押されてポカンとしている

「タロー君戸籍がないようですし、現時点で住むところも職もないでしょう。僕の所にきますか？」

「え…？」

「ちよつとリーシャン！こんな怪しい奴に何いってんの！」

「僕は古書ハンターをやっています。この本は見たことがありますんしぜひ読みたいんですよ」

リーシャンさん同類だったのか…

いくあてのない俺にとってこの申し出はとてつもなくありがたい
「お願いしますー！」

「あんたも簡単に乗るんじゃないわよ！」

「ダナさんがギヤーギヤー言ってるがそんなの関係ない」

「ダナ、僕がちゃんと監視し教育します。僕は争いごとはあまり好きではありませんがもしタロー君が何か悪事に手を染めてたりしたら僕自身の手で処理します」

処理：殺すって事だろうとは思うがようは悪いことをしなければいいのだ

俺はチキンだし根暗だし犯罪を犯す様な度胸はない

「絶対に迷惑をかけません。お願いします」

「しょうがないわね。リーシャン甘いんだから」

「まっただくだわ」

「手続きは僕がやります。試験前から僕が取っていた弟子で少し問題が起きたので連絡を取るために追いかけてきたという事にしましょう」

「ありがとうございます！」

「じゃあ僕の部屋にいきましょう。その荷物をまとめてついてきてください」

リーシャンさんについていき、個室に入ると俺をベットに座らせリーシャンさんが椅子を持って目の前に座った

「タロー君」

優しい穏やかな声で話しかけられポンと頭に手を乗せられる

「君が何か隠してるだろうことは僕も他の2人にも分かりました」
はっとして顔を上げる

しまった…反応してはいけなかったのに

「僕はそれを責めません。これ以上何もタロー君が話してくれるまでは聞きません」

「リーシャンさん…」

顔が目がだんだんと熱くなる

「君は今日新しく僕の弟子として産まれました。過去はひとまず置いておいて一緒に楽しく生活しましょう」

ぼろりと涙がこぼれると、どんどん滝のようにあふれ出してくる俺もういい年なのにおっさんに近いのに…そうは思うが止まらない「師匠と呼んで下さい。僕は弟子を取るのは初めてなのでつたない所があるかもしれませんがちょっとづつやっていきましょう」

「し…師匠…」

俺の涙腺は決壊した

わんわんとわけのわからないことを泣き叫ぶ

リーシャンさん…師匠はそれ以上は何も言わず、俺が泣きつかれて眠るまでぎゅっと抱きしめてくれた

第2話

がやがやとした話声が聞こえてくる

目を覚ますと少し灰色がかかった天井が見えた

天井を見る限り、夢落ちの希望ははかなく消えたようだ

「知らない天井だ」

起きたばかりのぼーとした頭でとりあえずトリップの基本をつぶやく

しばらくして頭がすっかりしてくるとリーシャンさん…俺よりはるかに年下にみえる師匠に抱きつき、泣き喚いた記憶がよみがえる
「恥ずかしすぎる…」

三十路に足を突っ込んだいい年した男なのに情けない

泣きすぎたせいで目がはれぼったく、ヒリヒリする

顔を洗ってすっきりしようと洗面所を探してジャケットを脱ぎYシャツの袖を捲り上げた

「これ…」

寝る前の面談(?)の最中にダナさんに痛めつけられた腕に包帯が巻いてある

ためしに動かしてみるが、動かすたびに激痛がはしってた腕は全く痛みがない

包帯を少しずらしてみようと紫色になっていて気持ち悪いがこの様子だとすぐ治りそうだ

きっと師匠が巻いてくれたのだろうと思うと暖かい気持ちになる

蛇口をひねり何回かザバザバと顔を洗うと、だいぶん目の腫れと痛みがましになってきた

備え付けのハンドタオルを手に取り顔を上げる

「え……俺……」

鏡に映った顔をじっと凝視する

何か違ういつもの自分の顔と。たしかに自分の顔のはずだが心な

しか違和感がもたげる

目じりにあつた皺がない…それと視力が悪く遠くを見るときは眉に皺を寄せてみるせいで眉と眉の間にできていた皺の跡もない
足元を見るときつちりすそ上げしてもらったはずのズボンが余っている

Yシャツの袖も戻して確認してみるとやはり余っていた

『若返り?!』

ベットがある部屋に戻り、部屋を見渡す

読書の弊害で落ちに落ちていた視力

仕事中はメガネが手放せなかったはずなのに視界がくつきりとしている

窓の外を見ると遠くの方に街の輪郭がはっきり見える

俺の視力ではあんな遠くをぼやけることもなく見ることは不可能
なはずだ

『トリップ特典ってやつか…?』

身体能力はどうなのだろう

とりあえず腕立て伏せと腹筋を試してみることにする

結果腕立て伏せ5回腹筋にいたっては1回が限界でした

どう考えても身体能力特典はありませんでした

どうもありがとございました

腕とお腹がぷるぷるしますorz

高校時代から本しか読んでなかったし

体育の授業はサボれる限りはサボっていた

卒業後は家から会社の行き帰りに歩くくらいだったしな…

階段が大嫌いで2階や3階にいくときでさえエレベーターエスカレーターを使っていた生粋のもやし野郎である

『どうしようこの世界で生きていける気がしなくなってきた…』

気を取り直し部屋のテーブルをみるとラップにかけられたサンドイッチとスープ。ミネラルウォーターのペットボトルが見える

脇にはハンター文字らしき文字で書かれたメモが置いてあった

もちろん俺はハンター文字は読めない

文字というよりは記号に近くしかも達筆っぽい文字で英語の筆記体のように崩して書いてあった

さらに意味不明である

とりあえずこの食事は俺が食べていいのだろうと判断する

カバンの中にお弁当が入っていたが部屋の中は少し涼しいくらいだし

明日の朝までは持つだろう

とりあえず何かあったときのために置いておこう

ラップをはずし、もそもそとほうばる

自分では気づかなかったがかなり空腹だったようだ

食べてる途中なのにグーッとお腹がなる

一心不乱にサンドイッチをほおばっているとノックの音がして師匠が入ってきた

「調子はどうですか？落ち着きましたか？」
相変わらずの優しい声で師匠が話しかけてくる

「はい大丈夫です」

「食事は口にあったようですね。これから飛行船は4次試験会場に到着します。僕の担当の試験はもう終わっているのですが試験官は最終試験まで拘束されます」

師匠は向かいの席に座りゆっくりと頭を撫でてくれる

「最後まで試験についていかなければならないというだけで特に仕

事はもうありません。タロー君僕と少しお話ししましょうか」

「わかりました」

なんというか凄く子ども扱いされている気がする。師匠の目には俺は何歳くらいに見えているんだろつか

とてつもなく気になるが怖くてまだ聞けない

少年のように見える師匠だけど念の影響で見た目以上の年かもしれない

言葉遣いも丁寧だし、何より雰囲気落ち着いてて年以上の貫禄がある

「僕に聞きたいことはありますか？なんでもいいですよ」

なんでもいいが一番困る

とりあえず切羽詰った問題であるハンター文字だな

「えっと俺これ読めなくて…」

「崩しすぎて読めませんでしたか？このご飯はタロー君の為に用意した物なので気にせず食べてください。それから部屋の外には気が立った受験者も一緒に乗っているので部屋から出ないようにして下さいと書いてあります」

「あの…俺この文字自体読めなくて…えっと教えてもらえませんか？」

「ハンター文字読めないんですか…」

師匠の目がすっと細まり探るような目つきになる

どうしようますます変な奴と思われて放り出されたら…

動揺していた俺を安心させるように師匠はニッコリと笑って

「ではまず読み書きから勉強しましょうか。タロー君は僕が面倒をみると決めました。僕は一旦決めたことは覆しませんよ？」

「ありがとうございます！」

また泣きそうだ

師匠に拾ってもらえて本当に良かった

俺はこれから先一生師匠に頭が上がらないに違いない

それからハンター試験が終わるまで付きっ切りでみっちりとハンター文字を教えてもらった

あいうえお順で覚えるのはある程度教えてもらえればできたが、書く方がとにかく難しい

今まで使っていた日本語とかなり違うので一文字書き取るだけでものすごい時間がかかる

とにかく数を書いて覚えるしかないので寝る間も惜しんで書き取りをする

師匠はずっとそばにいてくれて丁寧に教えてくれる

ハンター文字にも公式な書き準があったことをはじめて知った

だいたいできてくると次は文字数の少ない詩集のコピーを渡された

文字のあいうえお表を作ってもらった時に端っこにあいうえおと

対応した日本語を書き込んだので

書き込みができるようにコピーした物を用意してくれたらしい

いい人すぎて感動が止まらない

試験終了までそれからだいたい3週間程度かかった

6次試験までやったらしい。

理由を聞くと

「なかなか人数が減らなくて。はやく帰りたいのに困ったね」

そういつてニッコリ笑った師匠は顔は笑っているのに目が笑って
いなくて怖かった

ちょっとちびりそうになったのは内緒だ

師匠は顔がかなりいい

浅黒い肌にいぶし銀のような少しくすんだ銀髪に透き通るような
青い目をしている

ぶっちゃんけ師匠の様な美形は始めてみた

面談の最中は少しのミスも許されないと気を張っていたせいで気が
つかなかった

無事？かどうかは分からないが（やっぱり死傷者はかなりでたらしい）試験も終わり

師匠に手を繋がれながら師匠の家に向かった

やっぱり子供扱いされている

途中大きなデパートに寄り、下着から着替え日用雑貨にいたるまで全て買い揃えてもらった

師匠名義で携帯電話とパソコンも買ってもらった（持っていたパソコンとは違いキーボードがハンター文字になっている、ネットも好きに繋げてもいいと許可をもらった！）

師匠の金銭感覚は狂っているとしたか思えないレベルの買い物だった
値札を見ないのは当たり前で目についたものを片っ端からサイズが合っていればどんどんカゴに入れていく

そんなにいらないと少しあれば着まわすから十分だと止めようとはしてみたのだが

「僕もハンターの端くれですからお金の事は気にしないように」
とニツコリいい笑顔で言われるとそれ以上何も言えなくなった
デパートの店員さんに計ってもらったところ身長が10cm以上も縮んでいた

元々の身長も170を少し超えるくらいだったのでさすがに凹んだ
一番うれしかったのは文具コーナーで指紋認証のキーがついた分厚い日記帳を買ってもらったことだ

ずっと使うものだから自分にあったペンやノートを選んできなさいと放り込まれた文具店で、ガラスケースに入った真っ黒な日記帳から目が離せなくなってしまうのだ

A4くらいの大きさを黒一色の装丁に銀色に輝く金属の枠取りがしてあり、右下に丸まった同じく銀色の小さな猫が埋まっていた
値札をみると60万ジエニー…考えるまでもなく高すぎる

そう思っているのに目と足が黒い日記帳から動かない

師匠に声をかけられるまでずっとそこに立ちすくんでしまった

師匠が俺の目線を見てこれですねっと店員を呼んで日記帳を取り出してもらった所で我に返った

いらぬ、そんなの欲しくない主張したが聞き入れてもらえず、俺の人差し指を掴むと強引にピツと認証キーに当ててしまった

「これでもうタロー君以外では開けられませぬね」

とまたいい笑顔で笑われた

師匠結構強引なんですな

買った品物は多すぎるのですぐ使う物以外宅配便で送ってもらった

師匠の家はヨークシンのはずれにあった

外觀だけで億ションクラスだと分かる

「誰にもばれていない家ですから安心ですよ」

若干怖いセリフを聞きながらマンションの部屋に入った

心配になったので恐る恐る聞いてみた

「師匠は誰かに狙われているんですか？」

「僕は古書ハンターですから希少な本をかなり所持しているんですよ。ビブリオマニア（書物蒐集狂、蔵書狂、愛書狂などの意。広くは「本好き」を越え「本を愛して」いる人のこと）は結構多いですからね」

それはもしかして、どこぞの団長とか団長とか団長だろうか…

幻影旅団に狙われた事があつたりするんだらうか…聞きたいが何で知っているんだと突っ込まれると困るので聞けない

「タロー君は本は好きですか？」

「大好きです！」

「気が合いますね。では僕の自慢の書庫に案内しましょう」

さらっと話題を変えられた気がするが、書庫と聞くと見てみたくてしようがない

案内されるままに進むと2Fへ続く階段がありそれを上るとなん

とワンフロア全部が書庫になっていた

目が輝いていくのが自分でもわかる

「タロー君も読みたいものがあつたら好きに読んで下さいね。ただし読んだ本は元に戻すこと、鍵のかかった書棚には決して近づかないこと。それだけは守ってください」

「わかりました」

「とりあえず文字を読む練習の為に何冊かもっていきましようか。」

このあたりの物語形式の物はいかがですか？」

師匠に連れて行ってもらった書棚で何冊か本を選ぶ

本は全て種別に分けられ透明なブックカバーがつけられており、その上から書棚の番号と何段目に入っているかを現す数字を書いたシールが貼ってある

並べ方はあいうえお順らしい

師匠具現化系かな？神経質で几帳面。この本棚を見るとそう思える
部屋もホコリひとつなく綺麗だ

師匠の家に住み始めて1年ほどはゆつくりと時間が過ぎていった
ハンターの弟子になったとは思えないほどだ

めつたに外出せず、出かけるときは必ず師匠と一緒に

たまに仕事で師匠が家を開けるときもあるが、たいていは1週間ほどで帰ってきた

「お金はありますからあくせく働く必要はないんですよ」

と師匠は笑いながら言う

勉強は古代文明文字や歴史、経済、数学に機器類の操作、プログ
ラミングの組み方果てはハッキング方法まで座学は幅広く教えても
らった

神字を教えてもらった時はかなり興奮した

念のことはひとかけらも話さなかったが、こういう文字もあるんですよ、神字というんですとまるで他の古代言語と同じように教えてもらった

今の所、全て浅く広くといった感じだが師匠の教え方がかなり上手く、俺の覚えが悪くてイライラする時もあるだろうに常に優しくゆっくりと根気よく教えてくれる

習うこと全てが新鮮で目新しく、毎日が楽しい

師匠との生活になれた頃、俺はいつたいいくつくらいに見えるのかと聞いてみると

「14、5歳でしょう」

と凹みたくなるような年齢を返された

さすがにそれはないと抗議したが、戸籍を14歳で作りましたから14歳で決定ですとびっくり発言をかまされた

誕生日は俺が言った日になっているようだ

師匠の年齢を聞いてみると

「タロー君の3倍以上は生きていますよ、数えてないので正確にはわかりませんね」

更なるびっくり発言が飛び出した

男版ビスケですか・・・

お気に入りの日記帳には今日教わったことや思ったことなどを書き込んでいった

ネットでこつそり調べると拾ってもらった時は原作から10年前だった。原作の知識を忘れないように日記帳の後ろに漢字の当て字を使い（いわゆるヤンキー漢字）自分にしか理解できないように筆記体でメモっていた

方針は蟻編以外の原作には関らない。蟻はさすがにやばそうだし、万が一にでも師匠が食べられたら死にたくないのでなんとか王が産まれる前に何とかしよう。

ハンター試験は原作時とヒソカ参加の原作前年度にいかなければいいし、ヨークシンも原作の年の9月に師匠を他の都市へ連れ出せばなんとかなるだろう

あとはなるべく美術館に近寄らない様にすればいいだろう。師匠も本以外には興味はないようだし

毎日少しづつ続けた腕立て伏せと腹筋も一桁台から夢の3桁10
0回までできるようになった

プロテインはやっぱりあるようだ

念の方はとりあえず起床後、就寝前に10分程度づつ点を続けて
いる

1年たってもオーラの気配すら分からないが気長にやるつもりだ

第2話（後書き）

リーシャン師匠にとって太郎は弟子というより養子に近い存在です
師弟そろって本好きヒツキー体質なので外出はめったにしません
太郎も自分から外にいきたいと言い出すタイプではないです。お家
大好き

原作キャラはそのうちでます

第3話

腕立て伏せ腹筋回数が150回を超え、俺の呼び名がタロー君からタローに変わった頃

俺は師匠に思い切ってハンターになる為の修行がしたいと話した師匠はちよつとびっくりした顔をしつつ、本当にハンターになりたいのか？気持ちは変わらないのかとしつこく聞いてきためずらしく苦りきった表情で

「別にハンターにならなくてもタローは十分暮らしていけると思っ
んです」

たしかに師匠から色々教育をうけているので、後3年ほどがんばっていけば師匠がやってる仕事（系統も解読法も不明な文字の翻訳、解明作業など）はさすがに無理だが、後2、3年ほど勉強をすれば簡単な物なら翻訳できるようになると思う

でもここで負けたらだめだ

蟻編突入までに女王を倒せる力と実力のあるハンターとのコネを少しでも作らなければならぬ

女王討伐に関して師匠の力を頼るつもりは俺にはない

トリップしてから今まで俺は師匠におんぶにだっこの生活だ

食事の支度や洗濯は全て師匠がやっている

食品、日用品の買出しは外には行かず、ネットか電話でお取り寄せ掃除は俺もやっているが師匠もやるのでお手伝い程度

生活費はもちろん師匠持ち。まさにお荷物

この上女王討伐まで手伝ってもらうなど俺には言えない

NGLに上陸してしばらくするまで蟻も念は使えないはずだ

そのために念はマスターしたいが、ハンターにもならず念を教えなくていいっても無理だろう

師匠に守られた生活だし、身を守る為にといいのも弱い

「俺師匠みたいなハンターになりたいんです！」

「私みたいですか・・・」

目をきらきらさせ（気持ちの上で）なんだかんだで俺に甘い師匠に畳み掛ける

「師匠に助けてもらって俺本当に幸せになったんです。この幸せを誰かに分けてあげられるようなそんなハンターになりたい」

「分かりました・・・ハンターになる為の修行はきついですよ？途中で根をあげたら2度と修行はつけません。それでもいいですか？」「かまいません！」

よっしゃ！勝った！！心の中で盛大にガッツポーズを決める

こちらに来たばかりの頃は前の世界に戻りたいと考える事は多かったが、今はそんな気持ちは全くない

師匠が大好きで大切だ

受けた恩を返したい

前の世界の両親には申し訳ないとは思うがそれが本当の気持ちなのだ

高校卒業後自立し一人暮らしをしていたし、何か理由があって失踪したのだと納得すれば結構ドライな俺の両親は深く探したりはしないだろう

自分以外のハンターを雇う為のお金も実はもう現時点で問題ないほどある

ほとんど家から出ない俺がどうしてここまで稼げたかというと師匠のおかげだ

以前から師匠に読んでもらう為に前の世界から持ってきた本やハンター世界用に改造してもらったマイパソコンの電子書籍データの翻訳を続けていた

暇な時間を見つけて少しずつ完成させては師匠にファイリングして渡していたのだ

師匠がある時何を思ったかそれを本にして出版してみないかといってきた

師匠が持てるツテ全てを使って調べてみたらしいが同じ内容の本は1冊もなかったらしい

漫画の幽○白書やらナ○トは前の世界と同じく存在するのに小説系はないらしい

面白い本も多いし、どうせなら出してみてはどうかと言われたのだ
最初はビビッて無理だと思った

ネットで俺が調べてみた限り他にトリップや転生者は見つからなかった

だがそんなのこれからどうなるか分からないし

俺のように誰にもしゃべってないだけかもしれない

原作に近づいたらわらわらと沸いて出てくるかも・・・

そんな時以前の世界の本を見た人はパクリかよ！って騒ぎ出す可能性がある

異世界から来たんだと師匠にさえまだ話せてない（何かあるとは絶対気づかれているだろうが）

俺には無理だ。元々師匠の為だけに訳したんだとか、そんな度胸はないとかへタレ丸出して説得したが

師匠の必殺技

「もう決めました」

の一言で押し切られてしまった

せめてもの抵抗で原作者名はそのままにして翻訳者として俺の名前タロー・タナカの頭文字T・Tを（本名を入れる度胸はなかった）追加で表記した

ついでに本の最後に翻訳者としての感想文を少し入れさせてもらった

原本があるのはまだいいが、電子書籍になってる方はもしかしたら原本を出せと突っ込まれるかもしれないと師匠は懸念した

フタを開けてみれば、師匠を通して原本を売ってくれという輩はいるものの証拠を出せの突っ込みはまったくなく、出す本出す本順調に売れ続け（前の世界で名作と言われた物ばかりなので当たり

前だが）貯金が恐ろしいほど順調に今現在も膨れ上がり続けている

「では明日から修行に入りましょう」

そう言われた俺はワクワクしてなかなか寝付けなかった

次の日朝起きて動きやすいジャージに着替え、師匠の元へ行った
どんな修行をするのかと師匠を見つめていると

「まずはこの机と椅子を修行場まで運んでください」

素直に椅子と机を持ち、玄関の方へ運ぼうとすると待ったをかけられた

「何か忘れ物でしょうか？」

「外へ出るわけじゃないでしょう。こっちに修行場がありますのでついてきてください」

さすがは俺の師匠、徹底的にインドアである

ダイニングを抜けいつもの使っていない余り部屋へ入ると師匠が壁にあるパネルを操作し始めた

そんなに大きな音ではないがウィーンと機械音が聞こえる

しばらく待つと床が下へどんどんずれ階段が出来上がった

「いつもタローが寝た後にこの下で自己鍛錬しているんですよ」

「なんか秘密基地みたいですね」

師匠と話しつつ下に降りるとそこはかなり天井の高い体育館のようなドでかい部屋で、俺が通っていた高校の体育館よりかなり広い
書庫と広さも高さも同じくらいなんだそうだが書棚がないのと、かなり明るいのでぜんぜん違って見える

しばらくポカンと修行場を見ていた俺だが師匠に椅子を真ん中に持っていくよう声をかけられた

その後師匠に教えてもらいながら準備体操と柔軟を1時間

俺の体はガツガチだった

イタイイタイともう曲がらないと叫ぶ俺の背中を押す師匠は今まで一番の笑顔をみせてくれた

師匠ひどい・・・後で師匠の読みかけの本の栞を抜いてやる
ようやく修行だ

「まずは端から端まで全力で走ってみなさい」

「はい」

端から端までといってもゆうに200mはある以前のもやしな俺
なら200m走っただけで息が上がっただろうが

毎日続けた筋力作りのおかげか息はあがることはなかった
だが……

「そうですね。今日はまず走り方から修行しましょうか」

走り方ですか……まずはそこからですかorz

「タローの走り方には無駄が多い。変な癖がついていますね」

「うう……」

「大丈夫ですよ最初からできるような人間はいませんから気を落と
さず基本中の基本から学んでいきましょう」

そうだよなあ…外で遊んだ覚えなんてほとんどないもんなあ…

その日は1日朝から昼食をはさみ夜まで走り方を徹底的に仕込ま
れた

修行が終わった後、いつもやっている腕立て伏せと腹筋を見ても
らったがそれもやっぱりやり方が違ったらしい…

正しいやり方だと2つとも80回が限界だった。その2つに足に
錘を乗せ椅子に座ったまま足を上げて足の筋力をあげるトレーニン
グも組み込まれた

俺の1年ってorz

初めての修行から1週間は初日の内容の繰り返しで
準備体操柔軟軽く走りながらの走り方の矯正。途中で休憩や食事
を挟みつつ最後に筋力トレーニング

俺が走つてるとき師匠は歩いてるんだぜ…マジハンターパネエ
しかし時折師匠のS度が見えるものの翌日にひどい筋肉痛になる
ようなこともなく

ゆっくりと俺のペースに合わせて鍛えてくれている

正直根をあげたら修行をやめると言われていたのでどんなドSメニユーがくるかとドキドキだったのに

内容は思ったよりこなし易い

『全メニユーが終わった後は汗ただけどな!』

師匠作成超初心者用メニユーが終わる頃には走り方もちゃんとしたものになり次のメニユーへ移ることになった

次のメニユーからようやく基本的な体力作りである

いつもの体操柔軟が終わった後

「もうだめだと思う所までマラソンして下さい」

「はい」

師匠は指示すると俺が初日に持ってきた机に仕事道具を広げ、お仕事モードに突入してしまった

放置っすか・・・

目頭がちよつと熱くなってきた

とりあえず指示通り走り始める

中身は30過ぎのおっさんだが見た目は15歳、師匠に会ってから見た目に中身が引っ張られる傾向にあり師匠にベタベタな甘えん坊である

放置されただけで泣きそうっでどうよ・・・

走り始めて2時間ほどで額にうっすらと汗が出てきた

もうだめだという所まで。この指示に師匠のSの片鱗が見える

さらに1時間走ると少し息が上がってきた

「タロー全力疾走に切り替えなさい」

マラソンペースだったからこそ3時間耐えたのである

全力疾走ではわずか10分で手足が上手く動かせなくなり息も絶え絶えになる

だが師匠の優しい声で

「タローだめだと思ったらやめていいんですよ」

「大丈夫ですまだいけます」

そう言われるとやせ我慢だが続ける事になり、結局床に倒れこみ

動けなくなるまで走った（最後は歩きに近かった気がする）

昼食をとることにしたが自力で上まで上がっていけず、だっこで連れて行ってもらった

昼食は師匠お手製ミルクリゾット。師匠の愛が五臓六腑に染み渡る
ーっうまうま

午後は夕方まで座学の授業

夕方以降は筋力作り

いつもの3種類各100回を1セットとし、休憩をはさみつつ3
セット

最後は10分間の瞑想を指示された

終わったらもう動く気力もなくシャワーを浴びてベットにダイブ
そんなこんなでそれからさらに1年ほどかけて一般人以下のもやしっ子から一般人から少し上程度のレベルまでいくことができた

第4話

その日はたまたま師匠が長期の仕事にでかけ、一人になってしまったので師匠が置いていった練習メニューを黙々とこなしていた部屋の真ん中で筋トレを終わらせ水を飲みにいこうとふつと階段をみると…

見たこともない浮浪者のような男が座り、じつと無表情でこちらをみていた

『怖い怖い怖いこいつ誰だよ…師匠！師匠！』

俺は真っ青になってガタガタ震える

師匠の蔵書を狙ったマニアだろうか？

それとも何か情報をつかみにきた奴？

この家だけは安全だと信じてただけに頭の中は恐慌状態でいろんな考えがぐるぐる回る

「おい、ぼっず」

何も話さない俺に男はニカッと天真爛漫な表情になり手招きをしてきた

「ぼっずはリーシヤンの弟子か？」

「……………ッ」

「そんな怖がるなって名前なんていうんだ？」

「タロー…」

「タローか！俺はジンっていうんだよろしくな」

ゴンの親父かよ！

初めて会う原作キャラが一番レアなジン・フリークスって…

ジンにだけは一生会えないと思ってたわ

人生何が起こるかわからないね…トリップした時もあったけど

「リーシヤンどこいったんだ？ちよつと頼みがあつて探してるんだが」

「師匠は仕事に行きました。どこに行つたかは聞いていません」

「くそー…絶対ココに居ると思ってきたのによー。ほつず弟子になつてどんくらいだ?」

師匠たいがい家からでないものな…俺もだけどさ

「2年くらいです」

「古代文字とかは習ってんのか?」

「はい」

なんだろう…凄く嫌な予感がする

ジンはポンツと手のひらにゴブシを打つと

「じゃあほつずでいいや!ちよつとついてこい」

「はあああああああああああああああ?!!」

まさに青天の霹靂

「無理無理無理無理!!俺この家から一人で出たことないんです!」

このオヤジなにむちゃくちゃいくさつてんだ

「いつかは出るさ、それが今日だったただけだ」

「かつこよく言えばいいつてもんでもないんです!確かに古代文字はある程度習いましたが師匠に比べたらひよつこもいいところです!」

「根性でなんとかなるって」

「なりません!それに俺は今修行中でここから離れられません」

「修行なら俺がつけてやるって」

「ジンさんに修行をつけてもらつたら死ぬ気がしますので遠慮させて頂きます」

「ほつずリーシャンにそつくりだなー…さすが弟子。これ以上拒否するなら気絶させて担いでいくぞ?」

「……………ッ」

くそ!さすがゴンの親父だ。のれんに腕押し、決めたらテコでもつづかぬえ…

「準備する時間を下さい。ジンさんはその間に風呂に入って着替え

てください。この条件を飲んでくれないなら絶対についていきませ
ん」

「えーめんどくせーよ」

「めんどくさいじゃありません！汚れすぎてるんです！！臭いんで
す！！」

「わかったよぼうず、しゃーねーなー」

「ぼうずじゃありませんタローです」

「おーう タローな」

自由人すぎる…

早く用意しないとマジで無理やり担いで連れて行かれそうだ

俺は高速で自室に戻ると、持っている一番大きいポストンバック
に勉強に使ったノートや財布、着替えなど必要と思われるものをど
んどん詰めて行く

ジンさんは古代文字と言っただけでどの種類かさえ言わなかつた
きつと師匠に押し付けようとしてロクに見てもいないんだろう
荷物をまとめ終わると書庫へ上がり、師匠の著作である古代文字
解読の考察書をつめる

急いで下に戻るとジンさんはもう風呂から上がり、真っ裸でポタ
ポタとしずくを垂らしながら笑っていた

「わり、着替え持ってきてなかった」

だめだこいつはやくなんとかしないと…

師匠が使っている大きめのジャージと下着をひっぱり出し、バス
タオルと一緒にジンさんへ投げつける

その間にジンさんにつれされるはめになったと師匠への置手紙を
書く

「着替えたぞ！いくか」

「帰りはちゃんと家まで送ってくださいね」

「そんなに遠くないから一人で帰れるって」

絶対嘘だ

そんなに遠くないって絶対ジンさんの基準で俺のものさしとはかけ離れていそうだ

「じゃあその荷物手に抱えろ」

そう言うのと俺を両手に抱え上げ玄関を出る

「今から現地まで走っていくから口閉じて歯食いしばってる」

「走って行くってちょ！おま！！」

ドンツと今までに感じたことのない重力が全身にかかる

初めての体験にギョツとジンさんの服にしがみつく

物凄いスピードで走っていつているようだ

顔に受ける風のせいで目を開けることができない

どんだん体にかかる圧力が増え意識を保っていられない

「おいタローだいじよぶか？おい…タロー」

俺に話しかけるジンさんの声を聞きながら失神した

どれくらいたったのだろうか

顔の上の冷たいタオルの感触で目を覚ます

薄く目を開けていくと、最初に見えたのは見事な金色

「大丈夫か？ジンさん無茶しやがってこんな子供に…」

茶色のキャスケット帽に肩くらいのまつすぐな金髪

目つきの悪い三白眼

「俺……」

「気がついたか？お前ジンさんに運ばれてくる途中で気絶したんだよ」

「そうですか 面倒を見てくださりありがとうございます。俺はリーシャンさんの弟子でタロー・タナカといいます」

「俺はカイトだ よろしくな」

「カイトさんですね よろしくお願ひします」

「カイトさんとか気持ち悪いからカイトって呼んでくれ。起きれるか？」

「大丈夫ですカイト」

うわー…なまカイトかつけえええ
背たけえええ

今俺は猛烈に感動している

原作キャラでもカイトが一番好きだ

そのカイトが今日の前にいるっ

「おう 起きたかータロー」

なまカイトに感動していると背後から疫病神もといジンさんの声
が聞こえた

「タロー無視すんなよー見てもらいたいのがあるんだよー」

くそ！俺の感動の時間を邪魔するな

「なんですか誘拐犯」

「誘拐犯?!ジンさんまさか了解もなしにつれてきたんですかっ」

カイトが俺のセリフを聞き蔑むような目でジンさんを見る

「なつちげーよ タローお前ついてきてもいいっていったじゃねー
か」

「ついてこなければ気絶させて無理やり運ぶっていわれましたから
ね」

「ジンさん…あんたって人は…」

「まーいいじゃねーかタローついてこないとまた運ぶぞ」

しぶしぶジンさんの後についていくと深い森林の谷間に緑に輝く
扉があった

俺の身長のお3倍はあろうかというその扉には真ん中に丸いプレート
のようなものがはまっており、そこに古代文字らしきものがびっ
しりと書かれていた

「すっげーだろ！調査依頼を受けたんだが、どうもそのプレートを
外さないとは入れないみたいだな。外し方がその文字解読す
ればわかると思うんで頼む」

「読めもしないのになんで外し方がわかるって思うんですか」

「勘!!!」

「「はあ…」」

俺とカイトはそろってため息をつく

カイトとの友好を深めたい気もするが師匠が心配するしとっと帰ろう

その為にも早く解読を終わらせないといけない

俺は荷物の中からノートやペン師匠の本などを取り出すと早速作業にはいる

習った事がある文字でよかった

わからないところは師匠の本で調べよう

やっとのことで作業が終わると辺りは暗くなり星が出てきていた
「どうだタローできそうか？」

カイトが心配そうに声をかけてきてくれる

「なんとか終わりましたよ、分かる文字で良かったです」

「早いなージンさんあの扉の前で3日くらいうんうん唸ってたと思
ったら出かけてくるっていきなり走っていった」

「説明もなしにですか…物凄いですね」

帰ってきたと思ったら子供抱えてるから本気でビックリしたとカ
イトは笑いながら話す

「タローも凄いよ。半日もせず解読できたんだしな」

「師匠に付きっ切りで勉強してもらっているのにできなかつたら怒
られてしまいます。カイトも凄いですよジンさんの弟子なんですか
ら」

俺だったら1日ももたずに死んでそうだ

あのフリークス（化け物）について行けるだけで凄い

「ジンさんの弟子だから納得しそうな自分があるのがいやだな…」
ぶつと同時に吹き出す

カイトがジンさんがいかにひどい師匠か身振り手振りで説明して
くれる

その内容がおかしくて2人一緒に大笑いしてしまった

俺は笑いを納めると、カイトに向き直り顔を見つめる

どうしても言いたい事があった

「カイト俺友達いないんですよ」

「なんだいきなり」

「今まで師匠と2人つきりで友達いなかったんです友達になって下さい」

こっぴどくかきしいセリフに俺はもちろんカイトの顔まで赤くなっている

断られたらどうしよう

「タローお前……」

無言になるカイトに俺はカイトの顔を見ていられず視線を地面に落とす

カイトは俺の頭にポンと手を載せる

「よし今から友達だな。これからよろしくな」

「はい！」

人生初の友達ができた

「いやー青春だなあ」

俺とカイトのほのぼのとした空気をぶち壊してくれたのはもちろんジンさんだ

木に逆さまになり枝に張り付いている

本当に人間か？コイツ

「いつからみてたんですか」

慌てるカイトにジンさんがニヤニヤと返す

「んー？最初から」

「このくそオヤジが……！」

俺は被っていた猫を引っぺがし、地面に落ちている石をどんどん投げつける

ガハハハとどこぞの悪役のように笑いながらヒョイヒョイとかわ

していく

「解読終わったみてーだし明日から修行な」

「「は?!」」

「タローに修行つけてやるって約束したからな」

「俺必要ないっていいましたよね?!」

「もう決めたし」

「ちよつとジンさん流石にタロー死んじゃいますよ!」

「だいじょぶだって!根性だせば死なないから」

また根性が。

根性だけでジンさんについていけるなら世の中ダブルハンターが
余りまくってるっつーの

ジンさんが決めたことに後から何をいっても無駄だと理解した
今できることは明日への準備だけだ

「カイト俺缶詰いっぱいもってきたんだ一緒にどう?」

「おっいいな」

食事を食べると寝袋に包まり眠りについた

翌日からのジンさんの修行は死を確実に認識させるに十分だった
頭から何かの動物の血液をかけられた俺はそのまま文字通り放り
投げられた

……… 人食い虫の住む洞窟に

朝寝ている寝袋に巨大な蜂の巣をつめられた

凶暴な魔獣の赤子を背に括り付けられ、赤子の親の前に放り出した

湖に連れていかれると真ん中まで泳げと言われ、しぶしぶ泳いで

いくと湖なのにサメが出てきた

カイトに助けられると一人ではできなかった罰だといわれ、ジンさ
んを背中にのせて腕立て伏せをさせられた

後晩飯用にウサギ捕ってこいといわれたり(この森に住むウサギ
は俺の背よりでかい凶暴な爪を持つ種だけだった)

さらにその捕ってきたウサギを捌けといわれた(現代日本人にと

つてかなりつらい試練だった)

嘔吐はもちろん血反吐まで吐かされた(ウサギの内臓に毒があった)

まさにDEAD OR ALIVE

2週間もたつと俺の姿は風呂に入っていないせいで、全身血と泥で薄汚れている

水浴びくらいはしたいが、近くの川には陸にいる生物でさえ飛び跳ねて襲うピラニアもどきがいるため無理

水浴びしたければ10kmはなれた泉に行くしかない

けれどジンさんのシゴキの後に10km往復マラソンをするとか無理ゲーすぎる

早く帰りたいというと

「逃げるのか」

とニヤニヤしながらジンさんは言う

半分意地でここに残っている

今日の分の追いかけてが無事終わり、ウサギを捕ってきて捌くもう体力の限界だ

仰向けに寝そべって荒れた息を整える

横を見るとジンさんとカイトが元気に組み手をしている

ジンさんは分かるがカイトよ…

どこにそんなパワーがあるんだ

俺以上のメニューをこなして、さらに毎日水浴びにいつてるはずなのに…

これが原作キャラ補正かチートかこの野郎

これ以上あの2人を見ていると虚しくなるので空へと視線を移す
師匠今なにしてるんだろう

仕事は終わってたんだろうか

俺がいなくなったことに気づいているのだろうか
いつも俺を優しく見つめてくれる師匠の顔を思い出すと涙が出そ
うになる

まぶたを閉じこぼれそうになる涙をぬぐおうとした時

「おい！よけるタロー！！」

ジンさんに吹っ飛ばされたカイトが俺めがけて飛んできた

ドン！

避ける体力がなかった俺はカイトを抱きとめた

が、体に衝撃が走り目の前に薄もやの霧のようなものが体から立
ち上る

足がガクガク震え抱きとめたはずのカイトが両腕から零れ落ちる

「タロー大丈夫か？やっべ精孔がひらいちまった！」

ジンさんの声が聞こえる

精孔？じゃあこのあふれ出してる物がオーラか

「タローよく聞け体の力を抜いて目をつぶって俺の手の動きに意識
を向けるんだ。失敗したら死ぬから必ず成功させる」

無茶ばかり言う

目をつぶり横たわる俺の体にジンさんの手がゆっくりと血のめぐ
りをたどる

この2年念を起こすために色々がんばってきたのだ

ここで失敗するわけにはいかない

師匠と共にやってきた瞑想の感覚を思い出しながらジンさんの手
の動きに意識を向ける

どれくらい時間がたっただろうか

「よくやったタロー」

笑うジンさんの顔

その記憶を最後に俺は意識を閉じた

次に目を覚ましたとき見たのは心配そうな師匠の顔だった

「大丈夫ですかタロー」

「師匠……」

「大馬鹿者の野獣に無茶をさせられたようですね」

師匠の顔を見て俺は今まで張り詰めていた何かプツンと音を立てて切れるのが分かった

とめどなくあふれてくる涙

師匠は俺を始めて会ったあの日のように何も言わずに抱きしめてくれる

「いきなり精孔が開いてビックリしたでしょうね」

「師匠、精孔って？」

「それについての勉強は明日にしましょう。精孔を開いた影響でタローは1週間近く寝ていたのです」

「1週間も……」

無理やり起こされたからといってそこまでかかるものなのか

体力もないのに念の才能がなかったら詰む気がする

「今はゆっくり眠りなさい。大馬鹿者の野獣はボコボコにしておきましたから」

師匠に頭をなでられながらうつらうつらと考える

ジンさんをボコボコって師匠そんなに強かったのか

あれか普段ニコニコ優しい人が切れると怖いとかそういう感じだろうか

色々聞きたい事はたくさんあるが師匠の手のぬくもりが眠気をさそう

「おやすみなさい師匠」

後はもう起きてから……

第4話（後書き）

遅くなってすいませんでした
次はもう少し早めに投稿できればと思います

第5話（前書き）

説明回…

第5話

「おはようタロー。気分はどうですか？」

起きてダイニングへ向かうと師匠が朝食の準備を整え待っていてくれた

「おはようございます師匠。とってもいいです」

「それは良かった。では朝食が終わったらタローに起きた現象の説明をしましょう」

「わかりました」

今日の朝食はジャポン風

味噌汁がうまい

「一言でいうなら念といいます」

「念ですか…」

「簡単に説明しますとタローの体の中には体液とは別にオーラと呼ばれる生きていく為の源とされる水があります」

「水ですか…」

えらく大胆な説明ですね。師匠

お水ときたか

「そうですね誰しもの体にもこの水があり、大小大きさは人によって違います。体の中にこの水が湧き出るバケツが存在し、フタがしてあります。このフタが精孔と呼ばれています。一般の人は皆このバケツのフタが閉まっています。バケツからはいつも水が湧き出ていますので少しづつですが体の外へ出てきてしまいます。頭のとっぺんから足元へと…この現象を垂れ流しといいます」

手元の紙に丁寧で分かりやすい絵と文字で説明してくれる

「このバケツ実は底が不安定になっていて、他人の垂れ流している

状態以外の水が当たってしまうと、簡単に倒れてフタが開き中に入っている水がドバドバと体中から溢れ出て行ってしまいます…この現象を精孔が開くといいます。この現象はとても危険な状態なんです。水は命の源です。なのにバケツは倒れてしまいどんどんあふれ出てきています。このお水がバケツの中から全て出てしまうと人は死んでしまいます。タローはどうすればいいと思いますか？」

「水を戻せばいい？」

「そうですね。体から離れてしまっても危険です。溢れていく水を体の周りに集めバリアの様な薄い膜を作り、それ以上水が外に出ないようにします…これを纏てんと言います」

「俺はバリアはちゃんと張れているんでしょうか？」

「まだまだいびつですが馬鹿のせいで混乱しながらやり遂げたと考えれば立派な物です。その纏てんの流れを良くしていきましょう」

また目が笑っていない怖い笑顔になってる…

「今日は纏てんを練習するんでしょうか」

「その通りです。纏てんは歩くことに良く似ています、歩き方を一度覚えれば何も考えなくても歩けるようになります」

「倒れてしまったバケツは2度と戻りませんが、フタを閉め直すことはできます。水が1滴も漏れないようにギュッと閉めますと絶、バケツから湧き出ている水の源の穴を一気に広げて、通常以上量の水を体の外へ出す事を練と言います。ここまでは理解できましたか？」

「はい」

「この水の形を変えたり体の外へ出して操ったり、人によって様々な現象は違いますがこれを発と呼びます。いわゆる必殺技です。これは攻撃という手段だけには留まらず、人を癒したりはたまた遠くの

場所へ行ったりする事もできます。水を操る技術の事を念といい操る人の事を念能力者と言います 纏・絶・練・発 この4つを合わせて念の基本四五行といえます」

「四五行に必殺技ですか…」

「やっぱり師匠の教え方は分かりやすい

「タローも男の子ですから必殺技には惹かれますか？」

「ものすごく!!」

「実際見せた方が早いでしょう これが僕の発です」

少し離れた所に立つと師匠はビックリしないで下さいねといながら、巨大な真っ白い本を出現させた

「デカ!!」

高さだけでも俺の目線くらいある

師匠は具現化した本に体重を乗せつつ、更に説明を続ける

「精密な図案書と僕が名づけた本で、武器防具道具など固体を作り出す事ができます。かなり硬くて丈夫なのでこのまま殴っても結構いけます」

「なんか凄そうな念だ

「さすがというかやっぱり本なんですな

「発はむやみやたらに作る物ではありません。いきなり出来てしまう時もありますが、一生付き合っていくことになりますし駄目だったら作り直すということもできません」

「師匠はその本を作るのにどれだけかけたのですか？」

「20年ほどです」

「……ッ」

「思わず絶句する

「20年で…」

「タロー変な顔になってますよ」

「変な顔にもなりますって!」

「アハハハ 僕は色々な念能力者を長年見てきましたがあ念を覚えて1年以内に作った発というのはだいたい失敗します。よっぽどいい

師匠に恵まれて才能豊かであれば分かりませんが」

ゴンとかキルアのことかー……っ

クラピカもそうか？でもあれは色々特殊だしな

チート共はそんな所にも特典が…

「タロー焦ってはいけません。個人個人歩むペースは違います」

「はい」

「タローには僕がいます。完璧な師匠という訳ではありませんが年を食っているのです。ちょっとしたずるも知っています。気長にやりましょう」

「りょーかいです！！」

ビシッと手をまっすぐ上に上げて元気良く返事をする

「念は纏・絶・練をマスターしてその先の円を覚えたらしばらく念はお預けです。タローは体力がないですからまず体力筋力作り優先ですね」

第5話（後書き）

念について作者なりに分かりやすくしたつもりですが

分かりにくくなっているかもしれないor z

詳しく知りたい方はWikiをどうぞ…

念の修行法についてはこの先、作者の捏造になりますので信じない
で下さい…

2次ですからかるーく流してくださいませ

第6話

「それでは纏てんの修行を始めましょう」

朝食後師匠と一緒に俺の部屋へ行き、鏡の前に立つとと銀色のフレームのメガネを渡された

かけるよう促されたので装着してみる

「おおっ」

自分のオーラが見える

俺のオーラは少し霞がかった白っぽいマーブル模様をしている
師匠の方を見ると、霞がかっているのは同じだがオレンジの様な色をしている

俺が薄めすぎたカルピスで師匠が濃縮オレンジジュースと言った感じだ

「タローのオーラが体から見て凸凹しているのは分かりますか？」
黙って首を縦に振る

いわれて見ると俺のオーラは寝起きのクセ毛の様にあっちゃこつちや好き勝手な方向に伸びている

「今はまだタローは上手くオーラを体の周りに循環させることができず、オーラが体の外へ出て行こうとするオーラに負けてしまっているんです」

「だから師匠はさつき俺の纏てんがいびつだといったんですね」

「その通りです 纏てんの練習を始めましょう。ベットに寝て体の力を抜き、目を閉じてください」

俺が楽な体勢を作ると何か暖かいオーラに全身を包まれた

「今感じている感触は僕のオーラです。一点だけ得に存在を感じる部分があるのがわかりますか？」

集中すると左の指先の辺りに感じる事ができた

「左の指先でしょうか？」

「その通りです。ではゆっくりその部分を移動していきますのでタ

ローはその感触を意識で追って行って下さい」
なるほど

体の中のオーラを血液の様に循環させると言葉で言われても普通分
からないよな…

ゴンとキルアは天才だっという意味が習ってみて本当によく分かる
しかし、師匠のオーラが気持ちよすぎて寝そっだ

「タロー、寝たら晩御飯抜きですよ」

「ネ…ネテマセンヨ」

ちよつと危なかつたけど…

師匠は有言実行だからシャレにならん

あせつた心を落ち着かせると

ゆっくりと師匠のオーラを感じる作業に戻った

お昼頃まで纏^{てん}の修行をし、昼食後鏡をみると凸凹部分がだいぶ
マシになっていた

こんなにすぐ効果が表れるとはビックリだ

「次は絶と身体トレーニングです」

同時かよ!!!

何その無理げー

「さすがに2ついつペンには無理だと思っんですが…」

「普通は無理です。なのでタローにはこのプレスをつけてもらいま
す」

はめてみなさいといわれ、先ほどのメガネと同じようにつけてみる
すると自分のオーラがすつと消えた

「え？何これ」

「それが絶です」

「そのプレスやメガネは念具と呼ばれる道具で色々な種類がありま
す。念がこめられた道具だから念具、このメガネはオーラが見える

ようにする効果があり

ブレスは強制的に絶状態となるものです」

「なるほど、だから絶をやったことのない俺でも絶になれたんですね」

「念は体で覚えていくものです。いくら頭に知識があろうとも体が覚えなければ決してマスターはできません

なのでしばらく身体トレーニングの時はそのブレスをはめて絶の状態を体に覚えさせていきましょう」

体力や傷の回復も早くなるって読んだし絶は大切だよな

しかし念で絶が使えるようになったからか、今までの修行内容より一段と厳しいメニューが用意されていた

ジンさんの修行内容と違い命の危険はないが、1セットの回数はいきなり100回から200回に増やされ消化スピードも上げるよう言われた

余裕ができたらもつと回数を増やしていくらしい
できればほどほどにお願いします

そして新たに体術が組み込まれた

体術といっても最初は反射神経の訓練といった感じで、師匠が操るロープを右へ左へと避けていく物

修行場の全域を全て使い、倒れるまで避けながら逃げ回った

当たると結構痛いんです…

体力をしいはたすとそのまま抱きかかえられて1Fへ戻り、座学の授業となった

絶の回復効果は素晴らしい物で、起き上がる事さえできなかった状態から10分も経つと師匠の授業を真面目に聞くことができるレベルまで戻っていた

念ってマジチートツス

朝は纏てん、昼から夕食までを絶と身体トレーニング夕食後は座学
そして寝る前にまた纏てん

そのサイクルで半年ほど続けるとブレスを取った状態でも師匠に完壁といわれるような纏てんと絶ができるようになった

うれしくて舞い上がったけどこれってかなり習得スピード遅いよね…

第6話（後書き）

今回はかなり短めです

短いのに産みの苦しみハンパなかった：

次は長めを予定しています

ちなみにタローとリーシャンのマンションは2人以外の住人はいません

1 F 居住スペース

2 F 書庫

地下修行場

となっており、3F以上が製作スペースや物置、実験場という感じの設定です

誤字修正と少しだけ文追加しました

第7話

「タロー、ジンの弟子のカイト君からタロー宛のメールがきていますよ」

その時俺は師匠に見てもらいながら練の練習中だったが、すぐさま師匠のパソコンに飛びついた

「おおおおお、本当にカイトだあ」

「僕がタローに嘘を言うわけじゃないじゃないですか」

ひどいですねと師匠に言われた

内容はジンさんに仕事を押し付けられたらしく、その関係でヨークシンに行くから会わないかという事だった

普段ヒツキー丸出し生活をしている俺だが、カイトからの誘いならもちろん行くに決まっている

師匠のパソコンを借りて絶対会うからと俺のメールアドレスを添えて返事をした

今度は俺のアドレスにカイトからメールが来る

今は飛行船の中らしい

到着予定時刻は2日後のお昼前だったので、12時に待ち合わせをして一緒に食事でもしつつ話そうと約束した

待ち合わせ場所はセントラルパーク

場所わかるか？と聞かれたがまあ地図で調べればわかるだろう

キャンプ場の中にあるらしいのでそこでと

わかったとメールを返信すると、しばらく経った後にセントラルパークの地図に赤丸がついた画像が送られてきた

カイト：さすが具現化系、几帳面だ

あ：師匠にお休みお願いしないと

プリントアウトした地図を片手に師匠の所へ走っていった

「ししょー！ししょー！ししょー！おー！おー！おー！」

「いつになく上機嫌ですねタロー、カイト君との予定は決まったんですか？」

師匠に2日後カイトに会うことになったと報告する

ぜひいきたいので修行をその日だけは休みたいと訴える

「いいですよ。タローは真面目に修行も勉強もがんばっていましたからね 楽しんでらっしゃい」

「やったー！やったー！」

その日はうれしさの余り修行に集中できず、生まれて初めて師匠からお説教をくらってしまったorz

怒った師匠は怒鳴ったり手をあげたりはしませんが、あの怖い笑顔でニコニコとどす黒いオーラを浴びせられた

本気で泣いて反省したorz

約束の日、俺はいつもより2時間も早く目が覚めた

遠足前の子供かつ

確かにすごく楽しみだけど少しだけ恥ずかしい

今日は修行もないし、待ち合わせまでやることもない

『本を読むのもいいけど、ひさびさに翻訳でもやろう』

前の世界のパソコンを起動し、次は何を翻訳しようかと悩む

翻訳といっても、そのまま原文をハンター文字に直すだけではだめなのだ

主に土地名の問題で

師匠に最初に目に付けられた百人一首程度ならまだいいが、普通の娯楽小説などはしっかり読み直してネットで調べて、小説に出てくる土地に良く似た雰囲気のところや店を見つけないとだめなのでないと読んでる人が意味不明で混乱する

変換の必要のないファンタジーから探してみるが、コレは！という
ものがない

『十二国〇もいいけどキャラの名前が中国風だから翻訳しにくいん
だよー…』

ふと画面の端にあるSAOが目についた

これなら内容はほとんど室内だし、ある程度変えれば問題ないな
ちよつとグロいけど…

気を取り直し、俺の渾身の力作（タロー視点）日本語からヤンキー
文字に自動翻訳するソフトを起動する

これさえ使えばパツと見た目は漢文だ

ジャポン出身の人に見られても読まれる心配はない

ハンター世界において漢文は古代文字に分類されている

自動翻訳が終わりプリントアウトし、見やすいようにファイリング
する

かなり時間がたったはずなのにまだ10時だ

少し早いけど待ち合わせの場所にいこう

カイトも飛行船到着は昼前だと言っていたし…

バックにパソコンと携帯に財布、完成したばかりのファイルを入れる

「師匠、ちよつと早いけど行ってきます」

「タロー知らない人について行ってはいけませんよ？迷子にならない
ように気をつけて行ってらっしゃい」

俺は子供かっ

途中コンビニでジュースを買うと待ち合わせのセントラルパークへ
向かった

緑あふれるとてつもなく広い公園

ジョギングしている人や犬の散歩に来ている人などとたまにすれ違
うくらいで、とても静かですがすがしい空気で満ちている

「今まで外にあまり出なかつたけど今度散歩にでも来てみようかな……」
キャンプ場につくと、少し奥まった場所の木陰に丸太で作った椅子とテーブルがあった

座ってみると見た目に反して結構座り心地がいい

早速バックからパソコンとファイルを取り出す

パラパラとファイルを軽く読んでから、冒頭部分を打ち込んでいくこのSAO、初めて見たときは本ではなくめずらしくDVDだったゲームはするがあまり映画を観たことはなかった俺だったが、同僚に面白いから絶対見ろと言われ、無理やり押し付けられたのでしかたなく観た

…開始後15分もするとどんどん映画の内容に引き込まれ気づいたらエンドロール

小説版を購入し、何回も読み返していた。本の内容もそらで言えるほどなのでファイルを見なくても打ち込める

後で差異を確認すればいいだろうと、無心で進めていった

どれくらい時間が経ったのか

「ここ座つてもいいかい？」

声が聞こえ顔を上げる

20代弱だろうかやたら顔のいい男がいつの間にかそこにいた

黒髪をおろし、細身でスタイルもいい

すつきりとした黒のスラックスにクリーム色のYシャツを着込み、

にこやかに笑っている

「えっと……その……」

俺はヘタレであるヒツキーである

いきなり知らない人に声をかけられてもなんと返事を返していいか、すぐには思いつかない

あわあわと焦っている男は俺の返事を待たずに隣に座った

「何を書いているの？仕事の書類とかではなさそうだね。物語？」

「んと…その……」

「俺結構本読むの好きでさ、少し見せてもらえないかな？」

「あの…まだ全然最初だし内緒なので…」

「なんだコイツは！いきなり話しかけてきて内容見せるとか無理だろ
う常識的に考えて

そうは思うが口にはだせない

俺の対人スキルは限りなく低い

「いいじゃないか ちよつと見せて。盗作とかしないからさ」

そう言つと男は俺の目の前にあるパソコンを強引に奪い、最初から
読み始めた

「返してください！」

「ちよつと黙つて今読んでるから」

キツイ口調で言われ俺は黙り込む

まだ10ページ程度しか打ち込んでいないし、すぐ終るだろう…
しばらく待つと読み終わったのか男が話しかけてくる

「ごめんね。でも面白いねこの話 他にも本を出してたりするの？」

俺名義では本は出してないので首を横にふる

早くこの人どつかにいつてくれないだろうか…

「じゃあ完成したら持込とかするのかな？」

「…わかんないです」

「この先話はどう進んでいくの？」

質問多いな…コイツ

さっさとどこかにいつてほしいので考えてないと答える

「ふーん」

男はあごに手を当て、考えるような動作をする

イケメンはこんななんでもない仕事たくしさえ決まっている

自分と比べて一人心中で凹んでいるとキャンプ場の入り口からカ
イトがゆつくりと歩いてくるのが見えた

「カイト！」

「タロー元気だったか」

急いで男からパソコンを取り返し荷物を持ってカイトの所へ急ぐ

「待たせたか？」

「ううんだいじよぶ」

ひさびさに会えたのと、不審な男から解放されたのとで知らず知らず笑顔がこぼれる

カイトは前にあったときよりも身長も髪も伸びたようですらにカッコ良くなっていた

「こんにちわ。タローのお友達？」

ぎよつとして振り向くとさっきの男がすぐ後ろにいた
なんでついてくるんだ！

しかもなんでタローとか呼ぶんだ…俺名前教えてないのに

「タロー知り合いか？」

「さっき初めてあつた人…」

カイトの腰にしがみつき、背中に隠れながら答える

「ひどいなタロー」

「すまないが俺達はこれから仕事でな」

カイトは俺に代わって男を追い払おうとしてくれる
ありがたい

男はジツと一瞬無表情で俺とカイトを見つめると

「そうか。俺はクロロ・ルシルフル またぜひ会いたいな」

爆弾発言をかました

おまっクロロって！団長かよ！

驚きが顔や態度にも出なかった俺を褒めてほしい

『怖い怖い怖い』

なんでデコに十字マークついてねーんだよっ

デコの十字は団長のアイデンティティーじゃねーのか！

それからちゃんと上半身裸で黒のファー付コート着とけよ

でないと見た目わかんねーっつーの！

「ごめん…俺達急いでるんだ」

絶対 2度と 会いたくない

「アドレスを交換しよう」

「アドレスとか持っていないから無理」

キツパリハツキリと言う

本当は持つてるが、そんな危険そうな事したくはない

「タローいくぞ」

カイトが空気を読んで、俺を腰にしがみつかせたまま歩き出す

そつと後ろを振り返ると団長がにこやかに手を振っている

似合わなすぎて背筋がゾツとした

カイトと一緒に公園を出た所で辺りをみまわす

とりあえず団長はいないようだ

一般人の振りをしてたし大丈夫とは思うが、俺のチキンハートが限界を訴えている

「カイト、師匠の家にいこう」

「タローと食事をした後はホテルを取るつもりだったんだが…」

カイトが難色をしめすが、カイトの為にも安全な師匠の家にいかなければならない

「さっきの男なんか嫌な感じがしたんだ。カイトには迷惑かけるけど家まで一緒に来てくれない？」

いつになく真剣な俺にカイトは少し戸惑いつつも首を縦に振ってくれた

「じゃあいこう！走っていこう！」

「電車か車でいかないのか？」

「走りたい気分なんだ お願いカイト」

強引に腕をひっぱりひとまず街の中心地を目指して走る

「分かった 分かったから腕を放せって」
苦笑いを浮かべながら、場所わからないから案内頼むと了承してく
れた

中心地につくと師匠の家とは反対方向に走る

それから街を大幅に迂回し、到着

街を出てからは全速力で走り続けたせいか、息があがっている

家につくと師匠が驚いた顔で迎えてくれた

「まだ1時にもなってますが：何かあつたんですか？」

カイトと俺の顔を交互にみる

俺が無言でダイニングへいくとお気に入りの緑茶を黙って出してく
れた

「変な人にあつたんだ」

「タローそれじゃわからないだろ」

一言で済ませた俺にカイトから突っ込みがはいる

しかたがないのでつつかえつつかえ男の出会いから説明する

「話を聞くとただの強引な男だとしか思えませんが…」

蜘蛛の団長だからとは言えない

「何て言っていいかわからないんだけど…」

俺は唯一の知り合いのジンさんとの出会いと比較しながら話す

「ジンさんはルシルフルって男より出会い方は完全に怪しかった。

いきなり家にいたし けど少し話せば：なんていうかジンさんは俺
を傷つけたりしないって警戒を解いても大丈夫だって思った」

本当は名前を聞いたからなんだけど…

ジンさんを尊敬しているであろうカイトは黙ってうなずいてくれた
師匠はちよつと眉に皺がよっている

「ルシルフルは出会い方は唐突だけど普通だった。話している間は

ずっと笑顔だったし物腰も柔らかかった。でも怖かったんだ。勘づいていうのかな、警戒を解いちゃいけないって…そんな気がして」
上手く伝わるだろうか…ちょっと嘘も入ったけど
団長なんだし 危ない男なんだから警戒は大げさなくらいがちょうどいい

じつと俺の話を聞いていた師匠が口をひらく

「ご飯は食べてきたんですか？」

なんとも気の抜けたセリフでポカンと師匠を見る

俺が首を横に振ると

「僕はすませてしまいました。何か簡単な物をすぐ用意しましょう」

「ありがとうございます師匠」

簡単なといいつつ出てきたのは美味しそうに湯気を立てるカルボナーラとコーンスープ

俺の好物で師匠にお願いしてよく作ってもらう物だ

カイトと一緒に食べ始めると師匠は仕事が途中だったのかパソコンに向かいながら作業をしていた

「タロー…」

食事をしながらカイトが声をかけてきた

「精孔の件、本当に申し訳なかった」
びっくりした

んな事とつくに忘れてた

「気にしなくていいよ。俺も無事だったし、それにカイトはジンさんにぶっ飛ばされただけじゃない」

「それでもだ。悪かった…」

「うん分かった」

心がほっこりする

ちよつと照れくさくて顔が暑い

それ以上何も言わず、食事を再開した

俺達が食べ終わると師匠はパソコンから顔をあげて話し出した

「クロロ・ルシルフルという名前の男は存在しませんね」

「「え？」」

仕事してたんじゃなくて団長の事調べてたのか

そりゃ流星街出身なものな

戸籍なんてあるわけない

「偽名だったのかもしれませんが、タローの話も気になります。カイト君は街を離れるまでここに泊まっていきなさい」

「いいんですか？」

「もちろんですよ。うちのタローと随分仲良くしてくれてるようですし、よければ時間が空いた時にタローの組み手の相手をお願いします」

「それくらいだったらいつでも」

素直に嬉しい

カイトならジンさんと違って手加減してくれそうだし、カイトと現時点での実力の差がわかる

ピトーにカイトが負けたとはいっても、ピトーはまたやりたいうってセリフがでてくるくらい気に入ってたばいしな

強さ的には同等程度はあったんだろう

女王を始末すれば大好きなカイトも死なない

更にかんばらないと…

それからカイトは1週間ほど滞在した

たまたま仕事だと出かけていったがほとんど家にいた

修行もカイトも交えて一緒にやった

組み手の相手をしてもらったが、俺はほとんど相手にならなかったぶっちゃけボコボコにされましたorz

師匠との修行で避ける事だけは上手いとお墨付きをもらっていたの

に、避けれたのは6割くらいでそのうちの半分はなんとかギリギリというレベル

俺の攻撃なんて全くかすりもしない

というか身長が違いすぎて、カイトの懐に飛び込まないとリーチの関係上当たらない…

カイトは高身長を抜きにしても手足がモデルのように長い

先は遠そうだ…これでもまだ成長途中もいい所だろうしな

カイトといえばここでの修行生活に感動していた

ご飯は毎食美味しい物を師匠が作ってくれるし、毎日風呂に入れて着替えられる

師匠がカイトの修行をつけているがボコボコにされても死ぬような目にはあわない

勉強も教えてもらえる

「ここはまさに楽園だな」

カイトは真面目な顔で語る

「そんなにすごかったの？」

「ジンさんに拾ってもらって、1ヶ月くらいたった頃にちよつと出かけてくるって密林の中に放置されてな…その時は俺もまだガキだったし、サバイバルのサの字も知らなかったからちよつと大変だった」

それをちよつとというんですか！カイトさん

俺だったら確実に死ぬってマジで

「狩をして獲物を取ったはいいが火のおこし方が分からなくてな、生のままたべた。血抜きもせずに」

腹を下してなと笑顔で語る

啞然として近くに座る師匠に目をやると

「ジンは野獣ですからね。人の話を聞かないし自己中心的です。カイト君の修行もジンの基準でやったんでしょう。生きていられたのはカイト君の才能があったからです」

師匠ジンさんにやたらきついな

昔何かあったんだろうか…いやあったんだろうか
でなければ基本的に優しい師匠がここまで言うはずがない

カイトとの楽しい時間はあっという間にすぎ、カイトはジンさんの
所へ戻っていった
また来るからと…

カイトが帰った夜、俺は団長に首を刎はねられる夢を見た
やたらリアルで怖かった

団長の夢はそれから2、3日続いた

『お外怖いお外怖い』
完全にトラウマである

パソコンの中身を見られただけで、それ以外は何もされていないと
いうのに。

自分でもたいがいチキンだと思いが、俺は夢を見てから発以外の念
をマスターするまで師匠が外出に誘っても外へでる事はなかった

文字通り1歩もでなかった

団長はもう俺の事など忘れているとは思う

俺のチキンハートとヘタレさは一生直らないに違いない
でも恐怖心が引き金となり、念や体術などの修行は師匠が心配する
ほど熱心に打ち込んだおかげでぐんぐんと伸びていった

これも怪我の功名っていうんだろうか

第7話（後書き）

活動報告のタイトルに簡単な更新予定をのせています
気になる方はそちらをよろしければご覧下さい

第8話（前書き）

前書き 今回は後書きにこの先の展開に関する重要なお知らせと警告を載せています

第9話以降をお読みになる際は必ずご覧下さい

第8話

初めての師匠の買い物をした時に買ってもらった日記帳を手取る
真っ黒だったそれは今ではすっかり色あせし、少し茶色っぽい色
になっている

トレードマークの銀猫も毎日日記を書くたびに撫でていたからか、
磨耗まさうしている

師匠に拾われ弟子になって5年弱、引きこもり生活をしてた割に
は色々あった

日記のページをめくり読み返しながら想う

最初は日記の書き方が堅苦しく笑いが漏れる

カイトはたまに仕事がヨークシンであると家に寄ってくれる

ジンさんの元から独立し、弟子卒業試験の真っ最中であるらしい

俺にもジンさんに関して何か情報があれば教えてくれと頼まれてる

ジンさんはいえ年々1回くらいは家にくる

主に師匠を拉致しに

そのたびに抵抗する師匠とジンさんとの激しい殴り合いという名
の話し合いが行われる

初めて2人の戦いを見た時はリアルにちびった

師匠の殺気のオーラマジでやばいし…

最近来た時なんて部屋が崩壊寸前までいったものな

俺はさっくり気絶したよ？うんシヨウガナイネ

ジンさん来たよ！ そうカイトにこっそり電話をかけようとする

と、師匠と熱血バトル中にもかかわらずジンさんから鉄拳が飛んで
くる

そのまま避け続けていると、なぜかジンさんと組み手の修行に移項してたりする

不思議だ

修行の方も順調で念の応用技も無事マスター

今は円の強化と各系統別訓練を行っている

実は水見式はまだやっていない

師匠が水見式をやるうと言ってくれないし…

言ってくれないと何故知ってるんだ的な突っ込みがくるのは確かだしなあ

師匠いわく、系統別修行をしていけばだいたいこの系統だろうなと判断がつくらしい

俺は強化系修行が一番伸びが悪く、反対に伸びがいいのは変化系と具現化系ついで操作系、放出系と続く

たぶん変化系か具現化系なんだろう

性格診断だと嘘つきか神経質か…どちらも合ってる気がする

つらつらと考えつつ日記を置いて新聞を読み始める

もう年末

新聞を読んでいると何かひっかかる

なんか忘れてるような……

「……………あっ」

ハンター試験忘れてた

というかハンター試験受けるって名目で師匠に修行をつけてもらってたんじゃないか!!

俺のバカバカバカ

今が1995年年末

俺が受けれるハンター試験は来年1996年の283期〜1998年285期の3つだけ

286期にはヒソカが試験に初襲来するし、287期は原作開始最もダメ。その次の288期はキルアの一人勝ち

つまり285期の試験までに受からなければその次の機会は2002年の289期までまたなくてはならない

人生の目標設定に2001年4月前後の女王アリ討伐を掲げている以上、289期なんて間に合わない

一緒に行くハンターのツテも見つけなければならぬし、来年か再来年にはとらないと…

急いで師匠の所へ行き、ハンター試験を受ける事を伝える

「やっと受ける気になったんですか。ハンターになることを忘れているかと思ってましたよ」

「イヤ…あの…」

「まあ、いいです。でも申し込み期限まで後1週間しかありませんよ?」

なんですと?!

驚きパソコンで検索すると師匠の言う通りだった

急いでネットで申し込む

気づいてよかった…

思い出したのがあと1週間後だと来年までまたなきやいけない所だった…ふう

気が抜けてへたり込んでると

「タロー…ハンター試験はそう甘い物ではありませんよ 念をマスタ―しただけで合格できるような生易しいものではありません」

「受けるのはほとんど念を使えない人達だけなんじゃないんですか?」

疑問に思って質問を返す

原作でも念を使えるのはヒソカとイルミの2人だけだった

「会場に着けばわかりますが1次試験開始の際に、念が使える者に向けて纏てん、絶以外の使用を禁止すると念で作った文字で知らされま
すよ。破ればもちろん失格です 多少は目こぼしはありますが、円
なんて使えば1発ですね」

「…………ツ」

思わず絶句する…

やばい俺、念使えるから多少はスムーズにいけると思ってた

ドウシヨウ

師匠が真剣な顔になり俺を見つめる

「タローハンターになりたいとまだ思っていますか？」

「はい」

「ハンター試験中にタロー自身が死亡する可能性をきちんと考えて
いますか？ハンター試験中の死傷率は8割を超えます」

「…はい」

「最後に聞きます。ハンターになる覚悟はできていますか？」

「できていると俺は思っています」

ふうと師匠はため息を吐くと

「ではタローへ特別修行をつけます。捨ててもいい服装に着替えて、
1週間分の着替えなどの荷造りをしてきなさい…タオルを多めにい
れるように」

荷造りを終えた俺を師匠は外へ連れ出す

ドアから最初の1歩を踏み出すときは勇気がいったが、一旦出て
しまえばなんてことはなかった

それよりも普段と違う師匠のピリピリとしたオーラが気になる

俺の方へは一切顔を向けず無言で車を運転している

つれてこられたのはヨークシンの中心部にある警察病院

師匠は裏口の警備室にハンター証を見せ入っていく

長い廊下を進み、エレベーターで地下へと降りる

「タローはこれから1週間ここで仕事をしてもらいます」

「仕事…?」

「そうです。そこにある部屋がタローがこれから1週間泊まる部屋になります。荷物を置いてきなさい、持っていく物はタオルだけで十分です」

荷物を置いて師匠の元に戻ると、知らない男が立っていた

ベージュのぼさぼさの髪に鋭くにこった黒い目

茶色つばい薄汚れたツナギを着ている

年は40 - 50歳くらいだろうか、

「タロー、この人はゼルマさんといえます。ゼルマさんがこれから1週間タローの上司となつて監督指導してくれます」

「タロー・タナカと申します。よろしくお願いします」

「……よろしくな」

「この仕事にはハンターとなる上で避けては通れない問題が待っています」

戦闘…とかがらうか

ハンターに避けられない問題…?

ゼルマさんに頼むつて事は、師匠では教えられないそういう問題なのか

「僕は今までタローを見てきて、タローがどういう性格をしているかトラブルに見舞われた時にどういう思考をするか、把握はつかしているつもりです。ハンターとしてタローが生きていく上で力や知識とは違う足りない物の事も分かっています。そしてこの先の仕事をこなしていく過程で、タローは壊れてしまうかもしれません」

師匠は真剣な顔でそう言うつと白い封筒を差し出す

「僕は今から家に帰ります。今までの様に近くで見守ることもしません」

一瞬背筋に怖気が走る…

「この仕事は僕がタローに科す弟子卒業試験でもあります。できなければ一生ハンターになる事は認めません 僕が使える全ての手段を使ってハンターになれないよう工作します」

覚悟を見せなさい

そついつと昔のように優しく抱きしめてくれた

第8話（後書き）

後書き お知らせと警告

原作時期ですがネットで調べた結果

1999年と2000年であるという説があります

13巻92ページより2000年とする説

15巻116ページより1999年とする説

作者の勝手な都合で申し訳ありませんが、切が良く計算しやすいという申し訳なくなるような理由で

2000年説で行きたいと思います

次の9話目より、残虐な表現が出てきます

その先12話あたりで（プロットの上でなので多少前後するかもしれませんが）

原作崩壊と原作改変タグを追加させて頂きます

読んでくださる皆様にご不快な思いをされるかもしれませんが
ご注意ください

第9話（前書き）

残酷な表現が登場します

苦手な方はお気をつけ下さい

第9話

「ぼつ、ついでこい」

緊張しながらゼルマさんの後を追う

「仕事内容を先に説明しとくぞ、死体処理だ」

「……ッ」

背筋に衝撃が走る

日本にいたころも、こちらにきてからもぬくぬくと何一つ不自由なく暮らしてきた

死体なんて一度も見ることがなかった

ゼルマさんは歩きながら説明する

ヨークシンは世界中のマフィアの中心地

十頭老と言う元締めがいるが、毎日どこかしらで大小様々な抗争が行われていると

「この警察の仕事には毎日道端に放置されてる死体を回収し、焼却処分する事が含まれている」

放置していると衛生上悪いしなと、ゼルマさんは笑う

ヨークシン警察とマフィアは蜜月とっていい関係が続けており、街の掃除も立派な警察の仕事だ

表で歩く何も知らない人間に裏を見せない為に…

「今日の数は少ないほうだ。でかいドンパチがあるともっと増えるぜ」

ゼルマと共に処理作業場へはいると、無造作に部屋の真ん中に死体が積み上げられている

人間の形をしていないモノ見える

急激に嘔吐感がこみ上げそのままうずくまって嘔吐する

吐く物がなくなっても、えずきは治おひまらない

「慣れるとはいわねえ。耐えて割り切れ」

山のように積みあがった死体のひとつつをゼルマはタローへ放り投げ
げる

「服をぬがせ。後の処理は今日は俺がやってやる」

今日は…ということはゼルマが今行ってる作業を俺もやらなければいけないのか…

絶望的な思いがする

できるわけがないと

「作業をしながら俺のやってることよくみとけ。明日はお前にもやつてもらおう」

最後にそういうとゼルマさんはもうこちらを見ることはなかった
次々と処理されていく死体

『覚悟を見せなさい』

師匠はそういった

ここで止まってたら師匠に呆れられる

萎なえた足に力をいれる

何回も何回も嘔吐を繰り返す

涙もとめどなく流れる

それでも作業をやめず、何も考えないようにしながら作業を続ける

「……………うあ…あ……………あ」

声が聞こえてふと積み上がった山をみあげると、わずかに動く人影があった

「ゼルマさん、この人 生きてます!」

ゼルマは感情のない瞳で人間を一瞥いちへつすると、ナイフをタローへ渡す

「もう助からん。楽にさせてやれ」

手が震える

すぐるような瞳でゼルマさんを見上げるが、もうこちらを見ようともしない

生きている人間がタローへ懇願する

頼むから殺してくれと

震える手で師匠に教えられた急所へナイフを当てる

力をこめればこの人は死ぬ

俺が殺す…

そう思うと突き立てる事ができない

そのままの姿勢で俺が固まっていると、俺の手の上にそっとゼルマさんの手が重なる

そしてナイフを握った俺の手の上から力がこもった

「初の殺しだ。その感触忘れるな」

その後どうやって仕事を終えたのか分からない

気がついたら人気のないトイレで手を懸命に強く擦りながら洗っていた

気がつくときゼルマさんが近くに立っていた

「ぼつ、初仕事はどうだった」

相変わらず感情の見えない瞳で俺をみる

すっかり干からびて割れている唇をどうにかあける

「生まれてはじめて死体を見ました……人を殺したのも、初めて…

です」

「やれやれ、リーシャンの奴とんだ純粹培養を送り込んできたモンだ」

「師匠とゼルマさんはどういう関係なんですか？」

「さてな ひとつだけいっておく、この施設をココに作ったのはリーシャンだ」

それ以上のことは師匠からもらった手紙を開けて読んでみると

「今日だけは特別に食事を部屋へ運んでおいた。明日は9時からだ遅れるなよ」

部屋へ戻ると、テーブルの上に湯気を立てるスープとパンが置いてあった

ベットに座り、師匠からの手紙をあけた

手紙の内容は師匠の生い立ちだった

リーシャン・マートはヨークシンの片隅で生まれた

母親はリーシャンと同じ髪をもつ、道端で客を取る売春婦だった

父親は知らない

母が客の誰かだろうと笑っていた

毎日男と絡む母を見ながら育った

6歳の時、母親が薬のやりすぎた常連客に目の前で絞め殺された住む場所がなくなり、自然とストリートチルドレンに仲間入り

初めての仕事はタローと同じ死体処理

といつてもその頃はこんな施設はなく、ヨークシンの裏路地を歩けば死体にあたると言つくらい簡単に死体が転がっていた

死体から服を剥ぎ取り、金目の物を漁り解体する

食べる為ならなんでもやった

窃盗、売春：そして殺人
リーシャンにとっては当たり前前の日常だった

成長し、ストリートチルドレンからマフィアへ
よくある出世街道、順調に人間のクズへと歩む
ある日所属していたマフィアが何かやりすぎたらしい
1人のハンターが乗り込んできた
ハンターは圧倒的だった
銃を撃つても傷ひとつ つけられない
バズーカを直撃されてもケロっとしていた
これは殺されるとあきらめて椅子に座り、ハンターの戦いをなが
めていると

ぼつ、度胸あるなと殺されずに拾われた

僕は運がいい人生を歩んできました

軽蔑してもかまわないと書いてある

ただひとつ

師匠と似たような育ち方をした人間は腐るほどいるのだけは覚え
ておきなさいと…

それから食事はきちんと取りなさいと…

泣きながら食べて寝て初日は終わった

2日目 吐いた 手が震えた でももう泣かなかった

3日目 また殺した 手が震えた 嘔吐感がこみ上げるがなんと
か我慢した

4日目 手の震えがまだ治まらない 萎える心を叱咤する為に師
匠の手紙を何回も読み返した

5日目 まだ手は震えている でももう吐く事はなかった

6日目 手がようやく震えなくなった ゼルマの介添えを受けな

がら初めて解体した

7日目 迷わず殺せるようになった　ここで生きてるゼルマ以外の人間は死にたいと願うから

「お疲れ、タロー」

最後の仕事が終わると、ゼルマさんはタローと呼んでくれた
給料だと薄い封筒を渡される

「お金もらえるんですか」

「ここは孤児共のバイト先だからな」

もらった封筒を開けると7000Jの現金が入っていた

「7000J……」

「少ないと思うか？」

黙ってうなづく

「1日1000J　それだけあれば飯が安全に食べるんだぜ」
ハツとして顔をあげる

「表に迎えが来てる。とつとと帰れ」

「ありがとうございます」

頭を下げて今までの感謝を表す

裏口をでると師匠が車で迎えにきてくれていた

「いい顔になりましたねタロー」

車に乗り込み流れる景色を眺める

なぜかもう外を怖いとは思わなくなっていた

第9話（後書き）

本当は8話と9話はセットでした

プロットを眺めているうちに不安になって2つに分けました
警告をかなり載せましたので、苦情は受け付けません

第10話

家に帰り着くと師匠が紅茶を入れてくれる

いつものように師匠と二人向かい合わせで飲む

「まずは 弟子卒業試験の合格です」

「ありがとうございます」

紅茶を一口飲み、師匠が一息いれる

「手紙は読みましたか？」

「はい…どうしてあの仕事を？」

「タローはこのままハンターになったら死ぬとそう思ったからです。しかも最悪に近い仲間を巻き込んで死ぬタイプです」

「そんなっ」

「甘いです。敵を殺せない者はハンターになれません タローは肝心な場面で躊躇ちゅうちゆして反対に殺されるでしょうね」

悔しいが否定できない

唇を噛みしめうつむき拳を握り締める

「殺さなければ殺される。殺さずにすませるといっなのは高等技術です、よっぽど実力差がなければできません。何の為に罪の免除がハンター証についていると思いますか？それだけ殺そうと狙ってくる者たちが多いからです」

そんなにも甘い事だったのかという考えが頭をかすめる

女王アリさえ倒せれば後は田舎に引き籠こもって暮らせればそれでいい

今まではそう思ってた

俺はまだこの世界のお客さん気分だったのかもしれない

漫画に書かれてあるのは一部分だけなのに、それだけでこの世界の全てを知っているとそう思ってしまった

「タローを狙っても殺されない、そう情報が回ってしまえば終わりです。1対1なら負けないかもしれない でも1対2だったら？1対10だったら？同じハンターでさえハンター証を目当てに襲って

きますよ」

「そんな風に考えた事ありませんでした」

「これからは考えなさい。ハンター試験に受ければそういう世界に身を置くのですから」

沈黙が部屋を支配する

黙り込む俺の前にゴトリとベルトについたた大ぶりのナイフが置かれる

「これは…？」

「ペンズナイフ初期型をモデルに僕が作ったナイフです。抜いてみなさい」

ゆっくりとナイフを鞘から抜く

なんとというかナイフというよりドスといった方が近いデザインだ。全体的にゆっくりとした曲線を描いており、刃先は日本刀のように丸みを帯びている。

中心から根本にかけて波型の細かい刃が特徴になっている

なんか緑色で金属っていうより水晶みたいだ

背筋の凍る美しさってこういうのをいうんだろうか

「弟子卒業のプレゼントです。オーラを少しナイフに流してみなさい」

「うわっ周になった」

「強化系が苦手なタロー用なので、オーラを流すと自動的に周を行うようになっていきます。残りの効果はオーラを切る」

「オーラって切れるんですか…」

「すんごいナイフだな」

「というか刀身の模様に見えるのが、偽装された神字っぽいし。」

「刃こぼれなどしたらオーラを練で流し込めば直ります。肌身離さず持つように」

「……大切にします」

ベルトを腰にまわし装着する

ナイフの鞘は腰の後ろにベルトと並行についている

『これならちよつとダボつとした服をきたらナイフもみえないな』
新しいオモチャをもらった子供のよう嬉しくなつて気分が浮上する

「今年のハンター試験はここヨークシンから始るようです。場所と合言葉は調べておいたので、ギリギリまでそのナイフを使った修行をしましょう」

「りょーかいです!」

「ここか……」

ハンター試験会場である場所に着くと、俺はなんとも言えない気分になつて立ち止まった

入りたいけど入りたくない

なんで入口が可愛いケーキ屋さんなんだよ!!

ゴンの時みたいにもうちよい入りやすい所にしてくれよ!

溜息をつき、色んな意味で覚悟を決めて中に入る

レースがちりばめられた店内

ファンシーな雰囲気圧倒される

『俺は今激しく浮いている……』

近くの店員を捕まえ、あらかじめ教えてもらっていた合言葉を言う

「すいません、ウエディングケーキ1人用を下さい」

「ご結婚用ですか？」

「……誕生日用です」

周りにいた一般人の女の子からクスクスと笑われ、顔にカーツと血が上る

これイジメだろっ

「こちらへどうぞ」

案内され、奥へとついていくと下に降りる階段があった

『エレベーターじゃないのか』

受ける年が違うので内容は違うのは当たり前だが、突っ込み要素が多い

「どうぞ奥へお進み下さい」

階段は降りはじめてすぐに終わり、長いトンネルが続く

30分ほど歩くと扉が見えた

開けてみるとそこは大きな体育館のような場所で、もうすでに多くの受験者が集まっていた

俺結構ギリギリに付いたもんなー

タローは師匠に試験開始時刻をリークしてもらっていたので、開始間際に着くよう調整して来ていた

「こんにちわ。受験者番号のプレートになります 胸のところに見やすいようにつけてくださいね」

声をかけられ下をむく

『マーメンさんきたああああ』

タローのテンションが激しく上昇する

なんだかんだいっても原作キャラに会えれば嬉しいのだ

「あの握手してもらえます?」

「えっ」

ドン引きされた気配はするが強引に握手を交わす

ほんとにマメだし、マーメンさん

満足した所でプレートをもらい中にはいる

『番号666…もう突っ込み疲れてきた…』

諦めて胸にプレートをつけるとすぐ近くの壁にもたれる

奥に進む気はしない

どうみてもマツチヨの海

泳ぐ気にはなれない

ギイイという大きな音が聞こえ、入ってきた方向と反対側の大きな扉が開く

それまでざわざわと騒がしかった部屋がシインと静まりかえる

「283期ハンター試験の開始を宣言する」

大きな野太い男の声が部屋中に響く

後方にいるタローには声はすれども姿は見えない

「第1次試験会場に案内するから全員ついてこい」

どうやら1次試験は外で行われるようだ

タローも後をついて外に出る

「よし！お前らよく聞け、よく見ろ」

第1次試験官であろうか

体格のよい重量級の男が壇上に登り、人さし指を立てる

凝で見ると師匠が言ったように、纏てん、絶てん以外の使用を禁止する

と念字を試験官が作っていた

「俺が第1次試験官モカ・マンタリだ。試験内容はフィールドアスレチックだ」

試験官が指す方向を見る

ていうかあれって…

『SASSUEじゃねー！かー！かー！かー！かー！』

元の世界でTVでみたような巨大なアスレチックがドンとそびえ
たつ

内容はきつとサ○ケとは比べモノにならないくらい物騒なんだろ

うが…

「どんな手を使ってもいいゴールに到達しろ」
試験官は手を振り上げ大きく振り下ろす

「それでは開始!」

第10話（後書き）

太郎は武器をてにいれた！

10話にしてようやく武器ゲット

そしてここまで女性登場回数2人（しかも片方ナナシ）

シリアスパートは終わり、いつもの雰囲気にもどります

第11話

開始の号令と共に轟音をたて走り出すマツチヨ…もとい受験者達
すでにサケもどきの入り口で乱闘が起きている
近づきたくない

しばらく待つてから行こうとその場に座り、荷物の確認をする
師匠お手製のお弁当に念能力者が作った救急セット
ペットボトルの水にサバイバルを想定した濾過器
ライターにパソコンと携帯電話などなど
バックにこれでもかと詰まっている
詰めすぎたと思わないでもないが、できれば今回1発で受かりたい
確認が終わると入口がだいぶ空いていた
周りに転がるモノは見ないフリをする

「ねえ、いかないの？」

横をみると知らない男が面白いものを見つけたような表情でこちらを見ていた

嫌味なほど高い身長に金色の髪

色白で目が大きく少女のような顔

これで胸があつてスカート穿いていれば完璧美少女だな

「ねえねえ返事は？」

答えない俺にじれたのか男が畳み掛ける

「マツチヨの海に飛び込みたくなかったから」

そう答えると、男はケタケタと腹を抱えながら笑い転げる

「もう俺いくから」

さすがにムツとしてアスレチックへ向かう俺を男が慌てて追いかける

「ごめんごめん、悪かったって」

ちつとも悪そうに聞こえない

「いいよ、もう。君はいかないの？」

「君とかやめてよ、サブイボ立つから。俺シアルっていうの　ちつこい君のお名前は？」

ブチツと豪快に理性の糸が切れた音が聞こえた

「ちつこいいうなあああああああ」

トラウマボタンを押された俺はシアルに殴りかかる

それでも伸びたんだよ！

その無駄にでかい身長を俺によこせっ

こちらに来る時縮んだ身長は、少しは伸びたものの160?を超えたあたりから動いていない

結構スピードを入れて殴りかかっているのに、シアルはアハハハと笑いながら軽い調子で避けていく

しばらく鬼ごっこを続けているとさすがに頭が覚めてきた

ヤバイ、これ以上やると念を使ってしまう

拳を下ろし、元の目的に向かう

「なんだ　やめちゃうの？」

「試験のが大事だし」

「まっ、それもそっか　で名前は？」

「タロー」

二人で話ながらアスレチックを攻略していく

「タローは何でハンター試験受けに来たの？」

「んー、師匠みたいなハンターになりたくて。後、探し物ってうわっ！」

いきなり上から液体が降ってきた

さつきまで俺がいた場所はジュツと嫌な臭いを発しながら溶ける
当たったら死ぬっ

「気をつけないとダメだよー 探し物ってなにになに？」

「虫？」

「アハハ なんて疑問形なの？」

本当によく笑う奴だ

なにがそんなに面白いのか

無邪気っていうのかな

俺は結構人見知りする方なのにもうシアルと話するのが楽しくなっ
てる

「本で読んだだけなんだ」

「へー、タローそこ落とし穴あるよ」

「うおっ」

やっべシアルが指摘してくれてなかったら落ちてた

円が使えないって本当に厄介だな

「シアルはなんでハンター試験を？」

「俺も探し物。情報少なくてさハンターサイト使いたいんだよね

」

「なるほどー」

「シアルの探し物はなんなの？」

「伝説の一族？」

なんだよ…伝説って

ふと思う

シアルは念を使えるんだろうか

「シアルは試験官の指の先は見た？」

俺の質問にシアルがぎょっとした顔を見せる

「なんでわかったの？」

「カマかけたただだよ」

やり込めた俺は会心の笑みを浮かべる
シアルはニッコリ笑うと額に青筋を浮かべ、コブラクローをかけた
てきた

「タローのくせに生意気」

「イタイイタイイタイっすいませんでした!」

このジャイアンめ!

ギヤーギヤーと漫才をしながら進む

しばらくすると、目の前に垂直に切り立つ壁が現れた
ところどころに窪みがある

それを伝って上るようだ

上を見るとすでに到着した受験者が休んでいる

「これで終わりかな?」

「んー、っぼいね 先いくよ」

シアルはトンと飛び上るとリズムよく上へ上がっていく

「タロー ー、おいでおいで」

「犬のように呼ぶな!」

また笑いのツボにはまったらしいシアルを放置して俺も登り始める
シアルよりだいたい時間がかったが無事に到着

「タローよく頑張ったね。ほらアメあげるよ お手!」

「シアルってほんと性格悪いよね」

「俺ってすんごくいい人だよ」

「あーはいはい」

軽く流しながら周りを見る

700人近くいたはずなのに半分以上減っている

「結構減ったね」

「早く減ってくれると楽だよねー 試験だるいし」

おいおいおい

シアル、結構毒舌だな

周りの受験者がシアルの発言を聞いて殺気立つ

「おまつシアル、ちょっとは自重しろよ」

俺が気をきかせて鎮めようとするもの

シアルはどこ吹く風で、だってほんとのことだもん

お前は子供か……

重い空気のため息をつくとき絶妙なタイミングで笛が鳴る

「第1次試験終了!!合格者152名」

一気に落ちたなー1/3以下か

これなら本当に早く終わるのかもしれない

シアルと雑談をしつつ次の試験を待っていると、神経質そうな男と髪を高く結い上げた女性が近づいてくる

ん……あれって……

「第2次試験官のノブです。第2次試験は向こうにある建物で行います」

やっぱりそうか

歩きだすノブに受験者達がついていく

ノブって事はあの後ろにいる女の人はパームなのかなあ

「タロー あの試験官の後ろにいる女の子可愛いと思わない?」

マジか……

シアル面食いか?

「シアル結構女好き?」

「可愛い子はみーんなダイスキ!」

「でもあの女性はやめといた方がいいと思っけど……」

「えーなんでー」

「勘」

俺は美形でも可愛くもないから興味なんて持たれないだろうが…

シアルは美形だからなあ

一度噛みつかれたら大変そうだ

あの包丁を大量にぶら下げた姿

漫画なのに怖かった

「ふーん…おね

ーさ

ーんっ」

いきやがった…

俺は知らないからな、忠告はした うん

あ、殴られてる

「第2次試験は皆さんに2種類の中から1つ、試験内容を任意で選んでもらいます」

ノブがそういうと壁に取り付けられた液晶パネルに試験内容が載る

1 .バトルロイヤル 1を選んだ者全てで1時間戦闘を行い残ったものが合格

2 .ペーパーテスト 2を選んだ者全てでペーパーテストを行い、5位までが合格

「1を選んだ者は私の助手の女性の所へ、2を選んだ者は私の所へ並んで下さい」

んーんーこれは迷うな

ていうかほぼマツチヨ共は1だろうな

問題は…

「シアルはどっちいくの？」

「1かな」

シアルには勝てない

「タローはどっちにするの？」

「俺は2にいくよ」

結果、1が135名 2が17名

これはまた綺麗にわかれたなあ

シアルは問題なく受かるだろう

俺はどうかなあ

師匠に何年も勉強を教えてもらったし、それなりの知識はあると信じたい

ノブさんに着いて行くと少し大き目の部屋に入る

「適当な席に座ってください。全員着席し終わったらテストを配ります」

配られたテストに目を通す

なんすかコレ…

テスト内容は10問あり、すべて種類が違うがどれも高難易度問題だ

『1問目の数学とか、4問目の物理とか異次元の言葉にしか見えねえ…』

これはヤバイかもしれない

額に汗を流しつつ、テストを凝視する

素直に1いつときゃよかったか…

後悔しても今更遅い

とりあえず解る問題だけきっちり完璧にやろう

気を取り直しペンをもつと

5 問目の歴史と7 番目の古代文字翻訳、そして10 問目のハンタ
I の成り立ちに関しての小論文

3 問だけ解いた…

師匠…すいません

落ちたかもしれないです

第11話（後書き）

1話以来の女性登場です
うん…なんかすいません

第12話

ノブが淡々と試験結果を発表している

いや、それはいいんだけど結果がおかしすぎる

1問10点100点満点

なんで最高得点が俺の20点ってなんだよ！

次が10点なのはまあいいが

3位は0点でその他全員

これはあれかつ白紙で出しても受かってたってことかあああああ
あああああ

冷汗流しながら師匠にする言い訳を考えてた俺に謝れ！陰険メガ
ネ！！

俺が怨みがましい目を向けていると陰険メガネがにやつと笑った
「これから1のテストの合格者と合流し、第3次試験会場へ飛行船
で向かいます。到着時刻をお教えする事はできません」

「それでは良い旅を」

憤りがおさまらない俺は師匠にメールを打つ

【2を選択した人が全員合格って納得いかない！】

少し待つと師匠から返事がきた

【その古代文字問題、僕が考えたんだよ よく解けたね】

【それは本当ですか…てか知ってたんですか…】

【試験内容はさすがに言うわけにはいかないしね。1が畏で2を選
択するのが正解 全員0点になるように問題が作られてるんだから
20点も取れたって偉いね】

褒められて嬉しいのか騙されて悔しいのか

心の中で行き場のない気持ちをもてあまし、暴れる

『やっぱり納得でき

ーん』

むしゃくしゃした気持のまま、不貞寝ふてねをしているとポンと肩を叩かれる

「合格オメデトウ」

「シアルもやっぱり合格か、てか他の人は？」

俺が質問するとシアルは最上級の笑みを浮かべる

「1の合格者は俺だけだよ」

「マジツスか…」

どこの無双だよ…とんでもないなコイツ

シアルだけは敵に回さないようにしよう

1に行つた人可哀そうに

怒涛の1日だった

身体はそうでもないが精神的にももの凄く疲れた

飛行船内にあるシャワーを浴びて、師匠お手製弁当に舌鼓をうつ

カイトに2次まで受かつたとメールを送信し、食堂に向かう

飛行船の到着時間がわからないので、空いた弁当箱に日持ちのしそうな物を詰めていく

「よう、お前ルーキーだろ」

…すっかり存在を忘れてたよ、トンパさん

俺が到着したのがギリギリだったから1次の時に声をかけられなかつたんだな

自己紹介をしながらペラペラとどうでもいいことを話している

ボーっとしながら聞く俺にクツキーを手渡すと、風のように去つていった

もらったクツキーをゴミ箱に捨て、今日の寝床を探す

雑魚寝できる部屋を発見したが、むわっとした汗の臭いが充満していてとてもじゃないが寝られない

おいてあった毛布を2枚ほど拝借する
廊下の角に陣取るとそのまま毛布に包まり眠りについた

3日たったが飛行船はまだ飛んでいる

俺は誰もいないデッキをみつけると日々トレーニングを始めた

ここには師匠もいないし、練習用の道具もないけれど続けることが大事だと思う

まずは纏^{てん}でトレーニングをイメージ訓練

その後は絶をして汗をかくまで腕立て伏せをする

ハンター世界のプロテインのおかげか、1セットの回数が1000回を超えた

柔軟もあんなにガチガチだったのに、開脚してペタンと床に着くことができる

無心で続けていると誰かがデッキに入ってくる

「まっじめー」

「シアル…」

明るい声に気が抜け、中断して座り込む

上気した顔をぬらしておいたタオルに埋める

「シアル暇なの？」

「うん すっごい暇」

これなら暇つぶしのゲームでも持つてくればよかったとシアルが口を尖らせる

たしかに3日も何もせずにいるのはある意味苦痛だよなあ

「パソコンでネットでもする？」

「持ってきてない」

シアルがぶすつと言う

『美形はどんな顔をしてても美形だな』

顔のいい奴は本当に羨ましい

「俺もつてきてるよ、貸そうか？」

「ほんとに!？」

すごい勢いで食いついてきた

「組み手の修行に付き合ってくれれば貸すよ」

「オツケー!やるやる」

1時間程度組み手をしていると目的地についたというアナウンスが聞こえた

組み手を中断し、降りる準備をする

パソコンを使うつもりだったシアルはまたぶすつとしてる

機嫌が悪そうだ

『着いたんだから暇潰しの必要はなくなったのに』

そうは思うが口にはださない

触らぬ神にたたりなし である

「第3次試験官のアリー・モハドでございますわ」

今度はまた濃いのがきたなあ

中世風のドレスに白い日傘をさしたマダム

そんな印象だ

「それでは第3次試験内容を説明致しますわ」

スーツを着た男がスツと手に箱を持って前にでる

「これから皆様には写真を引いて頂きますわ。引いた写真に写っている動物かその一部を持ってくる事、殺してはいけませんわ。この森は私の私物ですので試験中目的の動物以外を殺す事も許しませんわ。破ったら失格にしてさしあげます」

森が私物かよ…

どんだけ金持ちなのさ

この森むちゃくちゃ広そうなのに…

「私に渡す動物と写真は自分が引いた物でなくても認めますわ。どうぞ殺しあって下さいませ ちなみに当たり前ですけれど、動物に

関する質問は一切受け付けませんわ」

うはー

きつつい、殺し合い確定かよ

覚悟ができたとはいえ自分から殺しには行きたくない

「2次試験の成績順にスタートしますわ。まず666番来なさい」

自分の名前が最初に呼ばれ、ホッとする

よかった…最初で

これなら逃げ回れば問題なくいけそうだ

クジを引くとコモドオオトカゲに似たトカゲだった

違うのは爪が鋭く猛毒をもっている事

興奮すると体中から神経ガスを噴射する

えらく物騒なのがきた

生態や生息地域は本で読んだことがあるので問題ない

問題はどうか逃げ回るかだな

最初のアスレチックでの事や、飛行船でした組み手で分かったが

シアルは強い

それ以外の受験生も警戒に値するが、シアルほどではない

この試験、いかにシアルに発見されないようにするかが重要になるだろう

「期限は3日以内ですわ」

スタートの合図が鳴る

俺は一目散に森へと走る

俺のチキン具合はまだまだ健在だっ

森に入ると絶をして、更にスピードをあげる

トカゲの生息地域は湿地帯

森の深部になるはずだ

円ができないので周りの気配を読み、神経を尖らせる

さっそく入り口の方向から誰かの叫び声が聞こえた

ご愁傷様

タローは心の中で手を合わせる

『どうか俺の身には何事もおこりませんように』

木々を走りぬけ湿地帯を探す

しばらくすると葦に囲まれた泥の沼地が見えた

『いるかもしれない』

葦の草原に足を踏み入れるとズツと飲み込まれる

そのまま体を低くし葦の影に体を隠し、慎重に進む

ガサツと後ろの方から草を踏みしめる音がする

タローは身を硬くし、周りの景色に溶け込む

誰だろうと思ひ、感覚を向けてみるが相手の気配も弱く感じにくい
絶を使っているのだろうか…

誰かはわからない

額に汗をかきつつ、身を潜める

絶と気配の消し方は師匠に褒められた

上手くなっているはずだ

はやくどっか行ってくれ！

1時間、いや5分程度だったのかもしれない

時間の感覚が分からなくなっていた

草をかき分ける音がして誰かは去っていく

ジツと辺りの気配をさぐり、ようやくいなくなったと確信できる
と息を抜く

よし、これでとりあえずの危険は去った

気を取り直し、トカゲの発見に力をいれる

ほどなくしてのんきに草を食むトカゲを発見できた

上から慎重に手を降ろし、そつと捕まえる

トカゲが食べていた草も抜き、興奮しないよう食べさせる

トカゲは警戒心の緩い種類で、そつと扱えば暴れないと読んだ
手荒く扱うと毒のある爪を振り回し、神経ガスを発生させながら
猛抵抗をする

そのままゆつくりと小脇にかかえ、試験官のいる方向とは反対側
の森の出口へ出る

直接試験官の元へいく気はなかった

森を大きく迂回し、1日以上走り続け試験官の所へ無事到着

試験官にトカゲと写真を渡すと合格を言い渡された

どうやらタローがトップ通過のようだ

気が抜けてへたりこむ

試験官に聞くと森の中は絶賛殺し合いの真っ只中らしい

『よかつた…誰にも会わなくて』

森から連続して叫び声が聞こえる

後何人くらい残っているんだろうか…

試験終了間際

タローの次に戻ってきたのは返り血を多量に浴びたシアルだけだ
った

第13話

「ふおおおお、3次で残ったのが2名とはのう」

3次試験を無事合格できた俺とシアルはハンター協会ビルに移動していた

「ねえ、もう終わりでもいいんじゃない？疲れたし」

「そういうわけにもいかんのでのう」

「終わりでもいいよ！終わりで！！」

『漫画の最終みたいなのはマジ簡便！』

俺の心の声とは裏腹に無常な答えが告げられる

「残った二人で戦ってもらおうかのう。2人とも念は使えるようじやし、最終試験は念あり発なしじや」

絶望が俺を支配する

『それ俺受かる気がしないんだけど…』

「安心せい、力を見せてもらっただけじゃ。負けても合格するかもしれんぞ」

心を読んだかのようなネテロ会長の言葉は、俺の心を少しだけ軽くした

試験の準備期間は2時間

俺は与えられた部屋へ入り対策を考える

相手は絶対強者

師匠からもらったナイフを取り出し眺める

力を見せると言われた

シアルに最低でも1発入れなければならぬ

飛行船で組み手をした時、俺の攻撃は1発もシアルに当たらなかつた

正攻法ではボコボコにされて終わりだ

ナイフに麻痺毒を大量に塗る

傷をひとつでもつける事ができれば、毒が回りシアルの攻撃も緩くなるはず

それにかけるしかない

パンと両ほほを叩き気合をいれた

「それでは開始じゃ」

ビリビリとした緊張感が身体を支配する

「いくよ、タロー死なないでね

結構気に入ってるんだよ、君の事」

そう言った瞬間、シアルの姿が掻き消え背後から蹴りつけられる。すばやく床に手を着き体勢を整える

再び向かってくる蹴り。両手を合わせ受け止める

凄まじい物量攻撃が俺を襲う

オーラを流し防御をするだけで手いっぱいだ

攻撃が一瞬ゆるんだ隙に、足を床に叩きつけるようにして後方へ飛ぶ

オーラを手足へ集め、反撃にでる

顔を狙った拳は軽く受け流され、カウンターが向かってくる

拳が避けられるのは予測済み

素早くオーラをナイフへ込めて切りつけ、シアルの頬に深い傷を刻む

「ぐっ！！」

シアルの強力なカウンターが腹に叩き込まれる。力の限りオーラ練って腹に回しガードするが、歴然とした力の差が俺を壁へと吹き飛ばす

歯を食いしばりなんとか気絶を避ける

喉の奥から血が逆流し、唇を汚す

死ぬほど痛い…

「へえ」

血を流す頬をなぞり、シアルの顔が驚きにみちる

「なんか秘密があるのかなあ？そのナイフ」

欲しいな。唇がそう動く

麻痺毒は効いてこない

倒れこみそうになる身体を叱咤しつたする

俺は本当に弱いんだな

思わず自嘲しそうになる

強くなりたい

強烈にそう思った

「そろそろ終わろうか」

怪しく笑う顔は凶悪なまでに綺麗にみえた

ゾクリと背筋を悪寒が伝う

またも激しい物量攻撃が始まる

ズキズキと痛む身体

押されているのがはっきり分かる

耐え切れるのはあと1分か30秒か

止めとばかりに強大なオーラを纏まとったシアルの回し蹴り

ソレが一瞬だけ痺れたように止まった

『今だ!!』

全てのオーラをナイフへ込め、全身全霊で振り下ろす
足を切り落とさんばかりの攻撃

シアルの足から大量の血がほとばしり、成功を知る

「それまで!!」

ネテロ会長の声が響き渡る。

『終わった…』

気の緩んだ身体が限界を訴え、倒れこむ

苦りきったシアルの顔が見える

生き残ったんだ…

安堵して息を吐くと、俺の意識は闇に染まり消えていった

診断結果は絶を使って全治1ヶ月

あばら骨を4本骨折2本にヒビ、両腕も骨折寸前。痣あざにいたって

は数えるのがめんどくさくなるほどだ

これが1ヶ月で直るんだから念は本当にチートだ

試験はなんとか合格していたらしい

ハンターになった実感が全く沸かないが、本当にありがたい

世話をしてもらったマーメンさんにシアルの事を聞いたが、ハ

ンター証を受け取るとすぐに帰ったらしい

連絡先くらいは交換したかった

ボロボロになった俺が悪いんだけどさ

早く動けるようにならないと苦痛だ

何せ現状腕も動かす事ができないので、暇つぶしに本を読む事すらできない

トイレもマーメンさんに世話してもらわないとできない

師匠にどう報告しようか……つらつらと考えつつ治療に専念する事にした

第13話(後書き)

短くてすみません

第14話(前書き)

この話から真・女神転生とのクロスが始まります
クロスが苦手な方はご注意ください

第14話

家の扉を感慨深く見つめる

試験で負った傷も治り、ほぼ1月ぶりに帰ってきた
手元にあるハンター証を握り、ドアノブに手をかける

「ただいま帰りました、師匠」

「おかえりなさい、タロー」

以前と変わらず優しく笑う師匠の顔があった

思わず涙が零れそうになる

「帰ってくると思ったので、タローの好きなクッキーを焼いたんで
すよ」

一緒に食べましょうと促す師匠に首を縦に振る

「試験はどうでしたか？」

俺は勢い込んでしゃべりだす

1次試験の大きなアスレチック、出会ったシアルの話や、まだ納
得できない2次試験の事……

話したい事があまりに多すぎて、支離滅裂になる俺の話の話を師匠は
ずっと頷きながら聞いてくれる

最後に相談があると師匠にいうと、紅茶をゆっくり飲みつつ先を
促してくれた

「最終試験は本当にボロボロでした。師匠がくれたナイフがなかつ
たらシアルに傷ひとつつけられなかったと思います」

それがとてつもなく悔しかった

「強くなりたいんです。俺は強化系がどうしても苦手で、単純な肉
弾戦になるときつい、だから師匠……」

「発で補いたいですね」

「はい」

「念の技術も向上してきましたし、そろそろいいでしょう。なによ
り違う系統の物を焦って作ってしまうと大変ですしね」

師匠が立ち上がり、キッチンへ向かう

しばらく待つと、グラスを手に持ち戻ってきた

水の入った透明なグラスの上にちょこんと浮かべられたミントの葉
「水見式といえます。自分がどの系統に属するか判別する為の手法
です。強化系は水が増え、変化系は水の味が変わります。放出系は
色が変わり、操作系は葉が動く、具現系は水に不純物が混じります。
特質系はその他の現象となります。分かりましたか？」

「はい」

ようやく水見式だ

今まで発や自分の系統の事はなるべく考えないようにしていた

師匠の未熟者は失敗する発言が怖かったのだ

「グラスに向かって練を試してみなさい」

これで一生付き合う自分の系統が分かる

緊張するが同時にワクワクとどんな結果がでるのか楽しみだ

オーラを大きく練り、練をグラスにかける

しばらくすると水の中に黒い何かが見える

色の変化と言うには、水の透明な部分が残っているし…

「具現化？」

首をかしげる俺に、もう少し続けてと師匠の声がかかる

やがてだんだん黒い何かは大きくなっていき……

グラスサイズの小さいかぼちゃがあらわれた

「いきなりなんだなんだ！？なんでオイラ体が小さくなってんだ
?!」

呆気にとられ、俺と師匠はかぼちゃを凝視する

お互い顔を見合わせ、もう一度無言でかぼちゃを見つめる
うんかぼちゃだね、ハロウィンの……

「ジャックランタン……？」

「オイラがそれ以外の何に見えるというんだ、このストコドッコ
イ……！」

「す……と……？」

「どうでもいいから、お菓子をよこせ！でないといタズラするぞ！」

ランタンの勢いに押され、師匠お手製クッキーの皿を差し出す
ポリポリとむさぼり食っていくかぼちゃ……シユールだ
やがて全て食べ終わるとランタンがこちらを振り向く

「そこのお前、名前なんていうんだ？」

「タローだよランタン」

「タローか、よし。お菓子をくれたから契約してやる！」

「契約？」

「タローは魂を捧げたからな、悪魔と契約できるようになったぞ
魂っておまつ

「捧げた覚えは1mmたりともないぞ……！」

「捧げたら捧げたんだ、何回も言わすなタロー」

「待ちなさい」

それまで無言で事態を見ていた師匠が口を開く

恐ろしいまでの殺気が師匠から漏れている

「最初から分かりやすいように説明しなさい」

「でないと殺しますよ。目を細め、ランタンを睨み付けている

『師匠！目がっ目が怖いですっ』

ランタンが師匠の殺気にガタガタ震えながら話をする

悪魔を呼び出し、悪魔の欲しがるモノを与えた俺は自動的に悪魔
と契約した事になるらしい。そこに本人の意思は介在かゐざいしないと……

「むちゃくちゃだなあ」

「むちゃくちゃもなにもタローがオイラを呼び出したんだから諦め
ろ。だいたい魂は死んだ後に捧げるんだから問題ないぞ？」

問題ありまくる気がするんだけど…

よく見ると可愛いしなあ

「この悪魔を呼び出す能力は強いのかな？」

「もちろん強いにきまつてる！オイラのような悪魔と契約して好きに呼び出せるんだからな」

色々納得できてない部分はあるが、水見式で出てきたという事はこれが俺の念能力で決定なんだろうなあ…

悪魔というと女神転生シリーズか、それとも他のシリーズだろうか…

他のシリーズだと困るな…女神転生シリーズしかプレイした事ないぞ

まあいいか

何より強くなりたい俺の希望と会うんだし

魂の事は…うん、死んだ後考えよう

「いいよ。契約しよう」

「なら契約書を書いてとっとと契約しろ」

どこから出したのか、羊皮紙でできた古臭い紙を取り出す

「その契約書はどうしても書かないといけないんですか？」

「書かなくてもいいぞ、でも書かないとオイラと契約したのに呼び出せなくなるぞ？」

「書いたとしてどうやって呼び出すんだ？練すればいいもんなのか？」

「そんなの腐るほど種類があるから分からん！機械を使ったり、頭に銃を打ち込んだり、悪魔を管に詰めたり、自分の身体に憑依させる奴もいるぞ。それくらい自分で考えろー！」

キ　　つと暴れ始める

「わかったわかった」

ランタンの口にアメ玉を突っ込む

女神転生シリーズで悪魔を呼び出すというと、邪教の館か悪魔全書か。邪教の館は建物丸ごとか無理があるし、となると悪魔全書か

『どんな感じだったか覚えてないな…』

こちらに着てから5年が経っている

しかもゲームをプレイした時期となると更に遡さかのほらないといけない
思索にふけつていると、またランタンが暴れだす

「契約書早くかけ　　っ」

契約書を手に取り、ペンを滑らせる

『日本語表記か。わかりやすいが違和感ありまくり……』

死後その魂を悪魔に捧げる事

悪魔が傷を負うと、その痛みは契約者に移る事

ランタンが説明してない事まで書いてあるな…コイツ、煮物にしてやろうか

契約書に日本語で名前を記すと、タローの身体の中へ吸い込まれていった

「それでタローも立派なデビルサマナーだ。んじゃオイラは戻るか
ら、また呼んでくれ。お菓子は必須な」

くるつと1回転するとランタンは消えてしまった

『勢いに飲まれてとんでもない事したかも……』

少しだけ後悔が頭をもたげる

「よかったですか。死後の魂を渡す事にしてしまって」

「過ぎた事をよくよしてもしょうがないですし、何より俺がやったゲームの通りなら、かなり強い能力のはずですから」

心配そうにこちらを見る師匠を安心させたくて、わざと明るく答える

「それより師匠具現化の事なんですが、あやふやなイメージしかない
くてどう作っていいの…」

「ふむ。タローが持っているイメージを教えてくださいませんか？」

ゲーム中の本を必死に思い出し説明する

「色は黒か青って感じで、うーん……大きさは小脇に抱えられるく

らいで。後はよく覚えてません」

「では似たような本を書庫から持ってきてイメージを固めるしかありませんね。僕もやりましたが具現化できるまで触ったり見つめてみたり、目を閉じてても完全なイメージを浮かべられるまで続けるしかありません」

その日からずっと俺は書庫に籠りきり、本をいじくり倒し具現化修行に入った

これ、はたからみたらかなり危ない奴だよな……

俺は今本に頼ずりしながらゆっくり触っている

怪しい雰囲気満点だがこれも修行、幸い誰も見ていない。

『だいたいイメージは固まった気がするんだよな』

イメージと本物は違うかもしれないけど、とりあえずやってみよう

自室に戻り、座禅を組む

ゆっくりと息を整え、目蓋を閉じる

大きくオーラを練って手のひらへ集め、具現化しようとするが上手くいかない

じんわりと額に汗が浮かぶ

ひたすら試行錯誤を繰り返す

全身が汗だくなる頃、手のひらに集めていたオーラがふっと消えて同時に重みを感じる

A4くらいだろうが、青く分厚い表紙の1冊の本が手元にあった

重厚な歴史を感じさせる

開いてみると契約書と同じ内容が、最初のページに書いてある

次のページはランタンの名前と可愛いイラストがあった

その後のページは白紙だ

ためにランタンのページを開き、名前を呼ぶ

「ジャックランタン」

黒い塊が宙に現れ、かぼちゃ頭のランタンがふわふわ浮いて現れる

「タロー、召還器できたのかーっ！！オイラのおかげだぞ。お菓子
をヨコセ」
相変らずのランタンに苦笑が漏れる

悪魔全書・デビルサモン

これが俺の念能力
本を胸に静かに抱き、こんごともよろしくとランタンに声をかけた

第14話（後書き）

クロスさせる悪魔はなるべく女神転生シリーズを知らない方でも、想像しやすいモノを採用する予定です

ボツネタだった頃より、誓約を強くし、能力も若干弱くしました（それでもちよつとずるい感じですが。チートにはなりません）
詳しい説明は同時投稿した、田中太郎念能力をご覧ください

投稿して2時間で改定しちゃいました

よく推敲しろって突込みが聞こえるようです

田中太郎念能力（前書き）

下を読まなくても分かる能力説明

悪魔は一度に1体しかだせない

呼び出してる時は本は手に持っていないといけない

呼び出してる時間に応じてレベルがあがる

レベルが上がると変身する悪魔もいる

レベルアップさせないと悪魔の能力はしょぼい

悪魔は別次元から呼び出してるから念獣じゃない（陰で隠す、見えなくする事はできない）

悪魔合体ができる

悪魔は呼び出したり合体できる悪魔を3体と、合体専用の悪魔2体の合計5体

後書部分に仲魔にした悪魔の能力説明があります

田中太郎念能力

《悪魔全書・デビルサモン》 具現化系寄り特質系

真・女神転生？マニアクスクロニクルに沿った悪魔を異次元より召還、契約および悪魔合体ができる書物

(契約した悪魔は仲魔なかまと呼ぶ)

悪魔召還、悪魔合体と2つの能力の複合

使用手順

- 1．本を開き悪魔の名前を呼び召還する
 - 2．召還した悪魔を会話か戦闘で説得する(契約した悪魔以外の手助けを受けてはならない)
 - 3．悪魔が望む品を1つ与える
 - 4．悪魔全書に契約した悪魔の名前を登録して完了
- 1～4の手順は3日以内に完了しなければならない

同じ種類の悪魔を登録することはできない

召還、合体に使用できる悪魔は総オーラ量をレベルに変換し対応した悪魔のみ

(合体事故、変異の場合はのぞく)

仲魔は最大5体まで悪魔全書のページに登録できる

そのうち2体は材料悪魔専用で召還に使えない

仲魔と召還者は心話が可能

仲魔は1つなにかしらの能力を有している(最初に仲魔にしたランタンだけ2つ)

愛せる悪魔しか召還できない

どんな能力を有しているか契約して仲魔にしないと分からない

1度でも仲魔にした事のある悪魔の能力は悪魔全書に記録される

召還方法

- 1．悪魔全書を開き名前を呼ぶ
 - 1．悪魔全書の仲魔の名前を指でなぞる
 - 2．仲魔のレベルに比例したオーラを与える
- 1度召還した仲魔は帰還命令を与えるまで留まる
- 仲魔を召還している間は常に本を手に持つていなければならない
- 上記が守られない場合仲魔は強制的に帰還となる
- 仲魔は同時に1体しか呼び出す事ができない
- 仲魔を召還中、時間経過1分ごとに1の経験が入る
- 経験を消費する事で仲魔をレベルアップさせる事ができる
- レベルが上がると能力の強さがあがる
- レベルが上がると変異する悪魔が存在する（悪魔の変異は任意で行われる）
- 変異時、変異前の能力を引き継ぐ（最大3つの能力を持つ悪魔になる）
- 悪魔の能力は同時には使えない
- （Aの能力を使用中にBの能力を使うとAは解除される）

悪魔合体

通常合体

夜にのみ可能

登録した悪魔を2体合体させ異なる悪魔を1体作り出す事ができる

悪魔合体でのみ最大3つの能力を有した悪魔を作り出す事ができる

満月新月の時は1/16、それ以外の場合は1/256の確率で合体事故が発生する

生贄いけにえ合体

満月の夜にのみ可能

登録した悪魔2体と生贄にする1体、合計3体の仲魔を合体させ1体の仲魔を作り出す事ができる

生贄にする仲間は最低でも5つレベルが上がっていなくてはならない
通常合体で1つ、生贄合体で2つ任意の能力を合体後の悪魔に移す
事ができる

悪魔全書は真・女神転生？マニアクスクロニクルをクリアしていな
ければ使えない

悪魔全書以外の念能力を持つ事ができない

元の世界への帰還方法が判明したとしても帰る事ができない

この能力は異世界の人間にしか使えない

悪魔に死後自分の魂を捧げる

悪魔が傷を負うと、その痛みは召還者へと移る

悪魔は念獣ではなく、実体をもっているので陰で隠すことはできない

考察

悪魔召還という強すぎる能力の為、ガチガチの条件で固めてみました

強い誓約は異世界へ帰還できないと悪魔に魂を捧げる事

痛みの移動もそこそ強いけど傷は移らないので

団長対策は色んな意味でばっちり

タローのメモリは多いという設定です

オーラ量はそこそ程度

本編終了後でもLvは40くらいが限界かもしれません

なんで蠅の王とかメタトロンとかは絶対でません

クーフリーンもいいかなと思ったのですがLv52は高すぎる気が
したので…

常に片手がふさがり、しかも仲魔は全て補助系です

戦闘の場合タロー自身が片手で戦う事になります。

通常時であろうと戦闘時であろうと、本を片手に持っています

本を持っていなければならぬ誓約もばれやすい
能力の同時使用もできない

戦闘時の使い勝手はそんなに良くない

タローはあまり悪魔を傷つけたくないの、それでいいと思ってる
模様

最大9種の能力を所持する事ができますが、大器晩成型

専用スキルも多いので合体方法の研究にも時間がかかります

能力9種を可能にするには登録悪魔を生贄に捧げ、合体を行う必要
があります

生贄に捧げる悪魔は長年一緒に過ごしてきた悪魔を使う必要があります

タローには無理ですね

ここまで設定を作って果たして読む奇特な方がいるかは疑問です
作者の趣味です すいません

田中太郎念能力（後書き）

登録悪魔能力

ジャックランタン Lv20

かぼちゃ頭にとんがり帽子をかぶっている

黒いマントを着用し、手にはランタンを持ついたずらっこ

移動およびタローの癒し担当

必要でなくてもタローはお菓子を買いでいる

召還の為プレゼントは師匠お手製クッキー

【かぼちゃのカーテン・パンプティダンプティ】 ジャックランタン専用能力 合体時他の仲間に移す事はできない

あらかじめ、かぼちゃらんたんを置いておいた地点に移動できる

使用後ジャックランタンにお菓子を与えなければならない

複数人を移動せざる場合、能力者のオーラを使用する。

かぼちゃらんたんは2ヶ月に1つ、ジャックランタンの帽子の中にあることができる

【とりかえっこ・トリックオアトリート】

指定した人間や物と能力者の位置を交換する

能力者と質量が違いすぎる人間や物とは交換できない

タローにしかつかえない

例・タロー以外とは交換できないので、師匠とカイトを交換する事はできない。

第15話(前書き)

第14話後半をかなり改定しました

基本的な流れは変わっていませんので読み返さなくても問題はないかと思えます

第15話

能力完成から1ヶ月

俺はさまざまな悪魔を召還契約し、能力を確認している

一度契約すると悪魔が持っている能力が本に登録され、後で確認できる

召還の時に悪魔が欲しがるものは様々だが、ランタンのお菓子はかなり可愛い部類だった

綺麗な宝石が欲しいとか、牛まるごと1匹食べたい、希少な絹織物が欲しいのだの……果ては人間の死体が食べたいとか。

死体が食べたいと言った奴は即効追い返しておいた

あれは愛せない

どろどろでぐじゅぐじゅのヘドロみたいな真つ赤なスライム

あれを愛せるという人がいたら見てみたい

作った頃は登録用の3ページほどしかなかった俺の本も、新たに誓約を付け加え5ページまで増やしている

新たに付け加えた誓約は

原作ゲームををクリアしていなければ使えない

悪魔全書以外の念能力を持つ事ができない

元の世界への帰還方法が判明したとしても帰る事ができない

悪魔全書は異世界の人間にしか使えない

本を手に持っていないと悪魔が帰還する

この5つ

元々強力な能力のせいかな、ちょっとやさそつと誓約を加えただけではページが増えなかったのだ

誓約を増やした今では呼び出しに使える3ページと、合体の材料に使える2ページ

今の俺のレベルは21

これは総オーラ量で決まる

今もレベル20のランタンを呼び出してレベル上げをしてるが、俺が21なので同じく21までしかあがらない

ランタンの能力は便利だが、今のままでは使いにくい

能力・かぼちゃのカーテンは、ランタンが作るかぼちゃらんたんが必要だし、(2ヶ月に1個しかできない)

能力・とりかえっこは現時点ではたった5mしか位置を取り替える事ができない

レベルを上げれば距離も増えるらしいが、ランタン以外の悪魔の能力もレベルを上げないとしょぼいにもほどがある

回復能力は擦り傷程度しか直せなかつたし、攻撃を防ぐ盾を作る能力も軽く一撃殴っただけで壊れてしまった

悪魔と同じく俺も修行をしてオーラ底上げを行い、レベルを上げなければならぬ

『そろそろメインで使う3体を決めなきゃいけないんだが……』

できれば幅広く使える能力がいいが、種類が多すぎていまいち決め手にかける

頭を抱えて唸っていると、食事の用意ができたと師匠が呼びにきた今日のメニューはかぼちゃのグラタンにパンプキンパイ

師匠まだランタンの事、怒ってるんですか……

師匠の怒りを知ってか知らずか、ランタンは今日も勝手きままに振舞っている

「これうま　っ、タローのパイもよこせ」

共食いですか、ランタン

黙って皿を差し出すと勢いよく食事を再開する

ランタンのマントの中は空洞で白い手袋だけが浮き上がっている
食べたものがどこに消えるのかランタンにも分からないらしい

それでいいのか、悪魔よ……

オーラを底上げするには、円か堅^{けん}の修練をするのが一番いい
円も堅^{けん}も原理は同じだ（広げて留めるのが円、凝縮して留めるの
が堅^{けん}）

基本がチキンな俺は探索系の円で底上げを行っている

今ではかのゼノ・ゾルディックがやったのと同じ100mまで伸ばす事ができる

ゼノと俺とではオーラの量が天と地ほどにも違うが、俺は極限までオーラを薄く延ばして広げているので消費はさほど多くない

1分だけなら200mでもいけると思う。たぶん1分使ったら、ぶっ倒れて病院生活確定だと思うけど。

円は重要な技術なのに、堅^{けん}を優先する人が多いせいか使えるレベルまで広げられる人は極端に少ない

ハンターは基本的に肉体派が多く、戦闘を重視するからだろう

もうすぐ俺はカイトのジンさん探しに着いていく約束をしている
原作を知る俺はカイトが後1、2年もすればジンさんを見つげ出す事は知っているが、単純にカイトに密林や奥地でのサバイバルや動物の見つけ方などを教えて欲しいからだ

師匠は教育者としてとても優秀だが、基本引きこもりで隠居状態。サバイバル知識などは本で読んだことだけしか知らない

より実践的な事を学びたいと思うとハンターにひつついて教えてもらうしかない

知り合いハンターはカイトにジンさん、今どこにいるか分からないシアルしかない

カイトに電話をかけ、一緒に連れて行ってくれとお願いした

カイトは円が苦手で、それにパソコン機器も得意ではない

そこについて、俺はカイトほど強くはないが、足りない部分を補えるとアピールしまくった

しぶしぶと言った様子だったが、最後は了承してくれた

『カイトが嫌がっても勝手についていくつもりだったけどね』

カイトとの待ち合わせの約束は後1ヶ月ほど

能力やオーラ量に関する問題をそれまでに片付けないと……

待ち合わせの日、パドキアにある飛行船の到着ロビーでカイトを待っている

周りの視線がとても痛い

どうにかこうにか使う悪魔を決め、合体を繰り返し能力を決めた今出しているのはイヌガミ

日本人にとっても馴染み深い悪魔だ

細長い胴体を持ち、性格も温和でおとなしい

俺に従順で、付き合いやすくもふもふだ

能力は回復系のメディアと念を食べて除念を行う憑き物食いレベルはまだ13なので能力の力は弱い、今後に期待という感じだ問題はその胴体が2m近くあって、ランタンと同じく浮いている事ランタンはなぜか大きさを自由に換えられるらしいが、イヌガミはそれができない

イヌガミは現在俺にぐるぐると長い胴体を巻きつけ、顔を俺の頭に乘せている

この状態がイヌガミにとって最も楽な姿勢らしい通りすぎる人たちが、ジッと立ち止まりこちらを見ている

『恥ずかしい……』

飛行船到着の合図が響き、次々と人が降りてくる

最後にあつた日から憎らしくもさらに伸びた身長、さらさらと長い金髪。長い手足
ひと目で彼とわかる

「カイト!」

俺が叫んで呼ぶとゆっくりとこちらを振り向いて……………固まった

うん。気持ちは分かるよ

でもその反応は友達としてどうなのさ

傍に近づきパンと両手をカイトの眼前で鳴らす

「なんで固まるの?」

「なんでってタローお前、その」

「この子はイヌガミっていうんだ。俺の能力」

実体を持っていて隠せない事、能力の関係上なるべく出しておきたいと話す

イヌガミがカイトにペコリとお辞儀をすると、ようやくカイトが動き出す

「どこのUMA（未確認生物）かと思った」

もふもふとしたイヌガミの毛皮をなでるカイトの顔は幸せそう

俺もこのもふもふ具合に魅せられて、合体して生み出したから人の事は言えない

「それでカイトの目的地は?」

「まだ決めてないんだ。知り合いにもあつたんだが情報がなくてな」

予想通りの反応をするカイトにスツとプリントアウトした書類の束を見せる

俺が収集したジンさんの情報

やはり少ない量だが、見つけ方はなんとなく分かった

世界で一番ゴタゴタが起きている場所を探せばいいのだ

ジンさんは天性のトラブルメーカーで、ジンさんが立ち去った後には起きたトラブルを押し付けられたハンターがいる

このトラブルがまたドでかいので、ニュースにもなりやすい
その情報を追った

現在だとこのパドキアから西、リクソンという田舎の村でそのトラブルが起きている

そうカイトに説明すると納得して頷いた

「じゃあ、まずそこからいつてみるか」

「だね。」

パドキア中心部で装備を整え、念のためホテルを取りそこにかぼちやらんたんを放置しておいて置く

今のかぼちやらんたんは合計2つ

1つはカイトにもってもらって、もう1つは町への帰還用

これでスムーズに動ける

帰還に使わなくても、カイトがかぼちやらんたんを持っていく
ればすぐに回収できる

可愛い小さなかぼちやらんたんはカイトの腰に、キーホルダーの
ようにぶら下がっていた

第15話（後書き）

イヌガミ L V 1 3

細長く白い胴体をしたワンコ

呼ばれた時はいつもタローの体に巻きついている

回復と除念、もふもふ担当

合体召還の為プレゼントはなし

召還中はいつもタローの体に巻きついている

メディア

傷を癒す 病気は治せない

使用にはタローのオーラを必要とする

憑き物食らい（ゴーストバスター） イヌガミ・マカミ専用能力

合体時他の仲魔に移す事はできない

物や人にやどっている念を食べて除念ができる

使用后、念の強さによって一定期間イヌガミが召還不能になる

第16話

リクソンに到着する直前の夜道、俺の広げた円が大量の何かを感じ取る

「カイト、この先に何かいる」

「何かってなんだ？」

「村へ向かっておおよそ90m、俺の円に引っかかるだけでも1000はいる」

黙り込むカイト。

気合を入れ、円を120mまで広げると更に多くの何かがいる

「カイト。放置して回り込んで行くか、このまま進んで確かめてみるか。どっちにする？」

「それだけの数だ、盗賊か魔獣だろう。放置すれば村人の安全に関わる。やろう」

そう言うが早いか、カイトが走り出す。俺も必死に着いていくが、一歩及ばない

温存の為半分に減らした円にかかる、数を増やす何かの気配立ち止まったカイトを不思議に思い、その背後から道を覗く

『なんだっこれは……』

村への道を埋め尽くさんばかりの魔獣達額から一筋汗がこぼれ落ちる

たしかあの魔獣はランクB

1体1体なら俺でも倒せるランク

だが……

「カイト、これやばくない？」

「たしかに数が多すぎるな」

出していたイヌガミに帰還を命じ、本を開く

「ジャックランタン」

ランタンが小さくなって頭に乗し、キャラキャラと笑う。

俺は腰のナイフを抜き、こちらへ向かってくる魔獣を迎えつつ

ドウルドウルドウルと軽快な音が闇夜に鳴り響く

カイトの気狂いピエロだ

スロットの目は4番 銃

カイトの武器は使わないと消せない

「チツ、ハズレだ」

『文句いわねーで大事に使いやがれ！！』

ピエロが大声でどなりちらす

群れに向かって1発放ち、すぐに消す

そしてまたピエロのスロットを回す

合間に俺はナイフを右に左に振るい、数を少しでも減らしていく

2度目の挑戦、スロットの目は1番 剣

「そこそこいいのがでた」

近接専用武器が出たことでカイトが安堵を浮かべる

「俺が敵を寄せるからカイトは寄せた敵の処理をお願い」

「分かった」

ランタンのとりかえっこを使い、群れから1匹つつカイトの傍へ寄せていく

カイトは細身の曲剣で次々と魔獣達をなぎ払う

曲剣が月を背に煌き、幻想的な雰囲気演出する

辺りはすでに一面血の海

なのに数は全く減った気がしない

これでは埒があかない

「ランタン戻って」

お菓子をくれなきゃ戻らないとすねるランタンを、本から手を離す事で強制的に帰還させる

「わがママがひどいな」

「カイトのピエロほどじゃない」

「これから別の悪魔を呼んで俺達のを上げる。一瞬衝撃が走るから注意して」

頷くカイトを確認し再び本を開き、名前を呼ぶ

「ピクシー」

俺の最後の悪魔は可愛い妖精。小指ほどの体に美しい銀の羽
見た目は弱弱しいが、俺の持つてる悪魔の中でも最強のサポート

悪魔

スクカジヤ

俺とカイトの体に衝撃が走り、一時的に身体の反射移動速度を上げる

使った後に痺れが残るが、その効果は圧倒的。

しかも2度、3度と効果を重ねる事もできる

重ねた後、効果が切れると三途の川が見れるオプシヨン付き

スピードが上がったおかげで魔獣はバタバタと倒れていく

太陽が昇り中天に達する頃、ようやく最後の1匹を切り伏せる

「ハアハア……しんどっ」

休憩なしで動き続け、さらにピクシーの能力、スクカジヤのおか

げで体の節々がミシミシと嫌な音をたてる

身体を曲げ荒い息を繰り返す俺に比べ、カイトはもう息が整ったのか襲ってきた魔獣の検分を開始している

「目の充血がひどい、筋肉も断裂してる。ここまで暴れる種族じゃないはずなんだが……」

絶を使い、ようやく息が落ち着いてきた

マジでカイトの体力どんだけだよ……

悪態をつきつつカイトへ疑問を投げかける

「薬でも打たれたのかな？」

「今この状況じゃわからんな、サンプルを取るから少し待ってくれ」「らじゃ」

しばし休憩を取り、村へ向かう

村は荒され、廃墟の様になっていた

「タローあれを」

カイトが指を指した方向に教会が見える

あの教会だけ綺麗に残っている

凝で見ると結界の様な物が張られている

「近くにいつて様子をみよう」

「そうだな」

近づいていくと教会の扉がゆっくりと開かれた

身構える俺達の前に、一人の老婆が進み出る

「村長のアンナと申します。この度は助けいただきありがとうございます」「ございました」

カイトと顔を見合わせる

「助けたって何のこと？」

疑問符を浮かべる俺達に老婆が経緯を説明してくれる

「昨晚、多くの魔獣が村を襲いました。驚き、慌てふためく私達の所へ黒髪のハンターさんがあらわれまして……」

必死に話す村長のアンナさん

まあそれはいい、問題は……

こみ上げる怒りを押さえ、俺が簡潔に結論を言う

「その黒髪のハンターとやらは、すぐ後ろから弟子が討伐に来てい
るから大丈夫だと。そう言ったんですね？」

「はい……そうです。この石を渡して弟子が来るまで教会に隠れて
いろと」

教会の入り口に目をやると、隠れていた村人達が次々と顔を現す
違ったのでしょいかとオロオロ困惑するアンナさんにカイトが優
しく声をかける

「大丈夫です。魔獣は全て倒しました。その黒髪のハンターの野郎
はどこいったんです？」

「分かりません、あの私達はこれからどうしたら」

確かに村はめっちゃめっちゃ、畑もあの魔獣の暴れっぷりじゃ無事で
はないだろう

くそっジンさん、やりやがった……

押し付けられたのは俺達かよ

「せめて怪我人だけでも、病院に運んでいただけませんか？少ない
ですがお金はお支払いします」

頭を地面にこすりつけ、懇願を繰り返す村人達

カイトと同時にため息を大きく吐く

「タローお前が怪我人を病院へ運んでくれ。俺はこちらに残って瓦
礫の撤去と護衛をやる」

「りょーかい」

重い腰を上げ、動き始める

ランタンを召還し、怪我人をまとめてパドキアのホテルへ運ぶ

そのまま救急車を呼び、病院へ搬送した

ホテル側は苦情を訴えたが、ハンター証と小金で黙らせた

最初に使うハンター証の目的が苦情処理とは……

それから怒涛の忙しさだった

俺とカイトの資産で土木業者を雇い、村へ送る

当座、しのげるだけの食料、水や毛布も同時に搬送

種^{たね}籾^{もみ}やら農機具やらもついでにつける

ついで、カイトが取ったサンプルを疾病疫病セン^{しつぺいえきびょう}ターへ

結果は魔獣だけがかる狂犬病

それがあの一帯で集^{しゅつ}団^{だん}罹^り患^{かん}していたのだ

パドキア政府へ伝え、1年間の減税をもぎ取る

言葉で言うのは簡単だが、死ぬほど疲れた

魔獣と戦っている時の方が簡単だった

ハンターって漫画じゃカッコいいけど、コレただの便利屋じゃないの

「カイト、俺は誓う」

「なんだ……？」

「必ず、ジンさんを1発殴る！」

カイトはまあがんばれと言ってくれた

その後も世界中を飛び回り、2人でジンさんを探し回る

やっかい事を何度も押し付けられ、さて次はどこへ向かうかと話を向けた時……

「くじら島？」

「ジンさんがそこにいる家族の様子を時々見に行ってるようだ」

「ほう……」

来たか

ちっこいゴンに会えるのか

しっかし、もう原作3年前か……

そして俺はとうとう37才か……肉体（戸籍）的には21才だけども。

哀愁が俺の心の中を漂う

「カイト、先に行ってももらえるか？」

「用事か？」

「少し気になる事があるから、調べてから行くよ。くじら島に着いたら電話して」

「分かった」

気になる事なんて実は全くない

ここでカイトに一人で行ってもらった方が、スムーズに行きそうだし

俺にはゴンを怒鳴りつける事なんてできないよ……

第16話（後書き）

ピクシー Lv2 Lv17（16話終了時）

小さな小指ほどの妖精の女の子

銀色の羽をもつ

タローが見た目にこだわり、変異（進化）はさせてない

合体で仲魔になったのでプレゼントはなし

スクカジヤ

仲間だと思う人間と自身の反射神経、および移動速度を上げる

一度だと問題ないが、重ねがけすると効果消滅後に強い反動がくる

1回目 痺れるような疲労

2回目 全身の筋肉が痙攣し、立ち上がる事さえ困難になる

3回目 半死半生

4回目 運がよかつたら死なないかも

妖精の屋敷楼 ミニチュアール

タローの円の範囲に入っている地域の詳細な立体地図を具現化する
生きている生物も再現する

大きさは1/5〜1/300まで任意で作成

タローのオーラを使って具現化する為、あまり大きな物を作成しようとする消耗する

立体地図を触ろうとするとすり抜ける

ホログラムのようなもの

地図がどれだけ詳細に再現されるかはレベルに依存する

ちなみにタローがLv2で試した際は幼稚園児が作ったような粘土細工でした

第17話（前書き）

この物語は作者の趣味全開（脳内妄想ともいう）で最終話まで突っ走る事を基本方針としています

作者は物語を書くのは初めてですので、文章や構成に変な所があるかと思いますが、生温かい目でご覧下さい

悪魔の能力について簡単な説明

ジャックランタン 瞬間移動できる 位置入れ替えができる

イヌガミ ヒールできる 除念できる

ピクシー 素早さアップできる 地図作れる

悪魔がこれ以上増える事はないですし、能力が変更になる事もありません

ランタン以外がしゃべる事もたぶんないでしょう

第17話

カイトをくじら島へ送り出し、俺は一旦師匠の元へ里帰り
しかし、帰ってみるともぬけの殻

ダイニングは破壊の限りを尽くされており、ジンさんが師匠を攫
っていったのだと確信する

タイミング悪い

しかたがないので自室に戻ってしばらく荷物を整理する

カイトと一緒に密林や氷に覆われた島などを彷徨ウロウロっていたので、
着替えが全てよれよれになっている

丈夫さ第一で購入して神字まで縫い込んで使っているのだが、ど
うしても消耗が激しい

「服、買いに行きますか……」

バックを肩からかけ、悪魔全書を小脇に抱える

そういえば、ランタンに最近お菓子を買ってなかった

今日はランタンの日だと決め、呼び出す

お菓子を買いに行くよと声をかけると、宙をくるくると飛び回り
喜びの踊りを踊る

ポケットサイズになったランタンを頭にのせ、家から出る

近頃、イヌガミを身体に巻きつけたり、ピクシーを肩に乗せたり
したまま街を平気で歩けるようになった

なんの自慢にもならないが。

ひさびさに訪れるヨークシン、頭をトントン叩きながらランタン
がお菓子を主張する

しかたがないのでまずは服は後回しにして、中心部のデパートを目指す

ランタンの最近のお気に入り、歯茎が痙攣どころか溶解しそうなチョコレートヌガー

あんな物のどこが美味しいのかよくわからない
そういえば、ランタンって歯があるのか……？

「あれ、もしかしてタロー……？」
いきなり自分の名前を呼ばれ振り向く

「……シアル」

「元気だった？」

「シアルにボコボコにされた時が一番大変だったよ」
試験だからしょうがないじゃないとシアルは笑いながら話す
相変らず愛嬌たつぷりのイケメンである

話している間もビシバシお嬢様方の視線を独り占め
コーヒーでも飲まないかと誘われ、了承して足を向ける

「タローっ！オイラのお菓子は?!」

思いつきり忘れてた
人形か何かだと思っていたのか、シアルがランタンのしゃべる姿を見て目を剥いている

答えない俺にジレたランタンは頭をぐちゃぐちゃにしながら暴れだした

「お菓子は後で買ってあげるって。喫茶店でケーキも付けるから。」
そういうと納得したのか、ランタン作のケーキの歌を歌いだした
「ちよつと、タローそれは何なの。」

「うーん、内緒っていうのはダメかな……」
できれば能力の事はしゃべりたくない
「ダメに決まってるじゃない。」

「ですよー」

「ひとまず喫茶店に行こう、ここじゃ嫌だ。」

喫茶店に入り、シアルはコーヒーを頼む

俺はランタンの希望を全面的に聞きいて注文をする

「アイステイーとグレートチョコサンデーと苺のショートケーキ
ホール下さい。」

またもや、シアルが目を剥いている

瞳がこぼれ落ちないか心配になる

「……で、その変なのは何？」

ランタンを変と言われ、ムツとする

「ランタンって言うんだ。俺の能力だよ。」

余計なことを言わないように、心話でランタンに釘を挿しておく

「大きさを換えられる能力以外の事をしゃべったら1ヶ月おやつは
抜きだからね」

ランタンは首を大きく縦に振り、お口にチャックとばかりに黙っ
こむ

「へえ……具現化系なのかな？変わった能力だね。」

「そういう事は聞かないのがマナーじゃない。」

「俺は強化系だよ、だからタローのも教えて？」

「それは絶対ないだろ。」

バレバレの嘘に高速で突っ込む

シアルが強化系なら俺も強化系になれる

「えー、なんでさー。」

「まだ変化系って言われた方が納得できるよ。」

「今度からそう言うようにするよ。」

「じゃあ操作系かな。」

いきなり真顔になってシアルが動作を止める

もしかしてピツタリですか……

ちよつとはポーカーフェイスを覚えましょうよ

変わってしまった空気に、周りの音が凍りつく

シアル……殺気が漏れてるよ……怖いんですけど……

「どうしてそう思うのか聞いていい？」

「勘かな。後、性格的に。」

「ふーん、まあいいけどさ……タローの系統教えてよ。」

ピンポイントで殺気を俺へ飛ばしてくる

だから無理だっつーの

人の話を相変わらず聞かない男だ…

「そんなに簡単に系統しゃべるわけないよ。」

「タローのくせに生意気だっ。」

むうっと口をとがらせ、なつかしいジヤイアン発言が飛び出した

「お待たせしました」

ウェイトレスのお姉さんが空気を読まず、注文した品を運んでくる

正直ありがたい

アイスティーだけをもらい、後はランタンにスプーンを渡して好きにさせた

大きくなり、俺の膝の上でケーキを犬食いする

シアルが眉をひそめるが、気にしない

「大きさは変えられるんだ……感情を持つてるとかすごいレアだね。」

「それだけしかできないよ。ただの趣味の産物。」

コーヒーを飲みながらジロジロとランタンを観察している

「そういえば、伝説の一族とやらは見つかったの？」

ワザとらしく話題を変える

「よく覚えてたねー。なんとか見つかったよ。ていうかさー聞いて

よ……」

シアルが怒涛のように仕事の不満をぶちまける

うんうんと真顔で相槌を打つ

こっちに来る前の仕事場でよくやっていた役目だ

こっぴつ愚痴は右から左へと聞き流し、聞いているフリをするだ

けでいい

適当に大変だねと合いの手も入れれば完璧だ

男、田中太郎37才人生の荒波を生きるコツである

「シャル、こんな所で油を売っていたのか。」

どこかで聞いたような声がする

シアルとの雑談を中止し、目線を上へ……

目線を落とし、もう一度見上げる

「あ、クロロ。もうそんな時間だっけ？」

黒いタートルネックにジーンズを身につけ、白い包帯を頭に巻いている2度と会いたくないと思った人物だった。

どうしてここにいますか……

「そろそろ時間だ。すぐ準備して集まれ。」

俺は床を見つめ、気配をできるだけ消す

無邪気にチヨコサンデーをむさぼるランタンに初めて殺意が沸く

「ねえ、クロロ。お客さん一人連れていってもいい？」

待て、お前……シアルいや、シャルナークさんちよつと待て下さい

お客さんてもしかしなくても俺ですか？

全力で遠慮させていただきたいんですが……

2人の視線が俺に絡む

シャルナークがランタンの事を説明している

「ほう、変わった能力だな。」

あれですか、拷問か記憶を読まれてポイルトですか……？

「タロー、ちよつと俺の仕事場おいでよ。」

俺の名前にピクリと反応する団長様

「いや、お仕事の邪魔しちゃ悪いし……てかシアルじゃなかったの？」

「それ偽名なんだよね。本当はシャルナークっていうの。」

「そう……なんだ……、俺は帰るよ。用事があるんだ。」

「気にしなくていいよ。大丈夫何もしないよ。」

本名を名乗った時点で、信用できないにもほどがある

「まあいい、とりあえず連れて来い。時間も無い事だしな。」

立つよう促され、喫茶店の出口へ向かう

頭の中にドナドナが流れる

支払いをすませ、店を出ると団長様がランタンをジーツと観察している

おやつ抜きが効いたのか、ランタンは未だにお口チャックを継続中。えらいぞランタン

必死で逃走方法を模索する

ランタンが召還中なのはありがたい

上手くとりかえっこを発動すればたぶんきつと逃げられる

目を辺りに彷徨わせ、対象を探す

運の悪い事に、進行方向に別の蜘蛛が見える

あのでかい筋肉質の身体、露出狂かと疑いたくなる服装、立派なもみ上げ。

ウボオーギンだろう

だが同時に最大のチャンス到来でもある

レベルも上がり、とりかえっこ可能距離は伸びている

前を見つめ、能力使用可能ギリギリの範囲を見極める

『今だ！ランタン』

一瞬のうちに俺とウボオーギンの位置が入れ替わる

後方で驚いたような声がするが、人波をかき分け逃走する

円を広げると、ウボオーギン以外のクロロとシャルナークが追いかけてくるのを感じた

やはり向こうの方が足が速い、とりかえっこで作った距離がみるみる縮まってゆく

このままではいずれ捕まるが、蜘蛛にランタンの能力をこれ以上見られたくない

右手前方に服飾店が目に入る

ガラスを割って飛び込み、試着室へ入ると能力・かぼちゃのカー

テンを発動

ドサツと落ちた先はカイトの真上

どつやら船上のようだ

「どうしたんだ？くじら島に着いてから来るんじゃないのか」

カイトが質問をぶつけてくるが、俺に答える余裕は全くなかった

第18話

死ぬかと思った

てか死の一步手前だった

4人しかいない知り合いの1人が蜘蛛つてどんな確率だよ……

ポンと頭にランタンの手が乗る

「お菓子をヨコセ。」

ランタンの頭の中はお菓子でできています。もうちょっと俺に優しくしようよ……

バックを探るがお菓子が見つからない……大量に買うから置いてきたんだ

「カイトお菓子持ってない？」

「コレやるからとりあえず説明しろ。」

チヨコバーをランタンに放り投げ、俺に向き直る。ランタンの被害にカイトが合わないはずもなく、いつもせびられていた。カイトは俺と同じくお菓子を常備している

「いや、あの……調べ物の途中でハンター試験で知り合った人に会ってさ……」

話していると、だんだんカイトの眉間にシワが寄っていく。三白眼が細まり、殺気が発生する

「どうしてそんな事に……シャルナークとクロロってのはタローが全力で逃げるほどやばいのか？タローお前いったい何を知っているんだ。」

「ええ……っと、そのなんだ」

「はつきり言え。」

カイトの殺気が凄みを増す

これはやばい

言い逃れが許される雰囲気じゃない

周りを見渡し、人がいない事を確認して口を開いた

「あいつらたぶん幻影旅団じゃないかと。」

「幻影旅団……？」

「やっぱり知りませんよねー」

「自然の中で生きる男ですもんね」

「クルタ族虐殺は知ってる？」

「クルタ……ああ、緋の目か。」

「そう、皆殺しにして目をえぐっていった人たちの事。」

「なるほど、それなら危ない奴らっていうのは納得はできる。だが、知り合いも数えるほどしかない、俺と一緒に旅をするまでめったに外出もしなかったタローが、なんでそんな奴ら知ってるんだ。」

「いや、気になって調べた事があって……」

「保身を優先するタローがか？」

「鋭い質問の連続に冷や汗が背中を伝う。長年友人をやっているだけあって、俺の事をよく分かっている」

「危険な奴を避ける為にも情報は必要だよ！」

「この前、俺が賞金首の事調べてくれて言ったなら、危ない事頼むなってブチブチ言ってたじゃないか。」

「ソナナコトモアリマシタネ」

「俺が俺の首を絞めている……」

「分かった、もういい。」

「殺気が消える」

「よかった……許してくれるみたいだ」

「だが、言い逃れをしようとしたのは事実だな。」

「カイトは嘘を極端に嫌う。そこに正座しろと命令を受け、くじら島到着までカイトの説教を受ける事となった」

「俺が悪いわけじゃないのに!!」

そこは物語のスタート地点

下船し、辺りを眺める

潮の匂いがあたりに漂い、漁師達がせわしなく働いている。

よくある漁村、めずらしくもなんとない

だが俺にとっては特別な場所

悪魔全書をしまい、ランタンを帰還させる

「ジンさんの家に行ってみるか？」

ジンさんはこの島にはいない。師匠を攫っていった時点で決定している

「うん、行ってみよう。」

「タローは常に円を張ってくれ。」

「りょーかい」

ゴンとカイトは必ず出会わなくてはならない

くじら島に着いたら俺の意見は言わず、カイトの判断のみで動く決めていた

カイトと出会ってゴンはハンターを目指した

俺の余計な一言が、重要な出会いを変えてしまっただけは困る

ジンさんとゴンの実家に着くと、中の様子を探る

「家の中に感じる気配は一般人だけだよ。」

「さすがに、ダメか……町を出て森に行くか。ジンさんは人が集まる所より動物が好きだしな。」

草を踏みしめながら森を進む。歩いているとジンさんが何故ミトさんにゴンを預けたのかよく分かる

離島で大陸と離れているせいか、危険な動物は見当たらない。生えている植物も食べたとしても、最悪食中毒程度

ジンさんの息子の遊び場としてはピッタリだ

あくまでゴンならと注釈がつくけど……普通の子供が遊べば死ぬかもしれない

「いい森だね。カイト」

「そうだな。」

森の雰囲気にとんと和んでいると、キキキキッという甲高い鳴き声が響いた

マダラリスだ

カイトがハッと森を見渡し、走り出す

物語が始まった

俺はカイトの後姿を眺めながら思った。絶をして気配を殺し、ゆっくり歩いて後を追う

やがて木々の隙間からゴンを殴り飛ばすカイトが見えた

カイトさん、それ普通の子供だと死んでますよ……

その場に留まり、成り行きを見守る。感じる疎外感

キツネグマの子供を抱えた。見た目は可愛いが、子供とはいえクマだ。爪は鋭く、ゴンの皮膚を鋭く抉る

まっすぐカイトを見つめるゴンの目が、ジンさんの息子だとカイトに気づかせる

「おい、タロー。そろそろ出て来い。」

「えっ誰かいるの?」

ゴンがカイトの視線の先にいる俺を振り返る

おまつ声かけんじゃねーよ!!

せっかく上手に隠れてたのに……

しぶしぶ出て行く

俺が姿を見せるとゴンは不思議そうな顔をしている

「おにーさん……知り合い?」

「一緒に旅をしてる友達だ。」

「俺はタロー、よろしくね。」

「オレはゴンっていうんだ。」

ゴンはまぶしい、ジンさんと良く似たまっすぐな目が太陽のようだ。目を見ただけでカイトがジンさんの子供と判断したのも頷ける

お墓を作りたいと、ゴンが言い出した

「カイト、穴掘りまかせた。ゴン君はこっちにおいで、傷の手当てをしようね。」

「でも……オレのせいで……」

「子供は大人の言う事を聞くものだよ?」

悔しそうに唇をかみ締めるゴンを強引に座らせ、手当てを始める。

思ったより傷は深く、出血はまだ止まっていない

カイトは何も言わずこちらを見ながら墓を掘っている

念字でカイトに意思を伝える

『ジンスさんの説明はカイトに任せた。』

予想通りの苦い顔

無視して手当てを続けた

日が暮れ、カイトのジンスさん自慢大会が始まった

ちびっ子ゴンがキラキラとした目でカイトを見つめている

カイトって本当にジンスさん大好きっ子だよなあ……

言ったらボコボコにされそうだけど

「どう見てもお前は優秀なハンターの器量だよ。なあ、タロー。」

「うん、そう思うよ。」

「いいハンターって奴は、動物に好かれちゃうんだ。」

キツネグマの子供がゴンの傍へ来て、つぶらな瞳でゴンを見上げた。抱きあげるゴンの腕の中で気持ちよさそうに目を細める。

「ゴン君、これあげるよ。」

俺は小さなかぼちゃんたんをゴンに渡す。今日この日の為、キーホルダーに加工していた。金具の部分には神字を彫り、強度を底上げしている

「タロー……お前。」

「お守りだよ、ゴン君。よければ持っていてくれると嬉しいな。」

「……大事にするね。」

ゴンがキーホルダーを腰のベルトにつける。感動しているらしいゴ

ンに悪いが、これは保険の意味合いが強い……蟻の。
カイトや師匠が殺されるなんて耐えられない。女王蟻の討伐は必ずやるけど、何かあった時の為の保険。

「そろそろいくか。」

「立派なハンターになってね、ゴン君。」

ゴンと別れ、森を出て岬へ向かった
辺りはすっかり暗くなり、月が顔を出している

「タロー、知ってたのか。」

「なんの事かな……?」

「全く、お前という奴は……」

クドクドとまたカイトの説教が始まる。カイトは気持ちのいい人間
だけど、説教が長いのが困る

さて、次はどこを探そうかな。

そう思案に暮れつつ、くじら島の1日は終わった

第19話

今日も今日とてジンさん探し。

タリカコスという街のホテルでパソコンに向かい、ひたすら情報を漁る。

ここはハンターが経営するハンター専用ホテル。

ホテル全体が支配人の念で出来ており、支配人が認めた人間しか泊まることができない。セキュリティもばっちりだ

中には修行専用のスペースもあり、ハンターが多少暴れたくらいではびくともしない。

「カイト……ちょっとは手伝おうと思わない……？」

カイトは高速で移動するランタンを捕まえる、という修行をしている。飛べるランタンが縦横無尽に逃げ回り、カイトがそれを追う。俺も毎日やっているが、かなりいい訓練になる。悪魔の中で一番素早いのはランタンなのだ

何よりお菓子を差し出せばすぐにやる気になるし、長時間付き合ってくれる。口は悪いし、意地汚いがいい子だ

悪魔がいい子というのも変だけど

「俺がやるよりタローが調べた方が早い。悪いが頼む。」
そう言われると何も言えない。

諦めてパソコンに再び向き直る。キーボード片手操作大変なのに

……

こここの所、極端にジンさんの情報量が減った。何回かニアミスしている、ジンさんも警戒度を上げてきているみたいだ。全くもって大人気ない

大きなニュースを中心に調べるが、ハンターが関わったと思われる物も今現在はない。

「どーすっかなー…原作的に言えばそろそろ見つかるはずなんだが
「あっそっか。」

ピンと来た。

携帯を取り出し、師匠に電話をかける。一般的な手法で見つけようとするから、見つからないんだ

「もしもし、師匠お久しぶりです。」

さすが俺の師匠、攫われてる時以外は必ず家にいますね

用件を話し、師匠がリストアップしてくれる情報をメモに取って行く。長生きだけあって知り合いも多い

師匠にお礼を言い電話を切る

「カイト、ストップ。」

アメ玉をランタンに投げ、修行を強制終了させる。

「なんだ、いきなり。」

「相談したい事があるんだけど……」

答えは念だ。今までなんでやらなかったのかと、過去の自分をぶん殴りたい。ネットで見つからないなら探索系の念でジンさんを探す。

「なるほど、いい考えだな。その能力者はどこにいるんだ？」

世界地図を広げ、場所を指差しながら説明する

「タリカコスから北西にある無人島だよ。実力も確かで、温厚な人物でもあるらしい。問題は支払いがかなり特殊で…」

「特殊とは？」

「記憶を支払い、調べるらしい。どの記憶になるかは依頼者次第だ
そっか。」

「自分で選べるのか？その支払う記憶とやらを。どの記憶にするか
選べるなら俺はかまわないが。」

「渡したくないと思ったら調べてもらえないだけらしいから、行ってみない？」

「わかった。」

話は決まった

ホテルを引き払う準備をカイトに任せ、俺はボートを借りる算段をつける。運転はカイトにしてもらおう。

残念ながら貸し出しボートはなかったもので、1台購入する。ハンターになってから俺の金銭感覚は麻痺してきている。

ジンさん探しの合間に仕事をカイトと一緒にやっているが、報酬は最低でも1000万Jから。カイトがたまに見つけて引っ張ってくる賞金首の最高額は10億Jだった。

平凡なサラリーマンだった俺が変われば変わるものだ。

準備をすませると支配人に挨拶をして、ホテルを出た。

商店街に向かい、足りない物を補充していく。

「タロー、支払いは俺がするからな。」
キョトンとしてカイトを見つめる

「ジンさん探しは俺の領分だ。絶対に俺が支払う。いいな？」

「あ……うん。」

真剣なカイトの顔に若干押されながらも了承する。カイトが支払うのはスラム時代の記憶だろうか。それならいいんだけど……

ボートで海の上を進む

というか飛ぶ。カイトの運転は鬼のように荒い、いわゆるスピード狂。必死振り落とされないうようボートにしがみつく

ようやく島が見えてくる

助かった……てかこれ帰りも味わうのか……

島は密林で覆われ、島全体から鳥や獣の鳴き声が聞こえてくる
うーん、これはやっかいだ

この密林の中からたった1つある能力者の家を探さなくてはなら

ない

本を開き、ピクシーを呼んで円を伸ばす

「1/50くらいの地図をよろしくね」

目の前に屋気楼の地図が現れる。これでしらみつぶしに探して行くしかない

「カイトどっちの方角から行く？」

「向こうにある気がする。」

「りょーかい、じゃ行こうか。」

カイトの勘は蜘蛛のマチ並みに当たる。だからこそ即効嘘がばれて説教されるんだけど。カイトの直感通りにいけば間違いはない

密林は人の手が一切入った気配はなく、歩きにくい。地図を見ながら進むが底なし沼があったり、魔獣が襲ってきたりとなかなか多彩だ

どうやってここに家を建てて、生活してるんだか……移動系の念も持っているのかな

やがて地図に巨大な渓谷が現れた

大地が割れているようにも見える。それほど深くて幅も広い

地図を見ながら相談する

「この向こうにあると思う？」

「そうだな、たぶんこの渓谷の向こう側だろう。ただ、この幅じゃ飛んで渡れないな……」

飛んで渡る気だっただんですかっ

これより狭くて普通に渡れるところ探しましょよ！

「カイト、円をもっと広げるから地図をよく見て。たぶんそんなに長い時間は持たない。」

了承を取り付け、目を閉じて集中する

円を戻し、オーラを大きく練る。そして一気に広げる

歯を食いしばるが、消耗が凄い。時間にしてものの10秒ほど見えた、もう大丈夫だ。」

身体が崩れ落ちる。カイトに腕を支えられてようやく立ち上がる。

「さすがにきつつ。」

「大丈夫か？円だけならトップクラスのハンターになれるな。」

「円だけっすか……」

褒められてるんだろうけど、素直に喜べないのはなんでだろう

円以外ならほとんどのハンターに負けるんですね、わかります……

「渡れる場所が映った。行くぞ。」

渓谷を渡り、しばらく密林を歩くとぽっかり何も無い草原があった

大きな大樹が真ん中にそびえ立ち、草原の広さと同じ位の枝を広げている

「ここだと思んだが……」

「おっきな木しかないねー。」

「あの木を調べてみるか。」

大樹に近づき、回りを調べてみるが変わった様子は何も無い。カイトは木に登ると先端近くで声を張り上げた。

「タロー、ここだ。入り口みたいだ。」

登ってみると大きな洞があった。中は真っ暗で何も見えない。先に行くぞとカイトは真っ暗な洞へ飛び込んだ

勇気を出し、続けて飛び降りる

着地すると、薄暗い空間が広がっていた。円を広げてみるが何も発見できない

「何も無いな……」

こちらへおいでなさいな。お客人

いきなり頭の中で声が響く。驚いてカイトの方を見るとカイトも辺りを見回し、警戒している

右手に扉を用意しましたよ。お入りなさいなお客様

右手を見るとたしかに扉がある

ドアノブを手に握り、ゆっくりと開く

そこにはフードで全身を隠し、ソファに背を丸めて座る人間がいた
年齢はわからない。性別は女性だろうか。100歳の老婆にも見
えるし、10歳の少女にも見える

「そちらがタローだね。リーシャンから連絡をもらっていた……弟
子が出るだろうからよろしくと。その名前はなんていうんだい
？」

驚いて目を見開く。

『師匠、ありがとうございます！』

心の中でお礼を言う、もう来世も頭が上がらないだろう

「カイトといます。俺の師匠である人を探して貰いたく参りました。」

「お待ち……、私がするのは探し物ではないよ……私ができるのは、
望む先を少し見せる事。この先会う事があるならきつと見えるだろ
う。」

先？未来予知の類だろうか

黙って話の続きを聞く

「代償は記憶……。大事な記憶、幸せだった記憶。渡せるなら見せ
てあげよう。」

カイトの顔が驚愕に変わる

だめだと思った。カイトにはその記憶は渡せない。

1度だけ、酒に酔った勢いで話してくれた事があった。

親にボロボロになるまで殴られ、捨てられた。

スラムでたった一人、信用できるのは自分だけ。盗みやケンカに
明け暮れた日々、そこに現れたジンは俺の太陽だと。

幸せな記憶、それはきつとジンスさんの記憶だ。

「俺が支払います。その代償。」

「タロー待て！」

「この代償ばかりはカイトに払えるわけないよね？」

「……………ッ、ここでは調べない！」

「ジンさんを探すなら、この人が一番確実だろう？俺が払うのはた
いした物じゃない。」

カイトを黙らせ、老婆に向き直る。

「どの記憶を支払うかね……………選びなさいな。」

「どんな記憶でもいいんでしょうか？」

「代償が大きければ大きいほど、長く詳細にみえるだろう。」

息を大きく吸い込む。

俺が幸せだった頃……………

「血の繋がった家族との記憶を支払います。」

そういつた途端、顔を横から殴り飛ばされた。地面に沈んだ俺の
胸ぐらを捕まれ、引つ張りあげられる。

「ふざけるな！そこまでしてジンの行方なんか調べたくない！

！」

「本当にたいした物じゃないんだよ……………」

カイトと睨み合う

俺は薄情だ。向こうにいる家族の記憶なんて本当にどうでもいい。
産んでもらって、大切に育てられた。カイトみたいに暴力を振る
われ、捨てられたわけじゃない。食べさせてもらい、学校にも通わ
せてもらった……………こちらに来てからそれがどんなに幸せな身分かを
知った。

でも俺は今ここにいる。

怪しい俺を拾って弟子にしてくれた師匠、初めて友達になってく
れたカイト。まあついでにジンさんも。この世界にいる人の方が何
倍も大事だ

「……………何か、勘違いしてやしないかね。」

「「え？」」

「記憶は……………年単位でいいんだよ……………？」

カ
ツと一気に俺たちの顔が赤くなる

「「最初に言え！！！！」」

結局2年ほどの代償を俺が支払い、カイトの未来を見てもらった
気まずい……………カイトの顔を見れない
穴を掘って埋まりたいほどの羞恥心がこみ上げる

黒歴史ってこういうのかな……………

第20話

街へ戻り、一晩かけてお互いの気持ちに折り合いをつける。

翌朝、朝食の席でこれからを話し合う

「ジンさんが現れるのは、ジャポンの北。越後だ。」

「越後か……」

「これから3カ月後、16日の午後14時31分。越後の駅から降りてくる。」

「駅前か……悟られやすい場所だね。」

顔を突き合わせ、どうやったらジンさんに見つからないよう待ち伏せできるか考える。

駅前じゃ、かぼちやらんたんは置いたら盗られるよなあ……

「変装して、一般人の振りをする？」

「うーん……とりあえず行つて、絶で隠れるじゃダメなのか？」

「もちろんそれは当然。見た目で逃げられないように服装変えて、カイトの金髪は隠そうよ。」

「髪は別に目立たないだろう。服装だけでいいんじゃないか？」

本気で言っているのかこの男……！

「髪をなんとかして、服装を普段と違う物にする。うん、決まり。」

盛大に文句を言い始めたカイトを放置し、ネットで越後のページをめくる。

駅の出口は一つ、これなら挟み撃ちにすればなんとかいけるかも……？

「とりあえず越後に行きますか。」

飛行船で10日。

ジャポンは桜の季節だった。

懐かしくもどこか違う景色。

「カイト、そろそろ機嫌直してよ。」

「変装は分かるが、なんで密航までするんだ……」

かぼちゃらんたんを宿に置いてくるだけだろうと、まだぶつぶつ文句を言う

ジンさんの勘には、煮え湯を飲まされてきた。後1歩の所で何回も何回も逃げられた。

ならば勘が働かないよう、細心の注意を払って準備をしなければならぬ。

ハンター証を使えば、必ず証拠が残る。偽名を使っても、入国審査の時にカメラに映る。

密航して空き部屋に籠り、整備時にこっそり抜け出すのが一番いい

カイトは長い髪を黒く染めて一つに緩くまとめ、黒い皮のパンツにピタピタTシャツ、顔にサングラス。腕や首にはシルバーのアクセサリーをジャラジャラと着けている。

コーディネートは俺。カイトをデパート中引きずりまわし、着せ替え人形にしてやった。

髪も師匠の紹介でビスケちゃまにお願いしたら、嬉々としてやってくれた。専用のシャンプーを使えば簡単に落ちる代物

カイトを変装させた後は妙な達成感があった。

「諦めて。」

いい笑顔でカイトに言うと、思いつき殴られ壁に激突した

越後までは走って行く。これも準備の一環

本当は飛行船も使いたくはなかったが、ジャポンは島国なので

仕方がない

変装を避けたいカイトが泳いで行くと行って大変だった……
無理だっつーの

現地へ着くと、こじんまりとした旅館が街のはずれにひっそりとあった。

旅館の離れを長めに見て、半年間押さえる。

「変わったお願いですね……」

「知り合いが着たらすぐ使いたいので。部屋にこの飾りを常に置いて欲しいんですよ。もちろん半年分の宿泊費は先払います。」

慣れたお願いをして準備が終わった

これで逃げられたら、師匠の所で張るしかない

決戦の日まで残り2ヶ月……時間が余った

「何か仕事をするぞ。」

「どんな？」

「死ぬほど暴られるやつ。」

………まだ根にもってるの？

カイトが取ってきた仕事は美術館の警備
B級賞金首が展示品を狙っているらしい
狙われたのは強固な呪いがかかった指輪

死亡フラグをビンビンに感じるのは気のせいですか……

カイトをそれとなくさとしてみたが、決めたらテコでも動かないのは弟子も一緒。

いちおう例の方々をネットで調べると、A級に上がっていたので無理やり自分を納得させる

嫌な予感を感じながら仕事場へ向かう

念には念を。

美術館側が結構な数のハンターを雇っていた

これでは暴れられないと、カイトは不満顔だったが、俺はホツと一息ついた

カイトは集められた中ではトップクラス、展示室を任された。俺もおこぼれで同じ配置

俺は美術館の許可を取り、展示室の扉から陳列ケースのちょうど真ん中に足止めの神字を念で書き込んでいく

公開時間が終わった後、コツコツと毎日刻んだ

チキンな所は直る気配がない

なかなか来ない賞金首にカイトがジレていたが、運命の日は簡単に訪れた

その日の昼、警備室で昼食を食べていた

スツと誰かの影が映る

「ん……？」

虫の知らせだろうか、気になり監視ビデオを巻き戻す。

荒い画面を凝視し、確認してみる

変な民族風のコートをまとい、短い髪で眉毛がない男

フィックスかよっ！！

大当たりじゃねーかつ！

「たぶん幻影旅団のフィックスって男だと思う。」

「能力は分かるか？」

「系統は強化系、腕を回転させてパンチ力を強化する能力だと思う。」

腕を組んでカイトが考え込む

契約切って帰りませんか……カイトさん

「腕を回させなければいいんだな。」

「なにをいってやがるんですか？」

ダメだったらランタンで飛ばばいいだろうと明るく笑う

殴りてえ……

仕方がないので準備を進める

俺はまず契約主に事情を説明し、ハンターをまとめる役目を貰う
カイトには美術館の奥庭を使い、使いやすいタイムン専用武器
を出してもらった
蜘蛛に全体攻撃など意味がない

多少、庭が荒れて美術館関係者の顔色が悪くなったが問題はない
俺は、念を使えるハンターを5人1組に分ける

一人で立ち向かうな、やばいと思ったら逃げると言い聞かせる
守らなくて死んでも俺は知らない。俺はカイトだけ死ななければいい

念を使えない人は邪魔なので帰っていた

殺気立ち、文句もたくさん言われたが、伝家の宝刀【契約主の
威光】を振りかざし場を治めた

悪魔はピクシーを出し、何時でも補助がかけられる体勢を整える

夜……

静寂が美術館を支配する

警備人数がかなり減ったので、指輪以外は守らない方向で動く
1人だけ移動系の念を持っていた。その男に指輪を任せ、蜘蛛
が着たら即逃げろと指示をする

大きな音が響き、それと同時に警備室から連絡が届く。

正面玄関扉が壊されたと

指輪を持ったハンターにすぐさま飛んでもらう

展示室の扉を見つめ、畏の後ろに立つ

「来たか……」

カイトが笑う

心臓の音がドクドクと鳴り響く

ギイイと、ごく普通に扉が開いた

入ってくるのは普通からかけ離れた蜘蛛達

フェイタン、ノブナガ、フィックス……そしてクロロ・ルシル

フル

背中に汗がこぼれ落ちるのを感じる

「やあ、タロー。意外な所で会ったね。」

蜘蛛の頭の唇が上がる

悪魔全書をギュと握り締める。ここで失敗したら終わる

「ルシルフルさんも案外お暇なようですね。」

「とても素敵な物を見つけてね。欲しくなったんだ」

「素直に帰っていただけませんか？」

「それは聞けないな…欲しい物を盗る為にきたんだ。たった2人
で俺たち4人を相手にするつもりか？」

自分の顔が歪まないのが不思議なくらいだ

「そのチビと眉なしくらいでしたら、俺一人でなんとかなりますよ。」

「殺すっ!!!」

チヨロイ

簡単にかかってくれた
思わず笑顔になる

「待て、フィックス、フェイタン!」

クロロの静止が入るが……もう遅い
蜘蛛の2本の足は罠にかかった

「カイト、そのデコを頼む。俺はちょんまげをやる」
「わかった。」

「ひどいな。タロー」

カイトは剣で、クロロはナイフで向かい合う。刃が擦れる嫌な音が聞こえる。カイトと切り結んだクロロが手をかざす

ノブナガを必死で抑えながら叫ぶ

「デコは他人の能力を盗んでストックしてる。本を開かせるな!」

クロロの顔が驚愕に変わる

「へえ……後でゆっくり話を聞きたいな。」

ノブナガの剣が俺を襲う。一撃、一撃が鬼のように重い。避け切れなかった刃が俺の身体に少しづつ傷跡を残す。

「そのちょんまげは大丈夫なのか?」

カイトがクロロの手に波状攻撃を加え続ける。決してスキルハ
ンターの発動は許さない。

「ちょんまげはカウンタータイプ。今は問題ない。」

「このクソガキがああああああああ」

攻撃は激しくなったが怒りに燃えている分まだ逃げやすい。避
けてばかりで、まともに戦わない俺に、ノブナガの怒りは更に激し
くなる

「タロー、1回目!!」

カイトの指示が飛ぶ

ピクシーに速度上昇をかけるよう頼む

未だになれない身体を一瞬襲う不快感。唇を噛み締め、耐える。

「コイツ、いきなり早く!!」

回避から一転して攻撃へ移る。さすが強化系だけあって1発は
重い。スピードはこちらが上回った

ヒットアンドウェイでノブナガの肉体に細い傷を付けていく

俺とノブナガの血液が床で交じり合い、血溜りを作る。足を取
られ、転倒しそうになる。

一瞬の隙を付かれ、肩口から大量の血が流れ落ちる

早く痺れて動かなくなれ……っ

祈るように攻撃を続ける

どれくらい時間が経っただろうか、ピシリと嫌な音がして神字で
作った蜘蛛の檻が壊れる。束縛からの開放に歓喜の声を上げる手足。

ヤバイ……もうもたない

「戻れ、ピクシー！来い、ジャックランタン！！」
カイトが俺めがけて飛ぶ。身体を必死にカイトへ寄せる

「かぼちゃのカーテン！」

カイトが俺の腕をつかんだ瞬間、能力が発動した
俺たちの姿が消える

何も無い空間に啞然とする蜘蛛達を残して……

第21話

タリカコスのだ宿、ハンター専用ホテル。

俺たちは蜘蛛から命からがら飛んで逃げてきた。俺もカイトも全身血だらけ、服はボロボロで酷い有様だ。

イヌガミを呼び出し、傷の回復を指示しながらカイトへ不満をぶつける。

「死ぬとこだったじゃないか！フェイタンのクナイが後一瞬遅かったら喉に刺さってたっのっ！」

「フェイタン……？ああチビか。まあ死ななかつたし、楽しかったから気にするな。」

「全然楽しくねーよ！！このバトルジャンキーめっ！」

思わずカイトを蹴り飛ばすが不満は晴れない。能力の後遺症で全身がズキズキと熱を放っている。

絶対に目をつけられた……次は殺される。

「アイツ強いな、指を一本切り落としたのに顔色も変えずに戦ってたぞ。」

「強いのが解ってるから逃げようって最初に言ったんだよ……念系使いがいるから、次会った時にはくつついてるだろうな。」

頭が痛い。この状況、本気でどうしようか……とりあえず逃がしたハンターに連絡を取ろう。

携帯を取り出し、電話をかける。イヌガミが俺に擦りより慰めてくれて、心が暖かくなった。

「もしもし、タローです。指輪は無事ですか？待ち合わせ場所を決めて、契約主の所へ運びたいと思うのですが。」

『……………指輪はもう頂いたよ。タロー。指輪を持って逃げた彼の能力はいいね。ありがたくストックさせてもらおうよ。』

思わず電話を切る。きつと幻聴だ、そうに違いない。

今度は相手から電話がかかる。

鳴り響くベルに、カイトが不思議そうに取らないのかと聞く。ため息を吐きながらボタンを押す。

『いきなり切るなんてひどいじゃないか。』

「……契約主は死んだんですか？」

『指輪を運んだ男がどうなったか聞かないんだな？ いや……生きてるのを知ってるから聞かないのか。俺たちが4人だけで来たとも思い込んでたか……』

全てが裏目にでている気がする。4人以外にもいたという事は俺たち以外のハンターの命はほぼ絶望的だろう。

カイトをキツと睨みつける。このバカカイトが戦いたいと言い出さなければこんな事にはならなかった……恨みがつのり、のんきな顔を殴る。

『どうして俺たちの能力を知っていたのか聞いてもいいか？』

「他の人から聞いたんですよ。」

『君たちの契約主やハンターはタローから聞いたと言ったが。』

「……さあ、俺には解りかねます。」

『タローやそこにいるお友達とも、一度ゆつくり会って話がしたいな。仲間も君たちに興味津々でね、また遊びたいと五月蠅めづくて。』

「全力で遠慮させて頂きます。もう2度と会うことはないかと思えますので、記憶の彼方へ投げ捨てて下さい。」

そう言つと次は通話を切り、電源も落とす。報酬はパーだ、まあそれはいい。

このホテルにいる間は大丈夫だ、支配人が決して蜘蛛を中には入

れない。

その後どう逃げるか……

「ジンさんのXデーまでホテルに籠って、修行しようか……カイト。」

それから1ヶ月ほど

俺とカイトはホテルの修行部屋に籠りきり、修行を続けた文字通り、血反吐を吐くような訓練。

生き残るために……

オーラに負荷をかける念具を何個も身に付け、練を倒れるまで続ける。俺の能力は一部を除き、余り効果中オーラを使用しないのが取り得だ。

その分他へまわせるが、ノブナガと戦い解った事がある。

俺は総オーラに比べ、排出できるオーラが少ない。つまり、身体の中でいくらオーラを練つても上手く身体の外へ出すことができない。

戦闘時には致命的すぎる弱点だ。

解決方法は排出オーラに制限をかけ、体内に収めきれないほどのオーラを練り上げる。

簡単にいうと、念具で風船の穴から出る水を少なくし、風船の中に水を大量に注ぎ込む。

そうすると穴は水の圧力に耐え切れず……広がる。

念の訓練と同時並行して肉体を苛め抜く。

身長を伸ばす事はもうすっぱり諦め、全身の筋肉を鍛える。

これは青春ドラマのような青臭い方法を取った。

錘を手足と腰にこれまた大量に着けた。全身で現在2t。最初は

歩くことも困難だったが、ハンター世界の空気は特別製で1週間もすればある程度動けるようになった。

カイトと組み手や、ナイフを使った戦闘訓練。

倒れれば、イヌガミや危険な薬まで使って無理やり即時回復させ、さらに続けた。

血反吐どころか、カイトに腕を切り飛ばされた事もあった。

イヌガミがいてよかったよ……ホント。もふもふだし。

ピクシーの速度上昇能力の実態は、筋肉の伝達神経と反射神経を無理やり活性化させるという物。

弱点は、効果終了後のリバウンドと効果対象を選べない事。つまり、身体への副作用とカイトだけに効果を表したいと思っても俺にも効果がでる事

いい所は、戦闘時の大幅な移動反射速度上昇。修行に取り入れると激痛と引き換えに簡単に鍛えることのできない神経系統の訓練になる。

一度試しに3回目をかけると、カイトですら目視できない程のスピードだった。劇的な効果と引き換えに、動くたびに皮膚や筋肉が断裂した……即解除したが全身の穴という穴から血や変な汁が流れ、バトルジャンキーなカイトをして、殺されそうでランタンも使えない時以外使うなと約束させられた。

4回目はたぶん命と引き換えで、手足がもげるのかもしれない。

これはいい切り札になる。

使った後は必ず相手を殺さなければならぬが……なにせ動けないどころか三途の川の半歩手前までいく。

俺はまだ絶対に死にたくない……だからきつと殺せる。

殺せなければ、嘔吐をしながら死体や血に慣れた意味がなくなる。

死にたくない、殺されたくない……そう足掻く。

俺という人間らしい理由。

睡眠時間は毎日2時間ほど……さすがにXデー前日はたっぷり取ったが。

師匠の家へ途中で合間を見つけて何回か飛び、毒薬の仕入れを頼んだ。

もう痺れ薬なんて甘い事は言わない。

ゾルディック御用達毒薬専門店で、毒を塗りこんだナイフで傷を付けられれば相手は死ぬ。そういう毒を頼んだ。

師匠に毒専用ナイフを作ってほしいと頼み込み、もう1本作成してもらった。

今まで使っていた物より、かなり短く多数の溝がついて、黒光りしたナイフ。

刃は紙のように薄く、細長くて鋭い。

もちろん周とオーラ切断を付けてもらった。

俺は師匠特製武器がなければ周をまともに使えない。

時間は修行であつという間にすぎ、Xデー当日。

「準備できた？」

「タロー……俺はまたこの格好なのか。」

「本番で変装しないでどうするんだよ……」

ジンさん、必ず捕まえるから覚悟してて下さい。

第21話（後書き）

ほとんど捏造ですよ……もちろん

作者の二次の材料は100%妄想が含まれています。

第22話

ジンさんとの決戦当日、越後の旅館に飛び、着々と準備を進める。

「俺は電車のホームに張る、タローは改札を張ってくれ。」

「りょーかい。少し香水も付けて行こう。」

「なぜ香水を付けるんだ？」

「匂いがない人間は一般人には見えないよ。」

結局、絶で張るのは中止になった。その代わりに、オーラを垂れ流し一般人に偽装する。

優秀な念能力者ほど匂いがない。

いくら絶で消えていても、匂いで居場所がばれるからだ。

一般人なのに匂いがないなど、怪しんで下さいと触れ回っている様な者だ。

ジンさんの鼻はゴン同様、優秀な警察犬レベル。匂いで様々な事を判断してるに違いない。

準備が整ったが、カイトがまた文句を言っている。

そろそろ諦めればいいのに……

俺がカイトと一緒に行動している事は、とっくの昔にジンさんに知られている。

俺も髪の色を抜いて茶髪に、服もいつもは絶対着ないホストみたいなレンガ色のスーツ。

「行くか。」

「らじゃー。」

グッと親指を上げる。

越後駅前。

時間はギリギリ、14時25分。

カイトは切符を購入し、ホームへ入っていく。俺も一応購入。追いかける時に改札を普通に通るとは思えないけれど。

今日の悪魔はピクシー。目に付かないようスーツのポケットに入ってもらおう。

ジンさんの足の速さが人外レベルなのは痛感させられている。逃げ出す前に1回目をかける。カイトから2回目の使用も許可が降りた。

ピクシーの能力がジンさんにかからないよう、ジンさんは今は敵だと自分に言い聞かせる。もし、かかってしまったら3回目をかけて解除して捕まえてやる……。

頭の中で2人で決めたシュミレーションを何回も思い浮かべる。

「後、3分……」

手にじんわりと汗をかく。

ホームで待ち合わせをしてるフリをしているのに、改札に目がいきそうになる。

天井の時計をジッと見つめる。時間が経つのが遅い……たった3分なんて何時もは気づかないうちに過ぎるのに。

1分を切った。

秒針が数字の6を指す。アナウンスが鳴り響き、電車が到着したのだと分かる。

5秒をゆつくりと数え、改札を見る。

来た!!

間違いないジンさんだ。

視線を向けられないよう慎重にジンさんへと歩く。後ろからカイトも近づいていく……。

まだ気がついていないようだ。あたりをキョロキョロと見回している。

まるで田舎から都会に出てきた少年だ。
現在距離は10mほど。

後もう少し、縮まったら能力を発動しよう……

途端、いきなりジンさんの顔が真顔に変わる。

俺は心話でピクシーに頭に登るよう頼む。カイトへの捕縛開始の合図。

カイトがうなずいた。

察知したのかジンさんが走り出した。

どんだけ勘がいいんだ！

これだからフリークスは困る。

「クソ！待てコラ、ジンさん！！」

「一発殴らせろ！！」

垂れ流しを解き、能力を発動。足に限界までオーラを集め、逃走者を追跡する。能力はジンさんには効いてないようで助かった。

ジンさんが俺たちを振り替えり、嬉しそうに笑った。

「おーう、ようやく来たか！お前らよくここに俺が来るのが分かっ

たなあ。なんだ？その格好は。」

俺たちを見ながら後ろ向きで走っている……器用な。
それでも俺たちより速いとかないわ。どんなチートよ……

「ジンさん！見つけるのが試験でしたよね？！何で逃げるんだ、このクソ親父！！」

「捕まえてみろっに変えた。」

「何時だよ！！」

「今かーえた。」

「ふざけんな！！」

「相変わらず、お前ら仲いいな！」

ジンさんとの距離は縮まらない。ジンさんがワザと変わらないように走ってるんだろう。

バカにしゃがって。

「タロー2回目だ！」

「らじゃー。」

2回目？とかしげるジンさんの顔が変わった。

あふれんばかりの笑顔。

後ろ向きに走るのをやめ、本格的に逃走する。

街のビルを飛び回り、方向も好き勝手。ジンさんの性格を体言するよつな逃げっぷり。

驚くのを通りこして呆れ果てる。

「タロー！俺が死ぬ気で捕まえる。ランタンを呼べ！」

ここでランタンに変えると能力のリバウンドを食らう。

カイトの目を見て俺は頷きを返す。

ジンさんを標的に捕らえてピクシーを戻す。

「来い、ジャックランタン！」

すぐさまランタンに入れ替えを命じる。転移した直後、リバウンドが身体を襲い地面に沈む。

目線の先にはジンさんにしがみついているカイトの姿があった。

「よし、カイト。タローの手助けを受けたけど合格だ。一人で捕まえろなんて言ってるねーしな！」

「そもそも見つけるで、捕まえろなんて聞いてねー……」
俺はそうなるだろうとは思ってたけど。

無事とっていいのか、ジンさんを捕まえることができた俺たちは旅館に移動した。ジンさんに担がれて……

ジンさんが大量に色々頼んだせいで、目の前のテーブルには乗りにくいほど料理と酒が並んでいる。

「てか、ジンさん。よくも面倒ごとを何回も勝手に押し付けてくれましたね。おかげで大変だったんですよ！問題解決はジンさんがやって下さい。」

「んー、お前らならできると思ったからな。」

現にできたしなと酒を飲みながら言う。

できないじゃないじゃなくて、押し付けんなって言うてるのに……
師匠の言う通り、人の話を聞かない。

カイトは口で文句を言いつつも、ジンさんと会って嬉しそうに話している。顔が普段と違い、どこか甘えるような雰囲気を感じる。

「ジンさん。うちの師匠を無理やり連れ出すのやめて下さいね。」
「リーシャンはああ見えて喜んでるんだよ。」

「ないから。嫌がってるから。」

「タローはわかってねえな、俺が家に行くのが嫌なら引越すだろ。」

「あのクラスの家を用意するのが不可能に近いからですよ……」

「師匠の家はこの上なく特殊だ。設計からこだわって造り、何十年もかけて神字を刻んだ。建材には師匠の能力で作った物が、いくつか組み込まれている。1年に1回しか作れない能力で作った物が。」

「師匠、ジンさんを説得できなくてスイマセン。」

「後、ひとつお願いがあるんですけど……」

「お、なんだ？」

「ジンさん名義の携帯電話が1個欲しいんですけど。」

「別にかまわないが、何かあったのか？」

「俺はジンさんに蜘蛛に狙われている可能性が高いことを説明する。蜘蛛との戦闘も……」

「んじゃあ、カイトにもいるな。あのいたずらっこ共しつこいからな。」

「蜘蛛と何やらかしたんですか。それより、いたずらっこですか……」

「あの蜘蛛が。うちのランタンと同じいたずらっこ……ジンさんの頭の中は理解できない。」

「まあいいや、携帯電話はもらえるようだし。秘匿性の高いジンさんの携帯電話ならシヤルにも調べられないだろう。」

「しばらくお前ら俺にくつついとけ。」

カイトとジンさんの酒が進み、酔っ払いに進化した。

俺は酒を飲まないタチなのでこの状況はひたすらツライ。

「カイト！ほれ、もっと飲め。」

「もう……のめません。」

「いけるいける、もういつちよいつとけ。コラ！タローも飲めやっ。」

テーブルの周りには酒ビンが50本以上転がっている。どんだけ

飲むんだ。

付き合いきれない。

2人から離れ、本を開いてランタンを呼び出す。俺には癒しが必要だ。

「タロー。おやつの間か？」

「さつきは、ランタンが頑張ってくれたからね。」

荷物からお菓子を取り出しランタンに渡す。食べる姿に癒されてみると、カイトを潰したジンさんがにじり寄ってきた。

「タロー、ソレなんだ？ 駅でも出してたな。」

ランタンはしゃべっていいのか？と俺を見る。ランタンは知らない人と話さないよう教育を施してある。シャルの再現はもうごめんだ。俺が頷くとジンさんとしゃべりだした。

「オイラはジャックランタン！」

「ソーかソーか。」

「悪魔だぞ。さいきよーだ。」

「ほうほう。」

「ランタン、そのおじさんは放置してこっちおいで。」

俺がそう言うと、ちよつと貸せとジンさんに連れて行かれてしまった。俺の癒しがジンさんに盗られた……やっぱり後で殴ろう。

その後、ジンさんがランタンに酒を教えたり、その様子を見た俺がジンさんを殴り飛ばしたりと色々あったが、やがて撃沈した。

「よつやく寝た。」

隣の部屋に布団を敷き、大きな酔っ払い共を運ぶ。

静かになった惨状現場を片付け始める。よくコレだけ散らかせるものだ。師匠の影響か、汚い部屋は耐えられない。

黙々と掃除をしていると、いつの間にかジンさんが隣にいた。驚いて凝視していると外へ行くこうと誘われた。

「タローはバカだな。」

いきなりなんだ、このオヤジ。

「魂捧げてどーすんだ。んなコトして強くなってもしょうがねーだろ。」

そこまでしゃべったのかランタン。

口止め教育も必要か……とりあえず明日のおやつは抜きだな。

「やりたい事があるんですよ。その為にも弱くちゃダメなんです。」

「俺たちにも話せねーコトなのか。」

異世界から来たと言ったら、カイトも師匠もジンさんも信じてくれるだろう。

元の世界で漫画になっていると言ったら、笑い飛ばしてくれるだろう。

蟻退治をしたいと言ったら、手助けしてくれるだろう。

でも何故だろう。話せないのは……俺は自分がわからない。

「ゴン君すら利用してるくらいですよ。どうしてもダメそうなら頼るかもしれませんが、それまでは一人でなんとか足掻あがいてみます。」

「ゴンも巻き込んでるのか。タローがそこまでするなら、大事なコトなんだろうが……」

ジンさんの顔を見る。

「怒らないんですか。ジンさんの息子利用してるんですけど……俺。」

「俺の息子なら、んなコトくらい気にしない。まあ殴られる覚悟はしとけよ。」

「……………はい。」

月が天に輝く。

ひさびさに泣きそつだ。

「明日からまた楽しくやるーや。」

第23話

「とりあえず、仕事手伝え。」

くつついてるってそういう意味かよ!!

色々な事を諦めた俺たちはジンさんの次の仕事場である、ジャポンの蝦夷えそへ向かった。

飛行船を降り、進む事3日。俺の想像した蝦夷とは違い、起伏にとんだ大地と深い森林が続いている。

まだ夏だというのに肌寒い。

「ジンさん、仕事場はどこなの？」

「あつちのほーにな、でっかい山があつてな。その上。」

「はあ?!」「」

確認しよう。

今季節は夏である。そして、越後からそのまま来た俺たちは夏服である。

ジンさんが言う、でっかい山の上には雪が残っているに違いない。
「俺たち半そでとか薄い服しか持ってないんですが……」

「根性で!」

「「また根性が!」!」「」

拜み倒して説得し、衣服調達の許可をもぎ取った。

本を開き、ランタンを呼び出しながら話す。

「カイト、ヨークシンでいいか?俺は師匠の所に置いてあるので問題ないし。」

「そうだな。街には走ればすぐ着くだろ。」

「今からヨークシンって……タローお前移動系持ってるのか!」

俺をキラキラとした瞳でジンさんが見つめる。ゴンなら可愛いけ

ど、ジンさんがやるとちよつと気持ち悪いですよ。

どこまで飛べるんだ、条件はなんだとか普通聞かない事まで聞いてくる。仕方がないのでかぼちゃらんたんを出しながら説明する。

「ゴン君にもあげたけど、コレがある所にランタンで飛べます。」

「おお　　っ！2個くれ。」

「持つてくれるんですか？それになんで2個……」

かぼちゃらんたんをジンさんに差し出す。飛びたい所があるのか

……

ちよつとな。と笑うジンさんはそれ以上はしゃべらなさそうだ。

俺がいないと飛べない事忘れてないか？

「タローはついでにリーシャンの本も持つて来い。」

予想通りのお言葉ウレシイデス。ジンさんの仕事で俺が手伝うつてそれしかないですもんね……師匠が被害にあわない分よしとしよう。

ハンター世界の自然は本当におかしい。

ヨークシンで服を調達し、一路仕事場の山頂へ向かう。師匠がジンの山の上を舐めない方がいいと、ダウンを渡してくれた時は大げさだと思っただが感謝する。

今は夏ですよ？と言いたくなるほど雪が積もり、空からも降ってきている。風が出れば吹雪と呼ぶくらい。カイトは今の季節にダウンが購入できるはずもなく、重ね着で対処してるが寒そうだ。

「お前ら早くこーい。」

ジンさんの服は半そで短パンにマントである。もうジンさんのフリークスぶりに突っ込むのは疲れた。

「こんな寒さくらいでそんなに着込むな。動けなくなるぞ。」
脱いだ方が動けなくなりますよ……。

少し、開けた場所でジンさんが止まる。

「ここが仕事場だ！」

「何もないですよ。」

「俺の指をよく見る。」

ジンさんの指は真下を指していた。

ついでに修行だと言われ、ジンさん特製の負荷装備を1つ渡される。

見た目は只のピアス。穴を開け、着けてみると世界が変わった。体が雪の上に倒れる。重いなんてもんじゃない……これは拷問だ。念で身体を起こそうと思っても上手く練る事ができない。

筋肉と念、同時に負荷をかけているようだ。隣をみるとカイトも同様にへばりついている。

自主的に着けていた錘おもいを外そうとするとダメだと言われた。死ぬ気でオーラを練らないと指すらまともに動かせない。

「さっさと掘れよー。」

あれか、俺が強くなりたいたい発言をしたからか！

立てないので、全力でオーラを練り寝転びながら雪を掘る。

「それに慣れたら増やすからな。」

そんな時が来るのですかね……

丸2日かけて雪が掘り終わる。なんとか立てるようにはなったが、オーラが切れるとぶっ倒れる。その度に、何かカードを取り出し俺たちにかけて回復させる。

「ジンさんそれ、大天使の息吹ですか？」

「おっ。やったことあるのか？」

「手に入りませんよ、それこそ盗みでもしないと。」

「根性で手に入れる！そしてクリアしろ。俺が作ったから面白いぞ。」

その根性論はなんとかありませんか。

質問をはぐらかすって事はゲームマスター専用カードかな。生命力まで回復するし、そんな設定なかったよな……たしか。

「ゴンがきつとクリアしてくれますよ。1番最初に。」
「だとすっげー嬉しいけどな！」

漫画だとジンさんのゴンへの想いはちょっと意地悪だけど、本当の所はどうなんだろう。

「ゴンに言わないから教えて下さいよ。ゴンに会いたいですか？」
んー…と腕を組みながら考えている。

「わからん！」
「は？」

「会いに来たら全力で逃げるけど会うだろ。でも俺からは会いにいかねーな。写真で結構顔も見てるし、成長具合も分かってるからあんま離れてる気はしねーしな。」

ホラと、写真を差し出した。

以前、ゴンと会った時より少し髪が伸びている。あの時のキツネグマだろうか、一生懸命世話をしている様子が写っている。

「息子を隠し撮りですか……。」

「タローはゴンと会ったんだよな。どーだった？」

「ジンさんの息子って感じですよ。そっくりそのままです。」

「俺はアイツになんてゆーか。俺の息子にはなって欲しくないってゆーか……。」

頭をボリボリかきながら、顔を赤くしている。

レア物見れたな……。

「ゴンのオヤジのジンだつて言つて欲しいってゆーかな。ま！そんな感じだ。そんな事よりとつと立て！」

照れ隠しか俺を一発殴るとカイトの方へ歩いていった。

顔がニヤニヤするのが止まらない。

なるほどなー…いい事きいた。ゴンにちくろう。

俺とカイトで1週間もかけて入り口を掘り出した。

負荷をかけなければたぶん10分くらいだろう。

入り口全体を包む柔らかい布が遺跡の入り口にかけてあり、布に

は神字と古代文字の混合文がびっしりと縫いこまれていた。何年、何十年か。長い時間をかけて縫いこまれていた。

圧倒的な力を感じた。

無理に入ろうとすれば死にそう。

「これは……。」

「随分前、リーシャンに見てもらったんだが、特定のパスワードが必要らしいと言わなくてな。タローこれ頼むわ。」

「師匠がそれだけしか分からなかったのに、俺が解けるとでも思ってるんですか？」

「分からなかったんじゃないよ。言わなかったんだ。」

………そういう事か。

「りょーかいしました。」

こんなことがあるのか……。

かなり時間がかかったが、解読はできた。

その内容に俺は啞然とした。

修行しながら待っていた2人の元へ向かう。

「カイト、ジンさん……。」

「お！終わったか。」

「お疲れさん。」

大きく息を吸い込み、2人を見つめる。

「ジンさん、師匠がコレを見たのは何時ですか。」

いつになく真剣な俺に、ジンさんの顔が真顔になる。

「ゴンがちょうど産まれた時くらいだから10年くらいだな。」

「そうですか……。」

「どうしたんだ？タロー。」

「解読は終わりましたが、パスワードも分かりました。でも内容は言いたくありません。」

随分悩んだ。話してしまおうかと。

でも中に入ってメッセージを見てから決めたい。

「中に入って気持ちが悪ければ言えるかもしれませんが。でも今は……」

2人は黙って考え込んでいる。

「後で教えてくれるかもしれないんだな。タロー。」

「うん。」

「俺はそれでいい。ジンはどうですか？」

「中には俺たちも一緒に行っていいのか？」

「一緒に入りたいです……一緒にいて欲しい。」

ジンスさんがポンとひざを打つ。

「行くか！」

パスワードを布に手を当てて叫ぶ。布は効力を一時失った。

書かれていた内容によると、パスワードを言ってから1日だけ効力が消えるらしい。

中は狭く、遺跡というより洞窟と言った方がいい印象を受けた。

腕が入るくらいの小さな穴が開いており、手前に古びた手紙が置かれていた。

「ジンスさん……。」

「好きに読め。」

手紙を手に取り開いてみる。

そつと文章に手を滑らせる。

書いたのは名もない男。

男は依頼でこの山にしかない鉱物を採りに来たハンターだった。そこで男は1人の女を拾う。

女は日本から来たと話した。ジャポンだろうと言う男に日本だ、ジャポンじゃないと言い張った。

男ははなかなか豪快な人物だったようだ。日本から来たと話す女を信じて受け入れ、生きる為の知識を教え込んだ。

やがて2人は結婚、子供にも恵まれた。

男は幸せだった。だが、女は老いて死ぬまで帰りたいと繰り返した。

男は返す方法を見つけたが、何も言わなかった。

女が死んだ時、男は後悔した。女を帰してやればよかったと……あんなに帰りたいがっていたのに。

そして男はこの洞窟を作った。女と出会ったこの山に。帰りたいと願う別の誰かのために。

布には、この地上のどこにもない日本に帰りたいかと書いてあった。質問は日本の首都はどこだと。

首都が変わったらどうするつもりだったのだろうか。
クスリと笑いがこぼれる。

帰りたいがってない俺がこの洞窟に来るなんて……ひどい皮肉だ。
涙がボロボロ流れ、俺の顔を汚していた。

「カイト、ジンさん。話したい事があるんです。かぼちゃらんとん置いていくので、師匠の所へ行きませんか？」

3人の前で全て話した。泣きながらつつかえつつかえ話した。
3人は黙って聞いてくれた。
やがて話し終える。

「帰りたいのか。」

カイトが聞いた。

「帰りたくない。」

俺は答えた。

カイトは俺を殴り飛ばした。

ジンさんは笑っていた。

師匠は昔の様に頭をなでてくれた。

第24話

暴露大会の最後。俺がハンター世界が漫画になっていた事を話し、内容に移ろうとする時口がジンさんの大きな手で塞がれた。ジンさんは俺の目を見ながら言った。

「お前が一番大事だと考える事だけを話せ。」

「でかいキメラアントにカイトが殺されるんです。」

「やっぱりそーか。」

「は？」

やっぱりって何？！

勘が鋭いかさそういうレベル超えてないか！
混乱する俺に師匠が声をかける。

「タロー…僕でも予想できましたよ。」

「俺はリーシャンさんが死ぬのかと。」

なんですと！

俺、何も話してないよな。うん。

何か口が滑った事があったのか……。

「タローは僕との生活に満足していましたよね？」

師匠が俺を優しく諭す。驚いて師匠を見る。

たしかにそうだ。俺が帰りたかったのは最初の数ヶ月だけ。

それだけ師匠の傍は居心地がよくて暖かった。離れたくなんてな

かった。

「そんなタローがハンターになりたいと僕に修行を頼んだ事自体おかしいと思うのに、カイト君と一緒に旅をするなんて。魂をかけてまで強くなるうとするなんて…ね。それほどまでに何か重要な事が将来あると思い込んでいる。または視えている。そう思っていましたよ。」

「俺についてくると言った時、何やらかす気なんだって思いましたよ。」

ジンさんもうなずく。

俺は啞然として3人を見つめる。

ジンさんが指を折り数えながら話す。

「タローが自分で動いてまでやりたいコトってなんだろうなって思ってたな。ココは安全だし、タロー以外のコトだと俺たちだ。タローは俺たちが好きなコトやって大怪我するくらいじゃ動かねーだろ？じゃー誰かが死ぬんだなってな。んでリーシヤンは妖怪だし、俺はそこそこつえーし。で…カイトだ！」

消去法ってやつだなとニカツと笑う。

言葉がでない。そんなバレバレだったんですか。

ていうか、フリークスに妖怪って呼ばれる師匠って……。

俺が師匠を見ているとニツコリと笑って話し出した。

「よく考えてみなさい。タローは僕の傍から離れませんでした。それを変えたのがカイト君なんですよ。外へ出かけたいと。」

カイトに会わないかって言われたらホイホイ出かけるだろう。普通。そんな事すら考えられないくらいダメダメだったのか。

しかもその時団長に会って、さらに引き籠ってたのはどうなんだ。

「まあ、タローは分かりやすいってことだ！」

「はあ。」

「タロー。一つだけ聞きたい。」

真剣な顔でジンさんが問う。

俺は居住まいを正し、身構える。

「漫画の主人公ってカイトか？」

その発想はなかったわ……………。

俺がカイトは重要な所だけ少し出て殺されたと簡単に話すとカイトは目に見えて凹んだ。

カイトが立ち直り、師匠が紅茶を入れるてくれる。

いきなりジンさんが立ち上がった。

「リーシャンでかけるぞ。」

いつもと様子が違い、耳元でジンさんが何かささやくと師匠は素直に出かけていった。

部屋には俺とカイトだけが残された。

「まー、あれだ。なんて言うか。」

カイトが頭をかきながら言いよどむ、顔が赤い。

ジンさんの弟子らしい、よく似たセリフ。

「俺は今より強くなるからな。絶対。だからタローは無茶するな、いいな。」

「……………うん。」

2人で向かい合い、ジッと黙る。

なんだ、この状況は……お見合いかつ。

俺の顔まで赤くなってる。

「ところでタロー。」

「ん？」

「魂をかけたってなんだ？」

……………逃げていいですか。

キリキリ白状しろとカイトに迫られ、洗いざらいしゃべる事になった。

悪魔の事は自分のピエロの事もあって、具現化した変わった能力としか思ってたようだった。

カイトの気狂いピエロはある意味ランタンより個性的だ。

いつも通り正座をさせられ、説教を受ける。

「バカだろ、お前。なんでそんな事したんだ！」

「強くなりたかったし、ランタン可愛かったし、もう決まった事だつて言われたし……。」

「決まってる。あっさり諦めやがって何考えてんだ。」

「ゲームの能力ってカツコイイなとちよっと思っただし、内容も好きだったから抵抗なかったというか……。」

「抵抗しろ!!」

オーラを込めた鉄拳をくらい、ダイニングの壁に激突した。

ランタンを呼べと言われ、俺を蚊帳の外にして話し出す。

カイトの怒りのオーラにランタンがビクビク震えている。

そのままランタンは契約内容というか、俺の能力の誓約すべらべらとしゃべった。

今のカイトに迫られたらしょうがないね。うん。

尋問が終わり、カイトが俺の前に座り直す。

「だいたいわかった。この事は俺がなんとかしてやる。」

さすがに不可能だとは思うけど、カイトがそう言ってくれる事がとてつもなく嬉しい。

「能力の誓約になってるし無理でしょ、常識的に考えて。」

「そんな事しらん！なんとかすると言っただらする。」

「俺は諦めてるから別にいいってば！！」

「諦めんなっていつてんだろ！！」

カイトに正面から蹴り飛ばされ、俺の頭に血が上る。

いい加減……しつこい。

「うっさい。俺が決めた事なんだから口出しすんな、バカ」

！！

右ストレートが綺麗に決まった。カイトはすぐに立ち上がり全身から強大なオーラを溢れさせる。俺も負けてなるものかと全力でオーラを練り出した。

「お前のがバカだ！口出しするに決まってるんだろ！！」

「するなっつーの！だいたいいつもいつも説教なげーっつーの。オヤジかお前は。」

「

っだと?!」

キレた俺とカイトのリアルファイトのゴングが鳴る。

力の限りを尽くし、暴れに暴れ大喧嘩を繰り広げた。

周りを気にする余裕などもちろんなかったので、やがて帰ってきた師匠にカイトと2人で盛大なお説教をくらった。

ジンさんはニヤニヤと説教を受ける俺たちを楽しそうに眺めていた。

第25話

「それで、カイト君を殺す相手はどの程度の実力なんです？」

お説教が終わり、部屋をカイトと片付けた次の日。作戦会議だと叫ぶジンさんに続けて、師匠がそう聞いてきた。

日記を見ながらネフェルピトーの覚えていた情報を話す。といっても円が2kmあった事、特質系で治療ができて死体を改造できる？事しか書いていない。GIまでなら結構覚えているんだけど……休載が多く、蟻編をあまり繰り返し読んでいなかったのだ。

ゴンのGIEクリア後NGI。カイトが殺されてゴンとキルアがヤンキーとケンカした。ノブがハゲになった。コミギとメルエムが仲良くなった。モラウがパイプ捨てられてネテロ会長が爆死した。おおまかに書いているのはこんな事くらい。後は印象深い事を断片的にしか過去の俺も覚えていなかった。

「長時間の円2kmか……。」「

そうつぶやくジンさんに、俺じゃ届かないのかと絶望に暮れる

「円基準で書かれてるんですか。一番分りにくい表現方法ですね。」「

「「え？」「」

俺とカイトが驚き、師匠を見る

分りにくいって……2kmも広げられるんだからオーラ量がめちゃ多いつて事じゃないの？！

「そのピトーは念を覚えて浅い上に自己流、その状態で2kmなら多量のオーラで無理やり広げていると考えられます。しかし、短期間で発を作り使用出来る、という事は念のコントロールが上級なの

かもしれません。そうすると2kmの円と言ってもどの程度のオーラを込めているのか……。」

「つまり実力がさっぱりわからん！ということだ。」

「話を戻しますね。ピトーは特質系、硬や堅なら威力や持続時間でなんとなく分かるんです。」

俺達が首を傾げているとさらに続ける。

「特質系だと覚えたての頃は硬か堅がダメなんだよ。伸ばせばオーラがいらねー円じゃ目安にならねーの。」

苦手分野が一番実力を測りやすいと話す。

分ったような分らんような。両方って選択肢はないんですか。

カイトは完全についていけない。虚ろな目で宙を見つめている。

「カイトの具現化系だと、流か円のどつちかで最初は躓く。そんなふーに覚えたての頃は得手不得手が系統別にあったりすんだよ。」

「教育者がいないなら特にそうなります。それに円2kmくらいタローでもできるようになりますよ。時間はかかるとは思いますが。」

信じられない。俺でもって何、2kmくらいって何。そこまでのけるものなの？

師匠がゆっくりと説明してくれる。

「円というのはオーラを伸ばして広げて、中にある物体やオーラを感知する能力です。集中的に成長させれば、陰すらかけないですむほど薄く伸ばせるんですよ。」

大気中にある微細なオーラと一体化させるほど薄くすると陰はいらない。とか意味の分からない事を師匠は続けて話す。

異次元の言葉を話す師匠たち。理解しやすいようにと砕いて話し

てくれるのは分かる。それは分かる。が中身が分からない。

「そこまで伸ばせるのは妖怪のリーションしかいねーけどな。」

「師匠つてそんなに凄かったんですか……。」

古代文字分かるだけで俺がつれてくわけねーだとジンさんは笑った。

長生きしても変わらない容姿が妖怪なのかと思ってました。

ノブとモラウも出ていて、モラウがピトーと同じ護衛軍の足止めをしていたと話す。

「モラウもノブも基本はサポート系だ。戦闘系じゃない。多少は強いがな。モラウはパイプがなければなんもできねーし、ノブなら今のカイトでもタイマンやれんだろ。カイトは戦闘特化だ。モラウに足止めされるレベルの奴に殺されるなんて育て方俺はしてねー。勝てなくても逃げれるはずだ。」

ゴンとキルアがいたから……。

「ノブの実力は見た事ありませんが、モラウは見ました。応用の幅がかなり広く優秀な能力を持っています。僕に見せてない切り札もあるでしょう。実力は確かですが愛用品の縛りがありますので後方から戦闘系をサポートする方が向いていますね。能力はやっぱりですがモラウからパイプを奪えず足止めされていたと考えると……。」

カイトが殺された事実を信じてくれてはいるが、どうしてそうだったか納得は出来ていないみたいだ。

「とりあえずまた修行させましようか。タロー、念のコントロールを集中的にやりましよう。」

「カイトもな。お前はとりあえず強くなる目標の相手を決める。んでそいつを1人でぶん殴れるよーになれ。」

師匠とジンさんという豪華メンツで修行がまた再開された。

耳のピアスは慣れてきたなど、また1つ増やされ開始早々床とキスするはめに。

最初は個別修行。

師匠はジンさんに影響されてか、ニコニコと死ぬ寸前までしごかれた。

ぐうの音もでないくらいオーラを搾り取られた後、円を薄く伸ばす修行が始まる。

「今あるオーラで伸ばせるだけ伸ばしなさい。」

そう言われて伸ばせたのはたった10m。師匠の鞭が飛ぶ、

「まだまだ厚い！限界があると思いつままないように。もう一度です。」

「……はい。」

だんだん使えるオーラは少なくなっていく。それでも師匠は前回より伸ばせと要求した。

修行が終わればいつもの優しい師匠に変わる。師匠を元に戻したい。どこかずれた目標を掲げ修行の日々を送った。

カイトはというと目標人物をジンさんに伝えたのだろう。

「そいつ見に行くぞ！」

とジンさんにどこかへ連れて行かれた。怖い想像がもたげそうなので、気にしない事にした。

俺が知ってるカイトが1人でかなわなかった人物はあの人だけなのだ。

やがて帰ってくると、全身骨折出血多量という所まで戦闘訓練を施された。カードで回復させてまた続きという地獄のループを……。本当に根性という文字が似合う修行風景だ。

個別修行がマシになってくると合同修行。

内容は山登りと水泳。

文字だけみると、とっても可愛い内容。うん。文字だけ見るとね。キリマンジャロクラスの山を朝から走って登山。山頂までに行つて麓まで帰ってくる修行だ。

昼までに帰って来いといわれたが。

無理！と2人で叫ぶと、師匠とジンさんが笑いながら師匠お手製武器を装備して追いかけてきた。泣きながら逃げた。捕まったら死ぬ。

水泳はいつぞやのサメの出る湖で。3時間ほど端から端まで泳いで往復、只それだけ。師匠がサメを興奮させる薬を撒き、ジンさんが俺達の身体に好物の餌をくりつけなければ……。

合同修行になれてくると今度は個別、合同と合わせて行われた。

「カイト……俺達なんで死なないんだろっ？」

「聞くな。」

ジンさんだけとの修行とは違い、毎日お風呂に入れておいしい食事が食べられるのでちょっとはマシである。

原作開始時期が近づいてきた頃。

ようやく修行終了の宣言を出された。

「つらかった……本気でつらかった……。カイトとマジで抱き合っ
て喜んだ。」

耳のピアスは6つになっていた。

「はずしてみる。」

そう言われ外してみると、身体が凄く軽い。慣れてくると増やさ
れるので、この2年間強くなった気は全くしていなかった。

ために軽く円を広げてみると、師匠との家であるマンションを
軽く困めた。なにこれ怖い。

この2年間俺はピアスのおかげで、円は50mが最高だったのだ。
いつもと違う感覚に戸惑う。

念の修行は円特化。円以外は鍛えてないから他の応用はそんなに
伸びはない。

本を開いて確かめてみると、レベルは36。最初の21に比べると
随分あがった。

カイトはと言うとピアスを取った瞬間、ジンさんにピエロを出し
て切りかかっていた。

「元気だなー。」

返り討ちにされたカイトをイヌガミで回復する。

イヌガミは一度で重症でなければ直せるまでに成長した。最初は
紙で切った小さな傷しか直せなかった。

ランタンは取り替えられる距離が200mまで伸びた。最初はた
った5mだった。

ピクシーは詳細と呼べる地図を作れるようになった。最初はぐち
やぐちやな粘土細工だった。

可愛くも愛しい俺の悪魔たち。もう別れる事などできない。

感慨深く過去を振り返っていると、ジンさんと師匠が何かを差し出す。

「修行終了のお祝いです。」

「何の効果もついてねーけどな！」

小さなピアス。

俺のは銀の土台に青い石、カイトには金の土台に黒い石。

「んじゃカイトはちゃんとぶん殴って来いよ！タロー、戦闘中は逃げ回れ！困った事があつたら俺のトコ来い。話くらいは聞いてやる。」

手のひらサイズのかぼちゃらんたんを掲げながら言う

「迷子にならないよう気をつけて行ってらっしゃい。」

「はい。いつてきます。」

「行くぞ、タロー。」

「いつてきますって言いなよ。」

「うるさい。」

空が澄み渡り、空気がおいしい。

「ねえ、カイト。俺行きたいトコあつてさ。」

漫画の内容気にすんな。とジンさんに言われた。

タローは漫画を絶対的な預言書だと思いついて入っている。と師匠に言われた。

たしかにそうだった。

せっかくだし、蟻退治までカイトと自由にやるとしますか。

どこへ向かってもカイトと一緒に生きているなら楽しいに違いない。

第26話

「又メーレ湿原?!」

来年の原作ハンター試験の時に又メーレ湿原へゴンを見学に行きたいと話すと、カイトはバカにしたように笑った。

「そんなダメなの?」

「あんな霧だらけの場所で見学とか無理に決まってるんだろ。見つからない様になってコトは遠くからだろ? 絶対無理」

監視員も周りに配置されてるんだぞと追撃を受ける。

最初は地下だし、又メーレ湿原の次は塔に島。そして最終は屋内。発見されないよう見学するには又メーレ湿原しかないと考えたのだ。いい考えだと思ったのに鼻で笑われた……。へこむ。

「リーシャンさんに頼んで、監督官か監視員で捻じ込んでもらうのが現実的だな。監視員は面倒だから監督官で話を通してもらってくれ」

んー……もう師匠に頼むのか。独り立ちを10年かけてしたところなのに。

心理的に抵抗がある

「どうしても無理?」

「諦める」

スッパリ言われてしまった。

ため息をつき、携帯へ手を伸ばした。

師匠に電話をかけ、お願いするとあっさり通ってしまった。これでいいのかハンター試験。

自由奔放なハンター達は監督官や監視員をやりたがる者など皆無に近く、無理やり押し付けているのが現状らしい。

どうして監督官なんかやりたいの? と本気で聞かれました。試験官は好き勝手できるのでそこそこ希望者はいるようだ。

師匠に電話をかけてたった5分。すぐにハンター協会から連絡が入った。

「そちらへ向かえばいいんですか？」

『そうじゃ、締め切りと開始はまもなくじゃし、2人共こっち来て準備をよろしくのう』

「俺達は何をやるんですか？」

『まだ決めとらん』

携帯を閉じると、カイトに電話内容を説明する。

「もしかしたら監視員かもな。1回やったコトあるが5日間不眠不休だった」

「マジっすか……」

「監視員なら恨む」

そんな……たしかに俺のわがままだけど。

肩を落としながらハンター協会へ向かう。

監視員をやらされると、後でまたカイトがつるさい。どうか監視員だけはやめて下さい。そう天へ祈った。

カイトは一度根に持つと長期間ブチブチ文句をたれるのだ。

到着すると、すぐに純ジャポン風に調えられたネテロ会長室に呼ばれた。

俺の祈りはとんでもない方向に通じた。

「2次試験官!？」

「そうじゃ」

ちよっおまつ。まで、それメンチとブパラだろっ！豚の丸焼き作って寿司で最後はクモワシの卵だろ！

原作見学のつもりが思いっきり干渉じゃねーか！

「ゴン君をこっそり見たいだけなので、試験官はやりたくないんですが。」

「お目当てはゴンとかいう少年か。ダメじゃ。試験官が嫌なら話はなしじゃ。そうじゃのう嫌だと言ったら、リーシャンにちよー大変な仕事を侘びにやらせるかのう」

ほっほっほと楽しげに笑うネテロ会長。

この狸じじい……殴りてえ。

人の心理を上手くつくネテロ会長への反論が見つからない。

ぐるぐる考える俺の肩にカイトの手がポンと乗せられた。

「諦めろ……恨むのはなしにしてやる」

「試験内容の提出は1日待ってやるからの」

たった1日で試験内容を決めなければならない。用意された部屋で俺は頭を抱えた。

色んな内容が浮かんでは消えていく。

グルメハンターでもないのに原作と同じ内容などありえない。豚の丸焼きなど1匹すら食える自信はない。

んー……どうするべきか。

「バトルロワイアルはどうだ？ 簡単で単純で数が減る。」

「危険な奴がいるんだ。その内容だと落ちた奴は確実に死体になるよ。」

もつと先の試験ならわかるが、たかが2次試験程度で落ちて大怪我ならともかく死亡確定はかわいそうだ。特にヒソカやイルミ相手だと実力差がありすぎて勝負にもならないだろう。死体の山が量産されるのが目に浮かぶ。

「なにか動物を取ってきてもらうとか」

「動物か……たかが試験で殺されるのはダメだ。鬼ごっこはどうだ？ 半分に分けて追いかっこだ。これなら半数は減る」

「落とす事ばっかだね。動物が殺されるのは嫌か」

自然大好き動物大好きカイト君ならその意見は妥当か。生きてつれて来いでも殺してしまう受験生は多いだろう。

カイトが嫌がる試験内容などともない。

鬼ごっこもバトルロワイアルと同じ事になりそうなんだよなー。

2人で顔を突き合わせ、唸りながら期限ギリギリに試験内容を提出した。

頼むよ、原作キャラ達よ。受かって下さい。

特にレオリオ、受かったらいい教師陣を探して紹介するよ……。

レオリオのような人が一番ハンターになってほしい。こちらに来る前はなんとも思ってたが、ああいう男は、多くいるハンターの中でもレア中のレアなのだ。ぜひ支援したい。

ハンター試験は弟子探しなど将来有望な人間を見つける為に来ているハンターも多い。復讐が目的とか頭の悪いのもいるが。

ハンターになれなくても、教育を施せばいけると試験中にハンターに感じてもらえればいい。弟子としてスカウトされたり、様々な教育生活支援を受ける事ができる。

色んな意味で人材探しの場でもあるのだ。強さが全てではない。

試験前日になると他の試験官や監督官、監視員と顔合わせをした。

2次試験の俺とカイト以外は原作通り。お互い自己紹介をし、試験内容を発表した。

メンチさんは監督官として来ていたが、ブパラさんは来ていないようだ。

俺とサトツさんは意気投合してしまい、すっかり仲良くなった。遺跡ハンターであるサトツさんと碑文や出土品話で大盛り上がりした。なんと向こうのレコードみたいな物が発掘品としてあるらしい。ぜひ見せてもらおうと連絡先を交換した。楽しみである。

長時間話し込み、ほくほく顔で部屋に戻るとカイトがむくれている。

試験当日。

たぶん原作通り、400名と少しの人数で始まった。

俺とカイトは湿原のど真ん中にソファアールとテーブルを置いて、優雅にティータイム。

1次試験は長い。まだまだ来ないだろう。予備試験合格速報に目を通す。

名前を見る限り原作通りなのか、原作キャラたちはちゃんというようだ。

「説明はタローがやってくれよ。ゴンの見学はタローの希望なんだからな」

「うん、分かった。44番と301番がヤバイ奴だからなんかあったらヨロシク」

「まかせとけ。顔や能力は知ってるか？」

「44番ヒソカは変化系、ドギツイ格好だからすぐ分かるよ。凶悪なバトルジャンキーで、オーラをゴムの様に変化させるトリッキーな純粹戦闘タイプ。狙われないように気をつけてね」

一息ついて紅茶を飲み干し、説明を再開する。

「301番ギタラクルは操作系、鋏を相手に投げて攻撃や操作をする。顔も能力で変えているよ。本名はイルミ・ゾルディック」

「ゾルディックなら、こっちから仕掛けなければ問題ないな。念の使用をチエックするだけで大丈夫だろ。タロー、最初が肝心だ。舐められないようにしろ」

「だねえ……上手くできるかな」

できるさと背中を叩かれる。

イルミは受かりたいから俺のルールを守るだろうけど、ヒソカはどうだろうか。あいつ色々面倒だから落としてもいいかもな。

サトツさんが2次試験会場へ到着し、続々と受験生集まる。

テーブルセットの目の前に【本日正午2次試験開始】の立て札を

置いてみた。気分的になんとなく。どうでもいいことは覚えているのに、大事な事があやふやなのは悲しい。

ポーカフェイスを保ち、受験生を観察する。

キルアがキョロキョロとあたりを見回している。なんだかんだ言ってもゴンが心配なんだな。

写メをとりたいが、ゾルディックが怖いのでやめておく。

ギタラクルは、あの顔はないわ。漫画よりずっとインパクトがある。変装するにしてももっとやり方があると思う。

「うぜえ……」

カイトの機嫌が現在急降下中。理由は例のピエロ。

会場に来てからずっとカイトに殺気を送り続けている。お前何しにきてんのさ。

イライラしたカイトをなだめる為に緑茶を入れる。

「コレ飲んで機嫌直してよ」

「44番マジ殺してえ」

「試験終わってからならいいよ」

俺は何事もカイト優先。原作よりもなによりも。

ゴンがこちらに気づく。でっかい瞳を限界まで広げて驚いている。俺が唇に指をあてると、頷いた。やっぱりゴンは可愛いな。

正午のベルが鳴る。

俺達は立ち上がり、前へ出る。

「只今より2次試験を開始します。2次試験を担当します、タロー・タナカとカイトです。同じ内容は2度と言いませんので注意して聞いて下さい。」

俺はポケットから写真を取り出し、立て札に張る。

「ユウラクチヨウという蝶です。これを生きたまま完全な状態で俺の所へ持ってきて下さい。捕獲方法は問いません。このヌメーレ湿原のいたる所に虫かごを隠してあります。虫かごを使うもよし、別

の方法で持ってくるもよし。皆さんの好きにして下さい」

ただしと俺は指をあげる。

「他の受験生から奪ってでもいいですが、人間や動物の殺害は禁止します。殺害した者は即失格です。ちゃんと見ていますのでバレないなどと思わないように。期限は12時間、試験を行う範囲は周囲半径2kmです。試験範囲から出ても失格とします。もちろんこの蝶に関する質問は受け付けません」

念字で【円で監視する】と記す。

ヒソカが面白そうに笑う。カンベンして下さい。

「それでは2次試験開始です！」

受験生達が一気に走り出す。

少し難しいけどがんばれ、きつと突破できる。

第27話

いやー緊張した。

説明してる間、心臓バクバクだった。特にヒソカに見つめられた時は、本気で逃げ出しそうだった。カイトが隣にいてくれたから踏み止まれた。

「どう？ 受験生を見た感想は」

「そうだな。ゴンは早めに捕まえられるだろうが、友達と一緒にだったからな。ギリギリになるかもしれん」

受験生の事を聞いたんであって、ゴンの事を聞いたんじゃないんだけどな。

なんだかんだ言っても、カイトの視線はゴンの方へ向いていた。気になるんだろう。

顔から少しだけ幼さが抜け、お子様から少年へと変化していた。漂う雰囲気もジンさんそっくり。そう言うとジンさんは怒るだろうけど。

本当に大きくなった。たまにジンさんから聞かされた様子だと森で遊び、動物を友に毎日元気に暮らしていたようだ。

ゴンの通信教育の成績を見て師匠は困った顔をしていたが、ジンさんは笑い飛ばした。俺はちょっと心配になった。アヒルどころか、1ばかりが並ぶ成績表に。

ゴンが主人公だと言う事は誰にも言っていない。ジンさんの逃げっぷりが良くなるかもしれないし。

紅茶を口を含み、ソファの横に設置した大きな檻を見る。

特別製の檻だ。たった1人の受験者の為に用意した。使う事がなければいい。そう思うがカイトは彼を落とそうとするだろう。

さてこの試験、ずばり忍耐力のテストだ。結果論だけどね。

虫捕獲テストにすると決めた時、カイトが作ったリストの中から

俺が選んだ対象は蝶。だってユウラクチョウだよ。名前で選んだ、後悔はしていない。

七色に輝く美しい繊細な羽を持ち、群れで行動する。ヌメーレ湿原ではめずらしく餌は普通の花の蜜や樹液だ。繁殖力も高く、受験生に乱獲されても気分的には不快だが問題はない。

そう繊細な羽を持っている。乱暴どころか普通に捕まえただけで羽は傷ついてしまう。捕獲方法は虫カゴを探し出し、群れの中で静かにジツと待つて虫カゴに入るのを待つ事。

カイトと俺の人間と動物にあまり死んで欲しくない、という気持ちで2次試験難易度を上げた。

他の受験生が暴れたりしたら失敗してしまう。殺したくなるほどイライラするだろう。だけど殺したら失格だ。怪我をさせただけでも血の臭いで他のヌメーレ湿原の動物達が集まり、餌を求めて騒ぎ出したら同じ事。

ネテロ会長に意地悪な試験内容じゃと言わせたほど。

「タローは最初に誰が来ると思ってんだ？」

「んー、女の子かな」

試験開始から2時間経ち、予想通りポンスが会場へ戻ってきた。

手のひらに蜜を垂らして蝶達を集め、そのまま歩いて連れてきた。カイトが隣で唸っている。素晴らしい、完璧だ。

「246番、合格だ。蝶の扱いをよく心得ている。いいハンターになっしてくれ」

「ありがとうございます」

「そこにある飛行船へ向かうように。後これは部屋のカードキーだ、与えられるのは女性受験者のみ。何か言われたら、試験官に指示されたと言っしてくれ」

「わかりました」

最上級の褒め言葉を貰ったポンズは、飛行船へ歩いていった。おそらくカイトのポンズへの評価判定はトップ、ハンター試験終了まで揺らぐ事はないだろう。

人を見る目があるカイトに、合否判定の全てを任せた。俺だと原組みを甘く判定してしまうかもしれないし、何よりこの蝶に詳しい。傷がついていても、カイトが合格と言えば合格だ。試験官がルールである。

カイトの事だ、ゴンの判定は厳しくなるに違いない。でもゴンならどうにかするだろう。

2番目は予想外、俺もカイトも本当に驚いた。
トンパだった。

35回連続受験は伊達じゃなかった。褒められたものでもないけど。

虫カゴを使い、蝶を自分で捕まえていた。傷も一切ない。

「16番、合格だ。飛行船に向かうといい」

「あんた達が試験官で来たか。俺が見た時より強くなったみたいだな」

「意外だったの？」

「そんなことはないさ、試験合格の翌年試験官で来たヤツもいる。

俺は新人つぶしが趣味だが、合格したヤツらがこうやって試験官で出てくるのも楽しみなんだ」

「そうなんだ……」

「試験内容で、どんなハンターになったか良くわかる。いい試験だった、がんばれよ」

「何このトンパかつこよす。」

漫画では、ひたすら主人公達の邪魔をする嫌な男として描かれていた。俺もぶつちやけ嫌いだったし軽く見ていた。

真面目にハンターを目指せば、とっくの昔に受かっていただろう。趣味とはいえもつたいない。

トンパの嫌がらせを見破れるかどうかも、試験の内に入っていないだ。

漫画の内容なんて気にするな。

そうジンさんに言われた。

完璧に気にしないでいる事などできない。でもなるべく考えないようにしよう。時間はかかると思うけど。

原作見学はまたやっちゃいそうだし。

トンパが残したいい雰囲気浸っていると、広げた円に嫌なモノを感じた。

ヒソカだ。

僅かながらオーラの揺らぎを感じた。トランプに周でもかけたのだろう。

俺は手元のメモを取り、完成途中の正の文字に横棒を1本足す。

これで3回目。文字が完成すれば失格だ。

足される横棒にカイトが嫌な顔をした。

「またアイツか。どうしようもないな」

「殺してはいないけどその直前まではいつてるね。殺し慣れてるだけあって、殺さずにすむやり方も上手いよ……」

ヒソカの攻撃を受けた受験者は良くて入院生活、悪くて再起不能だろう。

少しは自重しているらしく、被害を受けた人数は少ない。

ヒソカが持ってきた虫カゴは血だらけ、蝶も傷ついていた。カイトを舐めてんのか、コラ。

「44番、これではダメだ。それから警告する、3回目だ。合計5回になったら問答無用で不合格だ」

「じゃあ……後1回は使えるんだ。ありがとう」

俺とカイトの全身を舐めるように見る。ククッと不気味な声で笑

い、蝶を採りに戻っていった。

気持ちが悪いにもほどがある。

「鳥肌が立った」

「俺もだ。しかも、蝶をこんな風に痛めつけやがって」

怒りポイントはそこですか。

傷ついた蝶は、カイトが作った飼育ケースへ入れる。この中でしばらく世話をして、回復を待ってから湿原へ戻すのだ。

自然にはとことん優しい男である。

6時間を過ぎると捕獲方法が漏れたのか、次々と受験者が蝶を持ってきた。

受験者達に、厳しいカイトの判断が下されていく。イルミを1回不可判定にした時、もの凄い殺気をカイトへ向けていた。鋏を刺して持ってきたやダメだろ、試験内容的に考えて。

8時間経過、アクシデントが起こった。

ヒソカが殺人を犯した。どこかのバカが、ヒソカを攻撃した結果らしい。出血多量による死亡。気分が悪いけど、ヒソカが悪いわけではない。

しかし、ルールはルールだ。不合格決定を言い渡す。

「44番、不合格だ。文句はないな」

「んー、納得いかないなあ」

凶悪なオーラを、俺達に向けながら不満を表すヒソカ。内心恐怖しながらも、顔色はなんとか変えず俺が口を開く。

「人と動物を殺害しないように。これは最初に俺たちが、言い渡したルールでしたよね。どんな理由であれ、ルールを遵守できなかった。今回は諦めて下さい」

「遊んでくれるなら納得してもいいよ」

そう言い放つと、カイトへ飛びかかってきた。

ヒソカもまだ本気ではないのだろう。カイトもヒソカをあしらう

ように戦っている。

けれどこの状態では試験が続行できない。

結局使う事になったか……。ため息が出る。

俺は用意していた檻へ入り、鍵を閉めてもらってランタンを呼び出す。

位置をヒソカと入れ替え閉じこめる。

「試験が終わるまで、そこで反省して下さい」

ニタアと笑うヒソカ。

「キミの能力かい？ 面白いね。でも納得はまだしてないよ」
不機嫌なカイトが黙ってヒソカを睨む。

静寂を打ち破り、ジリジリと電話のベルが鳴った。

カイトが顎で電話を示す、嫌な事は俺ですか。試験見学希望を出したのは俺だけだよ。

「はい」

電話を取るとネテロ会長だった。

不可抗力だと判定したから、ヒソカを出せと。

ヒソカへの復讐を誓ったバカハンターが激しい抗議を行ったらしい。説得が面倒なので出せと。

死ねばいいのに。死ぬだろうけど。

「カイト、予想通りバカが騒いだみたい」

「チツ、試験内容にまで口出しすんのかあのバカ」

「44番よかったね。君の行いが君を救ったようだ。お礼にせいせい相手をしてあげて」

「クク……そうする」

檻へ向かい、ヒソカを開放する。

疲れた、能力見られ損かよ。

バカが殺される様子を思い浮かべ、少し溜飲を下げた。

10時間経過してようやくゴン達が蝶を持ってきた。クラピカ、レオリオ、キルアの順に合格が決定した。最後はゴン。

蝶を観察するカイト。カイトをまっすぐ見つめるゴン。やがて合否が伝えられる。

「どこがダメなのかちゃんと分かってるか？」

「うん」

「じゃあ、もう1回行ってこい」

クラピカが静止をかける。

「ゴンの蝶は私達3人の蝶より綺麗に捕まえてきている。その判定はおかしい」

「そーだ！ 納得いかねー」

「理由ぐらい説明しろよなー」

カイトが3人を見つめる。嬉しそうだ。

ゴンにできた友人達。3人を見つめる瞳が厳しくも優しい。

「俺たちが試験官だ。俺たちがルールだ。気に入らないなら帰れ」
思わず笑ってしまいそうになった。足をつねってなんとか笑いを押さえる。

「ゴン、お前がコレで合格にしてほしいなら、してやってもいい。どうする？」

「いらない！ もう1回捕まえてくる」

「よし、本人が納得してる。文句を垂れるな」

カイトから、本当の合格をもぎ取るうとゴンが意地を見せる。

3人はゴンにバカだとか考え直せだとか色々言っただけで騒いでいるが、ジンさんの息子だ。折れるわけがない。友を置き去りに走り出していく。

「嬉しそうだね、カイト」

「ああ」

その後もう1度ダメ出しを受け、試験開始から11時間45分。

「傷が全くついてないな。合格だ。よくがんばった」

「やったあ!!」

「ゴン君、おめでとう」

無事合格を言い渡され、真剣だった顔がパツと輝いた。

太陽みたいな笑顔。人の心を吸引するその魂。

ゴンの全てが眩しくて目が潰れそうだった。

「オレ、カイトとタローにずっと会いたかった」

「そうか」

「ゴン君がハンターになれば、俺たちから会いに行くよ」

「ホント?!」

「うん。ね、カイト」

「そうだな」

絶対合格して2人と会う! んで親父を見つけて会う!

そう言って飛行船へ入っていった。

「ジンさん捕まっちゃうかな?」

「捕まるだろうな」

試験終了のベルが鳴った。2次試験合格者は51名。

試験官は、ハンター試験終了まで拘束される。

「次はなんとかって塔か」

「トリックタワーだね」

監視ビデオでゴンの様子を見学しようと話しながら、俺たちも飛行船へ向かって歩いて行った。

第28話 後半は29話になります

「緑茶が飲みたい」

「りょーかい」

カイトは緑茶がお気に入りだけど、自分じゃ入れない。物凄く下手なんだ。絶対に苦くなる。

ポットを暖めているとサトツさんが入ってきた。

「少し、話ませんか？」

「いいですよ」

「受験生の事なんですが……」

なるほど。メンチさんは監督官だから、この部屋へ入れない。

メンチさん、ネテロ会長にどんな弱み握られているのか。シングルが監督官なんて。

しばらく話した後、問いかけてきた。

「今年は、ルーキーがいい。誰が受験者の中で残ると思いますか？」

「残るか、ですか」

「私は99番が残ると思うんですよ。彼はいい」

「ハンターとしてはどうか」

「貴方たちは誰が残ると思うんですか」

俺は403番レオリオをあげ、カイトは246番ポンスをあげた。

「403番は、そう見えませんでした……」

まあ、あの裸ネクタイを見てればそう思うか。でも、彼ほど熱い情熱を持つ男はいない。

ハンターと言う存在をしっかりとした目的で捕らえている。

だから羨ましい。するべき事が、はっきりと決まってる彼が。

蟻退治をしたい。それはカイトや師匠に、死んで欲しくないから。ハンターという職業で見た時、何か違う。

俺はハンターとして、やりたい事を持っていない。

「俺たちがあげた二人は、合格してほしい。残る、残らないじゃないか」

「私がした質問と意味が違いますね」

「残るかだと、強い人になる。サトツさんが言ったみたいなの、44・99・301番かな」

「ふむ。残る人より、残って欲しい人に興味があると」

「44番がハンター証を持ったとしても、ハンターにはならんだろ」

「ハンターになる試験だから。ハンター証を取りに来てる人は、残ってほしくない」

「ふむ。たしかに」

サトツさんも思うところがあったのか、考え込む。

この試験だけの話しじゃない。

ハンターになったから、ハンター証を貰うのに。本末転倒。

ヒソカの殺人免除目的とかふざけてる。

「その受験生たちが、合格すると思いますか？」

「そうだな。上手くいけば受かるだろう。ダメでも来年くるんじゃないか」

「落ちたからって、受験を諦めたりしないだろうね」

「それにさ、根性があれば、ハンターになれるよ」

「そうですか？」

「うん。俺だつてなれたからね！」

ダメ人間の俺がハンターになれた。ヘタレでチキンで引きこもりの俺が。

カイトや師匠を死なせたてたまるか！ んで俺も死にたくない！
そう思ったから。

つらい修行に耐える根性。諦めない根性。それがあればきつと。
歯を食いしばって、何年もやり続ければ絶対なれる。

ジンさんの根性論が移ってきたのかもしれない。

「サトツさん。俺は腹筋が一回しか出来なかったんだ。一回が限界

で筋肉が震えて、でも毎日続けた」

「そこからハンターになったのですか」

「がんばった、強くなる為に。今もハンターの中じゃ弱いけどね。けどやり始めて十年。今でも毎日やってる」

「継続は力なり。だな」

「うん。師匠に出会えて、助けてもらった。それもあるけどね」

「ふむ。ハンターには誰にでもなれる、ですか」

今まで考えた事がなかったと、サトツさんは言った。

俺だっと思ってた。特別な人間だけがハンターになるんだって。

空気中にプロテイン入ってるんだ。一般人でもきつといける。

「私の子供に聞かせたいですね」

「子供?!」

飛行船は順調にゆっくり進んで、トリックタワー到着。

俺たちは部屋で、監視テレビを鑑賞。

しょうがないね。中は入れないし。

最初は、バカハンターが死ぬところを鑑賞した。

カイトの希望だ。よほど、腹に据えかねていたらしい。

ヒソカはバカによく付き合っていた。

言いたい事を言わせて、傷を負ってあげてた。殺せるかもと、一瞬は相手に思わせていた。

二次試験をバカのおかげで突破できたものね。

最終的にやつぱり殺したけど。

バカ鑑賞が終わったら、次はゴン鑑賞。

ゴンたちの意地悪をするトンパの姿に、カイトと爆笑した。

ゴンたちは大変そうだったけど、俺たちは微笑ましい。

人がイライラする行動を、本当に心得ている。

受かるって信じてるから、笑えるんだけど。

偽蜘蛛の刺青に興奮して、緋の目を晒すクラピカには困った。カイトが危ないと焦って、記録を消去しろと無茶苦茶言った。

無理だっつーの。そう言ってもぬかに釘。

クラピカは緋の目の価値を分かってない。

狙う人間は、観賞目的だけじゃない。移植用に盗る奴だっている。移植用を探す人間は、生きているクルタを狙うだろう。

自分自身すら守れてないのに、復讐とはね。コンタクトくらいしろと言いたい。

ハンター試験のメインへ侵入して、全部まとめて消去。一次試験も含めて。

即効バレれて、ネテロ会長に怒られた。

理由を説明したが、相談くらいせい！　そう言ってまた雷が落ちた。

勝手をやったのは悪いと思ってる。カイトにやれと言われたら、できる事ならやるんだよ。

第29話（前書き）

決めていた方針を投げ飛ばし、全く違うモノへ変えました。
筆が進まなかったんです。相変わらずのへたれっぷり。
皆様を振り回し、申し訳ありませんでした。

第29話

三次試験が終了した。

ゴンたちは壁を無事壊して通過確定。
カイトはひやひやしていたようだが。

しかし次はゼビル島。第四次試験、俺たちについてはついていけない。
最終試験会場で待つしかない。監視ビデオもないから、見学もできない。

一週間も時間が余った。暇をもてあます。

「この試験が終わったら、殴りにいきたい」

唐突に言われ、キョトンとする。

「じゃあ、やり方決めないとね」

クロロは一人にはならない。手足の誰かが、常に守っている。
罨をかけるにしても、誰をかけるか。

誰が最も、やっかいだろうか……。

手足を一人、一人脳裏に思い浮かべる。

強化系三人組が、一番罨にかかりやすい。性格は単純だ、少し挑発すれば乗ってくるだろう。

本当にやっかいなのは、蜘蛛を支える生命線。

物語でクラピカは、パクノダを狙った。記憶を読まれるから、能力を知られるから。

シャルナークは、機械類が得意な情報担当……コルトピは能力以外 shouldn't。シズクが生命線なのは、能力のせいだろう。うーん……蜘蛛に特攻して、クロロだけ攫う？いくらなんでも無理だ。手足をはがすにしても、数が多い。

「大丈夫か、頭から湯気がでてるぞ」

二年修行した際、話し合い決めた事がある。

蜘蛛を殴る時だけじゃない。戦闘時に、カイトを敵とタイマン状態にする。

足手まといがない、タイマンならカイトは本当に強い。

チートここに極まれりだ。

物語だと、全体攻撃の鎌が凶悪な威力を見せていた。けど、あれはおまけ。

近接専用の剣や斧が、最も威力がある。痛いのは、スロットで当てないといけない事。

蜘蛛の時は、いつぞやのように事前に出すしかないだろう。

カイトは前衛、俺は後衛。戦闘時には役割分担を徹底し、役割以外の事はやらない。

戦うのはカイトがやる。

俺の役目は、カイトのサポート。全力で戦えるように、敵から逃げ回る。

念は円だけ、他はダメダメだ。師匠たち相手に、逃げ足も修行で鍛えた。つまり、索敵と回避に特化。

カイトは、俺の逃げ足を信じてくれてる。タイマン中、俺を守るうとはしない。

もし、攻撃されたら時間稼ぐ。真面目に相手はしない。ナイフでちまちま傷をつけ、嫌がらせ。

強いカイトが、戦い終わるのを待つ。

カイトがダメなら無理だ。とつとと一緒に逃げて体制を整える。二人で戦う。一人では向かっていけない。それが俺たちのルール。

「うーん、まずシャルナークをなんとかしよう」

「デコじゃないのか」

「シャルナークが一番やつかいとみた」

他の手足もやっているだろうが、彼が情報の全てを握っている。誰が欠けても代わりはいる。そう、彼らは言う。

だが、シャルナークの代わりを見つけるのは大変だ。

彼を捕縛し、閉じ込める。

成功すれば、蜘蛛は目と耳を塞がれたに等しい。

蜘蛛たちは隠れない。強いから、自分自身を信じているから。

そこに活路がある。

堂々と盗みをして頂けるおかげで、蜘蛛の情報は多い。無いのは、蜘蛛たちの顔と名前だけ。

「シャルナークをとつ捕まえて、蜘蛛をおびき出す」

「簡単に来るのか？」

「彼は最も重要な生命線だと思う。だから蜘蛛は、彼が死なない限り助けにくる」

「まあ、殺す気はないからな。どこで捕まえる？」

「居場所はだいたい分ってる。ランタンで二、三ヶ所回れば発見はできるさ」

「保存場所は？」

「俺たちの定宿、ハンター専用ホテルさ。支配人に頼みこもう」

時間はある。余った時間で、シャルナークを捕まえる。

彼はどんな顔をして、俺たちを見るだろうか。とても楽しみだ。

「ヒソカの檻をパクって運ぼう」

「俺が盗ってくるのか？」

「俺より絶が上手いからね。頼むよ相棒」

「はあ、わかったよ。相棒」

「俺はネテロ会長と話しをつけるよ。もう雷はごめんだ」

ネテロ会長の条件は、必ず戻ってくる事。

問題ない、シャルナークではカイトを止められない。

クロロは一人にはならないが、手足は単独行動が多い。
だが。

「シャルナークの奴、ホームから出てこねえ！ 引きこもりか！！」

「タローが言うのか、それを」

俺たちは支配人を説得し、ホームの近くに潜伏している。

ゴミ山の臭いに鼻が曲がりそうだ。

支配人の説得に、俺の資産がかなり目減りした。かなりの守銭奴
なのだ。

だからこそ、説得できたとも言える。

支配人の許可がなければ、入る事も出る事もできない。ホテル全
体が檻でもある。

円を伸ばし、ピクシーの地図でホームを探る。

「コイツは誰だ？ このでっかい奴」

「んー。フランクリンかな。放出系で、大量の念弾を指から打つよ」

「三人か、あと一人少なければな。」

「だね。カイトに任せて、俺はシャルナークの捕縛に専念できるの
に」

「タローが二人受け持てばいいんじゃないか」

なにいつてんだコイツは！

現在ホームにいるのは、シャルナーク、フランクリン……フェイタン。

蜘蛛の中で最も素早い、フェイタンがいる。

俺一人でフェイタンを抑え、シャルナークを攫えといいますが、鬼ですかアンタは。

「チビは地下だ。来る前に逃走できるさ」

「あーもー、カイトは無茶ばっか言うんだから」

「そうか？ やれるさ」

「分かったよ、でも本当にヤバイ時だけね！」

話は決まった。

ゴミ山の中に檻を隠す。短時間なら、拾う奴もいないだろう。

この場所が集合ポイントであり、逃走ポイントでもある。

悪魔はランタン。お菓子を先に渡し、いつでも飛べる準備を行う。

カイトがフランクリンを抑えて、俺がシャルを麻酔で眠らせる。

麻酔はSランク魔獣用。さすがに効くと思う。

「俺がダメだと思ったら逃げるからね」

「いけるさ」

「カイトはそればっかだね、逃走合図はいつもの通りで」

「行くか」

闇に染まるホームへ、少しずつ近づいていく。絶で気配を殺し、壊れた二階の窓から侵入。

音を立てないよう慎重に、そして確実に。階段を降りて、中を見る。

地図で確認した通り、フランクリンとその背中に隠れるようにシャルナークが見える。

カイトに目で合図をする。うなずいた、決行だ。

「誰だ!!」

「タロー?!」

フランクリンへカイトの剣戟が襲う。シャルナークを背後にカイトが向かい合う。

彼の能力は散弾。敵の背後に、味方が居れば打ちにくい。躊躇を見せた後、カイトへ殴りかかった。

よし、能力は使わないな。激しい戦闘を横目に跳躍し、シャルナークの前へ。

もう、俺の中に恐怖はない。隣に友達がいるから。カイトといれば、なんでもできる。そう感じる。

「タロー、いきなりひどいよ」

「ごめんね。用事があるんだ」

麻痺毒の変わりに、麻酔を塗りこんだ緑のナイフ。なつかしい、あの時もこれだった。

目的も同じ、シャルナークへ傷をつける事。

彼は武器を持っていない。アンテナだけを警戒する。

拳がこちらへ向かい、頬をかする。素早い。少量の血液が伝った。再び繰り出される拳にナイフが傷をつける。

少しの傷。それだけでいい。

「タローが、俺たちに向かってくるなんて」

「ありえないと思ってた?」

「あれから探してたのに、情報が手に入らなかった! この俺が調べてたのに」

「今日はね、シャルナークを攫いに来たんだ。素直に捕まってね」

「シャルって呼んでよ。悪いけど、無理だね」

おしゃべりを繰り返す間にも、シャルの傷は増えていく。彼の動きは緩慢になっていき、顔が歪む。

動けば動くほど、薬は回る。気づいても、防げない。動かない事は倒れる事だから。

そろそろ落ちる。

そう判断し、ナイフを振るう腕に力を込める。

シャルの足が俺を狙う。動きに精彩がない。この俺にさえ、効かない。

地面に身体を落とし、軸足へナイフを振るう。

ガクンと、シャルの身体が崩れ落ちた。傷は深く、血が辺りへ広がる。

素早く駆け寄り、手錠をかける。彼の顔が苦しげに変化する。

よし、後は逃げるだけ。

「殺……す、よ」

「逃げるよ」

「了解」

「待て！」

シャルの台詞を無視して逃走開始。

制止をかける大男を、カイトが蹴り飛ばした。激しく衝突する大男に耐え切れず、ホームの壁が崩壊する。

シャルを抱え、壊れた壁から外へ出る。向かうは檻。

二人で大地を駆け抜ける。後方から、激しいオーラの揺らぎを感じた。そつと後ろをみる。

怒りに染まる、黒く小さな影。暗器を投擲しつつ、全力で追跡している。

ヤバイ。

足に込めるオーラを増やし、更に逃走。

檻へ到着。作戦通り、事を進める。

「カイト！ チビをよろしく」

「まかせておけ」

俺が檻へ入ると、カイトがフェイタンを抑えに向かう。

担いだ荷物を降ろし、注射器を刺す。普通の人間なら致死量。だ

が腐っても蜘蛛。この程度では死なないだろう。

眠る彼の服を破り、全て檻の外へ捨てる。

全裸に剥いて連れて行く。服に何かあるかもしれない。逃げられる要素は、徹底的に排除する。ジャケットを脱ぎ、シャルにかけた。情けはある。

鍵をしつかりかけ、神字を込めた鎖を巻く。

絶対に逃がさない。大切な蜘蛛の釣り餌。

檻と共にホテルへ飛び、そしてまたゴミ山へ。

空中で、踊るように戦うカイト。その姿は、何時見ても綺麗だ。

見とれていた。頭を振り、意識を戻す。

攻撃が激しく、カイトの腕を掴むスキがない。

「しょうがないか」

癖になってしまった、この言葉。

痛いのは嫌なだけだな。

覚悟を決める。離れた瞬間を狙い、二人の間へ入る。ザクッと嫌

な感触。足にはクナイが刺さり、肩にはカイトの剣。

豪快に切れた身体を無視して、カイトの腕を掴む。

「じゃあな。チビ」

「バイバイ」

ランタンもキャラキャラ笑い、挑発する。すっかり性格が悪くなった。

広がるランタンのマントが、俺たちを覆い隠す。

臭いが変わった。

ランタンのマントを出ると、もうそこは定宿。

「あ　！　もう、肩がざっくりじゃないか。ちょっとは手加減してよね」

肩はパツクリ開き、大きく横へずれている。血が大量に流れ落ち、身体がふらつく。慌ててオーラで止めた。

手から落ちたナイフを拾い、カイトがポツリとこぼす。

「最初に見たのが、全裸の男か」

「まず、俺の傷をみる！ バカ！！」

殴りたいが殴れない。悔しい、後で必ず後悔させてやる。

第30話(前書き)

タロー、暴走モードへ突入。

第30話

「ハイ！ あーんして。あ　　ん。」

現在、ハンター専用ホテル内修行場。

俺は最上級の笑みを浮かべ、シャルへ食事を食べさせてあげてる。

「あれー、食べないの？」

「食べるか！」

「このシチュー美味しいよ？　大丈夫、殺すならとつくに殺してるから」

殺す気はない、大切な餌だ。大事に大事に、世話をしている。

全裸の身体に、大きなシーツを被せてあげた。俺って優しいよね。

檻にはもちろん入れたまま。シャルが睡眠中に身体を点検。レントゲンにもかけた。予想通り、アンテナを発見。取り除いた。

逃走できないよう、服は与えない。俺たちが修行で使ったピアス。

七個も着けてあげた。手錠も後ろ手に着けたまま。

歩かせたい時以外、足にも着ける。手足の錠を鎖で繋いだ。念に

は念を。徹底的に行った。

「これ、外してよ！」

「捕まえたままでもいいのに、そんな事するわけないよ？」

「逃げないから外してよ！」

「ダメ。シャルはね、蜘蛛をおびき出す餌なんだ。だから絶対殺さないし、逃がさない」

「来るわけないよ。俺を切り捨てる。それが蜘蛛なんだ」

わかってないな！。

それができるなら、物語でクロコを見捨てている。

蜘蛛たちは蜘蛛を愛している。

クロ口はウボォーが死んで、涙を流した。

自分自身には冷淡だが、手足を簡単に諦めない。

可能性があるかぎり、切り捨てない。

シャルは最古参メンバーだ。新しい手足とは重さが違う。

「頭はいいのに、バカだね。シャルは最も大事な蜘蛛の生命線だ。生きてる限り、助けにくるよ」

「俺は只の手足だ。蜘蛛に大事な物なんてない」

「シャルを攫う事。フランクリンが聞いてたよね？ 檻に閉じ込める所は、フェイタンが見てたよ。殺す気がない証拠だ。必ず誘いに乗るよ」

「クソッ」

「ねえ、シャル。聞きたい事があるんだ」

「喋らないよ」

「別に蜘蛛の事なんて、聞かないよ？ もう十分、知ってるからね」

「どこまで知ってるの？」

「教えない。ねえ、シャル。今、どんな気持ち？ 弱い俺に捕ま

つてさ。ねえねえ、どんな気持ち？」

「ツ殺す!!」

「アハハハッ！」

「タロー……」

楽しい。楽しい！ 楽しい!!

俺もたいがいだ。カイトのバトルジャンキーな所、もう詰れない。弱い俺が強い奴をハメて、捕らえて転がす。コレがとてつもなく楽しい。

「俺にこんな事して、タダですむと思ってるわけ？」

「思うわけないよ。シャルを攫った時点で、蜘蛛はマジになっただろ？ これ以上、何をやるうと一緒さ」

「可愛くない！ 昔は俺に怯えて、可愛かったのに！！」
そう、蜘蛛は本気になった。

俺たちが持つている情報。捕まえて聞く。そんな事は、考えもしない。

次は必ず、殺しに来る。シャルの命と引き換えにしても。
その事すら、俺たちの活路になる。

蜘蛛へのプレゼントは、考えてある。罠を仕掛ける準備がいる。
でもそれも楽しい。

ハメられたクロロの顔が見たい。

どんな顔をするのか、どんな気持ちになのか。見たい、聞きたい。

「シャル、記念写真を撮ってあげるね。ハイ、ニッコリ笑って！」

「ねえ！ その金髪。タローを止めてよ」

「無理だ。こうなったら、タローの師匠しか止められない。諦めてくれ」

今は待つ。待ったら、俺たちに蜘蛛からメッセージが届く。

その方法は、俺が考えている事と同じだろうか。

クロロは頭がいい。素直にハマってくれるかな。

はてさて、どうなることやら。

「タロー、聞ききたいコトがある」

「なーっかな？」

「もうすぐ一週間だ。アレはどうするんだ」

「アレ？」

「コレを捕らえる前に、やってたアレだ」

「うーん……」

あつ！ 思いっきり忘れてた。それはもうスッパリと。

ハンター試験の事か。

俺たちどつちかが、シャルに張り付かないといけないしな。

うーん、どうしよう。続きはできないな。また、ネテロ会長の雷

を食らうのか。

嫌になるなー。俺たちが悪いんだけどさ。

辞めるのは決定だけど、ハンターになったら会うって言っちゃったしな。

ゴンと友人たちか……。話したいんだけど、今は無理だしー。

手紙書くか。レオリオにも書かないとな。ピッタリな師匠は見つけたし。

クラピカにお説教したい。ヨークシンあたりで捕まえるか。

「よし、決まった」

「どうするんだ？」

「とりあえず、手紙書いてくる」

「後始末、任せていいか？」

「おう、まかせとけー。カイトはシャルを見張ってて。トイレはいけど、中まで付きっ切りでヨロシク！」

「……………」

イイネ、その嫌そうな顔。この前のお返しだ。

手紙を書き上げ、所変わって最終試験会場。

あー、扉を開けたくない。でもやんないとなー。

このまま逃げ出してもいいけど、ゴン達に手紙を渡して欲しい。気が重い。

ノックをするとすぐに、入れと返事がきた。

大きく息を吸い、気合をいれて入室する。

「こんにちわ！ 会長。相談したい事がありました」

「ギリギリじゃな。その様子だと、片割れも無事かの。捕まえたんか？」

「捕まえました。それから試験官、今すぐ辞めたいです」

「おぬしら……本当にどうしようもないの。師匠にそっくりじゃ」

「ありがとうございます。見てなきやいけないし、続けるの無理な
んですよ」

「ほめとらんわ！ 仕方ないのう。捕まえた悪がきを、後で寄りす
んじゃ。それで許す」

うーん、やつぱり欲しがったか。

蜘蛛だもんな。殺すつもりかな。そうだろうな。

クロ口を捕まえる時に、シャルを開放しない……か。たぶん無理。
餌をちらつかせたいしな。うん、やつぱ無理。

「無理です。諦めて下さい。後これ、宛名書いてますから渡しとい
て下さい」

「……………どんだけ自分勝手なんじゃ、おぬしらは」

「師匠がイイですからね。しょうがないです」

「ええかげんにせんか!!」

言いたい事だけ話すと、即座に逃走した。

あー、コワイコワイ。予想通り、雷が落ちた。

俺たちが捕まえたから、ついでに貰おう。そんなところだろ。

本気で欲しいなら、ネテロ会長自身が捕まえに行くはずだ。

世界一のチートに不可能はない。蟻王^{メルエム}は産まれないから無視。

カイトの所へ戻ると、シャルが素直に食事中。
どうしてそーなった。

しかも、すっごく仲良しになってるし。俺がいない間に何があっ
たの？

俺は首を傾げて、問いかける。

「俺の時は食べなかつたのにさ。なんで？」

「話してるうちに盛り上がってな……………」

「だね、話してるうちにちよっとね」

話しをはぐらかし、答えない。

「蜘蛛にせよ、タローにせよ。色々あるってことだ」

「何それ、意味わかんないよ」

「わからなくていい！」

カイトとシャルの共通点とか、そゆことなの？

なんかあつたけ？ そんなの。

考え込む俺を見て、二人は同時に頭を振った。

顔がどこか疲れている。

カイトがシャルの肩をポンと叩き、シャルが頷く。

そんな二人を俺は、ずっと不思議そうに見つめていた。

第30話（後書き）

短いです。すいません

第31話

「具体的に、どうやってデコとタイマンに持っていくんだ？」

「んーと。蜘蛛からメッセージが届くから、その時にお手紙渡す」「手紙？」

「デコ一人で、指定場所まで来い。でないとシャル殺しちゃうよって」

「一人で来る気がしないな。理由があるのか？」
作戦はクラピカのマネ。

物語で捕縛されたのは、クロロだった。今回の場合はシャルだ。物語ではクロロの安全を優先し、パクノダが一人で行った。

クロロは一人では来ない。動ける手足を、全て引き連れてくる。俺たちの逃げ足を、クロロは知っている。手足の存在を初めは隠す。

一人で来たフリをして、俺たちの前に現れる。
そう予想した。

その少しの時間で、クロロを罠にかける。
予想が外れたら、今回は諦める。
そう、カイトに作戦内容を説明する。

「タローの予想が、当たる前提だな。不安だ」

「ダメだったら、尻尾巻いて逃げる！」

「決行は何時になる？」

「そんなのこっちで決めれない。蜘蛛に聞いて、蜘蛛の頭にさ」

蜘蛛がメッセージを出さない限り、こちらでは動きようもない。シャルにクロロの番号を聞いて、誘い出す。

そんな手段もある。だが、念を使つての追跡が怖い。

肉声があれば、居場所が分かる。そんな念もあるかもしれない。

シャルの居場所がバレたら終わりだ。
だから、直前に書ける手紙がいい。

「決行場所はどこになる？」

「いい所見つけたんだ。蜘蛛たちが隠れる場所、いっぱいあるんだ」

待ち伏せ場所は、廃業したレジャーランド。

取り壊しは行われておらず、打ち捨てられたまま。

その中にある、今にも崩れそうなホテルの大広間。

そこが決行場所。

床には装飾が施されていて、罨を隠しやすい。

床に以前使った罨。足止め用である、神字の檻を描く。

クロロは見破るはずだ。なにせ二回目だ。

でも、クロロが直接かかる必要はない。

「ランタンの入れ替えを知ってる。タローの傍には、近づかないと
思うが」

「そこでさ、ちょっとイタズラしようかと」

「イタズラか……どんなのだ？」

俺がイタズラ内容を話すと、カイトは単純だと評した。

単純だからこそ、掛かる物もある。

クロロは、入れ替えを一度しか見てない。

そこに付け込む。

イタズラに自信はない。成功にはカイトの助けがいる

「練習必須のイタズラか。現地にシャルは連れて行くのか？」

「シャルの姿を見ないと、カイトにすら近づかないでしょ」

「わかった。開放時期をシャルに知らせるぞ」

「いいけど、なんで？」

「いつ帰れるかと、ヤキモキしている」

「本当に仲良しになったね……」

一応、敵なんだけど……その所わかってるの？

ちよつと妬ける。

報告に向かうカイトに、心の中でそつと愚痴した。

待つこと一月、蜘蛛からメッセージがきた。

世界一の規模を誇る、美術館への予告状。

三日後、午前0時に宝を頂く。

それだけ書かれた予告状。

準備が間に合っていない。今日は徹夜確定だ。

「シャル！ デコからメッセージが来たよ」

「おっそーい。クロロ、待たせすぎ」

「手紙を届けないとな」

俺とシャルの関係も、かなり良くなった。

常に見張りの為、張り付いている。それが1ヶ月も続けば、自然とそうなる

シャルは気持ちのいい男だ。蜘蛛だけ。

カイトの意見で、過剰な拘束道具は多少マシになった。

逃がさないから錠は外せ。そう言われれば頷くしかない。

今では、同じテーブルで食事もしている。

夕食のナポリタンをつつきながらの雑談。

パスタが太めで俺好み。

ちなみに作ったのはカイト。

緑茶は入れられないのに、料理の才能はあったらしい。

「あー！ あとさ、クロロの事、デコって呼ぶのやめてよ」

「今更だな、2年前からデコと呼んでるぞ」

「ダメだったら、ダメ！ なんか腹立つ」

「ちよんまげやチビはいいわけ？」

「それはいいよ、ホントの事だしね」

基準がわからない。

ノブナガやフェイタンは良くて、クロロはダメなのか。カイトも不思議そうにしている。

本人はヒドイと言ったが、そう呼ぶなどは言われていない。そもそも最初の時以外、名乗られてもいない。

呼んでいいのか、分からない。そう、俺の疑問をシャルにぶつける。

「いいんじゃない。デコよりマシだよ」

「わかった。ただし本人に聞いてからね」

「だいたいクロロをデコって呼ぶなら、パクやマチはどう呼ぶんだよ？」

「んーと。グラマーにロリっ子？」

姿を脳裏に浮かべ、思いついたあだ名を発表する。

二人は黙り込み、頭を抑えた。

視線が痛い。

バカにした表情でこちらを見つめる。

「……………捕まったら、百回は確実に殺されるね」

「そんなにダメ？」

「タローに恋人はできないね。俺が保証する」

「女性に対して、デリカシーを持って」

「何か失礼だったの？」

「理由が分からないなら、絶対にできないよ」

どうして決めつけるんだ！

俺の不満を残しつつも、準備は進む。

ホテルを蜘蛛采襲地点の隣町でとる。もちろん偽名だ。

同じく偽名で運び屋を雇い、かぼちゃらんたんを設置。

予告時間ギリギリに、ランタンと飛ぶ。

直接美術館に届けるなんて、もちろんしない。

ランタンに、手紙を託す。

ランタンは悪魔で、念獣じゃない。遠くへ行っても存在できる。大きくなり、空を飛んで美術館へ。

蜘蛛たちに姿を知られているし、何より目立つ。

ランタンが蜘蛛を発見できなくても、蜘蛛が見つけてくれる。

「ランタン、お届け物です。これだけしか言っちゃダメだよ？」

「ウルサイ！ わかったわかった」

「ちゃんと届けられたら、有名店のケーキをあげる。余計な事をしやべったら、1ヶ月おやつ抜き」

「いちごのヤツだぞ！ チョコもつける」

「用意しとく。気をつけて行っておいで」

「まかせとけー！」

気前良く言い残すランタン。

こちらを振り返ることはなく、ふよふよ闇夜へ向かう。

その背中はどこかのんきに映る。

不安だ。とてつもなく不安だ。

でもこの方法以外思いつかなかった。

頼むよ、ランタン。チョコケーキも、ついでにプリンもつけるから。

場面は蜘蛛へと変わる。

シャルが攫われた。

その知らせは衝撃を伴い、頭から手足へ走った。

連絡事項は、必ず来い。ホームに久々の集合。

空気が暗い。生きているのか、死んでいるのか。

クロロは黙したまま、未だ語らず。

手足たちは好き勝手いしつつも、心配はしている。

「シャルの野郎、油断でもしてたんだろ。バカだから」

「俺がいつちょ乗り込んで、助けてやる！ シャルはどこだ？」

「調べ物はシャルね」

「フェイ、シャルはいねーじゃねーか」

「嫌なトコつかれたね。誰が捕まったって、シャルが必ず見つける。そのシャルが攫われた」

「暴れるのは好むが、暴れる下準備は、ほとんどの手足が嫌う。」

「その下準備を行うのが、シャルの役目。」

「面倒な調べごとは、全てシャルに投げてきた。」

「その報いか、いざ彼がいなくなると、方策が浮かんでこない。」

「俺たちのことを、良く知ってるってことか」

「殺されてなければいいけどよ……」

「シャルが死ぬわけねー！」

「相手の目的が気になるわ。目的が私たちなら、殺されないはずよ」

「シャルへの復讐が目的なら、もう死んでるね」

「手足の視線が頭へ、自然と集まる。」

「シャルがいらないなら、クロロにしか解決できない。」

「当然の帰結だ。」

「シャルは生きている」

「本当か!？」

「タローたちとは、何回か会った。シャルの事は、本来の目的ではない。俺たち蜘蛛に、用があるんだろう」

「クロロの脳裏に、黒と金の姿が浮かぶ。」

「あの二人がシャルを攫った事実には、驚いた。だが、不思議とシャルを殺すとは思えない。」

「カイトとかいう男は、俺と戦った時、嬉しそうだった。」

「冷静に見えるが、本質は血気盛んで、俺たちと同じ人種だ。」

「暴れるのを好み、強い奴との戦闘に喜びを見出す。」

「反面、タローは違う。臆病者で荒事を嫌う。」

「蜘蛛に歯向かうなど、思いつきもしないだろう。」

カイトが蜘蛛との戦いを望み、タローが引きずられた。そんな所だろうと予測をつける。ならば、望み通りにしてやるう。

「適当に仕事の予告を出す。そうすれば、何らかの反応がある」

「ヒソカはどうすんだい？ また来てないよ」

「今回、奴はいらない。今いるメンバーで行う」

「決まりだな。団長、タローは俺に殺らせてくれ」

「俺はどっちでもいい！ ぶっ殺してやる」

シャルには悪いが、いい暇つぶしができた。

感謝しよう。

不自由な思いをしてるだろうが、油断したシャルが悪い。

押し殺した笑いが漏れる。

久々に楽しい。どうやって殺そうか。

あっさり殺しては、面白くない。

いい方法を、考えなくては……。

人の悪い笑みを浮かべ、思考の海へ沈んでいった。

遊びの相談が終わると、全員せわしなく動き出す。

仕事場所を決め、予告を出した。

蜘蛛たちは、予告日に予定通り向かった。

「団長！ ヘンなのがいる」

美術館への道すがら、フィンが何かを発見した。

その場所へ向かってみると、誰かと話す、かぼちゃ人形。

タローが連れていた人形だ。

近くにいいのかと探ってみるが、存在は感じられない。

「お前！ げんえーりよだんか？」

「お？ なんじゃそりゃ」

「違うのかー。 げんえーりよだんどこだー？」

俺たちを連呼しながら、道行く人間に、片っ端から声をかけている。

蜘蛛たちはため息をこぼす。

俺たちを探す者は多くいるが、こんな探し方は初めてだ。

「……アレ、誰か捕まえてこいよ。ほっとくワケにもいかねーし」

「俺、行ってくる」

「畏かもしれん。気をつける」

心配したのがバカに見える。それほど簡単に捕まった。

拍子抜けする蜘蛛たち。

幻影旅団は俺たちだ。そう名乗ると、素直に着いてきたのだ。のんきなかぼちゃ人形に詳しい話を聞く。

「では、タローに手紙を届けて来いと言われたんだな？」

「おー！ そーそー、コレな。なんか伝言しろって、言ってたけど

ワスレタ！」

「お前は、タローの念じゃないのか？」

「念？ なんじゃそりゃ。食えるのか？」

「質問に質問で返すな。タローはお前の主人だろう」

「タローはオイラの下僕だ！」

蜘蛛たちに、なんとも言えない空気が流れた。

「パク、能力を読み」

パクノダが頷き、ランタンのかぼちゃ頭に手を乗せる。

「貴方の能力は何？」

「お口にチャック！」

白い手袋を、右から左へ動かして、黙り込んだ。

おやつ抜きは最大の苦痛。絶対に食らう訳にはいかない。

パクノダは顔をしかめた後、いくつか質問を繰り返した。

やがて、沈痛な面持ちで仲間を振り返る。

「何を聞いても、菓子類のイメージしか浮かばないわ」

「……………そうか」

珍しい、クロロが頭を抱えて唸っている。

手足たちは顔を見合わせ、話始めた。

皆、一様に憐憫れんぴんの表情を浮かべている。

「タローって奴は大物だね。こんなのが能力だったら、死にたくないよ」

「酒を奢りたくなってきた。大変だな、タローは」

「我慢強いんだろ。俺には無理だ」

クロロは、意思疎通のできないかぼちゃは無視して、手紙を読む。

気分が高まるのを感じる。

なるほど、そうきたか。

目的は俺との戦いか。

だがこれで、シャルの生存は確信できた。

ならば、存分にやろう。俺たち蜘蛛の全力で。

「紙とペンをくれ。返事を書く」

「そんなモン持つてるわけねーよ」

「そのかぼちゃに言えばいいじゃねーか」

「正確に伝わるとは思えん」

「おーい！ 誰か紙とペン、盗ってこい」

騒ぎ出す蜘蛛たちを、ランタンは不思議そうに眺める。
「ご褒美を思うと、身体が踊りだす。
くるくると宙を舞い、ケーキの歌を歌う。
蜘蛛たちは諦め、かぼちやは放置と決め込んだ。
やがて、クロロから手紙が託され、タローと同様に言い含められる。

「いいか。必ず届けるんだ。要求した報酬はこれだ」
「オイラに不可能はない！」

「絶対に落とすな。タロー以外には渡すな」

「わかった。わかった」

「寄り道するな。まっすぐ帰れ」

「お前、ウルサイ」

啞然とする蜘蛛たち。

大丈夫なのか、と手足が眩く。こんな不確かな方法は、取りたくない。

だが、これ以上の方法は、浮かばなかった。

心配する蜘蛛を置き去りに、ランタンはタローの元へ飛んでいく。

その白い手には、大きな紙袋。

中には蜘蛛から頂戴した、大量のお菓子が入っている。

げんえーりよだんは気前がヨカッタ。

帰宅したランタンには、タローの雷が待ち受けている。

その威力は、熾烈を極めたと言う。

知ってか知らずか……ランタンは今日も、自由気ままに生きていた。

第32話（前書き）

【とりかえっこ・トリックオアトリート】

指定した人間や物と能力者の位置を交換する

能力者と質量が違いすぎる人間や物とは交換できない

タローにしかつかえない

例・タロー以外とは交換できないので、師匠とカイトを交換する事はできない。

第32話

クロロからの返答は、俺を狂喜乱舞させ、そして激怒もさせた。手紙の内容はこうだ。

【必ず一人で行く。シャルには手を出すな。

PS、人形に正確な人間語と、会話方法を教えておけ】

ランタンに盛大な雷を落とした。お前、何やったんだ！

問い詰めたが、ランタンの頭の中から、蜘蛛との会話は消えていた。

本当に、仕方ない子だ。そこも可愛いんだけどさ。

望む返事を貰った俺たちは、早速、待ち合わせ場所である、大広間へ移動した。

もちろんシャルも連れて。

シャルは、目的を説明したので、今回は傍観に回るようだ。来演までは、自由に近い。俺たちも暇だしね。

さすがに檻には入れたまま。ピアスは外し、念を封じる腕輪を着けた。

ピアスは、師匠たちからの贈り物。着けたまま放置はできない。直前になれば、猿轡さるくわも装着させる。

美術館から、ここまで距離がある。

移動に二日ほどかかると思う。蜘蛛だから、早めになるかもしれない。

暇そうにする俺に、カイトがまた無茶を言ってきた。

「デコとは、俺一人だけでやりたい」
「……二人で戦うのがルールだろ？」

二人で戦う、それは俺たちの絶対ルール。
納得して、決めたはずだ。今更、何を言い出すのか。

「ジンさんに、デコと戦う為に、修行をつけてもらった。別れる時、一人で殴ってこいと言われた」
「俺には、そんな意味には聞こえてないよ」

「そんなの嘘だ。同じ意味に聞こえた。
内心は、俺の支援なしで、クロロとタイムンさせたくなかった。
カイトはチートだ。でも、クロロもチートだ。
俺と同じ特質系。だが、その強さには圧倒的な差がある。
強化系から遠い特質系は、肉弾戦闘が苦手のはずなのに。
盗んでストックされた、幾つもの能力。
物語でも、全容はほとんど説明がなかった。
カイトが死ぬ。考えただけで、身体が震える。
怖い。少しは強くなっただけなのに……本当に怖い。
黙りこむ俺の手を握り、カイトが説き伏せる。」

「絶対に死なないし、負けない。だから俺を信じてくれないか」
「カイトのバカ！　んなの分かるわけねーよ。クロロはマジでヤバイんだ！」
「タロー、頼む。やらせてくれ」

ダメだ。こうなったらカイトは、テコでも考えを変えない。
長い付き合いで、思い知らされた。
こっちで、最初に友達になったのが、なんでカイトなんだ。
なんで、こんなにバカな奴なんだ。

全く嫌になる。

でも、カイトが人生初の友達になってくれた。
三十年以上、友達がいなかった、ダメ人間の友達に。
破れかぶれになって、叫んだ。

「しょうがないな！ 今回だけだからな！！」

「ありがとな。タロー」

あー！ もう、また泣きそうじゃないか。

コイツのせいだ。終わったらぶん殴ってやる。

ムスッと黙る俺に、カイトが嬉しそうに笑いかける。

「ねえ、俺がいる事忘れてない？」

思わず、近くにあった瓦礫を、シャルに投げつけた。
シャルは苦情を喚いているが、無視。
俺は、絶対に悪くない。

到着から一日経つと、俺は円を展開、索敵を行った。
ピクシーを呼び、蜃気楼の地図を作成。
蜘蛛が何時、到着してもおかしくない。

「それ、ズルイ！ 絶しても意味ないじゃん。反則だ！」

シャルがまた喚き出したが、放置する。
能力を見られたが、気にしない。

これが終わったら、蜘蛛と会う事はない。

まだ、昼時だ。確認の為だろうか、施設を見に来る人間が映っていた。

「あのさー。この能力は、俺の円がなかったら、無意味なんだよ？」
「それもズルイ！　なんだよ、その円の広さは……弱いくせに反則だ！」

現在、俺の円は半径3km。

極限までオーラを薄くする事で、可能になった必殺技だ。
ぶっ倒れる覚悟があれば、4kmまで伸びる。

反則、反則と連呼しやがって、全く。

この円を修得するのに、どれほど苦労したと思ってんだ……。
脳裏に、師匠の姿が蘇る。

出来なかつたら、死んでみますか？　そう、笑う師匠の顔。
ヤバイ。またもや泣きそうだ。

俺の円は陰をかければ、スーパーチートのジンさんでさえ、感知できない。

たかがチートに、バレる心配はない。見破れるのは師匠だけだ。
師匠はたぶん、本気になれば大陸囲めるんじゃない……。

オーラ量も段違いだしな。

師匠の極意、最後まで意味不明だった。

オーラを空気に溶け込ませるとか、なんとからしい。うん。わからん。

「アハハハッ！　ねえ、悔しい？　ここで俺と一緒に、蜘蛛がノコノコ来るのを見よーね」

「うぜえええー！」

「タロー……やめろ」

なんだよ、からかうの面白いのに。自分は好き勝手やる癖にさ。

ブツブツ、文句を言い始める。

話を逸らしたいカイトは、話題を戻す。

「たしかに、これがあれば、絶など無意味だ。範囲内にいる事自体、発見してくれと言うようなものだ」

「ホームもこれで見つけて、監視してたのか……」

「そのとおり。シャルが一人にならないから、乗り込んだんだ」

全く、引きこもりは困るよ。

そう言うと、何故かカイトに叩かれた。理不尽極まりないヤツめ。

二日目になってようやく、蜘蛛が現れた。

やはり、ほぼ全員を引き連れて来ている。

ヒソカはいない。ハブられたのか、ざまあ。

「蜘蛛がノコノコやって来た　　！」

「あー、もう。クロロは何やってんだ。説明通りになってるよ……」

「シャル、すまないが猿轡をかけるぞ。鍵は、壇上にあるカーテンの裏だ」

「わかったよ。クロロはちゃんと元に戻してね。迎えに行くから、一人にはしないでよ」

「安心してよ。シャルの携帯に、用事が終わったら連絡入れる」

「絶対だかんね！」

口封じの様子を、楽しく眺める。

シャルに今回の作戦を話したのは、蜘蛛への嫌がらせ。

アイツら一体、シャルから聞いたら、どんな反応するんだろう。

見てみたいけど、見れない。想像だけで我慢する。

うーん。実に残念だ。

入場口近くで、クロロが作戦説明を行っているようだ。

一斉に頷き、蜘蛛たちが散って行く。

蜘蛛の配置は以下の通りだ。

手足は全員、絶状態。

ホテル入り口から入場口の中間に、パクノダ・コルトピ・シズク。さすがにレアを、前線投入はしてこない。

ホテル周り、出入り口付近に、強化系三人組み。

うーん、堅実だ。勝手に殺している、と許可されてそう。

ホテルへ飛び、開いた窓から進入。一つ下の階にマチとフランクリン。

こっちは拘束狙いかな。

隣の施設から飛び、ホテル屋上に、ボノレノフ。

いざとなったら、ホテルを潰すんだろう。

大広間の近くにフエイタン。

俺とカイトを、引き離すのが役割かな。

一緒じゃないと、逃げないのはバレてそう。

そして、ゆっくりとクロロ・ルシルフルが階段を登る。

絶は使用していない。

背筋がゾクゾクする。

周りを見渡し、最終確認をする。

床の随所に、足止め罫を何個も設置している。

罫の威力は全てバラバラ。

神字は俺が描き、念を込めるのは、カイトにも手伝ってもらった。

どれが本命か、分かりにくくする為だ。

部屋の扉から二百mの所に、シャルの檻。

二百mは、俺のとりかえっこ最大距離。

檻の隣にカイト。

クロロを罫にハメるのを頼んでいる。

そのカイトの右隣に、俺と質量がほぼ同じ瓦礫。

なるべく、縦が短く、横に長い物を選んだ。

更に右横に本命、クロ口捕縛の足止め罨。

他の罨と比べ、威力をほぼ中間に仕上げた。

もっと弱くてもいいけど、本命とバレるとヤバイ。

ホテルにある全ての部屋を、瓦礫まみれにした。

この部屋だけ、瓦礫があつたら変だしね。

わざわざ、崩壊させないよう、壊すのは大変だった。

最後に俺は、カイトの少し後方。

もっと後ろでもよかつたけどね。クロ口は勘もよさそうだから、ここにした。

これが重ねた努力、成功すると信じたい。

本を持つ手を、少しだけ開いてみる。

手ひらには、小さな小さなスイッチ。

お願いクロ口さん、素直に罨にかかってね。

再び本を握り締め、そう懇願した。

第33話

もうすぐ、ククロ口が来る。

その前に、必要ないかもしれない。けれど、シャルに話したい事があった。

「ねえ、シャル。俺たちとシャルは友達だ。でも、シャルは蜘蛛だ。優先すべきは蜘蛛」

シャルが驚いて、こちらを見る。

何を言い出すのか、そう思ってるのかな。

シャルは優しい。優しいから、俺たちに情が移っている。

情があるから、悩む。悩みを取り除いておきたかった。

蜘蛛は、悪魔になりたかったのかもしれない。

血も涙も、感情すらない悪魔に。

でも、俺は知っている。

悪魔たちは、感情に溢れている。喜怒哀楽、全てを持っている。

「俺たちは、シャルに見せちゃいけない事、話してはいけない事。

その線引きはしてた。シャルと同じ様に」

「シャルが仲間になんて話を話そうと、俺たちの不利にはならん」

カイトが俺に追従し、話しの補強をしてくれる。

蜘蛛には会いたくない。けど、友達のシャルとなら、また会いたい。

わがままかもしれない。でもそれが、俺の本心だ。

臭い台詞を吐いてしまった。三人の顔が僅かに赤い。

頭を振り、気分を戻す。恥ずかしい、また黒歴史が増えた。

「カイト、そろそろ注射を打って」

カイトが頷き、針を腕に刺す。注射は解毒剤、毒対策。

ないよりマシ。たぶんその程度。

確認すると、大きく息を吐き、地図を見つめる。ククロ口が階段を登

りきり、扉を目指す。

ここまでの展開は予想通り。

あとは、クロロにバレないようにと祈るだけ。

ピクシーを戻し、ランタンを呼ぶ。

俺の可愛いかぼちゃの悪魔。頼むよ、お前に全てを賭ける。

大広間の扉が、ゆっくりと開いていく。

髪を後ろに撫でつけ、額には十字の刺青。黒ずくめの衣装。

入場したのは、蜘蛛の頭、クロロ・ルシルフル。

口角を上げ、俺たちを観察する。目が面白そうに細まった。

「シャルが世話になったな」

ゴクリと唾を飲み込む。

張り詰めた空気が漂い、額から汗が落ちる。

クロロへ、感謝を伝える。

「来てくれて、本当に嬉しいよ」

「会うのは二年ぶりか。招待を頂くとは、思わなかった」

「俺の希望だ。タローは、その付き合いだな」

「付き合いか……ならばこの床は何だ」

目にオーラを集め、凝で床を見ている。

バレた。だが、想定内だ。本当の罫は、まだ気づいてないはず。

落ち着け、そう自分に言い聞かせる。やれるだけやった、自信を持つと。

「保険かなあ、俺は怖がりだからさ」

「俺を遊びに誘った人間が、怖がりとは」

声を押し殺し、忍んで笑う。人の悪い笑みだ。

クロロの表情、しぐさ、全てが蜘蛛を体言している。

「カイトが殴るって言うんだ。しょうがないね」

「なるほど。やはり、引きずられただけか」

俺が前へ出ようとする、後ろへ飛びのいた。やはり、警戒している。

本当に夕チが悪い。あんな昔の事をよく覚えてる。

「タロー、後ろへさがれ」

「何のこと？」

「能力を、覚えていないとでも？」

「……………わかった」

顔をしかめ、仕方なくさがった演技をする。

瓦礫までは、五十mほど。この騙し合い、心臓に悪すぎる。

仕掛けるタイミングは俺次第。計り間違えば、水泡に帰す。

俺がさがると、クロロはカイトへ近づく。クロロとカイトの距離は、すでに射程圏内。

「殺される覚悟はあるだろうな？」

「ある」

「ならばいい」

クロロの全身から、オーラが溢れ出す。おそらく合図だ。

時は来た。

スイッチを押す。途端、聞こえる爆発音。

目を見開き、瞳が微かに上へと動く、クロロの姿。

その僅かな隙、それが欲しかった。

俺は自身と瓦礫を取り替える。即、クロロにも同様に。

カイトが全身で、クロロを抱きしめ、しがみつく。自分ごと、クロロを毘へと引きずり込んだ。その間、まさに一瞬。

とうとう、蜘蛛の頭が毘へと入った。

カイトとクロロは繋がっている。よし、三人で飛べる。

全力で跳躍し、カイトの腕を掴んで、叫ぶ。

「ランタン！ 飛べ！！」

土煙が充満し始め、風が吹き抜ける。壊されたのか、床が崩壊しだす。

最後に見たのは、一斉に入場する手足たちの姿。マントが広がり、終幕を告げる。

俺たちと頭は、手足を残して退場した。

「あ　　！　もう、やられた！」

檻から出て、猿轡を外されたシャルの第一声。呆れたように仲間を見る。

捕まってから、アイツらの悪巧みをずっと聞いていた。

クロロとタイマンなんて、無理だ。

完全否定の俺に、アイツらは何とかなるとそればかり。

結果は正にその通り。全て、タローの施策のまま。

あっぱれなヤツらだ。心の底から、賛辞を送る。

「ちよつと、シャル！ 説明しな」

「簡単に言えば、蜘蛛全員ハメられたんだよ」

「もっと詳しく話せ！」

話せと言うなら、首根っこを掴むのは止めて欲しい。

ため息をつき、タローたちの計画を教えてやる。

「全員で来る事は、アイツら予想してたんだ」

「読まれてたつていうのか？」

「一人で来い。そう書けば、一人で来たフリするってさ。しかも、タローの能力で、隠れてるのが丸分かり。」

忌々しい能力を説明しながら、全容を明かす。

仲間たちの顔が、どんどん殺気を帯びていく。

「なんだよ、それ。バレバレだったつて事かよ」

「団長は無事なのか！ え？！ どうなんだ！」

「アイツらが殺される事はあつても、団長が殺される事はないよ」

「根拠は？」

「師匠に、言われたんだつて。団長を、一発殴つて来いってさ」

「……………殴る？」

「うん。殺さないつてはつきり断言した。アイツらバカだし、嘘じゃないと感じた。信用していい」

沈黙が落ちる。視線が飛び交い、困惑しているようだ。

仲間たちは信じられないだろう。

この俺が、蜘蛛以外を信用するなんてね。

それに、あんな馬鹿馬鹿しい理由で、団長を攫うなんて。

アイツら、本気でやってたしな。全く、どうしようもない友人たちだ。

「じゃあ、何時帰ってくるんだい？」

「殴る用事が終わつたら、電話くれるつて言つてた」

待つしかないね。そう話すと全員、俺へ殴りかかってきた。

俺が、攫われたから悪いとか意味わかんないよ。

お前らも、全員ハメられた癖に。そう、笑つと浴びる非難は、更に激しくなつた。

全力で、回避しながら団長を想う。

どうなったかな……早く帰ってきてくるといいけど。

マントが元へと戻り、ランタンが頭へ乗る。

そこは、二日前シャルがいた修行場。

タンと軽やかな音がして、三人が同時に着地する。

タローは満面の笑みを浮かべ、クロロに話しかける。

多少ズルイが、あのクロロをハメられた。嬉しい。

物語を知らなかったら、到底無理だっただろう。

「一人で来てないとわかっていたのか？」

「うん！ そのとおり。ねえ、今の気持ちはどう？」

「……………やられた。物質とも可能だったとはな」

クロロは頭を振り、賛辞を贈る。

身体全体で喜びを表し、俺は飛び上がった。クロロに褒められた。

欲しいモノをクロロに強請る。

「ご褒美に、カイトとタイムンしてよ」

「ほう、殺さないのか」

「俺は、お前を殴りたいだけだ。殺す気はない」

「甘いな」

「甘々で結構！ 俺は手を出さないから、本気でヨロシク」

部屋の壁へ移動し、もたれた。約束した、一人でやらせると。

だから見ている。嫌だけど、本当に嫌だけど。

「タイムンでいいのか？ 死なせたくないだろう」

「うん。でもね、カイトがそう望んだんだ。しょうがないよ」

死なせたくなはない、だが、カイトの願いだ。

カイトが望む事、全て叶えてやりたい。

そんな思いで、蜘蛛ヘケンカを売ったのだ。

クロロは俺を見つめた後、褒美をくれた。

「お前の策を教えてください、やってもいい」

俺が話し終わると、クロロは大声で笑い出した。

腹を押さえて、身体を曲げている。今にも転がりそうだが、しばらく待つてみるが、彼の笑いは止まらない。

これ、どうしよう。まだ笑うの？

心配になった頃、ようやく収まった。

ガラリと表情が変わり、カイトへ視線を向ける。

「お前たちは本当に興味深い……………では、殺ろう」

二人は沈黙し、互いを見る。ピエロも今回ばかりは静かだ。

カイトが選択した武器は、二本の斧。

斧にしては珍しく、小回りの効く小さなサイズ。

両手に持ち、構える。

クロロも懐から、ナイフを取り出し、下げて持つ。

そして、手を掲げて、本を具現して開く。

能力発動を待った、カイトに苛立ちを覚える。

現れたのは念魚。

思わず扉を開けなくなった。手をきつく握り、衝動を抑える。

手を出す事。それはカイトの頼みを足蹴にする事。そんなのダメだ。

沈黙を破り、カイトが前へ飛ぶ。斧を振り下ろし、本を狙う。背中を念魚たちが狙い、食い破る。

クロロは、降ってきた斧にナイフを滑らせ、勢いを殺す。そのまま腕を狙い、切り払った。

襲う、もう一方の斧。

本を消し、手首を押さえる。が、力で押され、肩を抉られた。

二人の身体から血液が、流れ落ちる。

無意識に身体が揺れた。唇を噛む。

オーラで出血をとめ、再び彼らは切り結ぶ。鈍い刃の音が響き、二人は楽しそうに踊る。

お互い、強者との戦いに喜び、そして狂っている。

心配してるのが、バカみたいだ。なんという似たもの同士。呆れると同時に、諦めた。

身体のを抜いて、座り込む。満足するまでやらせよう。

俺が、彼らを止める手立ては……きつと無い。

二人だけの宴は、互いが動けなくなるまで続いた。

ようやく動かなくなった二人へ、歩いていく。

全身に怪我を負い、傷が存在しない部位はない。

部屋は荒れ果てた。俺も座り込む余裕は、途中からなくなった。辺りを気にせず、暴れまわったのだ。当然そうなる。

自慢の逃げ足がなければ、死んでたかも。

クロロは膝をつき、その場に寝転がる。呼吸が荒い。

カイトも床へ座り込み、肩で大きく息をしている。

「楽しかった？」

「ああ」

「なかなかだった」

全書でイヌガミを呼び出し、カイトの怪我から治していく。

俺たちの様子をクロロが、嬉しげに眺める。

その顔、本当に盗賊らしいね。

「見せていいのか？」

「シャルに、元に戻してねって頼まれたんだ。クロロも治すよ」

「そうか」

どこへ返却しようか。迎えに来るって言っていた。

この姿じゃ、暴走した手足に殺されるかも。
クロロも、今は気分が良くて、俺たちを殺すの忘れてるだけだろうし。

厄介この上ない。

二人の服は、当然ながら布切れに変化していた。髪も乱れ、皮膚には血がこびりついている。

服をどうしようか。ここにはないから、用意しないとイケない。風呂にも放り込まないと……。

後始末の事は、念頭になかった。

俺も詰めが甘いなあ。

腕を組み、宙を見つめ方策を探っていた。

第34話

あの後、ホテルの部屋へクロロを連れ帰り、風呂へ放り込んだ。

「カイト、クロロに着替え貸してあげて」

「あまり持っていないんだが」

「俺のじゃ、小さいよ」

俺の身長は、自称165cm。クロロに入るはずがない。

お前の我がままの結果だろうが！ そう言っつて、無理やり送り出し、これからの作戦を練る。

クロロが入浴している間に、殺されない方法を考えないといけな
い。といつても、一つしかない。

クロロといえば、本でしょ。うん、これしかない。

早速、師匠の家へ飛び、まずは冷蔵庫を漁って食料を調達。その
まま書庫へ上がり、数々の蔵書を許可を貰って持ち出した。

ホテルへ戻り、大量の本を床に積み上げる。テーブルに簡単な料理
を並べ、紅茶もつけておく。

俺っつて完璧だ。自分に酔いながら成果を眺めていると、クロロが
風呂から上がってきた。

声をかけられ、クロロを振り返っ……………身体が硬直した。

そこにいたのは、ドギツイ紫のジャージを着たクロロ・ルシルフ
ル。

ある意味、最強の破壊力だ。最終兵器だ。ヤバイ、目が直視を拒
否している。

カイト、お前というヤツは、なんて恐ろしい事をするんだ。まとも
な服を貸せよ。

「どうかしたのか」

「なんでもないよ。そのジャージ、嫌じゃなかった？」

「別に嫌ではないな」

「そ、そうなんだ？ えっと、こっちに食事を用意したからどう？」
どもりながら、クロロをソファへ案内する。後でカイトに鉄拳制裁だ。文句は絶対受け付けない。

あれか、自分の見た目に、こだわらないんだな。そういう所もカイトとよく似てる。

アイツの長髪は、不精からきてる。切りに行くのが面倒なんだそ
うだ。切るって言っても、俺が許さないけど。

「ほう、なかなか趣味のいい品揃えだ」

「盗らないでよ。師匠の蔵書なんだ。ご飯食べたら、好きに読んで」

クロロ様一本釣り成功。

心の中でガッツポーズを決める。カイトもシャワーを浴び終えた
ようだ。

小奇麗になったカイトを蹴り飛ばし、夕食兼朝食を三人で食べる。
小鳥の声が、かすかに外から聞こえる。

クロロは食べながら、もう読書を開始している。食ってから読め
と言ったのにさ。俺もやるから、別にいいけど。

食事が終わると本格的に読み始めた。

その様子を横目に見ながら、シャルへ連絡を取り無事を伝える。

「部屋は無茶苦茶になったけど、なんとか無事終わったよ。服はダ
メになったから適当に着せといた」

『タローたちが生きてるって言ったら、皆は驚くなー。賭けは俺の
一人勝ちだ』

「まあ、殺されてもしょうがない事やったけどさ。さすがに疲れた
から、今日は休むよ。近いうちに返却方法を話そう」

『わかった。じゃあまた連絡ちょうだい』

携帯を閉じ、クロロを見る。食事後から、全く体勢に変化がない。

声をかけても返事をしないので、放置して就寝した。よほど疲れ
ていたのか、布団に入った後の記憶がない。
激動の一日が、ようやく終わった。

それから五日、俺たちはまだ殺されてない。それはいい、目的通
りだ。

ただ、このクロロ。あれから微動だにしない。何回も声をかけて
いるが、一言の返答もない。

眠りもしないし、栄養も取らない。たまに入れ替える紅茶に、口
をつけるだけ。

鍛えてるから、死にはしないだろうが、さすがに途方に暮れる。

「ダメだな。これは」

「どうしょか？」

「シャルに迎えに来てもらえ」

携帯を手を取り、シャルに再び連絡を取る。

思わずため息がでる。

ここを知られたくなかったのにな。世の中ままならない。

「もしもし、シャル？」

『遅い！ うちの団長、早く返してよ』

「それがさ……動かなくて困ってる。迎えに来て」

『動かないってどういう意味？ まあ、いいや。とりあえず電話代
わって』

背後を振り返り、クロロに電話だと伝える。だが、相変わらず微
動だにしない。

そう伝えるが、信じてくれない。仕方なく、クロロの耳元へ携帯
を寄せる。

シャルが大声で叫んでいるのが、漏れて聞こえてきた。

やはり、何の反応も示さない。コイツ、わかって無視してるんじゃないのか。

『もしかして、本でも読んでるの?』

「うん。タイムン終わってから、ずっと読んでる」

『危険物を渡さないでよ!』

「本が危険物なんて始めて聞いたよ……」

かの、クロロ・ルシルフルは、物語で知る以上の本好きであったようだ。

読書を始めると、一週間は動かない。シャルがそう言い切った。マジですか。

シャルから、読んでる本以外を撤去しろ、との命令が下る。

その方法以外では、止められないらしい。

カイトと顔を見合わせ、ため息をつく。ここでシャルに逆らうのは恐ろしい。

二人でうず高く詰められた蔵書を、次々と撤去していく。レア本も多くある。なにせ、クロロが好きそうな本、という選択基準で選んできたのだ。

傷つくと後が怖いので、丁寧に運んでいった。師匠の怒りは、俺の中で完全にトラウマになっている。

作業の終わりが見えてきた頃、ようやく彫像が動き出した。

「おい、ここにあった本はどうした?」

「やっと、しゃべったね……」

餌を撤去したのが、よほど腹に据えかねたようだ。殺気を飛ばし、餌を元に戻せと要求する。

お前は猛獣か。

シャルの指示だと、バラして黙らせる。文句ならシャルに言って

くれ。

用事も終わったし、そろそろ帰れと伝えたと、対価を求めた。

「まだ、読みたい物がある。それを寄こしたら帰ってやる」

「意味わかんないんだけど……」

帰ってやるから寄こせって、アンタ何様ですか。クロ口様ですか、そうですか。

ぐっと怒りを堪える俺に、クロ口は指折り数え、対価の品を伝える。

次々とタイトルをあげていく。どれもこれもレア本ばかりだ。

本は全て師匠の物だ。あげれるわけない。どうせ返す気なんてないだろうし……。

一冊ならまだいいんだけど、コイツ十冊以上要求してるしな。

うーん。どうするか。何か渡さないと本当に帰りそうにない。

頭を捻って考えると、閃いた。

アレにしよう。アレなら世界中、どこにもない。レア中のレアだ。

「世界に一冊しかない本をあげる。それで帰って」

「ほう、どんなモノだ？」

「んー、詩集みたいな感じかな。読めないと思うから、翻訳したファイルもつけるよ。それでいい？」

「いいだろう」

「じゃあ、携帯貸すからシャルと連絡とって。その間に取ってくる」
領いた、交渉成立だ。本の事となると、クロ口は本当に行動がわかりやすい。

クロ口へ携帯を放り投げて、師匠の家にある自室へ向かう。

書棚に近寄り、一つの本を手にとった。

故郷から一緒に持ってきた本。これがあつたから、師匠に拾ってもらえた。

クロ口にやりたくはないが、これ以上の餌はない。

この世界には、万葉集なんて存在しないしな。
内容は全てパソコンに入れてある。読もうと思えば、また読める。
しみりした気分を入れ替え、さくつと諦める。
現本と翻訳ファイルをカバンに入れ、少し考えた後、もう一つフ
ァイルを抜き取った。

ホテルへ戻ると、カイトがご飯を食べさせていた。栄養不足が気
になっていたらしい。

「それで、どこへ送ればいいの？」

「しばらくは仕事もない。お前たちと遊べたから満足したしな」
そう、言つて有名な古書街をあげた。

ホームに帰るんじゃないんですか……。明らかに、帰るんじゃない
くて、趣味で行く所ですよ。

「仲間が心配してるんじゃない？ シャルはなんて言つてたの」

「シャルは関係ない。欲しい物があるから盗りに行く。タローは寄
こさないからな」

「ホームへ帰つてから、盗りに行って下さい……お願いします」

主に、俺たちの安全の為に。

一旦ホームへ送り、その後、古書街へ送り届ける事で話は決まっ
た。

ランタンを呼び出すと、あからさまに嫌そうな顔になる。

そう言えば、あの時何があったのか気になっていた。

どうせ、何かやらかしたんだらうけど。

「手紙届けた時、なんかあった？ ランタンてば、お菓子を貰った
みたいだけ」

「かぼちゃから聞いてないのか」

「戻つてからすぐに聞いたんだけど、忘れてたんだよね」

「何故、そんな能力にしたのか理解できん。腹が立たないのか？」

「可愛いは正義だよ。ちよつとくらいおバカでも許せるんだ」

「……………道行く人間に片っ端から、俺たちはどこだと聞いていた」
あちら、そんな事したんだ。

でも思つたより、たいした事してないね。お使いは出来たみたいだし、雷落として悪かったかな。

そんな俺の感想を聞くと、クロロの顔はますます歪んだ。イイ男が台無しだ。

「ちゃんと賤ける。甘やかしすぎだ」

「そうかなー」

「だいたい、パクに読ませたら頭の中には、菓子的事しかなかったんだぞ」

くどくどしたクロロの説教が始まった。

パクノダに悪魔の記憶が読めたんだ……………ちよつとヤバかったな。

ランタンは鳥頭だし、お菓子の事しか頭にないのは当然か。

なら、賢いピクシーやイヌガミは、お使いさせない方がいいな。

うん、決まり。今後何かあったら、蜘蛛へのお使いはランタンにまかせよう。

蜘蛛にとって、恐ろしい事が決定したとは露知らず、クロロの説教は続いている。

説教が長いともも似てるよね、そんなとこ似なくていいのに。

なだめすかして飛んで、クロロをホームへ送り出す。

「じゃあ、ここで待つてるから顔見せに行つて来て。それからコレ、お土産ね」

「ファイルが二つもあるが」

「最初に出会った時、続き読みたがってたよね。アレだよ」

「そうか。気になっていたので、ありがたい」

あのクロロが、礼を言つたよ……………明日は雨かアラレか、それとも

嵐か。

本当に本が好きなんだな。活字中毒としては、親近感が沸くよ。クロ口はファイルを大事そうに抱え、部屋を見渡した。

目線の先にあるのは、部屋の隅にちょこんと置かれた、かぼちゃらんたん。

勘良すぎだろ。ランタンが持つてるのと、ソックリだけどさ。

「この飾りが触媒なのか」

「まーねー」

「寄こせ。今度、仕事を依頼する」

「いや、そんなの無理なんで簡便して下さい」

仕事を請ければ、蜘蛛としては追わない。そう言われれば、断れない。

くそ、弱みを突いてきやがって……このデコめ。

嫌々一つ差し出すと、もっと寄こせと言ってきた。どこまで図々しいんだ、アンタ。

これだから、蜘蛛に関わるのは嫌だったんだ。

蜘蛛たちと二度と会わない、という俺の希望は儚く消えた。

俺の不満を知ってか知らずか、クロ口はホームへ戻っていく。

その背中を、心の中で悪態をつきながら見送る。

とりあえず、俺もカイトも殺されませんんだ事だけは良かった。しばらく、休息したら癒しを見に行こう。今の荒れた心には、癒しが必要不可欠だ。

カイトに異論は言わせない。

物語通りなら、天空競技場にいるはずだ。

銀のちびっこはどうしよう？ 癒しを求めれば会う事になるしな

……。
暗殺一家とも……なんて事になったら、俺のガラスのハートが砕
け散る。

方策を考えながら、クロロを待つ。

その後、ランタンが蜘蛛を急襲し、阿鼻叫喚の渦に陥れたとか。
当事者の内、一体と一人はすぐに忘却し、残りの人々はタワーへ
の復讐を誓ったそうなの。
めでたし、めでたし。

第35話(前書き)

小話二本

第35話

「そろそろ、帰りたいんですが……」

「ダメだ。次はあの店に行くぞ」

クロロを古書街に送り届け、帰ろうとした俺に、待ったがかかった。

頼みたい事があるから、付き合えと。

嫌な予感がして断ったが、依頼を受けないと殺す、そう脅された。

「待て、俺たちを追わないと言ったじゃないか！」

「蜘蛛としては、追わないと言ったんだ。個人的には自由だな」

「この悪魔め！」

ほめ言葉だなど、のたまうクロロを殴りたい。

その理論なら、俺たちの安全は、全く保障されてねーじゃねーか！
クソツ、やられた。

拳を握り締め、怒りに震える俺に与えた依頼は、書物入手の手伝いと配達。

「どっだけ、手に入れる気なんですか……アンタ。」

かばちゃらんたんをホームに設置してきたらしい。用意周到にもほどがある。

最初からその気だったんだな。しかも配達場所は、ホームかよ。殺されるので簡便して下さいと土下座した。プライドを捨てて、命が助かるなら安いものだ。

そんな俺に、クロロは無慈悲に語りかける。

「安心しろ。アイツらには、依頼中は手を出すなと命令した」

「依頼中じゃなければ、殺されるってことじゃねーか……！」

「行くぞ」

人の話しを聞けよ、このデコ！

言いたい事だけ言って、スタスタと書店へ向かって行く。
俺は、何もかも諦め、その後について行った。

その後、回った書店は五〇店以上にも上った。手に入れた本は、
数え切れない。

おそらく、五〇〇冊は超えている。

俺は幾度となく、ホームとクロ口を往復した。

意外だった事が一つ。販売している本は、代金を支払って購入し
てた事。

「盗らないの？」

「売り上げがなければ、仕入れはできん」

アンタ、本の為なら、人に気を使えるんですね……その優しさを
俺に下さい。

夜になる頃、ようやく購入は終わった。次は非売品集めだ。

嫌がる俺を引きずり回し、次々と入手していく。

非売品の古書は、もちろん盗った。

師匠、スイマセン……俺、とうとう犯罪者です。

だが、やはり本の為か、店主や店員を殺害したりはしなかった。

「ヤツらとは趣味が合う。また、違う本を入手して欲しいからな」

「どんだけ、自分本位なんすか……」

もはや、呆れ尽くして何も言えない。まあ、店主たちも命がある
だけマシだ。

朝方にようやく、満足顔のクロ口をホームに送り届けた。

帰ろうすると、またもや待ったをかける。

「なんだよ、もう十分手に入れただろ？」

「言い忘れた事があった」

「何なのさ？ 眠いんだけど」

俺は今、機嫌が悪い。動かないクロ口を運び、その上、本集めま

で手伝わされた。

せめて、金払えよ。このデコ。

ニッコリと笑顔を浮かべている。なんか、嫌な予感がするんですけど。

嫌そうに顔を歪める俺に、クロロが死刑宣告を下した。

「お疲れ様。依頼完了だ」

ありえん……さんざん引きずり回して、最後にそれかよ！

宣告と同時に、飛び掛る手足たち。

マジで、死ぬ。シャレにならん。ていうか、シャルまで混ざるな、バカ！

後ろからクナイが飛来し、右からは念弾、左からは念糸が俺を狙った。正面には、腕をぐるぐる回すフィックスの姿。

空中からも、嬉々として別の手足が襲いかかる。

仕返しにしても、やりすぎだろ！！

隙間を探して必死に振り払い、逃げ回る。

ようやく、戻れた時には、全身ボロボロで傷だらけ。

「大丈夫か？ 何があったんだ」

「……………」

カイトが優しく語りかけてくれるが、俺の心には届かない。

今すぐ復讐しよう。うん、そうしよう。アイツらはちょっと痛い目に合うべきなんだ。

でないと反省すらない。舐めたマネしやがって、必ず後悔させてやる。

お菓子をストックをつかみ、無言で飛んだ先は、流星街。

この場所をクロロは知らない。シャルを攫った時に、使用した場

所だ。

黙って怒りに燃える俺を見て、ランタンが震えている。

褒美の先渡しをして、きつく言い聞かせた。

「ランタン、わかったかい？ 必ず成功させるんだ。ヤツらに容赦はするな、情けなどかけるな。とことん搾り取って来い」

「りよ、りよーかい！！」

高速で飛び去るランタンを見守る。

あれだけ、クロロが嫌がってたんだ。

ランタンと蜘蛛の相性は、最悪に違いない。強いからって、何でも許されると思うなよ。

それから、四時間ほど経つと、ほくほく顔でランタンが戻ってきた。

その手には、大きな布袋。中には以前より、大量のお菓子が入っていた。

よほどの被害が発生したと見える。でなければ、こんなに与えるはずがない。

あー、楽しい。アイツらランタンに何されたんだ。

ランタンを捕まえて、イタズラを止める事は、できなかったんだろっ。

菓子店に盗みに入る、蜘蛛たちを想像する。

床をバンバン叩いて、笑い転げた。ダメだ、笑いすぎてお腹が痛い。

あー、すつきりした。この手はまた使えるな。

カイトが心配するし、そろそろ帰って寝るか。

流星街から戻り、すぐに眠りについた。

翌朝、目覚めると、気分がとてもいい。わけもなく、ウキウキする。

ダイニングに向かい、パソコンで情報を集める。

朝食を作るカイトが、ジンさんに報告したいと伝えてきた。そりゃそーか。修行の課題みたいなモンだしな。

「りょーかい！　じゃあさ、携帯を頼もう」

「何に使うんだ？　俺たちの分はあるだろ」

「ゴン君てさ、携帯持ってないからね。プレゼント用」

「……ジンさんに、ちゃんと説明しろよ？」

ゴンたちはまだ闘技場には着いていなかった。今頃、ゾルディックだろうか。

そんな危ない所へは行けないので、到着するのを待つ。説明が面倒だし、できれば式〇〇階到達後がベストだ。

念の習得に才能はいらぬが、教えるには才能が必要だ。素人に教わっていい物じゃない。

師匠も教師がいないと、天才でも失敗するって言ってたしな。

ジンさんに電話をかけ、これから飛ぶと連絡する。

了承が取れたので、早速飛んだ。

場所はどどこかわからない。断崖絶壁の中腹あたりだ。相変わらず、おかしなところばっかいるな。

こんなところ、どうやって来たんだか。

「おーう！　お前ら、元気だったか？」

「おひさしぶりです」

「ジンさん、報告にきました」

「おう、聞いてやる」

報告をカイトに任せ、俺はお茶を飲みながら二人を観察する。

お茶はもちろん、ホテルから持ってきた。ジンさんに、まともな飲食物は期待できない。

カイトは身振り手振りで、嬉しそうに報告している。

クロ口とガチで、タイムン張れたのが、本当に楽しかったようだ。

ちょっとだけ、自重もお願いしたい。蜘蛛みたいなのはもうゴメンだ。

まあ、無理だろうけど。

ジンさんは頷き、質問しながらニコニコと聞いている。

相変わらず、浮浪者のようで、ぶっちゃけ臭い。後で風呂に突っ込もう。

報告が終わると、ジンさんが立ち上がった。

「腹減ったな。なんか食うか」

「師匠の家に行きましょう。ジンさん臭いです。風呂に入って下さい」

「タローは相変わらずだな。別に死なねーよ」

「ジンさん。俺、料理上手くなっただんです。食べてみて下さい」

「わかった。行くか！」

カイトが話しを逸らしたおかげで、ジンさんが了承した。どんだけ風呂が嫌いなんだよ。

師匠の家に飛ぶと、すぐさまジンさんを風呂へ突っ込んだ。汚い格好で、師匠の家は歩かせない。

ジンさんを尊敬しているが、臭いのはだけは絶対に許せない。

いつぞやのように、まっ裸で出てこられても困るので、服を用意しておいた。

カイトが作った料理をつつきながら、四人で食卓を囲む。

今日は、とるところ卵のオムライス。うーん、絶品だ。

「ジンの息子に会いに行くのですか？」

「誰かさんのせいで、心が傷ついたんです。癒しが必要です」

「俺とそっくりだろ？俺でいいじゃねーか」

「可愛くないから、癒されません」

「タロー……悪かったって」

毒舌を飛ばしつつ、楽しく食事は進んだ。

ジンさんに、写真を撮って来いとカメラを渡された。

動画も撮れて、長時間録画が可能なタイプだ。メモリースティックを取り替えれば、電池の続く限り、撮影と録画ができる。

どこで買ったんだ……野生児なのに。カメラは箱に入ったままで綺麗だ。

保存方法もぜひ知りたい。ていうか、俺たち来るの知ってんじゃないの。この人。

「前に、盗撮してた人はどうしたんです？」

「アイツな」。結婚しちまってな。無理だっつーから、頼むわ」

「分かりました。貧乏人ですから、料金取りますね」

「お前……遅しくなっただな」

メモリ一本につき、一億円で話しがついた。金銭感覚がおかしい。こっちは美味しいからいいけどさ。

蜘蛛の経費やら、道具調達、情報料やら、ホテル代やらで俺たちの貯金がヤバイのだ。

もう何年も、仕事をしてないのだから、当然だ。職業、プータロである。

これからも、経費はかかるだろうし。悪魔たちにも、何か買ってやりたい。

「そうだ、ジンさん。携帯を二個下さい」

「なんだ、なくしちまったのか？」

「ゴン君と、そのお友達用です。携帯持ってないんですよ」

「ああ、試験で一緒だった子か。どの子の事だ？」

「銀色のゾルディックですね」

「友達が出来てたのか！」

さすがジンさん。息子の友達が、ゾルディックでも全く気にしていない。

携帯も後日、ここへ郵送してくれるそうだ。

ヨークシンで買うのは知ってる。けれど、持ってないと俺が不便だ。

携帯があれば、位置情報は分かりやすい。ジンさん名義にしたの

は、俺たち以外に利用されない為。

ゴンにジンさん名義だと、バレる心配はない。チートとはいえ、ひよっこハンターに調べられる代物じゃないしな。

食事後、やはり飲み会が始まり、ジンさんとカイトが潰れるまで続いた。

二人以上飲んでいたはずの師匠は、ケロっとしている。赤くなくてすらいない。

師匠……やっぱり、妖怪なんですね。

飲み会の席でジンさんに仕事を紹介して貰い、金稼ぎを開始した。ゴンが弐〇〇階到達までの暇つぶしだ。

内容はカイトの希望で、U M A（未確認生物）の確認と調査をやる。

自然が恋しかったようだ。

六本足のゴリラみたいな馬を追い、森や山を駆けずり回る。

カイトが確認と調査を行い、俺がレポートなどの書類作成を担当する。

夜にはホテルへ戻ったが、カイトは仕事が終わるまで、自然の中で寝泊りした。

カイトの癒しは、森や動物たちとの触れ合いらしい。

ゴリラ馬なのに、癒されるの？ カイトは足跡を見つめて、楽しそうにしている。

そうゆうーとこ、理解が全くできないよ。

ゴンが百八十階に登る頃。

カイトがゴリラ馬を捕まえてきた。

真っ赤な体毛に六本足、顔は馬なのにゴリラ。筋肉はムキムキで固そうだ。

……ないわ、色々な意味で、これはない。
こんな生物が存在する事すら、許せない。そんな気がした。
可愛いだと語るカイトが気持ち悪い。
お前の感覚、絶対おかしいって！
そういうと、何故か殴られた。理不尽すぎる。
まあ、これで仕事が終わった。頭を切り替えないとやっていけない。
財布はかなり膨らんだし、ゴンもそろそろ念を覚えるだろう。
これから、買出しなど準備を行えばちょうどいい。

「銀の子がいない時を見計らって渡そう」

「いつも一緒なんじゃないのか？」

「銀の子も選手だからな。試合の時に渡せばいい」

キルアのあだ名は銀の子。うん、そのままだ。

だけど、ゾルディックを呼び捨てにして、何かあると怖い。
執事とかが、ストーキングしてそうだし。
紹介してもらえば、名前を呼べばいいさ。

「いっぱい撮って、ジンさんから搾り取るっ」

「ほどほどにな」

取らぬ狸の皮算用をしつつ、天空闘技場に向かう。

この時俺は、復讐が復讐を呼び、自分に帰ってくるという、負の連鎖を綺麗さっぱり忘れていた。

第36話(前書き)

タローに変態注意報が発令されました。
カイトとタローはヒソカが大嫌いです。
ヒソカ好きな方はお気をつけ下さい。

第36話

「クーツ！ 可愛ええ」

「それじゃ、変態だ」

俺たちが天空闘技場に着くと、ゴンたちは、嫌がらせの真つ最中だった。

早速、ウイングさんの部屋を探し出し、お隣さんに、快く部屋を譲って頂いた。

ヒソカがいた事は、ぶっちゃけ忘れてた。

まあ、ゴンをストーカーするつもりだから、バレなければ問題ない……はず。

隣で、円の形を工夫し、地図を張って可愛いゴンを観察中。

いやー、癒される。

しかし、さすがにチートだ。こんなあっさり纏てんを習得するなよ。

俺の努力を省かえりみると、悲しくなってくる。

形状も、俺の修行時代みたいな、凸凹とは比較にならないほど、美しい。

初心者だろ、お子ちゃまたち。少し自重しなさい。

ジンさんから渡されたカメラで、動画も撮っている。現金もついでにうまうまだ。

「ええのう、癒されるのう……でも、何故か殴りたくなるな」

「これが才能ってヤツだな。俺もここまでじゃなかった」

「いや、カイトもたいがいだから」

お子ちゃまたはスパーチートだが、カイトもチートだからな。結局チートなのは変わらない。

チートと言ってもまだまだ、初心者。もう少し強くなったら、ヤバイが、まだ負けない。

それに、未だ精神的に甘い子供時代。この俺でも、G Iくらいまでなら勝てる。

正面から、戦うとかしないけど。絶対負ける。まあ、言葉で煽れあおばいけるだろ。

大人はずるい生き物だ。弱いとなれば、更にずるくなる。

さてと、どこで声をかけるか迷うな。

ヒソカがいるし、マチも来るから、カストロ戦までは隠れてストーキングだな。

うん、決まりだ。

カストロには、何も言わない。言っても何も変わらないと思う。だって、強化系だもの。

ゴンがバカやるんだっけか。怪我どうしようかな。治したいけど、師匠はウィングさんだ。決定権はウィングさんにある。

内緒で会って、相談しないといけない。

ウィングさん、調べてみるとかなり凄い人なんだよね。

見た目はアレだけど、弟子を育てる事にかけては超一流だ。

「しかし、44番がいたとはな」

「殺しとく?」

「そうだな……俺も出るか」

「はあ?!」

おまつ、直前まで考えてた俺の計画を返せ!

何、その楽しそうな顔。タイムン張りたくなったのね……。

これで、ストーカー計画は白紙か。

うなだれる俺に、カイトが呆気にとられている。

俺の性格、すっかり忘れてそうですね。

「何だよ、その顔。わかってるよ、タイムンしたくなっただんじょ？」

「さすがだな。頼む」

「クロロと違うし、手は出すからね」

「わかってる。タイムンするついでに、殺しておくか」

「いい考えだね」

俺たちは、ニッコリ笑って同調する。

性格など色々、正反対な俺たちだが、ヒソカ嫌いな所は、良く似ている。

闘技場に登ってもらえば、現金が更にうはうはか……てか、俺も登るか。

さすがに、200階に行けないほど、弱くはない。

二人で四億くらいはいくのかな？ 賞金の事はさっぱりわからん。

「俺も出るわ。200階まで」

「めずらしいな。見るだけかと思っただが」

「おせぜが欲しい。蟻用の経費貯めたいし」

「そこまでかかりそうか？」

「NGLに不法入国する時点で、かなりかかるよ」

蟻退治の際、NGLに素直に入国する気はない。かぼちゃらんだんを持ち込めないからだ。

移動手段確保の為、橋頭堡きょうとうぼとして、一つでもいいから置いてくる。それが不法入国の目的だ。

空から行くか、海から行くか、まだ思案中。

空が楽そうなんだよね。カイトを空中から捨てるだけでいい。

だけど、経費がなー。

攻撃されるだろうから、飛行船を使い捨てるハメになりそうだ。

飛行船は、買取となると、本体が十億前後。それに空港使用料、燃料代や乗組員の給与なども加算される。

ハンターからすると、高くはないが、使い捨てとなるとちょっと

な。

頭が痛い。

カイトは、金の事なんて全く気にしない。俺に投げとおしまいだ。ヨークシンで、マフィアの金でも掠め取るか。蜘蛛が暴れてる間に。

いい考えな気がしてきた。蜘蛛は、現金に興味はないだろう。

俺はもう犯罪者だし、倫理観とかは、おかしくなっている。

これからも、無茶ばっかやりそうだし、つき合わされそう。

蜘蛛たちとの騙し合いで、度胸のレベルが上がったのもある。

「まー、先の事は後回しにして、明日になったら登録行きますか」
「そうだな。金も稼ごう」

翌朝、受付に向かった。ずらりと見えない所まで並ぶ、筋肉マツチヨの群れ。

ダルイ。何コレ、並ぶの？ マジで……。闘技場舐めてた。こんなにいるとは。

隣を見ると、面倒臭そうに、眉を寄せている。

「やめたくなくてきた」

「やめない。場所を譲ってもらおう」

カイト君、性格変わりましたね。

俺は、戦闘以外では、かなり強引に物事を進める。その影響だろうか。

受付正面に行き、並んでた男たちを片っ端から殴り飛ばした。

念は使っていないし、手加減してるから、死なないと思う。たぶん。

今更、そんな事は気にしないけど。

誰もいなくなった所で、受付を済ませた。受付の人は引いていた。ゴメンナサイ。

すぐにリングに呼ばれ、一回目、二回目共に、適当に蹴り飛ばし

て上に登る。

一日二回、戦えるなら、すぐ200階に着きそうだ。

二人で適当に戦って、180階まで登った。周りの真面目な選手の方、本当にスイマセン。

腐ってもハンターなんだから、200階に登れるのは当然だしね……。

180階で勝利し、財布を思っただクホクしていると、ゴンに見つかった。

TVでカイトを見て、探しに来たんだそう。俺のは見なかったの……？

「タロー！ 会いたかった！」

「ゴン君、ひさしぶりだね。元気にしてた？」

飛ばされる勢いで抱きついてきた。ゴン、強くなった事を忘れてるね。

しかし、可愛い。尻尾が見えるようだ。ぶんぶん大きく振られる尻尾が。

頭を撫でて、癒しタイムに突入する。やっぱり、生はいい。

「ゴンじゃないか。なんだタローは見つかったのか」

「カイト……！」

ああ、俺の癒しが……やっぱり、カイトの方がいいんだね。

端でいじけていると、ゴンに変な目で見られた。更に凹んだ。

二人で、ゴンの念修行の話聞いた。まだ、基本中の基本をやっている所か。

バカをやるのは、もう少し先のようだ。

じゃあ、発の話はしてないのかな。

修行風景は覚えてないので、どこまで進んだか細かい所がわからない。

俺は常時展開型の能力者なので、ゴンに隠すのは、かなり面倒だ。

可愛くおねだりされると、しゃべりそう。

ウイングさんと話しをしないと、念の事をどこまで、バラしているのか、さっぱりわからん。

考えに耽っていると、ゴンが真剣な表情で、いきなり黙り込んだ。さつきまで、元気に話してくれてたのに。

今にも泣き出しそうな瞳で、俺たちを見つめる。俺は、優しく諭すような声で問いかけた。

「どうしたのかな、ゴン君。ゆっくりでいいよ、話してごらん？」

「ハンター試験の時に、殴られて、それで、オレ……貰ったキーホルダー、盗られて」

「誰に盗られたんだ？」

「……………ヒソカ」

ヒソカの野郎、そこまでしゃがったのか。そこまで腐っていたのか。

話しが終わった途端、ゴンの目から、涙がボロボロとこぼれだす。拳を握りしめ、悔しそうな表情でうつむく。

カイトが抱きしめて、胸を貸す。そつと頭を撫でて、ゴンが落ちて着くのを待っている。

「泣かないで、ゴン君が悪いんじゃないんだから」

「でも、ごめ、ごめんなさい。せつかく、タローがお守りだって……くれたのに。オレ、大事にしてたのにっ！」

悲鳴のような嘆きを叫ぶ。カイトにしがみつき、服を握り締め、ただ泣き続ける。

二人で何度も慰めるが、ゴンの嗚咽は、なかなか収まらない。

フツフツと、怒りが心の底から沸き上がってくる。許さない、ヒソカ。

殴るだけなら、何も言わない。だが、子供が大切にしている物を盗るなんて、最低だ。

殺す、絶対に殺す。

カイトも、静かに怒っている。オレと同じく、ヒソカを殺すつもりだ。

さっきまでの冗談半分の話とは違う。

最後の役目だけは、果たしてもらおう。その後に必ず。

「ゴン君、盗られたなら、取り返せばいいよ」

「怒ってない？」

「怒る事じゃない。盗られたからって諦めるな。ぶん殴って取り返してこい」

「うん……そのために、ココに来てるんだ」

俺が、ゴンに渡したキーホルダー。利用するつもりだった、ゴンを。

蟻で、ゴンなら主要な位置にいるだろうと、予想して渡したんだ。そこまで大事にしてくれるとは、正直思わなかった。

どうにもならなかったら、見捨てるつもりだった。俺はヒソカと同じ最低野郎だ。

だけど、今までカイトやジンさんと共に、見つめてきた。俺たちはゴンが可愛い。

子供のように、年の離れた弟のように。想い方は違う、でも大事な事には変わらない。

今なら、物語でカイトが何故、ゴンを見捨てなかったのか、よくわかる。

見捨てる事などできない。見捨てて、死なせる事などできない。

蟻で飛んできたら、殴つてでも送り帰す。

カイトが反対しても、絶対そうする。檻に閉じ込めてでも、ついでにこさせない。

決意を固め、ゴンを見つめる。目はまだ赤いが、涙は止まったよ。うだ。

俺たちが笑いかけると、ようやく、欲しかった笑顔をくれた。

ヨークシンは、俺とカイトのせいで、物語通りには進まないと言

んでいる。

クロロは俺たちの事で、誰かが囮にされた時の行動方針を見せている。

パクノダは、きつと全員連れて、クラピカの元へ行くだろう。死なせたくないので、ゴンの命だけ気にする。

後は知らん。酷いかもしれないが、それが本音だ。

キルアはゾルディックだから、そこをバラせば殺されないだろう。クラピカは、自分自身でなんとかしてもらおう。それが復讐をやるって事だ。

俺って本当に、クラピカには冷たいな。嫌いな訳ではない。ただ、ゴンを巻きこむのは、ちょっと許せない。

「友達できたんだ。カイトとタローに会ってほしい」

「いいよ。お願いするね」

「案内を頼む」

「うん！ こっちきて。部屋にいるんだ」

可愛いゴンの案内で、銀のゾルディックに会いに向かう。さて、ヒソカの戦績を調べないといけない。フロアマスターに挑戦できるなら、外で殺らないと。

とても、楽しみだ。

ヒソカ殺害計画に想いをめぐらせ、可愛い影を追っていった。

第37話

「キルアってホント凄いな！」

ゴンの部屋へ案内される道すがら、俺たちはずっとゴンのキルア自慢を聞いている。

同年代の友達の存在が、よほど嬉しくてしょうがないらしい。手を大きく振り、表情をくるくる変えながら、いかにキルアが凄いか説明してくれる。

正直、同じ内容の繰り返しが多い。

だが、そんなゴンの話す姿を見るだけで十分、俺たちは楽しい。

「ゴン！ お前どこ行ってたんだよ」

「キルア！」

こちらに走ってきたのは、細身の少年。癖がつき、自由に跳ねる銀の髪。つり上がった猫目の瞳をしている。

不機嫌そうに、俺たちを見るキルア・ゾルディック。

「コイツら、誰？」

「ハンター試験の時、二次試験官やってたカイトとタローだよ」

「ああ、あの時の。ゴンがずっと話してたヤツらか」

俺たちの事をどんな風に話していたんだろう。いつか、教えて欲しいな。

キルアは俺たちにを睨みつけながら近づいてくる。

目を細め、上から下までじっくり観察して、鼻で笑った。

「たいしたことなさそーじゃん」

「そんなことないよ！ 二人ともすつごく強いんだ」

見たことないのに、そんなことわかるの？ あ、カイトはあるか。

ゴンの中での俺たちは、ドンだけ凄いな。幻想を砕きたくないから、ほどほどにしてほしい。

キルアは、俺を指差しながら、大きな声で言い切った。

「特にコイツなんて、すつげー弱そー。強いとかありえねー」

ピキツと額の血管が浮き上がる音がする。本気で殴りてえ。

いや、ダメだダメだ。落ち着こう。相手はまだ子供。子供に大人が本気になっちゃダメだ。

深呼吸して、冷静になろう。うん。

必死に、怒りを抑え、自分に言い聞かせる。

そんな俺の努力を知ってか知らずか、キルアは更にたたみ掛ける。

「しかも、すつげーチビだしさ！」

「……………へえ、チビ、ねえ」

血管が切れる感触がした。

人が気にしている事を、ずけずけと…………お前こそ、チビのくせにさ。

いいよ、やってやる。チビで弱そーな俺が、叩きのめしてあげる。

「タローー!!」

不穏な気配を感じたカイトが、腕を掴んで、正気に戻してくれた。

危なかった。カイトが抑えてくれなかったら、確実にナイフを抜いていたな。

俺もまだまだだな、こんな挑発に乗りそうになるなんてさ。

ゴンが俺に持っている、優しいお兄さんというイメージ。そのイメージを壊したくない。

こんなお子ちゃまの挑発で、本性が知れたら大惨事だ。

「キルア」

「ゴン君、その子を紹介してもらってもいい？」

「あ！ 忘れてた」

ゴンを介して、キルアと挨拶を交わす。キルアは嫌そうに名乗り、そっぽを向いた。

あれか、嫉妬してるのかな？ 大事な友達が取られる、とでも思ってるのかも。

結構可愛いな。

「コイツら、部屋に呼んだわけ？」

「うん。もつと話しがしたいんだ」

二人に案内され、部屋へ着くと、思わず唾然とした。

ありえん、なんだこの部屋は……汚いにもほどがある。

服がいたる所に脱ぎ散らかされ、お菓子のクズやペットボトルが、ゴミ箱から溢れている。

床にはホコリが溜まり、鏡に至っては指紋がベタベタつき、本来の用途に使えるとは思えない。

思わず頭を押さえ、ため息をついた。

これは、説教だな。いくらなんでも酷すぎる。

「ゴン君、それにキルア君。そこに正座しなさい」

「なんだよ、いきなり」

キルアは不満を示したが、ゴンに促されてしぶしぶ正座した。

俺は二人の正座をじっくり眺めた後、説教を開始する。

内容は、ゴミをゴミ捨て場に持っていけ、掃除機をかける、など超基本的な事ばかりだ。

俺はたいがいの事は許せるが、汚いのだけは許せない。どうしても我慢ができないのだ。

ゴンはジンさんにそっくりだが、そんな所まで似てもらっては困る。

掃除させるのは当然だ。それよりも、掃除する習慣をつけないと、将来は汚部屋の住人。

ゴンもキルアも家を出たなら、掃除くらい自分でやらないとね。長々とした説教が終わると、キルアがポツリと呟いた。

「口うるせー……どこの説教ババアだよ」

拳と足に力を込め、なんとか踏みとどまる。蹴り飛ばさなかった俺を褒めてほしい。

コイツ、全然反省してないな。

気を取り直し、全員で大掃除を始める。呆れる事に、部屋に掃除機すらなかった。

ありえん、コイツらマジでありえん。

キルアの部屋に途中で確認に行くと、ゴンより酷かった。執事に全部任せてたなら、当たり前かもしれない。

シルバにも説教をしたくなった。掃除の仕方くらい教育しとけよ。極端な育て方してるから、こういう子供になるんだ。

夕日が沈み、夜になってようやく終わった。

「綺麗になったね。二人ともお疲れさま」

「ゴンもキルアも、これからはちゃんとやれ。ホラ、飯だ。食え」

「やったあ！」

「うまそー！」

カイトの用意した大量の夕食を、欠食童子のごとく平らげていく。気持ちのいい食いつぶりだ。まともな食べ物を食べていたのか、と心配になる。

しかし、小さな身体のどこに、それだけ入るんだか。

食事が終わり、食後のお茶をすすっていると、ゴンがモジモジしながら質問してきた。

その姿に萌え死にしそうになった。ゴン、可愛すぎる。

「今まで二人は何してたの？」

「今までか。それは試験からかな、それとも最初に会ってから？」

「最初に会ってから」

そう言われても、色々ありすぎて、話しきれない。何をどう話せばいいのやら。

思い出せば出すほど、元ヒッキーの人生とは思えない。正に波乱万丈。自叙伝が軽く一冊出来そうだな。

「そうだな。ジンをタローと捕まえたな」

とてつもなく、簡潔だな。オイ。

ジンの名前を聞いて、ゴンの瞳がキラキラと輝きだした。

「どうやって捕まえたの？ 親父はどんな感じだったの？」

ゴンから、矢継ぎ早に質問が飛び出す。

一つ、一つ詳細に答えていくが、質問が止まりそうにない。

でも、ゴンが聞きたいならいくらでも。そんな気持ちで、俺たちはゴンにつきあった。

質問が修行内容にまで及ぶと、キルアまで飛びついてきた。

地獄の特訓を、どこまで答えていいのやら。死の寸前まで追い詰められた、とか言ったら殺されそうだしな。

もちろん、ジンさんに。念の修行も、俺のは特殊すぎるしな……。

核心はさけ、あたりさわりのない、修行内容だけ答えていく。すると、意外な物を欲しいと言ってきた。

ピアスが欲しい、と。

「うーん。子供のゴン君たちには、まだ早いと思うな」

「身長が伸びなくなるぞ。タローはそれで止まったんだ」

嫌な事言っね……でもまあ、修行のやりすぎで身長が止まったのは、確かだろう。

やりすぎる前は、少しづつだけ伸びてはいたのだ。

身長が止まると聞いて、欲しい欲しいと騒いでた二人が黙り込ん

だ。

うん、男の子だものね。当然だ。

「どうして欲しいのかな？　今のまま修行を続ければ、必要ないと思うよ」

正直、今の成長スピードは俺たちから見ると、十分早いと感じる。才能に溢れ、努力もしている。焦らなくてもいい。物語のように、危険な所には近寄ってほしくない。

ヨークシンやG Iにだって、本当は行かせたくないんだ。危険な事は、俺たちが必ずなんとかする。

子供らしく伸び伸びと、友情を育みながら、楽しく生きて欲しい。そんな俺の思いとは裏腹に、ゴンの返答は、とてもゴンらしいものだった。

「強くなりたい。オレ、もっと今より強くなりたいんだ！」

そーきたか。まあ、ゴンならそう言うよね。

あー、どうするかな。ピアス以外でってなると、修行ってことだろな。でも、ウィングさんいるしな。

困りきってカイトを見ると、嬉しそうに笑っていた。

俺には何もいわず、勝手に返事をする。

「修行なら付き合ってもいい。それでいいか？」

「いい！」

「わかった。だが、俺たちは厳しいからな。覚悟しとけ」

「うん！　ね、キルア」

「家族でなれてるから、そーゆーの平気」

「じゃあ、明日からだな。今日は遅い。もう、寝ろ
おやすみなさいと走り去る、子供たち。

その後ろ姿を見ながら、ため息をつく。

あーもう、勝手に約束するなよ。いいけどさ、ゴンが強くなりた
いっていうんだし。

念は、ウイングさんの方がいいしな。とすると、念を使った訓練
をカイトにやらせるか。

俺が考え込んでいると、隣から声がかかる。

「内容はどうする?」

「ウイングさんと相談するしかないね。だいたい、決める前にやる
って言わないでよ」

「タローも同じ事を言ってたじゃないか。強くなりたいてな」

「うるさい!」

バカを蹴り飛ばしながら、方策を練る。

カイトは絶対に訓練しかやらないよね。ウイングさんとの交渉は、
きつと俺まかせだよな。

頼むとか言つて、いつでも面倒な事は、俺に全部投げるんだから。
どうしようもないヤツだよ、全く。

「明日はとりあえず、体力作りでもさせよう」

「そういえば、アイツらは物語とやらにいたのか?」

「あー……部屋に戻って説明するよ」

どこまで話せばいいのやら。洗いざらい言うべきか。

GI後に飛んできたなら、送り返したいし、今のうちに言っとくか。
決まりだな。

子供たちの事を考えながら、俺たちは自室へと戻っていった。

第38話(前書き)

タロー振り回されるの巻。

第38話

翌朝、俺たちはウイングさんを急襲し、説得を行った。渋る彼を、なんとか説き伏せ、陥落させた。

念修行はウイングさん。体力作りと、戦闘訓練をカイトが担当する。

ズシも、一緒に加わるそう。物語より、仲良くなるかもしれない。

部屋に戻って、修行内容をカイトに考案してもらおう。

「タロー、できたぞ。応用は覚えるたび、増やしていく予定だ」

メニューを受け取って、パラパラと読んでいく。

マジで、これやるのか……てか、これって物語よりたぶんキツイし。

子供時代に、この内容をやっていいの。不安だ。

カイトはジンさんのせいで、感覚がおかしいんだよな。

師匠に相談するか。いや、師匠を連れてくるか。二人の間を往復する事になりそうだし。

師匠とウイングさんで、この内容を検討してもらおう。

「不安だから、師匠を呼んでくる」

「どこがだ？ 俺の時より軽いぞ」

「カイトは基準がズレてるからね。師匠とウイングさんに見てもらおう」

不思議そうなカイトは放置して、師匠の元へ飛ぶ。まともに見えるから、タチが悪い。

ランタンのマントが閉じた瞬間、ナイフが飛んできた。

慌てて避けると、徐々にジンさんと師匠のバトルが繰り広げられ

ている。

あー、またやってんのか。でも、今回は連れて行かれると困る。

「ジンさん、止まらないと、ゴンを無理やり連れて来ますよ!」

俺がそう叫ぶと、ようやく二人の動きが止まった。まったく、よく飽きないな。

まだやり始めた所らしく、部屋はそんなに荒れてはいない。

「どうしたんです。また何か相談ですか?」

「まだ、リーシャンにベツタリなのか」

「俺の勝手です。ほっといて下さい。修行をつける事になったので」

「ゴンのか?」

「ええ、カイトがメニューを組んだんですが、少し不安なので」

ジンさんが寄こせと言って、メニューを無理やり奪い取る。

諦めて様子を見ると、嬉しそうに読み出した。

しばらく考え込んだ後、ペンを取り出して内容を書き変えていく。

隣で覗き込む、師匠の表情はどこか暗い。

「お前ら甘いな!。コレでやれ」

「甘いつて……勝手に変えないで下さいよ!」

「ジン。さすがにその内容は、子供には耐えられません」

「俺の息子だ。やれる」

返却された内容に、目を通していく。ほぼ全部、変わってるじゃないか。

うわー、最初より断然キツイ。いや、コレ死ぬんじゃないか。

てか、天空闘技場でやるの無理。

いくらなんでも、あんな所で毎日往復は嫌だ……キルアは逃げるな。

基本的に修行は嫌いだよ、アイツ。逃げられない場所用意しないと。

念修行の方も勝手に決めてるし。俺たちが全部教える前提で書いてあるな。

ズシごと、ウィングさんを連れ出さないとダメだな。そもそも、

この内容でウイングさんが了承すんのか。

無理だろう。あの人は時間をかけて、じっくり教えるタイプだ。

「ジンさん、念の師匠はウイングさんなんですよ。ここまで勝手に決めれません」

「ウイング？」

「ビスケちゃまの弟子です」

ポンと手のひらに拳を打つと、携帯で電話をかけ始めた。相手はもちろん、ビスケだろう。

電話越しに、ジンさんを怒鳴り散らしているようだ。

弟子に了承させる、といきなり話し出しているのだ。ビスケが怒るのも無理はない。

用件だけ伝えて、無理やり電話を切りやがった。本当に、了承させたのか？

「やれって言つといた」

「ありえない……強引すぎる」

「タロー、諦めなさい。こういう男です」

この野蛮人、息子に影から関わりすぎだろ。ミトさんに預けた頃から、盗撮やってたみたいだし。

もしかしたら、見つけて欲しいのかもしれない。

見つかったら、ジンさんは逃げる。話しを聞くには、捕まえないといけない。

俺たちの時は、全力で逃げてなかった。でも、ゴンからは全力で逃げると宣言している。

ゴンが相当強くないと、ジンさんを捕まえるのは無理だ。

なんつー回りくどい愛なんだ！

父親の手のひらの上で転がされる息子。嫌な関係だ。ゴンが可哀

想になつてくる。

「はあ、この下準備、全部俺がやるんだよな。」

「カイトが手伝うわけないしな、ウイングさんやビスケちゃまの怒りも、当然俺に来るんだよな！」

「理不尽だ、とてつもなく理不尽だ。」

「タロー、定宿を使うんでしょう？ 僕が支配人に話しを通しておきますから」

「師匠……師匠だけです。俺に優しいのは。ジンさん、経費は負担してもらいます。いいですね！」

「ゴンもキルアも頼むから、死なないでくれよ。」

「将来、ジンさんを殴る時は、手伝ってやるからさ。」

「天空闘技場に戻ると、疲れた顔をしたウイングさんが待っていた。ビスケからもう連絡が、来たのだろう。師匠命令で、無理やり了承させたと見える。」

「疲れる気持ちは理解できる。自分のやり方に口を出されたのだ。」

「平身低頭し、ウイングさんへ謝罪を伝える。」

「すいません、うちのが迷惑をかけまして」

「いえ……なれてますから。謝らなくてもいいですよ。タローさんのせいじゃない」

「本当に申し訳ない。それで、修行の変更内容なんですけど……」

「ジンさんが勝手に組みなおした内容を、メニューを見ながら、説明していく。」

「ウイングさん、俺と同じ匂いがする。友達になつて語り合いたい。説明が終了すると、予想通り顔がくもる。バカげているとも言いたげだ。」

「俺もそう思う。」

「本気で、これをやれと？」

「すいません。これでもカイトの修行時代よりは、易しいんです」

「それは本当ですか……カイトさんは、どうして生きてるんですか」

アイツがチートだからです。

少なくとも、身体を切り落とされたり、砕かれて、死の半歩手前まで行く事はない。

根性も、才能も常人では考えられないほど、持っている。

しかし、ズシがコレに付き合おうと死ぬ。

そこら辺も踏まえて、更に内容をつめていく。

メニューを元に、ウィングさんがズシ用を組みなおす事になった。キルアはズルイと騒ぐに違いない。脅して黙らせよう。

「準備に少し時間がかかります。その間に荷物をまとめておいて下さい」

「能力がバレてしまえますね。いいんですか？」

「一番知られたくない人たちには、ほぼ全てバレてますから。今更、気にしません」

ようやく、固まった。今から整える準備を想うと、頭痛くなる。ジンさんのカードを奪ってきてるし、金の心配だけはしなくていい。どうせなら、湯水のごとく使ってやるか。

ついでに、少しちよるまかそう。

カイトに会いに行くと、子供たちに雷が落ちていた。正座をさせられ、説教を受けている。

ズシまで一緒に正座している。可哀想に、巻き込まれたんだな。

ダメだと言ったのに、試合を申し込んでいたようだ。

勝手に試合を申し込んだから、そんな理由じゃないだろう。カイトがそんな事で怒るはずがない。

まあ、勝手試合を組んだ事が後ろめたくて、カイトに嘘をついた。そんなところだろう。

バカだな、カイトに嘘がバレないと思ってたのか。

「カイト、そこまでにしてあげて」

「まだ、反省してない。何か罰でも与えないと許せん」

「まーまー、おやつ抜きでいいでしょ。全員、反省したよね？」

子供たちが、大きく首を上下させる。

「もう、嘘はつくな。いいな」

「うん」

「わかったってば」

絶対、反省してないな。カイトが息を吐き、肩を落として開放する。

念修行の続きを行う姿を眺めながら、顛末てんまつを話す。

「どうして、そうなるんだ」

「嫌なら、あの人を説得してきて。今なら、師匠と遊んでる」

「無理だ」

「だよねー。誰が、ジンさんを止められるというのか。そんな人がいるなら、見てみたい。」

現実逃避はおしまいにして、予定を説明する。

俺が準備している間に、カイトが子供たちに荷物をまとめさせる。

準備ができたなら、定宿へ引越して修行場へ。簡単に言うところなところだ。

「準備ができるまで、修行はどうする？」

「あー、そうだな。ここじゃ無理だし、勉強させて」

「勉強つて、どの教科を教えるんだ？」

「ゴンには足し算、引き算、九九を、キルアには簡単な敬語を完璧に」

「そんな事もできないのか」

「頼むよ」

呆れるカイトを残し、準備に向かう。しばらくは、飛び回って休む暇もないだろう。

勉強を頼んだのは、ゴンの成績表を見ていたから。あれではこの先心配だ。

うーん。いい機会だし、俺が座学を教えるか。

せめて中学生レベルにはさせよう。生きていく上での基本中の基本だ。

戦うばかりじゃ、いい大人にはなれない。休憩時間を利用すればいい。

頭も身体も、全て徹底的に鍛えてやる。

教科書の調達もやらないと……。パソコンの使い方も教えるか。

ハンターになったんだ。書類作成の機会もあるだろう。決まりだな。

地獄の修行開始のベルが鳴る。

血反吐を吐きながらも、子供たちは彼らに着いていく。

タローの授業が、子供たちに人生最大の恐怖を与えたとか。

子供たちはその内容を、死ぬまで口にする事はなかった。

第39話

ジンさんの口座を覗いた時は、腰が抜けるかと思った。尋常じゃない金額が入っている。

修行経費とは別に、息子の教育料を五十億ほど引き出しておいた。蟻の経費になる。

これくらい盗っても、僅かに減った程度。ジンさんは気づきもしないだろう。

この資金を元手に、修行の準備を開始した。

修行場所を決め、確保した。薬品や食料、衣料を集めて定宿に溜め込んだ。

このたった一行を行うだけで、一週間もの時間が必要だった。ほぼ不眠不休で、世界中駆けずり回った。

ジンさんの作成内容には、様々な副次効果がある。怪我や、疫病などの対策が必要だ。

いくらチートとはいっても、子供だ。苦しみを少しでも和らげてあげたい。

修行内容は変えられないので。

修行のたまかな一日のスケジュールは以下の通り。

午前中は定宿の修行場で念の基礎訓練。ウィングさんが担当する。お昼になったら、食事後、座学の授業。俺が担当する。

午後には、世界各地での念の実践訓練。カイトが担当する。

修行内容は、自分がなんで死なないのか。そう疑問を持てる程度。

これを、八月末まで行う。今は三月なので、約五カ月続く。

物語より、強くなる事は保証できる。

ゴンたちはヨークシンに必ず行くだろう。

その時にゴンにヒソカを殴ってもらう。天空闘技場ではやらせない。

生き残らせる為の枠組みは作った。

その為にも、蜘蛛から逃げられる程度には、絶対なってもらおう。

準備が終わった後は、俺は心身ともにボロボロになった。

「タロー……大丈夫か？ 今にも倒れそうだが」

「着いたら少し寝るよ。最初に念修行やるし」

心配するくらいなら、準備を手伝えと言いたい。絶対やらないだろうけど。

カイトに子供たちを呼びに行かせ、テーブルに突っ伏して休息をとった。

肩を揺さぶられ、幸福から叩き起こされる。ダメだ、全然寝たりん。

周りをみると、子供たちとウィングさんが、荷物を持って集まっていた。

目を擦りながら立ち上がり、書類を手に説明を開始する。

「こんな感じかな。ココではできないから、移動するよ」

「話しがでかくなってねーか。付き合っがってのが、そこまでいくワケ？」

説明が終了すると、キルアが不満をこぼした。

うん、気持ちわかる。俺たちも、そんなつもりはなかったんだ

よ。

ゴンの友達になって、俺たちに修行を頼んだのが運のツキだね。キルアは物語でも、運に恵まれてなさそうだ。

「諦めて。やると言ったらやる」

「ヒソカはどうなるの？ オレ、絶対取り返したい」

「うん、それは考えてある。まず……」

ゴンに答えようとした途端、カイトが俺の肩を掴み、黙らせた。カイトの様子がいつもと違う。

周りを見渡し、警戒している。腰の長剣に手をやり、いつでも抜ける用意までしていた。

カイトは勘がいい。これは、何かある。

「……カイト」

「円を広げて、ピクシーを呼び出せ。何か変だ」

「わかった」

蜘蛛でも来たか？ だが、蜘蛛が来るなら、もう来ているはずだ。

ピクシーの能力を知っている。逃げ足も知っている。

俺たちを狙うなら、時間などかけない。果敢即効で殺すはず。

では、誰だ。ここまでカイトを警戒させる相手は。

子供たちも黙り込み、周りを警戒し出した。ピクシーが造った地

図を覗き込む。

地図に写っていたのは、キルアと良く似た銀の髪。

「オヤジ……」

思わず、頭を押さえた。

次から次へと……あれか、天中殺か。神様は俺に恨みでもあるのか。

ゾルディックねえ。シルバが息子の様子を見るのに、現地に来るとは思えない。

絶まで使ってるし。

十中八九、仕事だ。カイトが変だというなら、ターゲットは俺たち。片方が、もしくは両方が。

どうせ、依頼人は蜘蛛だろう。

はあ、頭が痛い。支配人とまた話さないと。

「どうする?」

「ゾルディックは放置でいいよ」

「オヤジを舐めるな! 殺されるぞ」

「いや、大丈夫だよ。仕事をさせなきゃいいだけだから」

「……………簡単にいくわけねー」

「問題ないよ」

改めて地図を見ると、ゼノ、イルミ、カルトの姿もある。このちっこい爺さんはマハだろうか。

なんという、ゾルディックオールスター。

クロロは、ゾルディックにいくら支払ったんだ。前金とるよな、

確か。

今は配置段階。能力の事は、聞いてないな。

まあ、クロ口の嫌がらせだろうな。

この前の仕返しか。とすると対象は俺か。後でやり返さないとな。無限ループにハマってる気もするが。

放置すれば、問題ないと言うのは、俺の考えだ。

依頼人を消すか、依頼を撤回させるのが常道だ。しかし、依頼人は蜘蛛。

それは不可能に近い。

ランタンなら、いけるかもしれない。だけど、今回は使わない。彼らの殺しは仕事で、趣味ではない。

そこにつけ込む。

ただ、逃げればいい。そうすれば、ゾルディックは諦める。

逃げた相手を、延々と追い続ける。こんな、割りに合わない仕事はない。

破棄して、別の仕事を受けた方が楽だ。そう思わせればいい。

破棄すれば、もう二度と、ゾルディックは俺たちの依頼は請けない。

支配人の所がヤバそうなら、師匠の家に拠点を移せばいい。あの家は定宿より、やっかいだからな。

それでもダメなら、密林で過ごせばいい。風呂がないけど。

世界各地の用意した修行場は、そこらの情報屋には発見できない。ミルキも無理だろう。

機械や人間が存在しない場所。

そんな所で、どんな情報が漏れるというのか。移動はランタンでやるしね。

念の追跡もあるが、俺たちに関する情報は少ない。物品も余りないだろう。

どんな念でも、条件が必要だ。満たすのは難しいに違いない。

「ゾルディックは仕事を諦める」

「諦めるはずねーよ！」

「それは後で教えてあげる。とりあえず移動しよう」

「どうやってだよ……オヤジたちがいるのに」

「ああ、忘れてた。この子が運んでくれる」

悪魔全書を開き、召還する。空中に黒い塊が現れ、少しずつランタンの形へ。

くるりとマントを翻し、現れたかぼちゃ頭。

子供たちは呆気にとられ、凝視している。いやー、いいね。そのポカンとした顔。

「ランタンっていうんだ。移動系を持つてる」

「タロー、早くしろ」

「りょーかい」

ランタンがマントを広げ、部屋にあるモノ全てを包み込む。

マントから出ると、そこは定宿。子供たちの驚愕は続いている。可愛いなー。

大人になったら、見せてあげる。ずっと撮ってるからね。その時が楽しみだ。

「さて、これが俺の発だよ。ゾルディックが問題ないのは、わかったかな？」

「……………ああ」

放心状態から抜けられない子供たち。放置して、大人たちは動き出す。

定宿で、最大の部屋を取っておいた。一日で会社員の給料が吹き飛ぶ。

ジンさんの金で、十年分前払いした。

ココが修行の拠点であり、この先の生活の拠点でもある。

中央にダイニングがあり、放射状に部屋が広がっている。

個室は七つあり、一人一部屋割り当てる。各部屋に、風呂とトイレは備え付けられている。

勉強部屋も用意してある。

子供たちを叩いて、割り当てた部屋へ、荷物を仕舞いに行かせる。詳細な修行内容は教えていない。驚く顔が見たい。

運んであった荷物から、修行着を取り出す。修行と言えばジャージ。異論は認めない。

衣類専門の念職人に、大急ぎで作らせた。オーラと体力を少しずつ回復する効果がある。

丈夫さも折り紙つき。弱い魔獣に噛まれた位じゃびくともしない。靴には探知効果を付けた。迷子になっても、場所がわかるように。薬や飲料も、念で造った物を大量に用意した。

戻った子供たちに、ジャージと靴を渡し、着用するよう命令する。

「ダサイだの、うつとうしいだの、ほざいてるが無視だ。命の為だ、従ってもらおう。」

無理やり着せた後は、オーラを絞り出す。倒れる寸前までやらせる。

「ウイングさんは諦めたのか、もう何も言わない。」

色々指示した後、俺は本格的に休息を取る。一週間動きっぱなしだ。眠い。

「ゾルディックが来たりもしたが、どうでもいい。ただ、眠い。」

「カイト、ウイングさん。寝ますから、念修行終わったら起こして下さい。」

「ああ、ゆっくり寝ろ。」

「お疲れさまです。」

子供たちがまた騒ぎ出した。

「俺だけ休むなとか、お前ら鬼か。俺は今まで、お前らの為に動き回ってたんだぞ。」

「クソッ、また説教したくなつた。いいや、寝よう。」

「全てを放り投げて、布団に潜り込んだ。」

「カイトに蹴り飛ばされ、顔を洗う。念修行が、もう終わったのか。一瞬しか、寝てない気がするんだが。」

「意識をはっきりさせて、子供たちを勉強部屋へ連れて行く。」

「疲れたとか、ほざくガキ共にイライラする。お前ら、始まったばかりだぞ。」

「俺の時間は勉強。最低ライン、ハンターに必要な事を叩き込む。」

「「「ええ!!」」」

「黙ってイスに座るように」

嫌々席につく子供たち。その姿に笑顔がこぼれる。チヨロイな。机の上に、分厚い紙の束を置いていた後、内容を話す。

「今日はテストだ。まずは、何が解ってないのか調べる。一時間以内^に全て解くように」

キルアが逃げだそうとした。イスの下には、軽い足止め罫。足の動きだけを封じる。

俺から逃げれるとでも？

動かない足に、キルアの顔に焦りが浮かぶ。無理やり座らせ、腰に特別製の鎖を巻いていく。

念が上手く練れない効果がある。しかも、オーラを絞り取られた子供には、絶対はずせない。

「逃げれば、鎖を増やす。そのまま、次の修行に行ってもらおう」

「殺す気かよ！」

殺す気ねえ。死なせたくないから、ここまでやるんだよ。

ニツコリと、笑顔を浮かべて黙らせる。

「死ぬ寸前で助けてあげる。時間内に終わらなかつたら、^{おもい}錘を出来なかつた枚数分、着けるから」

血相を変えて、子供たちが机に齧りつく。顔は青くなり、ペンを
持つ手が、僅かに震えている
出来てもつけるけどね。全部は無理だろう。幼稚園クラスから、
大学入試クラスまである。

カイトは容赦しないだろうし、錘をつけたままだと大変だね。

「白紙が一枚でもあつたら、夕飯抜きね」

脅しをつきつけ、イスにもたれる。子供たちから更に、血の気が
引いていく。

すごい顔してるねえ、半分冗談なんだけどな。真面目に答えな
かったらやるけど。

がんばってね。心の中で声をかけ、子供たちを見守った。

第40話

ようやく、授業が終わった。キルアの逃亡回数は、六回。もちろん未遂に終わった。

そこまで、勉強が嫌なのか……。

ズシとゴンは真面目に受けていたのに、しょうがない子だ。

鎖をタスキ掛けにした姿は、ちょっと可愛くて、写真を何枚も撮ってしまった。大きくなったら、このネタでからかおう。

テストを見ながら学力を計っているが、なんというか全員ダメダメだ。

小学四年生レベルが誰も解けていない。ゴンに至っては一年生の物すら怪しい感じた。

これを最低限のハンターレベルまで、持っていくのか……自信なくなってきた。

方針を決めた。算数と国語、地理を中心に、各自に合わせた内容も教える。

できれば、政治経済も組み込みたかったが、時間がたりない。

ゴンは一般常識を教えて、簡単なネット操作が出来るようにしたい。

多くは求めない。

キルアには期待をしている。頭脳として育てたい。情報収集の仕方や戦術論などを叩き込む。

実家では、教えられてなかったようだ。ミルキまかせなのかな。

ズシはウイングさんの希望で、歴史や理科を加えてやっていく。苦手科目のようだが、やる気があるので伸びるだろう。

おもり
錘はズシが60kg、ゴンが200kg、キルアが250kg。

重くて動けない、なんて事はないだろう。

試しの門を開かれるのだし、軽く感じるかもしれない。

身長的事もあるので、加減をしつつ増やしていく。

白紙はあったが初日という事もあり、夕飯抜きは止めることにした。

次の時間はカイトが担当。といっても、今日は山へ放り込んで捨てるだけ。

飛んで来た場所は、活火山の山頂火口付近。

山は、起伏が激しい岩肌で、多数の火口から、岩が常に麓ふもとへと大量に流れ出している。

溶岩の影響で、空気温度が上昇している。とてつもなく暑い。息をしているだけで、喉がヒリヒリする。

子供たちに各自一本づつ、ミネラルウォーターを手渡していく。水がなければ、死ぬ。

ビックリしている子供たちに、カイトが最初の課題を言い渡す。

「夕飯までに麓まで降りて来い。急いで降りようとすると、火傷が増えるから注意しろ」

「オイ！ 俺はいいけど、ズシは死ぬぜ」

「死ぬ気でやれ。いいか、これは念の訓練だ。それを忘れるな」

「マジかよ……」

「泣きたくなってきたッス」

「間に合わなかったら、明日はおやつ抜きだよ」

「わかった！ 行こ、キルア、ズシ」

「……アンタら、鬼だ」

歩いて行く子供たちの後ろ姿を見送り、カイトと麓へ飛ぶ。

見上げる景色が懐かしい。俺たちが修行の時、放り込まれた山だ。

「鬼って言われた……考えたのはジンさんなのにさ」

「鬼なのは、おやつ抜き的事じゃないのか？」

野外の修業場所で、一番簡単なのがこの山だ。まだまだ序盤、ここで根をあげられては困る。

山の溶岩の中に、【ジェリー】と呼ばれるスライムもどきが生息している。

見た目はスライムだが、実際はゾウリムシもどきの集合体。形は変則的で近くにいる生命体を、無差別に襲って溶かし、吸収する。

切ろうが殴ろうが元はゾウリムシ。分裂するだけで、死ぬことはない。当たり前だが、溶岩並の体温を持っている。

コイツのやつかいな所は、溶岩とほぼ同化していて、襲ってくるまで肉眼では判別できない事。

オーラをほんの少し持っているので、凝か円で確認しながら進むしかない。

子供たちに円はまだ無理。凝を使うしかない。

やっと応用を覚えたばかりだ。きつと苦労するだろう。

「大丈夫かな。早めに気付くといいけど」

「問題ない。俺たちの時は水なしで、何も言わずに放り込まれたら？」

「ジンさんって情け容赦ないもんね」

「俺たちもそう思われてそうだな」

カイトと軽口を交わしつつ、子供たちを俺の地図で観察する。

まだ、凝を使うのは分かっていない。次から次へと襲ってくるスライムもどきを、がんばって避けている。

キルアは案外、アニキ肌のように。回避が遅いズシを、庇うように動いている。

ゴンは楽しそう。スライムに、素手で殴りかかったり、岩を投げつけてみたりと、色々試している。

熱いのに、大丈夫かな。

ズシは半泣きだ。不安になってくる。

中腹まで降りてようやく、凝を使うことに気づいたようだ。だが全員で同時に使用した為、オーラ切れを起こしている。

フラフラで、今にも倒れそう。

「予想通りだね。明日からは、順番に使ってくれればいいけど」

「朝に搾り取ったからな。気づいたんだ、次からはやれるさ」

この山の訓練は、凝を使うクセをつけるのが目的だ。

知らない場所や人間を見た時に、そのクセがないと生き残れない。GIでビスケは念字でそれを行っていたが、これはその実践版といった感じかな。

ジンさんは身体で覚えるという方針だ。

何も言わずにに放り込まれ、捨てられて放置される。

自分で気づいて試行錯誤を繰り返す、切り抜けるしかない。

よって、カイトの担当はそういう内容ばかりだ。

星が空に輝いた頃、ようやく子供たちがふもとへ到着した。服は大部分が焼けたり、溶けたりしている。髪も焼け焦げ、手足には火傷が無数にできていた。

ゴンはスライムを殴っていたからか、一番ヒドイ。皮膚がただれて、指がちゃんと動かせないようだ。

イヌガミを呼び出して怪我を治療していく。

「そいつもアンタの発なの？」

「そうだよ、イヌガミっていうんだ。仲良くしてあげてね」

「タロー、さわってもいい？」

「いいよ」

ゴンが毛皮を撫でると、イヌガミが巻きついた。ニコニコと嬉しそうに頬をすり寄せている。あまりの可愛さに、身もだえそうになった。

本性を知られたくないし、気をつけないと。

定宿に戻り、夕食を食べる。今日のメニューはカイト特製中華だ。冷菜の前菜に始まり、フカヒレスープ、エビチリ、焼飯など大量に並ぶ。飲茶までいつの間にか用意していた。

なんか、やたら料理にこるようになってないか。こんなところも具現系だよな。

カイトは、食事をかきこむ子供たちの様子に満足そうだ。

「タローは小食だからな。コイツらはよく食うから、作りがいがある

る」

「俺は見てるだけで、お腹いっぱいになるよ」

「ズシは大食漢ですが、この二人も負けてませんね」

眺める大人たちなど気にせず、子供たちは一心不乱に食べ続ける。その勢いは止まらず、カイトが再びキッチンへ消えていった。

この食事風景を見ると、備蓄が心配だ。十分用意したと思っていたが、到底足りなさそうだ。

すぐに注文しておかないと、数日で備蓄が底をつくかも。

デザートは杏仁豆腐まで、ペロリと平らげてしまった。

君たちのお腹はブラックホールだね……。

食事が終わると、実戦訓練。最初は全員でやる。強くなってきたら、カイトのみだ。

カイトはゴンと、俺はキルアと、ウィングさんはズシと組み手を行う。

組み手といっても、俺たちはウィングさんと違い、型は教えない。んなもん教わってないから、教えられない。ただの殴り合いだ。

ちよっといじわるだけど、ルールは大人を殴れたら終わり。

キルアはニヤニヤ笑ってこちらを見る。簡単だと思ってるようだ。心の底から、イタズラ心が沸き起こってくる。

ちよっくらいいジメてもいいよね。この前のお返しだ。

「キルア君。俺を殴れたら、チヨコロボ君を一年分あげるよ」

「マジで！ 後悔すんなよな」

嬉々として、拳を繰り出して来る。さすがにキレと速度はいい、
だけど俺を舐めすぎてる。

何のヒネリもなく、ストレートに向かってくるなんて。

ヒョイと軽く避けて、すれ違いざまに髪を撫でる。うーん、ふっ
わふわだ。

身体を震わせ、頭を押さえて、キルアは後方へ飛ぶ。俺の周りを
無音でゆっくりと歩み、影を増やしていく。肢曲だ。

大人げなく円を展開して、本体を殴りつける。

「……スリイ」

「大人はずるい生き物なんだよ」

「カイトは使ってねーよ！」

「カイトはカイト。俺は俺。弱いからね、なんでもありだよ」

「絶対、殺ってやる！」

キレた。殺気を飛ばし、完全に殺す気で挑んでくる。手を鋭く変
化させ、心臓を狙ってきた。

殺し屋はやめたんじゃ？ そう突っ込みつつ、回避して後ろへ回
り、肩をポンと叩いてから蹴り飛ばす。

もう一度、同じ事を繰り返すが、俺もまた同じく蹴り飛ばす。
壁にめり込んだキルアの表情が一変した。

顔がゆがみ、眉にはシワが寄っている。冷静さが消え失せ、焦り
が浮かんでいる。

こうなったら、いくら強くてもダメだ。

蹴られても、殴られても、立ち上がって向かって来る。だが最初

に見せたキレは、すでに欠片もない。
しばらく続けると、ぶっ倒れた。さすがはゾルディック。かなり長時間持った。

「もう、終りなのかな？ 強いキルア君」

嫌味を言うが、キルアは動かない。内心悔しさでいっぱいだろう。物語で弱い相手を舐める傾向があった。それを聞いたカイトが提案した。

一度、お前にボコボコにされた方がいい、と。

俺は弱く見えるし、実際弱い。オーラも少なく、腕力も無い。自信があるのは脚力だけだ。

キルアが万全の状態なら、こつも簡単には沈まないだろう。だが、万全でも、今はまだ俺を倒すことはできない。

俺は攻撃を避ける事だけを、訓練してきたのだ。力があるうと、当たらなければ効果はない。

どんなに強くなろうと、油断しない気持ち。それをキルアに教えたい。

「キルア！ がんばって！！」

隣からゴンの声援が聞こえた。視線を向けると、ゴンもカイトに殴り飛ばされている。

でも、キルアを見ていた。見ながら戦っている。

よそ見をするなどカイトに蹴られた。それでも、キルアの名前を叫び続ける。

キルアの身体がピクリと動いた。

手をつき、腕の筋肉を震わせながら、再び立ち上がる。

「絶対……殴つてやる」

猫目を細め、ニヤリと笑う。キルアに笑い返して、構える。今度は全力で相手をする。

深夜を迎えた頃。

子供たちが眠るように気を失い、ようやく一日目の修業が終わった。

治療をすませ、ベットへ運ぶ。

子供たちの表情は柔らかく、眠りながら微笑んでいる。

「長い一日だったね。明日、起きれるかな？」

「殴れば起きるぞ」

「カイトって過激だよ。そういうところ、ジンさんそっくりだよ」

「タローもリーシャンさんに似てるな」

「そうかな？」

「そうさ」

明日も早朝から厳しい修業が始まる。だけど、今はゆっくり休息を。

そう願いながら、大人たちの一日も終わった。

第41話

天才たちは凡人の努力を一瞬で越えていく。
その事は理解していた。理解していたはずだった。

「ありえん……………あのチート共め、どんだけだよ」

ゴンとキルアは五日も経てば、あの火山をたった二時間で、降りてくるようになった。

しかも、ズシを背負って。

俺は一人で降りるのに、一ヶ月かかった。死ぬ気で努力したというのに。

ゴンとキルアには、ズシを残して次の修行場へ進ませた。

ズシは火山で頑張ってもらう。二人と同じペースで進むと死ぬ。

難易度が上がったが、そこもたった一週間で突破された。

更に難易度を上げるが、三ヶ所目が持った時間は三週間弱。

啞然と立ちすくんだ。俺がかけた時間など、もう言いたくもない。

ありえないなんてありえない。そんなのわかってる……………でも、理

不尽だ！

才能をまざまざと、目前で見せつけられる。足元が崩れていくような気がした。

笑いながら戻ってくる子供たちに、殺意が沸いた。

「俺は一ヶ月かかったのに。才能とは恐ろしいもんだな」

「自慢にしか聞こえないよ……………」

殺意を込めて選んだ四カ所目は、薄暗い洞窟。
カイトが渋い顔をしてるが、気にしない。

この魔獣は卵生で、体長は低く、横幅が広い。ずんぐりむっくりな印象だ。いくつかの家族でまとまり、洞窟の中で集団生活を行っている。

魔獣は母性が強い種族で、卵や子に近づく者に容赦はしない。身体と同じ大きさの布を渡して、魔獣の巣へ置き去りにする予定だ。

ここは難易度がかなり高い。

洞窟は、蟻の巣のように無数に部屋があり、道も入り組んでいる。その上、深度もかなりある。

この辺りにある中では、最大の巣だ。

「今度の課題は、怪我をしないで洞窟を出る事だ。布に周をかけて、身を守れ」

「教えてくれるんだ……めずらしいな。なんかたくらんでんの？」

「教えないと死ぬからな。まあ、がんばれ」

「ねえねえ、次はどんなところなの？」

「きつと、楽しいと思うよ」

瞳を輝かせるゴンに笑いかけ、ランタンのマントを広げる。

マントから出ると、ゴンとキルアの表情が固まった。

二人の顔を確認すると、カイトと共に上へ飛び、腕をつかんでその場から消える。

魔獣たちは、二百匹ほど周りにいた。

捨てた場所は巢のど真ん中、卵がある子育て部屋だ。すぐさま、殺気立った魔獣たちに襲われるだろう。

俺たちが飛んだ場所は、その子育て部屋のすぐ隣。近くから、二人の叫び声が聞こえる。

「行ってくる。後で迎えに来てくれ」

「りょーかい」

今回はさすがに危ないので、カイトが傍に隠れて様子を見る。

俺はもうカイトの時間は、送り迎えしか行わない。授業の下準備があるからだ。

授業内容の準備ではなく、イタズラ小僧の対策だ。

キルアは頭がいい。実家での教育の成果もあるのだろう。授業の罠を次々と攻略して、脱走しようとするのだ。

もちろん逃がさないが、諦める様子はない。

罠が攻略されるので、俺も新しく考案して設置する。

完全にイタチごっこだけど、これも訓練だと思ってる。

キルアは、たまに考えつかない方法で、罠を突破していく。その発想はなかったと、関心してしまう程だ。

修行が始まってから、キルアの身体から鎖が解かれた事はない。むしろ、増える一方だ。

容赦なく、キルアの部屋にまで罠を設置していく。情けなど無用だ。

そんなものかければ、逃げられる。

翌日の授業も、予想通り逃げだした。俺の怒声がキルアへ飛ぶ。

「コラ！ 逃げるな！！」

「イヤだっつーの。捕まえてみる」

「チツ、ランタン。入れ替えだ」

「まかせとけー」

「クソッ」

クロロと同じ手で、キルアを罠にハメる。この行為を何回繰り返しただろうか。

ため息をつき、キルアをイスに鎖で縛りつけ、雁字搦がんじがらめに拘束していく。

後で確認すると、設置した罠の多くが丁寧に解除されていた。

どれくらいの時間をかけたんだか……その分勉強か修行でもしろよ。

本来の趣旨からはずれ、罠スキルばかりが伸びている。

たった一時間の授業だ、素直にやればすぐ終わる。

「次は絶対逃げる！」

「キルア、ちゃんとやろうよ」

「どっしりもなないッス」

「ホラ、今日はここをやるぞ。ペンを持って」

机によつやく向かつてくれる。こう毎日、攻防が続くとさすがに疲れてくる。

シルバはどうやって、勉強させてたんだろう。俺と同じく、苦勞をしたに違いない。

ゆつくりお茶でも飲み、語り合いたい気分だ。

暗殺依頼の件が片付いたら、手紙でも出してみようか。ビデオと写真もつけて。

いい考えかもしれない。だが、依頼を破棄した事が確認できない。破棄してないと、殺されてしまう。

クロロが教えてくれるとは思えないし、ゾルディックに直接聞くのも無理だろう。

キルアなら、何か方策を知ってるかな……頼るのはシャクだけど、後日聞いてみよう。

そして今日も夜が来て、実践訓練が始まる。

そろそろ、俺ではキルアの相手は難しくなってきた。

カイトに訓練相手をまかせ、治療のみ行つと話したが、キルアは首を横に振つて了承しない。

理由を聞くと、俺を殴るまで続けたいと話した。

何故だかわからないが、あの時から俺を殴る事を第一目標に掲げて、修行してきたらしい。

俺が弱いフリをしている、そんな変な勘違いをしているようだ。

どうしてそうなった。

俺はキルアの相手にはもうなれないと、説得を繰り返したが意見を变えてくれない。

とうとう、カイトまで付き合つてやれと言い出す始末。理不尽だ。

「じゃあ、ピクシー使つよ。でないとやらないから」

「好きにしる。だが、キルアにもかかるんじゃないのか？」

「たぶん、大丈夫」

キルアの事を仲間というより、天敵に近い存在として認識している。

脱走の恨みは、根深く俺の心中に存在している。問題ないはずだ。

「ズリイ！！」

「大人はするいって教えたよね」

「だからって発まで使うなよ！俺らまだ使えねーんだぞ」

「なんでもありだつてば」

「どんな能力か教えるよ」

「後でね。じゃあ、一回目」

宣言した後、ピクシーの能力を有無を言わず発動させる。やはり、キルアに効いていない。

俺のスピードが、いつもと違う事に気づいたようだ。

少しだけ焦りが浮かんでいるが、最初のように、冷静さまで無くす事はもうない。

足をひっかけて体勢を崩し、蹴り飛ばす。もう拳は効果が無い。足技のみだ。

すぐさま立ち上がり、高速でジャブを繰り返してくる。

右に左にと回避しながら、足にオーラを集めて背後につく。そのまま、横から蹴りを浴びせ、地面に沈める。

やはり、ギリギリだ。ピクシーを使って、やっとキルアの相手ができる。

俺が殴られるまで、どれくらいだろうか。一週間か、それとも数日か。もしかしたら今日かも。

しばらく激しい攻防を繰り返していると、攻撃がいきなり止んだ。不思議に思っけてキルアへ視線を向ける。

フラフラと身体を揺らして、頭を押さえたまま、うつむいている。

「頭でも打った？ 少し横にな……」

「もらった！」

「ちよ！ 二回目！！」

俺をハメたと思ったのか、笑顔で殴りかかってきた。慌てて二回目を宣言して、速度上昇を重複発動する。

ズンツと衝撃が駆け抜け、効果が出ると同時に、向かってきた拳を紙一重で避ける。

てか、もう二回目使用かよ。

ブラフを使うなんて、タチが悪い。イタズラ小僧の本領発揮か。

「タロー！ 能力を解除しろ。ゴンに二回目はきつすぎる」

「ヤダ！ 面白いから続けたい」

「ダメだ」

ゴンには効果が出たようだ。カイトが、続行したくてむずがるゴンを押さえつけている。

慌てて能力を解除すると、全身に激痛が走りぬけた。リバウンドだ。短時間だったせいか、いつもよりは比較的軽い。

この痛みは久々だ。最近、二回目なんて使ってなかった。額から油汗がすべり落ちる。

人心地をついて隣を見ると、ゴンは床に倒れ毛穴から血を噴出していた。

効果中に動きすぎたのだろう、強烈なリバウンドを食らっている。激痛が襲ったはずなのに、ニコニコと笑っていた。

「カイトに注意されたら、言う事聞きなよ？」

「ゴメン。でも、すっごく速く動けて楽しかったんだ！」

痛みより、楽しさを取るところが本当にゴンらしい。この性格が人を惹きつける所だが、危なっかしくて心配になる

ピクシーを帰還させ、イヌガミを召還してゴンを治療をする。

「うー、まだ身体がギシギシする」

「なあ、それってどういう能力なワケ？ すっげー速くなったよな」

「ああ、それはね。神経の伝達速度を上げて、一時的に身体能力の向上をするんだ」

「し……」

俺の説明は理解できなかったみたいだ。言葉選び、理解できるよ
う砕いて説明する。

色々質問が飛び、俺も詳細に答えていく。

「身体って電気で動いてるんだ？」

「……………うん。そ、そうだね」

ようやく、質疑応答が終わったが、嫌な予感をヒシヒシと感じた。キルアは黙って考え込み、思考の海に沈んでいる様子。

……………もしかしなくても、スイッチ押しちゃったか。

名前を何度も呼ぶが、自分の世界に入ったまま帰ってこない。

身体、電気、考え事で容易く、答えが見えてくる。

物語より強くしようとは思ったよ。でもね、そんなに早く開発しなくてもいいよね。

俺の能力、悪魔全書は様々な能力を持った悪魔と契約し、召還できる。契約できる悪魔は無数にいる。能力も千差万別、攻撃系から防御、

支援まで色々ある。

その中で俺が、切り札として選んだのが、ピクシーの【スクカジヤ】。

身体の反射神経と反応速度上昇である。

直接的な力より、速度を選んだ。

速さ、それがあれば生き残れると感じた。それもある。でも、最も大きな理由はキルアである。

物語を読んだ時、キルアの発が、強く印象に残っていたからだ。

暗殺一家で育った彼でないと、簡単には習得できない能力。

その特別さにまず惹かれた。

次に惹かれたのは、その応用の広さ。

充電という条件があるが、たいした問題にならない。

彼の能力の一部と似てる。そんな理由で選んだ。

キルアのマネをした俺を見て聞いて、キルアが思いつくなんて…
…皮肉すぎる話だ。

しかも、猿真似した俺と違って、本家は素晴らしい能力を誇る。
あー、もう！ 恥ずかしい。自分で自分を殴りたくなってきた。

「どうした？ 大丈夫か」

「いや…平気。今日はここまでにしよう」

ゴンの後遺症が心配だ。そんな嘘をついてまで、訓練を終わらせた。

カイトは気づいていたようだが、何も言わなかった。

部屋に戻ると大声で叫びたくなった。ベットにダイブして、仰向けに寝転がる。

頬をパンツと叩いて気分を入れ替え、天井を見つめる。

自分の想いはどうあれ、キルアの事を考えよう。

サイドボードから日記を取り出し、パラパラと読みながら、古い記憶を掘り起こす。

物語でキルアは、スタンガンで主に充電を行っていた。後は、電気コードを切断して充電してたような？

スタンガンでは威力が足りないのだろう、すぐにガス切れすると語っていた。

ヨークシンが終わり、蟻で送り返せば、彼との接点は無くなる。それまでに、何か贈れないだろうか。

持ち運びできて、電量を確保出来る物。

故郷にあつた燃料電池とか、こっちにもあるんだろっか……。調べてみるか、そう思つてパソコンの前に座るとノックの音が響く。

来たか。

「開いてるよ。キルア」

「アンタ、発はどうやって作ったんだ？」

まずそこからか。誘導していいもんなのか、迷うな。遠回しでいくか。

「水見式をして、あの子たちが出てきたからだよ。どうしてそんな事を？」

「何となく、やりたいことはあるんだけど……どうやっていいか」

「そうだねえ。たとえば、俺が本を具現化した時は、ずっと本を触ったり、開いてみたりと色々したよ」

「触るか……あのさ、欲しいのがあるんだけど」

「欲しいって何が？」

「家で使つてた、なんて言うか電気イスみたいなのが欲しい。ビリビリくるヤツ」

スタンガンに、すぐ行き着いたわけじゃないのか。

その辺りの詳しい事なんて、全く覚えてないな。充電はまだ考え

てないのか？

物語と発の展開が変わりすぎて、予想がつかない。

「すぐに用意するよ」

「あっさりだな。最初からわかってたワケ？」

「そんな事ないよ。もう寝なよ、明日も早いよ」

「ふーん」

部屋に戻るキルアの背中を見送り、パソコンへ向き直る。

どこかで、会話を間違えたのだろうか。

なんか疑われてたような……何かまたよけいな事言っちゃったとか？

俺ってこんなばかりだな。

ため息をついて、通販ページをめくる。スタンガンで検索をかけると、色々な種類が現れた。

ワイヤータイプなんて物まであるのか。

種類が多すぎて、どれがいいのかさっぱりわからない。全部注文して、キルアに選んでもらおう。

ついでにコンセント付電気コードや、電気イスも注文をかける。

様々な通販ページをめくり、目新しい品物があれば、それも注文していく。

注文完了の画面を眺めながら、子供たちの修行風景を思い浮かべる。

何もかも、教えれば教えるだけ吸収して、モノにしていく。

でも何故か、俺の得意分野だけ、やる気ないんだよな。

勉強はやって、損になる事なんてないのに。後で苦勞するのはお前らなんだぞ。

大人になってから気づくんだよな。もっと勉強してれば良かったって。

注文した品は、一週間で届いた。量が多すぎるので、何回か分けて運んだ。

箱から取り出し、空き部屋にズラリと並べていく。色や形も様々だ。スタンダードな物や警棒みたいな物。

威力は弱いが、指輪みたいなタイプもある。

結局、電流が流れる物。そういう括りで注文をかけたのだ。キルアを連れて、収集結果を見せる。

「うわ、なんだよこの量。おお！ 懐かしー、家にあったのと同じイスだぜ」

「欲しがってたよね。好きに選んで」

「すっげー……なあ、どれでもいいの？」

「いいよ」

顔を紅潮させながら、楽しそうに次々試していく。

こっちまで痛くなる気がするから、自分の身体で試すのはやめて欲しい。

やがて、こちらを振り向き、指を指し示す。

「コレにする。なんか面白そうだし」

「わかった。他のも好きにするといいよ」

「……………ありがとう」

頷いて、選んだ物を手にゴンの元へ戻っていく。

選んだ品は意外だった。頭の中には、スタンガンしかなかったしな。

電気が流れるヨーヨーは見つからなかったし。

キルアの報告は聞けるだろうか。

大人三人で、発を作っても誰にも教えるなど、言い聞かせてきたのだ。

ゴンは守れそうにないが、キルアはどうだろうか。

あー……………そうか、忘れてた。

そういや、俺を殴るって言ってたな。

発が出来たら、まず俺で試される可能性が高そうだ。

チートに全力で殴られるのかと思うと、今から気が重いな。

カイトに相談して、次こそは担当を変わってもらおう。

相手をしなければ、なんとかなるはず！

そんな淡い希望にすがりつき、カイトと話すべくダイニングへと歩いていった。

第42話(前書き)

作者にネーミングセンスはありません。

第42話

あれからキルアは、隠れてカイトやゴンと、内緒話を繰り返している。

能力の相談をしてるのだろう。カイトから、電気に変化できた事は聞き出した。

だが、それ以上は男の秘密だから、言えないと黙り込んだ。

変化の修行を覗いても、すぐに中断してしまい、進行状況が全く分からない。

就寝して朝が来る度、死刑囚のような気持ちになった。

十三階段を登る足音が、聞こえてくるようだ。

キルアが選んだ道具は、特殊な金属で出来た、とても細長いワイヤーロープ。

専用の腕輪とセットになっている。

電気を発生させる腕輪を装着し、接続する事で七本まで取り付け可能。

両腕につければ、十四本だ。

中にワイヤーを収納する事ができる。

腕輪が発する電流は微弱だが、そんなものキルア自身のオーラで補えば、問題にもならない。

「マジで、どうしよう……殺される」

「あれだけやりたがってるんだ。諦める」

「そんな、殺生な」

カイトからの最後通牒に、ガツクリ肩を落とす。でもまあ、何時までもオロオロしてるわけにはいかない。

もうすでに、オーラを電気に変化させる事は出来ているのだ。充電の誓約にも、すぐ辿り着くだろう。

今のうちに対策を練っておかないと、本気で感電死する。

電気といえば、ゴムか。だけど、ゴム程度でキルアの電気を防げるのか。

溶けそうだし、無理だな。

キルアとの実践訓練も、ワイヤーを繰る訓練に変わっている。

最初は一本から始めた。内容は逃げ回る俺やランタンにあてる事。

現在、本数は三本で右手に二本、左手に一本。

オーラを使用しての操作はしないようだ。

変化系から見て、操作系が一番遠い。まあ、無難な選択だろう。ちなみに、カイトによってピクシーは禁止になっている。

友達を見捨てた恨みは必ず返す。

キルアの繰り出すワイヤーを避ける日々。

最初はぎこちなかったが、あてられる事も増えてきた。ワイヤーをあてるのは、殴る事にはならないらしい。

屁理屈はカンベンしてほしい。

そんなある日の訓練中、一瞬、服にキルアのワイヤーが掠った。

「ちょっとまって！　なんだこの威力は……」

掠っただけなのに、触れた部分は服どころか、皮膚までパツクリ裂けて、血が流れている。

昨日まで、こんなに威力なかったよね？　周もかけてないよね？！

念のため凝で確認するが、オーラはまもっていない。

「物足りなかったからさ、研いでみたんだー」

「研いだけで、こんな風になるわけないだろ！」

「へへー。俺、家にいた頃から、武器とか研ぐのは得意でさ」

ゾルディックめ、余計な事を教えやがって。

いや、ゾルディックならではの教育か。そんな事より、掃除でも教えてろ。

これに電気が加わるかと思うと、泣きそうになる。

どうせ、発がなくても死なないだろうし、余計なマネしなきゃよかった。

「なあ、焦った？ 巻きつけると、凄と思うんだー。試させてよ」

「死ぬわー!!」

確実に身体がバラバラになる。

キルアは本数を増やし、ニヤリと笑いながらワイヤーを繰り出してくる。

必死こいて逃げるが、身体の傷はどんどん増えていく。

ランタンは無視して、俺ばかりを狙う。
嫌なやり方だ。

訓練が終了した頃には、俺の身体はボロボロで、正に満身創痍というあり様。

これって、俺の訓練になってないか。

「ハアハア、ありえん」

「チツ、殺す気でやったのにー」

「殺し屋は辞めたんだろうが！」

恐ろしい事をこぼすキルアを蹴り飛ばし、イヌガミを呼び出す。この練習が始まってから、服がどんどんダメになっていく。調達しないと、着る物がなくなる。

調達と言っても、買い物に出かけるわけではない。元ヒッキーらしく、ネット通販で調達する。

昔は外で買い物もしていたが、危ない奴らに狙われるようになったので、通販専門になりつつある。

師匠の家を配達先に指定して、飛んで取りに行くのだ。

ダイニングへ移動して、通販サイトを開くと、子供たちが寄ってきた。

「タロー、何か買うの？」

「そろそろ、服が足りなくなりそうだしね。誰かさんのせいで」

「ふーん。じゃあさ、お菓子買って。チョコロボ君」

「オレも！ポテチがいいな。ズシは何がいい？」

「ポッキーがいいッス」

「お前ら……」

コイツらは、遠慮と言うものを知らないのか。ゴンとズシも最初は遠慮していたが、今ではキルアと変わらない。

買ってやらないと、ランタンのお菓子に手をつけかねない。
以前、ランタン用にストックしていたお菓子を、根こそぎ食われた事があるのだ。

正座をさせて説教したが、反省はしてないだろう。
ため息をつきながら、買い与えてあるパソコンを指差す。

「君たち、パソコンの使い方は教えたよね？ 自分で注文しなさい」

「えー、メンドクセー」

「代金はこっちに回していいから」

「やった！ 行こうぜ」

「うん」

嬉々として操作を開始する子供たち。その様子を見てみると、疲れがどつと押し寄せてくる。

全てを諦めて、画面に戻る。画面に写っているのは、洋服のサンプル画像。

服……………そうか、ピンときた。

以前、修行着を頼んだ能力者に、電気対策の服でも頼むか。出来るかどうかは分からないけど。

あのワイヤー対策だけでも出来れば、生存率は上がるに違いない。後は、間に合うかわからないけど、自分で神字でも縫いこんでみますか。

さっそく、メールに希望を記入して送信すると、すぐに返答がきた。

規定の倍を支払えば、特急で作ってくれるらしい。電気対策は完

全には不可能で、ある程度ならと返答が来た。

耐久力上昇もお願いし、依頼のメールを送った。代金も振り込んでおく。

この能力者は俺や師匠と同類で、一日中家で作業している。高い金を取るが、仕事は早い。

金と言えば、カードをジンさんに返却しないとな。

宣言どおり、湯水のごとく使ってしまったが、怒りはしないだろう。

あと一カ月ほどで夏も終わり、秋に突入する。ヨークシンの準備をして、カイトと相談もしないといけない。

ゴンにヒソカと殴る為の方法も、話しておかないとダメだな。

いや、キルアにも話さないとゴンは忘れそうだ。

ああ、ゴンがヒソカを殴りに行くって、クロロに話を通しておかないと。

シャルに電話をかけるか。

頭に予定表を思い浮かべ、あまりの忙しさにめまいがしてくる。

ヨークシンが終わっても、次は蟻退治が控えている。

全てが終わるまで、ゆっくり休めそうにない。

八月二十日、運命の日

修行最終日の朝、洗面所に行き顔を洗い、鏡を見つめる。

どこからどう見ても、凡庸な顔が映っている。何故キルアは、こんな自分に拘るのか。

理解できない。

変な勘違いなど、修行中に解けただろう。なのに、俺に対する対抗心はなくなる気配はなかった。

本当に困った子だ。

届いた箱を開けて、注文していた服を取り出す。
仕上がったのはギリギリで、神字を縫いこむ暇はなかった。
真っ黒に染め上げられ、上下に繋がりツナギのようになってい
る。

少しダボつとしていて楽な着心地だ。

所々に、シルバーの金具が取り付けられてあり、電気を自動的に吸収
して、金具に貯める効果ある。

金具の吸収量は多くはないが、これ以上金具を増やすのは無理ら
しい。

耐久力も上げてもらったので、ある程度ワイヤーにも耐えられるだ
ろう。

思ったより良い服に仕上がったので、追加も頼んである。

修行最終日は一日を通して、修行の成果を見せてもらう。

最初は、念訓練の成果。

基本から、応用まで一通り順番に行ってもらおう。

オーラ量がどれくらい増えたか、発動までの時間や効果持続時間
などを見る。

結果は全員素晴らしかった。

ゴンとキルアの二人はさすがとしか言えない。基本も応用も完璧
と言っていていまだに習得していた。

オーラ総量はすでに俺の三倍はあるだろう。これからも、まだま
だ増えると思う。

堅の持続時間は二時間程度と予想をつける。涙がこぼれそうにな
った。

円は20mが限界のようだ。オーラ量にモノを言わせて、無理や

り広げている。

隠れてガッツポーズを決めていると、カイトの視線に気づいた。そんな可哀想な瞳で見ないで下さい。

流が少し荒いけど、オーラの移動速度は問題ないレベル。修行を続ければ、移動量も最適化されるだろう。

円以外は完全に俺を超えた。

強くすると宣言しておいて、あれだけど、たった五ヶ月で、ここまで伸びないでほしい。

ズシは基本も応用も完璧とまではいかないが、ある程度マスターはできている。

オーラ総量は俺と同じくらいかな。子供だし、まだ増えるだろう。堅の持続時間は30分といったところかな。円もまだ5mだけど、薄く延ばすコツを掴むのは上手かった。

うーん、ウイングさんが見つけた逸材だけある。

将来に期待できそうだ。

結果に凹んでいたが、天才を気にしたら負けだと慰めておいた。

ズシも俺から見れば、たいがいチートなんだけどね。

スーパーチートと比べるからダメに感じるだけだ。

最終日は、野外修行の方は見ない。毎日結果が分かるから必要ないのだ。

すつとばして、実践訓練の成果を見せてもらう。

ゴン、ズシ、キルアの順に確認していく。ゴンはカイトが、ズシはウイングさんが見る。

キルアはもちろん俺だ。

「ハア……」

「まだ、諦めてなかったのか？」

「諦めてるけど、命は捨てたくないんだよ。誰かさんは代わってくれないし」

「死にそうになったら、助けてやるから機嫌を直せ」

「頼むよ……」

カイトは助けると言うが、基準が低いからズタボロは確定だろう。死の半歩手前までいかない、手を出さないに違いない。

「ゴン、全力で来い」

「わかった！」

ゴンはまだ発は作っていないようだ。G Iで完成させるのかな。急いで作る必要はないし、問題はないだろう。

ゴンは強化系なので、肉弾戦のみを徹底的に仕込んだ。拳と拳がぶつかり合う。なんか、汗臭いな。

さすがに、まだまだカイトには及ばないが、たまに拳をあてる事は出来ている。

カイトがあてさせてる感じはするけど。

ゴンがズタボロになった所で終了した。

イヌガミを呼び出して、治療する。この修行中、イヌガミは大忙しだった。

明日にでも骨付き肉を買ってやろう。毛皮を撫でながらズシを見る。

ズシとウィングさんの様子を一言で言うなら、正統派。

型にきつちりはまった攻防で、理論を語りながらの、戦闘風景。正統派は読みやすく、対応も楽だが、修練を積み、洗練されるとやっかいこの上ない。

ネテロ会長クラスまで、洗練させる人はほとんどいないだろうが、ウイングさんには一度手合わせをしてもらった。

攻撃は確かに読めるんだけど、速さが凄い。かなりの修練を積んできたのが、拳で分かる。

腹に攻撃がくる、そう予想できるのに、受け止められない。

手合わせは、念は使ってなかったし、本気でもなかっただろう。ウイングさんが敵に回ったら、カイトを連れて逃げるかも。

ズシの治療をすませ、とうとうキルアと俺の番。

気分が重い。今すぐリターンして、師匠の家に逃げ込みたい。

カイトに背中を押され、嫌々中央に立つ。

「今日こそ殴る」

「何時でも殴れたらろうに……」

「発が出来てさ、実験第一号がタローだぜ」

「絶対、それが本音だよな？」

向かい合い、キルアがワイヤーを五本、床に垂らす。オーラを電気に変化させ、ワイヤーに流している。

ピクシーは禁止の為、相棒はランタンだ。

緑のナイフを構え、ランタンを頭に乘せた。ナイフに薬は塗っていない。どうせ、効かないだろう。

俺とキルアの質量の差は問題ないと、授業の時に判明している。本を握り締め、目と足にオーラを集める。防御は捨てていく。そ

んな余分なオーラは俺にはない。

「ふーん、そう来るんだ」

「そちらからどうぞ」

「じゃー、行くぜ！」

上空に飛び上がりながら、ワイヤーを繰り出し俺を狙う。普段の修行とは違い、同時にキルアの拳が降ってきた。

スライディングで拳をかわしながら、ナイフを使ってワイヤーを弾く。電気が流れてくるのを感じるが、まだまだ金具は持つ。

体勢を整え、キルアに勢いをつけて飛び掛る。

ギリギリまで接近した瞬間、位置を入れ替え、身体を反転させて蹴り飛ばす。

ビリッと痺れが走る。一度に受ける量が多いと、吸収しきれないようだ。

こちらからの攻撃は諦め、回避に専念する。ギリ貧になるが、攻撃したら金具の許容量を超えて感電する。

次々とキルアの波状攻撃が繰り出される。本まで使って、ワイヤーを弾き返す。

電気を防いでいるとは言え、服は破れ、傷は増えていく。

「何で、痺れないわけ？」

「それが、能力を絶対に話すな、と言った理由だよ。知っていれば、対策が取れる」

「じゃあ、知らないヤツを使えばいいんだ」

なん、だと……お前、もう派生を作ったのか！
いくらなんでも早すぎる。クソッ、これだからチートは手に負えない。

猫目を細め、ニッコリ笑ってワイヤーを繰り出してくる。

知らない能力とは何だ？

攻撃してくるキルアを観察して、オーラの流れを読む。

髪にオーラは回っていない。カシムル 神速系統ではないな。

ワイヤーを使っているし、イストツシ 雷掌とは思えない。だとするとナルカミ 落雷か。
ナルカミ 落雷と判断して、上方に意識を向けて警戒する。

俺の武器はナイフ、避雷針にはピツタリだ。服に金具もついているので、完全に食らうかもしれない。

てか、直撃したら、死ぬんじゃない。

それからしばらく、ワイヤーを弾きながら戦闘を続けていたが、心に何か引つかかった。

様子が変だ。キルアの拳や蹴りが飛んでこない。ひたすらワイヤーを操り、俺へ飛ばすだけ。

ワイヤーが俺に掠りもしていない。俺が捌ききれくらいだ。

これでは、能力を使うと宣言する前より楽だ。何より、発動すると宣言した能力を使わない。

いぶかしむ俺に気づいたのが、ワイヤーを全て床へと叩きつけ、勢いをつけて左方向から蹴る。

とっさに右へ避け、地面に足をつけた瞬間。

「うあがあああ！！」

地面についた両足から、激痛をともない電気が頭の先まで一気に流れた。

ナイフが手に張り付き、全身から金具が弾け飛ぶ。痺れる身体を鞭打ち、足元へ視線を向ける。そこには、ビリビリと電気を放つ陰で隠された物体。

罨か！！

電気をまとった罨。これがキルアの言っていた能力か。物語に縛られすぎていた。

物語通り電気に変化させたから、派生まで物語と同じだと思い込んでいた。

俺は本当にバカだ。

物語は絶対的な預言書などではないと、師匠に言われていたのに落ち着け、そう自分に言い聞かせる。今は罨から抜けないと死ぬキルアに視線を向ける。笑みを浮かべる彼の足元には……罨。バチバチと火花が散っている。

俺より激しい電気が、発生しているのが分かった。

やはり、耐えられるんだな。罨の上に乗っているのは、入れ替え対策だろう。

意識を集中させて目蓋を閉じ、ロケットのように足元へオーラを一気に流して、無理やり罨を抜ける。

なんとか脱出はできたが、足が震えて床に崩れ落ちた。

「ズリイ！ 抜けんなよ」

「……………無茶言うな」

「でもさ、もう動けねーよな」

そう、動けない。脱出はできたが、全身が感電して痺れ、自分の意思では動かせない。

キルアの能力の恐ろしさはそこにある。

電気への耐性なんぞ、ほとんどの人間が持っていない。んなのゾルディックだけだ。

感電してしまえば終わりで、心臓が止まらなかつただけマシ。まだ、試作段階なのだろう。だからこの程度で済んだのだ。

視線を向けると、真剣な表情で俺へと歩いてくる。

目の前で立ち止まり、ゆっくりと手のひらを握り締めた。歯を食いしばり、衝撃に備える。

「アンタ、やっぱり強いよ」

言葉と共に壁に叩きつけられた。

頬に塗れた感触を感じて、目蓋を開き見えたのは、心配そうな顔をした少年。

お前、自分で殴っておいて、そんな顔するなよ。

「……痛い。滅茶苦茶痛い。死ぬほど痛い」

「俺は修行中、もっと痛かったぜ」

「実家で痛みに耐える訓練しただろ。俺は一般人なんだ」

「耐えられるだけで痛いっつーの。タローみたいな一般人いてたまるか」

身体を起こし、襲ってくる激痛に耐えながら、全身をくまなく眺

める。

服が原型を留めないほど焼け焦げていた。アバラも二、三本は確実に折れている。

皮膚も感電したせいでただれ、少なくなった布に張り付いている。自分のオーラを欠片も感じない。これでは、イヌガミを呼べない。

「キルア。俺の部屋に行つて、救急箱取ってきて」

「メンドクセー。犬っころ呼べよ」

「犬っころじゃない、イヌガミだ！俺がこうなったのは、お前の責任だろ」

「チツ。しかたねーな」

走り去る姿を横目に見ながら、カイトに質問を飛ばす。

気絶していた時間は二十分ほどらしい。

手を貸してもらい、立ち上がると塗れタオルが滑り落ちた。

「予想通り、死にかけたし」

「死ななかつただろう」

「死にかけたら助けるって言ったクセに」

「まあ、気にするな」

「気にするに決まってるだろ！このバカ！！」

どうせ、タイムンだから手は出せないとか、考えてたんだろ。

俺が死んだら、どうするつもりだったんだ。まったく、これだからカイトは困る。

ブツブツ文句を呟いているとキラアが戻ってきた。治療をしながら、能力の詳細を聞く。あれだけやられたんだ、遠慮はもうしない。

「ハア？ なにそれ、デメリットないよね」

「あるじゃん！」

「ないよ。むしろ、メリットしかないよ」

「あるっつーの」

内容を聞いて呆れ果てた。

タケミカツチ
天罰は、電気が流れる罫を具現化する能力だそうだ。それはいい。問題はその誓約。

【能力者自身が罫にかかった場合、倍の電気が流れる。】

これ、誓約って呼んでいいの？ 充電の問題が解決してんじゃねーか！

たしかに、ゾルディック以外なら誓約になる。だが、ゾルディック以外で、オーラを電気に変化させるヤツなんぞいないだろう。

メモリも多そうだし、物語通りの派生を作れば永久機関だ。

なんだ、このチートっぷりは。無性に殴りたくなった。振り返ちだろっけどさ。

「キラア。お前、おやつ抜きな」

「はあ?！」

途端、ギヤーギヤーと文句を言い始めるが、放置しておく。

ようやく、お子ちゃまたちの修行は終了か。

蜘蛛から逃げられるという目標は、達成できたと言っていていいだろう。無謀な事をしなければ、生き残れるはず。

明日になったら、荷物をまとめさせて、くじら島に送り届けないと。

しかし、まとまるのか……あれが。

脳裏に、ゴンとキルアの部屋を思い浮かべる。

通販を覚えた時から、急激に膨れ上がった彼らの荷物。

服やおもちゃ、はてはゲームとか、好きなだけ買ってたからな。ゲームなんて、買ってもやる暇なんてなかったろうに。

コイツらこのまま、定宿を荷物置き場に使うつもりなんだろうな。んで、俺に運び屋をやらせるわけだな。まあ、いいけどさ。

「疲れたし、風呂に入ってご飯食べて寝よか」

「リクエストはあるか？」

「ふわとろオムライスでヨロシク」

明日から、予定が詰まって忙しい。

頭の中でスケジュールを組みながら、バスルームへと向かっていった。

第42話（後書き）

キルア・ゾルディック

（本作中・オリジナル技）

【天罰・タケミカヅチ】変化系＋具現化系の複合

自身のオーラを電気に変化させる能力の派生。

電気が流れる畏を具現化し、仕掛ける能力。

誓約、制約 条件等

- ・畏は能力者の手と繋がった場所にしか作成できない。手からロープなどにオーラを流し、離れた場所に作成する事ができる。

壁や地面などにも、手を触れてオーラを流せば作成できる。

- ・能力者が知っている畏しか作成できない。

- ・能力者自身が畏にかかった場合、二倍の電気が流れる。

キルアのオーラを電気に変化させる能力。

その誓約である充電を、この能力で補う事ができる。

ただし、受ける苦痛も二倍となる。

- ・能力者が展開できる円の範囲内にしか作成できない。範囲外まで離れると消滅する。

円を実際に展開する必要はない。

・タローの授業のせいで、誕生した能力。

キルアは授業中、いつもタローに罠にハマられ、脱走を阻止されていた。

タローへの仕返しの為、脱走で得た罠の知識で考案して作り出した。

第43話

大怪我から翌日の朝。

ウィングさんとズシは、天空闘技場ではなく、所属してる道場へ帰るそうだ。

ズシの修行がひと段落したので、ゆっくりと休養を取るらしい。二人を近くの街へ送ることを約束し、連絡先を交換する。

ウィングさんとは、また会いたい。全てが終わって、暇ができたら、きつと。

しばらく会えないかと思うと、名残惜しく別れがたい。

「今までお世話になりました。おかげ様でズシもいい成長ができたようです」

「こちらこそ、ご迷惑をおかけしてすみませんでした」

「本当にお疲れさまでした。何かあれば、連絡を下さい」

大人たちが挨拶を交わす間、子供たちも別れを惜しんでいる。

三人は、この五ヶ月の修行期間中に、物語よりもずっと、仲良くなっていた。

「元気で。また会おうね」

「うっす。二人も無理しちゃダメッス」

「わかってるって」

「これ、連絡先ツス。メールでいいから欲しいツス」

「オレ、携帯持ってないよ」

渡すのをすっかり忘れてた。

ゴンとキルアの肩を叩き、携帯電話を差し出す。

ゴンには銀色を、キルアには黒色の携帯を頼んでいた。

「二人の携帯だよ。俺たちの連絡先は入れてある」

「ありがとう！ 大事にするね」

「サンキュ」

生き生きとした表情で、三人で連絡先を交換している。

こんな風景を見てみると、本当に子供らしい。

これからやることを考えると、そうでもないが。

別れをすませた後、二人を送り届けた。

戻った定宿はどこか広く感じて、寂しい雰囲気が漂う。

湿っぽい空気を振り払うように、三人にこれからの予定を話す。

「ヨークシンに行く前に、ミトさんにちゃんと報告に行きなよ」

「うん、オレも行かなきゃって思ってた」

ジンさんからのメッセージが置いてあるはずだし、あれがないと
GIへ繋がらない。

ビスケは完成しつつある二人に、修行をつけない可能性がある。
だけど、問題ないレベルまで育ったと思う。

GIもきつと二人でなんとか、クリアするに違いない。

「それから、二人に言っておくことがある。大切なことだから、必ず守って」

「なに？」

「ヨークシンで友達に会ったら、絶対に発の内容を話すなど言い聞かせて」

「いきなり、なんだよ。わけわかんねー」

ヨークシンでクラピカは、蜘蛛に対して、復讐を開始するに違いない。

俺たちのせいで、どう転ぶかわからないが、それだけは確かだろう。

能力の詳細さえ知らなければ、読まれてすぐに殺される事態だけは避けられる。

「ゴン、キルア。タローがここまで言うんだ。大事なことだ」

「わーっ たよ！ 必ず言うよ」

「どうなるかわかんないけど、ダメだって言う」

「よし！ 次はヒソカの件だね」

クロロと話をして、二人がヒソカを殴りに行くと伝える。生死は五分五分だろう。

だが、ヒソカにも話しておけば、ヒソカがゴンとキルアを守るだ

ろう。

めつたにいない、大粒の青い果実だ。カイトとのタイムンをつけてもいい。

ヒソカの番号はシャルから聞き出す。ダメなら二人より先に、捕まえればいいだけだ。

「ヨークシンでヒソカを探して、取り返しておいで」

「やっと、殴れるんだ」

「うん、待たせたね。ヒソカは幻影旅団の一員だ。彼らに捕まったら、カイトに指示されたと話すんだ」

「カイトに？ どうして？」

「旅団の団長とタイムンをやったからな」

「だからね、カイトの指示なら、納得すると思うんだ」

俺がクロロと話した後、二人が捕まっても彼らが連想するのは、クラピカではなく俺たちになる。

この会話内容も読まれる可能性が高いので、へたな事は言えない。だが、指示したのが、俺でもカイトでも、クロロは納得すると思う。

俺たちという前例があるから。

「俺たちは、手伝わないからね」

「マジかよ……ゴン、本気でやるのか？」

「やる！」

「オヤジに怒られる……手を出さなって言われたんだ」

「殴って取り返すって決めたんだ」

「……………わかった」

「ありがとう！ キルア」

やっぱり、キルアはゴンには勝てないな。勝利をもぎ取る日が、いつかは来るんだろうか。

これでなんとか、二人を守る最初の手順はクリアした。

安心はできないけど、二人が蜘蛛に殺されなければ、ヨークシンはそれでいい。

どうにもならなかったら、蜘蛛の巣に乗り込んで助ける。

命にかかわるなら、カイトも了承するはずだ。

話が終わると、二人の尻を叩いて荷物をまとめさせる。

予想通り、定宿を荷物置き場に使うようだ。二人が持つていくのは、二日分の服と携帯、財布それにハンター証のみ。

キルアの腕輪は荷物と言えないしね。

「それだけでいいの？」

「後で取りにくるからさ」

必要な物だけ、取りに来るの間違いじゃないのかな。カイトと顔を見合わせ、ため息をついた。

運び屋はやってもいいけど、当分は断るかもしれない。

「じゃあ、これ持ってて」

「かぼちゃ？」

「転移能力の目印だから、失くさないでね」

「これから用事がある。終わるまでは、本当に危ない時だけ連絡しろ」

「うん、約束する。カイト、タロー元気だね」

「二人も元気でね。ジンさん探しは手伝えないけど、殴るのは手伝うからさ」

「アンタ、弱いんだから無理すんなよ」

キルアらしい別れの言葉に、思わず笑顔がこぼれた。当初、守りたいのは師匠だけだった。そこに友達のカイトが増えて、ゴンが加わって、そしてキルアも大切に失くしたくない人たちが、どんどん増えていく。怖いくらいに。

送り出した場所は、くじら島への乗船乗り場。くじら島にはホテルがないので、設置できなかつた。二時間もあれば無事に着くだろう。

カイトと一緒に、手を振りながら船に乗るゴンとキルアを見送る。小さく振り返って、二人の顔を脳裏に刻み込む。

ヨークシンで会えるかは展開次第、出来れば会いたくない。

あの街で会うのは、危険だという意味だから。

「寂しくなるね」

「料理の作りがいが行っちゃまったな」

「あの子たち、舌が肥えてないといいけどね」

「さてな。それで、予定はあるのか」

「何もしないと、二人の命が危ないかもしれない」

「動くしかないな」

「ジンさんにカード返してくるから、戻ったら話合おう」

「決まりだな」

携帯の呼び出し音を聞きながら、今まで撮ったメモリーを取り出す。

コピーは取つてある。将来の大事な楽しみ種の、撮影しまくつたので二十本近くになった。返す前に、代金も引き出しておかないと。

経費と代金の明細を見たら、ジンさんはどんな顔するかな。守銭奴って言われるかもしれない。

「もしもし、タローです。これから行ってもいいですか？」

了承の返事がすぐに返ってきた。

銀行へ歩き出そうとした時、ふっと何か脳裏を掠めた。

何か、忘れてることがあるような……クラピカの話はしたし、蜘蛛

蛛のことも話した。

ゾルディックを忘れてた！

思わず頭を抱え、その場に座り込んだ。

ヤバイ、あんな別れ方しておいて、今更キルアに電話なんてできない。

あの子たちの性格からして、すぐに連絡するはずもない。

もしかしたらクロ口の暗殺依頼とか、請けない可能性もあるのか。作成していた予定表がガラガラと崩れていく音が聞こえる。

身体をフラフラと揺らしながらも、銀行へ寄ることだけは忘れない。

タローは預金明細を握り締め、ジンさんの所へと飛んでいった。

第43話（後書き）

ちびっ子修行編終了です。

次からヨークシン編に入ります。

第44話

ジンさんにお小言を少し頂き、カイトを拾って定宿に帰還した。朝まで六人が暮らしていた定宿は、部屋が大きい分、その喪失感を実感させてくれる。

緑茶と紅茶を一杯づつ入れて、ソファに深く腰掛けた。

「感傷に浸りそうになるね」

「こんなに静かだからな」

「それで、ヨークシンのことだけど」

「命の危険と言っていたが、シャルに話しを通すだけじゃダメなのか？」

「あー……」

そうか、ヨークシンに関する物語のこと、話してなかったな。ヒソカしか、あの街にいないと思ってるかも。ひさびさに、怒られるな。

「シャルにも話すけど、クロロにも話さない」と

「クロロもいるのか」

「あー……なんていうか、蜘蛛全員かな」

「そんな話聞いてないな」

声色に怒りを感じた。
蜘蛛が仕事でいるとなれば、話が違つ。そう、考えているに違いない。

しかも、全員いる。

「九月のヨークシンオークションを蜘蛛が襲つ」

「……また、物語か」

「うん」

「盗みの大きさは？」

「オークションの全てを奪つて、関係者皆殺し」

立ち上がったカイトの裾を掴み、引き留める。

これは、かなり俺が悪いな。話すべきか、話さないべきか、俺が勝手に決めていた。

大事なことなのに相談もしないで、勝手に決めた。

「止めても無駄だと思う。ゴンだから」

「タローは必要なことすら話さない。腹が立つ」

「ジンは、一番大事なことだけ話せて」

「ジンは一緒にいない。今、お前と組んでるのは俺だ！」

ドンツとカイトの拳がテーブルを打ち、カップが倒れ水溜りが広

がっていく。

カイトに怒られて、殴られたことは何度もある。だけど、こんなに静かに怒りをぶつけてくるのは初めてだ。

「ごめん」

それしか、言葉が出てこない。今は殴られた方がマシな気がする。正直、こんな展開になるとは思わなかった。カイトは腹を立てても、殴って終りにしてくれるから。いつの間にか、甘えていたのかもしれない。

「全部話せ。これからは、二人で全て判断する」

最初から、一から十まで知っていることを、洗いざらいぶちまけた。

覚えていることも、あやふやな記憶も全て。尋問が終わると、カイトが頭をガシガシかいて、目元を手のひらで覆った。

「タイムンのせいで、変わる可能性があると言っただな」

「うん。ヨークシンの作戦を流用したんだ」

「一番大事なことだろう！ 俺たちのせいじゃないか」

「だから、ゴンとキルアに話したんだ」

「まず、俺に話さないと意味がないな」

「ごめん」

「終わったら殴るからな。予定を話せ」

クロロに、ゴンたちがヒソカを殴ることを伝えること。

了承が得られないと、殺される可能性がある。だから、その時はヒソカに話をして、守ってもらう。

守る条件には、カイトのタイマンをつけるかもしれない。

そう、予定を話した。

「カイトの指示と話したのは、クロロの意識を俺たちに向けるためだよ」

「クラピカと言ったか。ゴンの友人は復讐を諦めないのか」

「無理だよ。友人が蜘蛛か、どちらか死なない限り諦めない」

「無理やり止めるのは？」

「無理やりか……攫って閉じ込めればいけるかも」

「俺たちは、誰かを攫ってばかりだな」

ふつと小さく笑った。カイトの雰囲気がようやく、柔らかい何時間もの状態に戻った。

大きく息を吐き、一息ついた。

復讐を無理やり止めるか。その発想はなかったな。

復讐は、止められない前提で考えていた。これも物語の弊害かな。クラピカを最初に攫えば、クラピカ関連のトラブルが起こらない。

ゴンに天空闘技場で、殴らせておけばすぐ解決してたな。

「あーでも、手配書見てお金のために追いかけるか。一緒だな。でも、クラピカを攫っても、一時しのぎにしかならない。」

「あくまで今回は、になるね。次は無理だろうね」

「タローの言う、死ぬ予定の筋肉ダルマの方にするか？」

「ウボオーか、交渉には使えるかもしれないけど」

「いや、待て。発想を変えるか」

「どうかえるのさ」

「両方攫おう」

「……………は？」

「二人の戦闘が始まったなら両方攫う。それでなんとかなるだろ」

「なるかもしれないけど、どうやってなんとかするのさ」

「考えるのは、タローの仕事だ」

思わず、頭を押さえた。頭痛がする。

先ほどまで、黙っていたことを怒っていたのに、全部投げるのか。ありえん。カイトの全てがありがたい。

さて、クラピカ誘拐は問題ないだろう。能力は知っているし、対策は簡単だ。

問題はウボオーギンだな。蜘蛛随一の強化系を攫うのか。鎖に八

められてる時なら、誘拐自体は問題ないが。

肝心なのは、保存場所と保存方法だ。

ヒソカの檻は蜘蛛にシャルごと渡している。今から作成依頼を出しても、間に合わないだろう。

神字の檻は、一時間持てば御の字だ。

シャルにやった程度の拘束で、大人しくなるのか。無理そうだな。カイトに四六時中、力づくで拘束させないと無理だ。そうになると俺たちも動けなくなる。

ということは、シャルより強力な念具を用意して、拘束するしかないのか。

クラピカの鎖は、どれくらい持つんだ。

クロコ誘拐から、空港までの経過時間なんて覚えてないぞ。

一緒に攫った時に、聞くしかないか。教えないと、ウボォーを開放すると脅せば簡単だろう。

「どうするかは、行き当たりばつたりになるよ」

「わかった」

「わかるな!」

「頼む」

行き当たりばつたりで、納得するなよ。

あーあ、結局、最後はいつもと変わらないじゃないか。

それなのに、俺が怒られて、終わったら殴られるのか。理不尽だ。

頭を振って、諦めの境地に立つ。まずはシャルに電話か。

携帯を取り出し、番号を押す。蜘蛛からのイジメ事件以来、連絡は取っていない。

呼び出し音が鳴って、すぐに声が聞こえた。仮宿には、もう移っているのかな。

「久しぶり。元気にしてる？」

『……タロー？ 半年も、何やってたの』

「ちよっと、修行の相手をしててね」

『弟子でも取ったの？』

「というより、弟って感じかな」

息子に近いけど、シャルは俺の年齢を知らないしな。秘密にしてるわけじゃないけど、誰も聞いてこない。

聞かれないと自分からは言いにくい。中年もいいとこだし。しばらく世間話に花を咲かせた後、用件を切り出した。

「ということで、クロロと話がしたいんだ」

『ヒソカを殴るって、蜘蛛に乗り込むかもしれないってこと？』

「うん」

『……骨を拾えばいいんだね。骨壺を用意しておくよ』

死なせたくないから、電話してるのに。

まあ、普通なら蜘蛛に関係なく、ヒソカを殴るっただけでも、そう思うか。

昔のおれなら、ヒソカの影を見ただけで逃げる。

「まだ子供なんだ。死なせたくない」

『殺してでも止めなよ。それから、医者に診てもらえばいい』

「止まらないんだ。殴って閉じ込めても。だから、クロロと話したい」

ヒソカのことであっても、クラピカのために動くだろう。

ゴンに、もう一度諦めろって言っても、聞かないだろう。

無理やり頷かせても、ヒソカを見つけた途端、殴りかかるのが落ちた。

最初の難関、クロロの説得。それが出来ないと、何も始まらない。かなり厳しいけど、やるだけはやってみるしかない。

しかし、シャルは変わらないな。

ヨークシンの情報収集で忙しいはずなのに、俺のバカ話を聞いてくれる。

自分でもかなり、無茶を言っている自覚がある。

本当にいい奴だ。これで、蜘蛛でさえなければ、完璧なのに。

蜘蛛じゃないシャルなんて、想像できないけど。

『今回は騙し討ちじゃないだけ、マシだと思うことにするよ』

「ありがとう、シャル」

『次はないよ』

「肝に銘じておく。助かったよ、本当にありがとう」

『決定じゃないからね。ククロに聞いてから、かけ直す』

プツリ、と回線が切れる音がした。

シャルは、通話が切れた携帯を眺め、頭を抱えた。頭が痛い。ただでさえ、大仕事の直前で忙しいのに、難問が持ち込まれた。呪われているに違いない。

せめて、オークションが終わってからなら、手助けもできる。タローときたら、もう行かせた、止められない、とか。俺を舐めてるのか。

放置しても、勝手に来るだろうから、結局は話すことになる。

それに、タローがキレて報復されるのが怖い。

殺したら、念入りに準備を重ねて、徹底的に復讐をするだろう。影から、裏から手を伸ばして、蜘蛛を消しに来る可能性が高い。

半年前もかぼちゃのせいで、色々大変だったんだ。

ホームは滅茶苦茶になるし、探して来いと詰め寄せられた。

四方八方探した結果、発見できなくて無能扱いされた。

この恨みは忘れない。

ゾルディックからも連絡がない。一体どこで暮らしてるんだ。

メラメラと怒りを燃え上がらせながら、ノックをしてドアノブを回す。

部屋に入ると、クロロが本から顔を上げた。

「どうした？」

「団長、タローが変な話持ち込んできた」

「暗殺依頼の件か？ 随分、遅い連絡だ」

「違う、ヒソカのことだって」

「……………殺して蜘蛛に入るなら、かまわないと伝える」

変態のことで話と言われたら、そう思うだろう。タローとカイトがヒソカを殴るに來ると。

変態が殺されて、代わりにタローが入るなら賛成する。情報探索系が、喉から手が出るほど欲しい。あの逃げ足があれば、バカも黙るだろう。

でも、今回は違う。

「タローとカイトに、弟ができたらしいよ」

「いきなり話が飛んだな」

「飛んでない。その子がヒソカを殴りに來るらしい」

「相変わらず、理解できん。いつ來る」

「九月初めに」

クロロの瞳が大きく開かれ、こちらを凝視している。

うちの団長にこんな顔させるなんて、本当に大物だよ。

「時期をずらせと言っておけ」

「もう、行かせたそうだよ。止めるのも無理だって」

「……………手に負えん。一度、話に来させる」

「仮宿に？」

「ホテルに部屋を取れ。そこで話をする」

「了解」

クロロが視線を本に戻した。会話終了の合図だ。

ドアを閉め、廊下を自室へと歩く。携帯でホテルを確保した後、タワーへ電話をかける。

避けられない事態なら、早めに済ませてしまいたい。そう、考えながら。

携帯を耳にあて、返答を聞く。

「ありがとう。必ず向かう」

通話を切ってカイトを振り返り、顔末を教える。

明らかに、ホツとした表情だ。俺も安心した。

来いと言われたのが、仮宿ではなく、ホテルだからだ。クロロはシャルだけ連れて来る。

ありがたい。だが、ここからが本番だ。

早ければ早いほどいい、すぐにホテルへ向かおう。

ジャケットだけを掴み、カイトを連れてホテルへ飛んだ。

ランタンを使って走った結果、五分後にはホテルに到着できた。かなり時間がある。

クロロたちを待ちながら作戦を練りたかった。

彼らが何の条件もなしに、了承するとは思えない。交換条件の材料が必要だろう。

「こちらの情報を渡すことになると思う」

「どんな情報だ？」

「殴る相手と、彼らがこの先戦う相手の能力。これで手を打てればラッキーかな」

「妥当だな。文句はない」

ヒソカと陰獣の能力、これで了承がもぎ取れば、御の字だろう。後は加えるならネオンか。だが、占いをクロロに盗られるのは阻止したい。

あの能力は本当にやっかいだ。占い結果で、ウボォー誘拐がバレル可能性が高い。

ドッキリテクスチャー薄っぺらな嘘の詳細は知らないだろう。物語で完全に騙されていた。

それを匂わせて、興味を持たせるしかないな。

脅すのもいいかも。流星街を更地にする、とでも言えば多少は効くだろう。

ポンと肩を叩かれ、顔を上げる。視線を入口に移すと、ちょうどクロロとシャルが、自動ドアを開けて入ってきた。

クロロは髪を下ろして日常モードで、二人ともスーツを着用していた。シャルが手を振っている。

カイトに目で合図をして、立ち上がった。

「早かったね。急いできたのに」

「こつちも、急いだんだ。無理を言っている自覚はあるよ」

「シャル、キーを受け取ってこい」

頷いたシャルがフロントへ向かった。

クロロに顎でエレベーターを示され、歩き出す。

「弟ができたそうだな」

「弟みたいな子だよ」

ボタンを押して待っていると、シャルが戻ってくる。キーを見ると、最上階。

お前ら、どんだけ稼いでるんだ。話し合いにスイートですか、だからスーツ着てるのか。

俺とは住んでる世界が違いすぎる。

部屋へ到着し、酒を勧められた。手を振って断り、ソファへ蜘蛛と向かい合わせに座る。

クロロが単刀直入に、話を切り出した。

「また、修行の課題か」

「俺たちの大切な子が、ヒソカに大事な物を盗られたらしい」

「なるほど、それで殴るか。だが、死ぬぞ」

「死なせたくない。だから、クロロに話に来たんだ」

顎に手をあて、考え込んでいる。相変わらず、どんな姿も絵になるイケメンぶりだ。

視線を俺に合わせ、ゆっくりと話を続ける。

「九月に何かがあるか、知っているか？」

「ヒソカを追っていたから、だいたいは把握してる」

「なら、時期をずらせ。意味はわかるだろう」

「ずらせと言うことは、殴ること自体は許してくれるんだ。」

「意外だ、何の条件もなしに受け入れるなんて……裏があるのか。」

「裏はない。来るなど言っても、来るんだろう」

「俺たちが止めても、行くだろうし、時期もずらさないと思う」

「なぜだ」

「一度中止になってる。誰かが雇った暗殺者のせいだ」

「まあ、嘘だけど。そういうことにおこつ。ゾルディックにいい理由を貰えたな。」

ヨークシンを乗り越えたら、再び、ゾルディックは無視でいいだろう。

ピクシーとカイトの勘があれば、なんとかなる。

「俺が悪いのか？ それに、俺たちが殺さなくても、ヒソカが殺すぞ」

「殺さない。あの子たちはヒソカのお気に入りなんだよ」

「たち？ 複数形か。何人で来るんだ」

「二人、片方はゾルディックの後継ぎだよ」

「やっかいだな」

やはり蜘蛛でも、ゾルディックには二の足を踏むか。仕事で命を落とすなら話は違うだろうが、仕事以外なら復讐に来るだろう。

あんな強者が団体で復讐にくるなんて、俺もごめんだ。

「もう片方を、俺たちが殺したらどうする？」

「もちろん、全力で復讐するよ。流星街を更地にしてでも」

「できるは思えないな」

「できる、できないじゃないよ。やるんだ」

「……………」ここで、お前たちを殺せば問題解決だ」

クロロから殺気が溢れ、すぐ後にシャルからも殺気が漏れてくる。カイトともに、後ろへとび、本を開いてピクシーを呼ぶ。カイトも腰の長剣を抜いて構えた。

クロロも本を開き、シャルはアンテナと携帯を取り出ししている。ピリピリとした空気が部屋を包み込む。お互い睨み合い、相手の出方を伺う。

パラパラと盗賊スキルハンターの極意のページが開いた。

現れたのは、インドアフィッシュ密室遊魚

すぐさま、近くにあった酒瓶をひつつかみ、窓ガラスへ投げつける。

粉々になり、地上へと破片が落ちていく。それとともに、消えていく魚たち。

クロロがニヤリとほほ笑んだ。

「やはり、コレのことは知っていたか」

「なんのことかなー」

「タイムンの時、コレを呼んだら身体が動いていた」

そんなとこまで、見てんのかよ！ ほんとに嫌な奴だ。目ざとすぎる。

これだから、蜘蛛とやるのは嫌なんだ。

「そろそろ、話し合いに戻らない？ 報酬を用意してきたんだ」

「依頼の形にするわけか。報酬とは何だ」

お互い言葉を交わしながらも、構えを解く気配はない。
これは、話し合いがまとまるか、決裂するまでこのままだな。

「ヒソカ的能力の詳細」

「知っている。報酬にならん」

「知らないと思うな。隠してるみたいだよ」

「何故、そうわかる？」

「内緒。報酬を受け取るなら、十老頭が飼ってる陰獣の能力も、知
っているかぎり教える」

「ほう、陰獣はだいたい掴んでいる」

「クロロが欲しがる能力もあるけど、それも掴んでるの？」

「……………いいだろう。依頼を受ける」

パタンと本を閉じ、ソファに座りなおした。シャルも構えを解い
たので、こちらも倣った。

全員、座り直したところで、依頼内容の確認が行われた。

依頼内容はただ一つ、ゴンとキルアを殺さないこと。依頼期間は
九月末まで。

蜘蛛の頭として受諾した、との返答をもらい、こちらも情報を譲
渡する。

陰獣は全滅が確定した。まあ、物語でも殺されたし、諦めてもら

おう。

死ぬ覚悟ができてないなら、陰獣に所属するはずがない。能力に驕っている可能性もあるが、知ったことではない。

「快く受けてもらって、本当に嬉しいよ」

「嫌味はやめろ。他に面白い能力はないか？ 高く買っぞ」

「気が向いたら売りに行くよ」

「やっかいごとを土産に持って来そうだ」

「やっかいごと好きでしょ」

「面白いことならな。お前たちが持つてくるのは、当たり前外れの差が激しい」

カイトのタイムマンは、楽しかったみたいだね。

何にせよ、これで蜘蛛は大丈夫だ。肩の荷が降りた気分だ。

「じゃあ、俺たちは帰るよ。またね」

「ダメだよ。帰さない」

「シャル、何か用事？」

「団長に話を通した報酬を貰ってない。コレよろしく」

「はあ?!」

手渡された書類をめくり、軽く目を通していく。

内容はマフィアンコミュニティの情報収集。シャルが担当している仕事か。

てか、部外者に見せるな。これ見たら、蜘蛛がどこを、どの順番に、襲うのか予想できるぞ。

「こんなの見せないでよ。困る」

「どうせ、調べてるんでしょ。ついでに手伝って」

「しょうがないな」。詳細はメールでいい？」

「うん、これで処理してから送って」

渡されたのは、一枚のディスク。暗号処理と解読用といったところか。

シャルの仕事に、アドレスとパソコン用意しなきゃダメだな。メインPCじゃ怖くて使えない。

「じゃあ、今度は本当に帰るよ。調査は、九月までには終わらせる」

「よろしくね。じゃあ、また」

「買取は本気だ。その気になったら売りに来い」

「世話になったな。二人を頼む」

ランタンを呼んで、定宿に戻る。

あー、これでクラピカ攫わなくてもよくなったな。

ウポォーだけ助けて、蜘蛛に恩を売るか？　ゴンにバレると嫌われるかな。

後で、カイトと相談だな。

まあ、何にせよ。無事まとまってよかった。余計な仕事は増えただけど、これくらいなら問題ない。

調査を押しつけたのは、調べられないのではなく、純粹に面倒だったんだろう。

「カイト、仕事にかかるよ」

「調査だろう？　俺は必要ないはずだ」

「マフィアコミュニティに乗り込まないと、調査できない情報がある」

「……………わかった」

自分だけ樂をしようなんて、許さない。

こき使ってやる。

その間に、カイトが殴ることを忘れてくれればいいのに。

二人はランタンを連れ、調査のためヨークシンへと乗り込んでいった。

第45話

ガラスが散乱し、少し荒れたホテルの室内。

ソファに座った二人の蜘蛛は、ブランデーを傾け直接口内へと注いでいく。

「依頼受けてよかったの？」

依頼など受けずに、殺しておけばよかったのに。

かなりの被害を被るだろうが、タローを集中的に狙えば殺せただけだ。

個人としては殺したくない。だが、蜘蛛の参謀としては殺しておきたかった。

あの二人の行動が読めないし、居場所や情報もほとんど手に入らない。

蜘蛛の為に、不確定要素はいらない。

「タローの思考パターンはわかりやすい」

「俺には全然わからないよ」

「わかる。俺とヤツは似ているからな」

信じられないセリフを吐き、ふっと柔らかく笑う。

悪逆非道と呼ばれる団長とは違い、蜘蛛のコートを脱いだクロロは、一転穏やかな人物へと変貌する。

最近は見られなかった、一緒に育った仲間しか知らない素顔だ。

出会ってから現在まで、クロロのことは誰よりも信頼している。だけど、そのセリフだけは信じられない。いくらなんでも、言い過ぎだ。

「ちつとも、似てないよ。目が腐ってるの?」

「似てる。ヤツも俺と同じで、仲間のためならなんでもやる」

「まあ、そんなところあるね……」

「つまり、仲間以外には冷淡で非情だ。たとえば、目前で誰が殺されようと、仲間でなければ見捨てる」

その意見には同意できない。タローは良くも悪くも、普通の人間だ。

普通の人間が、そこまで簡単に割り切れるとは思えない。

「弱いからじゃないの?」

「弱いヤツが、流星街を更地にすると言っすのか」

「あれは本気じゃないでしょ。いくらなんでも、流星街には手を出さない」

「俺は出すと確信した。依頼を拒否して弟を殺せば、必ず実行する」

「じゃあ、何で殺さなかったの? 追いかけて殺したくなったよ」

普通の人間と考えるのは辞めよう。

流星街に手を出せるヤツが、普通の人間などであるはずがない。

やっぱり、殺しとけばよかったのに。

二人が面白いから。きつと、そんな理由で殺さなかったのだろう。どんな名医にも治せない、俺たちの困った性癖。

「ヤツはまだ使い道がある。近日中に空席ができることだしな」

蜘蛛に誘う気だろうか、たしかに近いうちに蜘蛛の手足は減る。

タローは、とんでもないモノを報酬に用意していた。

報酬譲渡の際、備え付けのメモ帳をいじりつつ、語りだした。

『ドッキリテクスチャ薄っぺらな嘘は紙のような薄さなら、どんな質感も再現して貼り付けられる。

例えば、【皮膚に貼り付けて、刺青を再現】 するとか』

報酬を受け取った瞬間、目の前が真っ赤に染まった。

クロロが押さえなければ、そのまま変態を殺しに行ったに違いな
い。

変態が、クロロとタイマンを望んでいたのは知っていた。

だが、入団したフリまでするとは、思いもなかった。

「ヒソカはどうするの?」

「蜘蛛の名を騙かたるヤツは皆殺し。それが俺たちの慣ならわしだ」

「やった! 俺に殺らせてね」

「ヒソカは人気者だ。取り合いになるな」

「そこをなんとか! 内緒にしていればいいよ」

「それはできん。全員の前で話してから殺す。殺りたいなら、勝ち取れ」

やはり、そうなるか。

頭を捻り、変態の殺害権利獲得方法を考える。どの仲間も、きつとヒソカを殺りたがる。

だが、これだけは譲れない。

バカを先行させて、最後の一撃だけをもらうか。

戦闘に夢中になった背後から、アンテナを刺せば簡単だ。そうしよう。

ギヤーギヤー騒ぐだろうが、殺った者勝ちだ。

方策がまとまって隣を見ると、クロロが携帯を取り出しボタンを押していた。

「用事？」

「標的を探していたからな。教えてやろうかと」

「待つて！ 頼んだ仕事が終わるまでは困るよ」

「九月一日に標的が現れると伝える」

「それならいいけど」

押し付けた仕事が終われば、何の問題もない。

どうせ、あの逃げ足で逃げ回って、色よい結果は聞けないだろう。ゾルディックも可哀相に。タワーにかかりきりで、他の依頼をあまりこなせてない。

今回を逃したら、破棄してくるかもしれないな。

実現すると、ゾルディックに依頼破棄をさせた数少ない人間とし

て、有名になれる。

さぞや、嬉しいだろう。有名人を殺そうと、次々挑戦者が現れるに違いない。

ああ、タローたちは本当に面白い。

仕事のせいで、ゾルディックとの攻防を見学できないのが、残念でたまらない。

暗殺者と相対した時、タローとカイトはどんな顔をするだろうか。

そんな楽しい想像を膨らませながら、仮宿へと帰っていった。

ゾクリと背筋が振るえ、背後を振り返った。

「どっした？」

「……嫌な予感がした」

「俺は何も感じないが」

腕を擦って鳥肌を収める。蜘蛛がまた何か企んでいるのか。

九月まで時間がない。蜘蛛はしばらく放置して、動き出さないと間に合わない。

情報収集は抜きにして、俺たちでやっておきたいこともある。師匠の手を借りると話すと、予想通りカイトは渋い顔をした。

「この内容なら、リーシャンさんの助けがなくてもできる」

「借りるのは、情報収集のことじゃないよ。少し問題があつてね」

「問題？ ゴンとキルアのこと以外で、まだ何かあるのか」

「結果的に、マフィアンコミュニティーにケンカを売ることになるんだ」

「そんなことが問題なのか？」

マフィアにケンカを売る、と言ったのに動じてないな。さすが、カイト。

まあ、俺たちが負けるとは思わないけど、迷惑はかけるから、断りを入れないといけない。

それに、別の件でお願いもあるしね。

「お願い？ また何か、強請^{ねだ}るつもりなのか」

「攫った人間を預かってもらおうかと」

「クラピカとウボォーか？」

「そつちじゃないよ。別口」

「誰だ？」

「師匠にも聞いてもらいたいから、着いてからね」

師匠の家までは、飛べばすぐ。到着したが、就寝しているようだ。当たり前か。午前0時はとくに過ぎて、今は深夜。おねだりは明日にして、カイトをベットに寝かせ、パソコンを起動する。

新しいパソコンを注文して、いくつかの念具の在庫を職人へ確認した後、発注をかける。

ウボオーをどうするかは、まだ決めてない。カイトとの相談次第だけど、準備は怠らない。

念には念を。無駄になってもいい、準備が足りずに失敗したら目も当てられない。

ヨークシンでの、第一目標はゴンとキルアの命を守ること。これは絶対に達成する。

第二目標は、クロロにネオンの天使の自動筆記を渡さないこと。ラフリーゴーストライター出来れば達成したい。

ネオンを誘拐して、師匠に預かってもらう。クロロの能力は相手が死ねば使えない。

だけど、さすがに殺すのは、可哀相だ。まだ子供だし、盗まれても困るだけで、俺たちの命にかかわるわけじゃない。

蜘蛛がヨークシンから去ったら、家に帰せばいいだろう。

俺たちが利用するつもりは全くない。あんな能力必要ない。

物語では、100%当たる占いとクローズアップされていたが、そんないいモノじゃない。

ネオンの占いは麻薬と同じだ。

その絶対的な中率ゆえに、占った人間たちは占いへ入れ込み、依存していく。

やがて、占いがなければ、夕食のメニューさえ決められない、そんな人間へと変わる。

これぞまさしく、悪魔の能力。

ただでさえ、物語のせいで思考が硬直しがちで、何度も痛い目を見ている。

この上、占いにまで縛られるなんてゴメンだ。

自分の未来は、自分で判断して紡ぐ。

その結果、命を落とそうと自分のせい。そう納得して死んでいく。

占いに振り回されて死ぬ、なんてことになったら、悔やんでも悔やみきれない。

ネオンはすでにヨークシンへ向かって出発している。

到着したら、シャルの仕事完了後、誘拐して監禁。

九月の占いは、九月にならないと占えない。

八月中に誘拐すれば、蜘蛛にネオンの情報自体漏れないと思う。

たぶん。

師匠なら、ネオンを逃がすことはないし、占いに興味もないだろう。

その行動が、マフィアンコミュニティにケンカを売ったことになる。

十老頭にもファンがいる。そう、蜘蛛に殺された男が言っていた。

コミュニティは、ネオンを攫った俺たちを、血眼で探し回るに違いない。

家族も皆殺しだと言っていたが、俺たちの家族と呼べる人は、師匠とジンさんだけ。

マフィアごときに、どうにかできる人じゃない。

それに、師匠は元マフィアだし、コミュニティの詳しい話も聞いておきたい。

ネオン周辺の情報を調査し、ソファに沈んだのは朝と言っていい
午前五時。

夢の中から蹴飛ばされ、フラフラしながら顔を洗う。カイトの起
こし方は、いつも荒っぽい。

自分の寝起きがいいからって、俺にも求めないでほしい。

今日の朝食はジャポン風。

納豆を一心不乱にかき混ぜていると、師匠がダイニングに入ってきた。

「おはようございます。師匠」

「リーシャンさん、お邪魔してます」

「おはよう。二人共、今日はどうしたんですか？」

「マフィアにケンカ売る予定なんで、話をしようと思って。それから、女の子を一人預かってほしくて」

「いきなりですね。マフィアの件はかまいませんが、女の子とは？」

師匠とカイトに、これから行う予定を包み隠さず話した。

ネオンの件を聞いた二人の反応は正反対だった。

カイトは顔を歪め、気が向かないと遠まわしに反対してきた。普

通の女の子を誘拐するのは嫌なんだろう。

師匠はウキウキと、楽しげに了承してくれた。

「タローが手を離れて、少し寂しかったんです」

「親離れしたとは思えないが」

「うるさい。師匠、攫って監禁する予定なんですけど……」

「監禁なんて、女性に使っていい言葉ではありませんね」

「すみません。あの、誘拐するので、多少は拘束しないと逃げ出しますよ」

「わかってますよ。外出させなければいいんでしょう?」

「えっと……まかせます」

師匠の勢いに押され、問題を放り投げる。困った顔をしながら、仕方なく了承すると思っていた。

まさか、こんな風に話が転がるとは……信じられない。

女の子を、シャルみたいな方法で、監禁するのは抵抗がある。

小部屋に監禁して、飲食の面倒だけ見てもらえばいいと、考えていたのだ。

ちょっと複雑だ。

この様子だと、師匠は家から出さないだけで、きちんと面倒みそ
うだ。

ヨークシンでは、師匠の家を拠点に使うので、俺たちと暮らすこ
とになる。

女の子とまともな会話が俺にできるのか。クラリと、眩暈が襲っ

た。

不安だ。激しく不安だ。

「あー、それで、えっと、コミュニティーの内情を聞きたいです」

「一言で言えば、必要悪ですね。完全に潰すのは了承できません」

「そこまではしませんって。たぶん」

「タローは暴走したら、何をするかわかりません」

師匠はまだ、マフィアと繋がりがあつたようだ。

昔はハンターになつても、マフィアの仕事をやってたらしい。

仕事内容は怖くて聞けなかった。

以前、師匠に放り込まれた、警察の死体解体工場。あれは師匠がコミュニティーと交渉して、作り上げたようだ。

かなり、顔が効きそうだ。

シャルの仕事もあるし、ネオン誘拐のためにも、内部に食い込みたい。

「コミュニティーにコネってないですか？ 周辺警備とかでいいんですけど」

「問題ないと思います。ねじ込みましょう」

「できれば、二、三日中には潜入したいです」

「十老頭に貸しがあります。すぐに話をつけます」

十老頭に貸しって、師匠は何をやったんだ。

頭を抑える俺たちを尻目に、師匠は電話を何本かかけ、あつという間に警備の仕事を勝ち取った。

なんか、こういうところジンさんにすっごく似てる。言ったら殺されるけど。

これで師匠と俺の繋がりがバレるな。

「コミュニティーから報復が来ると思うんですけど」

「僕には何もできません。大丈夫ですよ」

「そうなんですか」

「この家に、近づくことすらできません」

遠くを見つめながら、過去を思い出す。

はあ……昔の俺は、蜘蛛や蟻から師匠を守ろうって燃えてたな。

なんでそんなに、おこがましいことを考えてたんだろう。タイムマシンに乗って、教えてやりたい。

メルエムでも連れて来ないと、師匠をどうにかするのは無理だ。

明日の昼に、指示されたホテルへ向かう。

そこで軽く顔合わせを行い、ホテル周辺へ配置されるらしい。

あー、そういえばセンリツをどうしよう。やっかいだよな、あの能力。

心音で判断かあ、嘘をつかなければいいのかな？ どうなんだろう。

誘拐当日まで、ノストラードを避ければなんとかなるか。

あー、マフィアの警備なら、ブラックスーツ着ないとダメだ。俺は何着か持っているけど。

「カイトってスーツ持ってたっけ？」

「ない。買ってくるか」

「お願い、ついでにお菓子も買ってきてよ。ストックなくなりそう」

「僕も行きます」

「はっ？」

「女の子が来るんですよ？ 必要な物が沢山あります」

ウキウキと、はしゃぐ師匠に俺まで連れ出され、洋品店を中心に次々とハシゴしていく。

まだ、時間があるんだから、通販でいいじゃないか……そう言いたい、師匠には逆らえない。

俺たちは師匠に、山ほど借りがあるのだ。

買い物くらい付き合ってもいいか、そう思いながら、荷物持ちの任務を遂行した。

第46話(前書き)

マフィアは現代日本というと、ヤクザよりタチが悪い人たちです。タローはマフィアという人種が嫌いなようです。

第46話

細身のブラックスーツに身を包み、タイを首に巻く。サングラスをかけ、髪を後ろへとキック撫で付ける。

ナイフが隠れるように、ジャケットは長めにした。最後にキルアと同じ腕輪をつけて、変装完了。

悪魔全書を手に持って、鏡で姿を確認するが、いまいち似合っていない。

マフィアっぽく見えない、ただの一般人だ。

クロロはあれほど変わるのに……神様は不公平だ。

カイトに視線を移すと、長い髪を一つに後ろでまとめ、同じデザインのサングラスとスーツを身に着けている。

俺とは違い、どこからどう見てもチンピラ。

「これが育ちの差ってヤツか」

軽く殴り飛ばされた後、仕事先であるホテルへ向かう。

マフィアは信頼が全て。

ありがたいことに、彼らは監視カメラの類を一切使わず、人力のみでオークションの警備と運営を行う。

ホテルは会場ではないので、多少は存在するが、一般人を監視するレベル。

後で消しておけば問題ない。

携帯も持ち込み禁止だ。もちろん、守るわけない。

軽い変装をして、髪型を変えれば素性がバレるのは遅くなる。

警備の人間は、全て顔写真を撮られるので、完全な証拠隠滅は不可能だ。

ゾルディックの探索が怖いが、ケセラセラなるようになれば、で行く。

こちらから、彼らの情報を掴むのは不可能に近い。ピクシーとカイトの勘で防ぐしかない。

物語で蜘蛛暗殺の依頼が入る日は、二日か三日だったはずだ。

物語通りなら、九月一日までは無視でいい。だが、もう信用はできない。

「キルア以外の銀髪を見たら、すぐ逃げるよ」

「まだ来ないんだろう?」

「念には念を。物語はすでに変わってるよ」

オークションの皆殺し以外は、全て変わると考えて動くべきだ。

ノストラードのボスとネオンは、ヨークシンへ向かった。

物語ではボスは一緒ではなかった。なのに、ネオンと一緒に来る。

おそらく、ボスの占いで何か出たんだろう。娘が誘拐されると出た、その回避の為に娘と共に来た。

そんなところだろう。

回避方法がどんなものかは、まだわからない。周囲をさぐり、予測を立てるしかない。

護衛も、俺たちが知らないヤツがいる可能性が高い。

物語は必ず変化すると確信し、ネオン誘拐の重要度が上昇した。できれば、失敗したくない。

「頼みがある」

「何？ 面倒は嫌だよ。忙しいんだ」

「犬使いの犬を、助けてやりたい」

「……………りょーかい」

どこまで、動物に優しいんだ。呆れて何も言えない。

何匹いたっけ……………んなの覚えてるわけない。

三匹くらいなら、連れて帰ってもいいけど。面倒はどうせカイトがみるだろうし。

四匹以上いたらどうしよう。飼い主探ししないとダメだな。

俺にとっては、どうでもいい問題の解決策を探している間に、ホテルに到着。

円を広げてから、フロントに行って合言葉を伝えると、奥の警備室に案内された。

拾い上げていく情報から、ここがダミー部屋だとわかった。

監視テレビの後ろに空洞があり、そこに何人が控えている。念使いはいないようだ。

監視ビデオの前にイスに座る、いかにもな男。顔中に傷跡があり、いかついマツチヨ。典型的なマフィアだ。

「お前ら、力が使えると聞いたが、どんなのだ」

バカなのか。マフィアになるくらいだ、バカなんだろう。

能力のことを、ベラベラしゃべると思うのか。思ってるんだろうな、バカだから。

「教えません。仕事内容の説明をお願いします」

「ここでは、全員教えてもらう。それがこのルールだ」

「無理です。諦めて下さい」

「教えないなら、仕事を下りろ」

「ええ、そうします」

隣に目配せをして、ドアへと向かう。

師匠におねだりして、ねじ込んだ仕事なのに、こんなに早く中止になるとは。

どうしても、この仕事をやらないといけないわけじゃない。

ドアノブに手をかけた所で、男が慌てて引き止めてきた。お前は

何がしたいんだ。

ただの脅しで、本気で下りるとは思わなかったらしい。

お前のとこにくる能力者は、どんだけ程度が低いんだよ。

カイトを振り返ると、肩をすくめ両手を軽く挙げた。諦め早いね。

「お前らの担当配置図だ。ここで見て覚える。持ち出しは許さん」

こんなに簡単に、配置図を見せてくれるなんて、本当に助かる。

俺たち以外の配置も書き込んである。

横の連携を取りやすくするためだろうが、なんて危機感のなさだ。

それだけ、師匠への信頼度が高いとも言える。師匠が裏切るなど思ってもいないらしい。

完全に潰さなければいい。

そう、話していた。師匠はマフィアを仲間とみなしてない。好きにやっていいだろう。

配置図を頭に叩き込み、逃走経路を組み立てる。配置は野外だが、休憩は内部で取れる。

調査に問題はなさそうだ。

配置は、ホテル裏口の駐車場。

このホテルは、各マフィア組織の幹部クラス以下しか泊まらないようだ。

さっそく配置に着き、広げた円で情報収集を行う。

ピクシーに小さな地図を作ってもらい、カイトが壁になって地図を隠す。でかいのはこういう時、便利だ。

地図なら、バレても警備のためだと言い逃れができる。パソコンを手元に置けないので、記憶する必要があるのが大変だけど。

「暇だ。緑茶が飲みたい」

「警戒は解かないでよ」

「しばらくは大丈夫だ」

勘か。カイトがそう言うなら、そうなんだろう。

暇なら、地図の記憶を手伝ってほしい。やらないだろうけどさ。

それから二人で、シャルの仕事を進め、合間を使いネオン周辺の情報収集を同時に行った、

シャルへ報告のメールが送れたのは、更に数日後。

なんとか、八月中に終わった……これ以上でこずると、誘拐は諦めていた。

モラウをネオンの父が雇ったからだ。占いのためとはいえ、どんなコネを使ったんだか。

オークションまで、後二日。ネオンたちはとっくに到着している。

仕事合間の休憩時間。

与えられた部屋へ戻り、念入りに室内を確認する。これ以降、会話を聞かれるとマズイ。

「さて、今日が本番だよ」

「どっつやるんだ」

「占いがあるけど、気にせず奇襲をかける」

カイトに作戦内容を説明する。

ネオンのわがままのせいで、ヨークシンに来る破目になったと読んだ。

モラウを追加で雇ったのが、その根拠だ。あの人を雇うということとは、守りきるつもりだということ。

ネオンが調べた通りのホテルへ入り、警備を強化しただけ。

つまり、本来の回避行動はとってないと予想した。本来のモノは、この街へ来ないという内容だと考えた。

警備の仕事が終わった深夜、ネオンが泊まるホテルを急襲する。

非常階段を使って上階へと登り、泊まる部屋の真下へ。

その後、天井をぶち壊して、ネオンの泊まる室内へ侵入するといふモノ。

「突入して彼女を確保したら、すぐに飛ぶよ」

「相手の能力者は？」

「物語通りとモラウさんがいるね」

「ああ、護衛軍の足止めの」

「対策は簡単だから、モラウさんは俺がやるよ。物語通りのヤツはまかせろ」

「わかった。他になにかあるか？」

「死神の円舞曲サイレントワルツの準備をお願い」

「鎌を使うのか」

ゴンの友人が混じってるから、使いたくないんだな。

クラピカは復讐のために、マフィアを選んだ。マフィアを選んだということは、命を捨てたという意味だ。

復讐に目がくらんで、裏社会を甘く見てるんだろうな。子供だし。血で血を洗う抗争を続け、他人の人生や命をおもちゃにしている。それがマフィアという生き物なんだ。

マフィアの娘を守るといって軽い仕事だが、彼らにすり寄って手伝っている。

たとえば、そんな覚悟はできていなくても、言い訳にならない。

鎌は作戦の要だ。絶対に使ってもらおう。

「今回は鎌で行こう」

「気がすすまない」

「友人はマフィアに手を貸している。忘れないでよ」

「タローは友人に冷たいな」

「あの子は見てて、説教したくなるんだよ」

「更正させるのも大人の役目だ」

「意見の押し付けは良くないよ。友人はそう生きたいんだ」

俺がどう言おうと、鎌を振るうのはカイトだ。カイトが調整して、死なせないだろう。

しかし、俺は本当に冷たいな。物語を読んだ頃は、クラピカが好きだったんだけど。

物語と現実は違うってことかな。実際に命がかかると、理想なんて追えない。

蜘蛛との交渉が成功した今、彼を攫うとリスクが増える。

ネオンは弱い。クラピカは強い。ネオンは自由に動けない、クラピカは自由に動ける。

強く、自由に動ける彼を蜘蛛から救うには、かなりの賭けをしなければいけない。

俺の手はそこまで長くない。自分と大事な人を守るだけで精一杯だ。

俺が物語を変えたからなんだけどさ。

カイトとゴンたちの命と物語。どちらが大事か、天秤にかけられるでもない。

「予定表に説教を入れてくれ」

「また、無茶いっただから。今、彼を攫う余裕はないよ」

「九月になってからでいい。入れておいてくれ」

「……………りょーかい」

本当に優しいね。

しかし、どうするか。ウボオーとの対決が起こるか、微妙になってきたんだよな。

誘拐が成功すると、クラピカはネオン搜索に回される可能性が高い。

ネオンを餌にすれば釣れるだろうけど、ネオンは閉じ込めたままにしておきたい。

そうになると、実行犯の俺たちが餌になるしかないか。すると、ゾルディックが来る。

ゾルディックから逃げ回りながら、攫って説教するしかないのか。

ネオンと攫うのがベストに思えるけど、保存場所がない。定宿だと支配人の許可がいる。

実行時間まであとわずか、そんな急には許可は下りない。師匠に合わせる気もない。

カイトの無茶な要求のせいで、八方塞になった。いつものことだけだ。

警備終了時間になり、誘拐へとシフトする。

途中にいるマフィアを倒し、その身体を物陰に隠しながらホテルへ到着した。

地図で確認しつつ、階段の手すりへから、手すりへとジャンプして登っていく。

モラウは真下にいた。クラピカと一緒に。他の能力者と護衛のマフィアはネオンの周りにいる。

占いで階下から来ると出たのかな？ 本当にやっかいな能力だ。鎌を肩に乗せているカイトに、クラピカの押さえを頼む。

「鎌はタイマンには向かない。知ってるだろ？」

「足で踏みつけて転がして。動けなければ死なないよ」

「タローは無茶ばかりだな」

カイトにだけは言われたくないよ。

軽口を言い合っている間に、モラウがいる階に到着した。

ゆっくりと廊下を歩き、ピクシーを戻してランタンと交代させる。目配せを交わし、天井に張り付く。

サイレントウォルツ

死神の円舞曲が発動し、廊下の壁がガラガラと轟音響かせて、壊れていく。

その瞬間、崩れた壁の向こうから、白い煙が一気にあふれてきた。

スモーキーシエイル
監獄ロック

それは困る。

煙の中に突入し、モラウの姿を探す。煙に隠れると、この檻が解けなくなる。

煙が充満して室内なのか、廊下なのか、よくわからない。
泳ぐように煙をかきわけ、進んでいると人影が見えた。

「おいたはいけないな。小僧」

あつさり出てきすぎ。アンタはサポート系だって、師匠が言ったのに。

てか、俺が小僧……四十歳超えたんですが。

虚をつかれていた間に、煙人形が次々と増えていく。この人形たちは本気でヤバイ。

陣形を組み、連携を取って襲い掛かってくる。

回避しながらモラウに狙いを絞り、とりかえっこを発動する。

モラウの身体だけ と自分自身を入れ替えた。

倒れていくキセルを受け止め、腕に抱える。でかすぎだ。

視界がクリアになり、ようやく室内にいたことが判明した。

煙が晴れた室内を見渡すと、クラピカが腹を押さえ、のたうちながら呻いていた。

近くの壁がへこんで亀裂が走り、クラピカの口元には、嘔吐した残骸と血液が付着している。

俺の指示通り、踏みつけて蹴飛ばしたようだ。死なせたくないくせに、情け容赦ないな。

モラウの顔が驚愕に染まり、血が昇ったのか朱色に変化する。

「てめえ！」

「サポート系なのに、チームの先陣を切ったらダメだよ。鎌を！」

部屋の隅へ素早く移動し、カイトへ合図を叫ぶ。キセルごと身体

を倒し、今度は床へ張り付く。

死神の鎌が優雅に舞い、天井を切り裂いていく。モラウは察知したのか、テラスのドアを蹴破ってベランダに飛び出した。

崩れてくる天井の瓦礫を伝い、上階へ駆け上がる。目を左右に動かし、状況を確認する。ダルツオルネが能力者で周りを固め、ネオンを抱えて、扉へと走り出そうとしている。

先行したカイトが、風船人形を蹴り飛ばし、銃を連射するマフィアへ鎌を縦横無尽に振るう。

ネオン誘拐前に殺されそう。

急いで飛び上がり、ダルツオルネを囲いから引きずり出す。止める能力者たちの方向へ鎌の刃が襲う。

衝撃波が俺の髪を一房切り取っていく。今のやばかったよ?!。抵抗して、ネオンだけでも逃がそうとあがく、ダルツオルネ。その両足首を切り、アキレス腱を切断する。

ここでオークションから離脱すれば、蜘蛛に殺されずにすむよ。

「ごめんね。その子、貰ってくよ」

「お嬢様! お逃げ下さい!!!」

あたりには血の臭いが充満し、息苦しいほどだ。

逃げると言われたのに、ネオンは腰が抜けたのか、ガタガタと震え、うずくまったまま動かない。

なにこれ、俺が悪役っぽい。

不満を持ちつつ、キセルをカイトへ投げて、ネオンを肩へ抱え上げる。

視界の隅からモラウが駆け上がってくるのが見えた。

「逃げるよ」

「わかった」

モラウは死に物狂いで、キセルを取りかえそうと向かってくる。そりゃそうだ。愛用品がなければ、能力は使えない。使えないなら、対応は簡単だ。

まあ、キセルがあれば、やっかいこの上ないってことだけど。カイトが片手にキセル、もう片方で鎌を持ち、モラウを狙って、鎌を横に振り切る。刃がモラウを襲ったが、空中に飛び上がって避けられ、そのまま拳を向けてくる。

だが、その隙に、キセルが俺の肩に乗った。マントが俺たちと少女を包み込み、視界が暗くなっていく。

「モラウさん。マフィアの仕事を放棄したら、キセルは返すよ」

捨て台詞を残して、師匠の家に転移した。

師匠の所に戻ると、肩で震えるネオンに注射器を打つ。ネオンの身体から力が抜けていき、やがて意識を失った。

ネオンを小部屋のベットに横たえ、毛布をかぶせる。なんとというか、問題の先送りだ。

女の子に騒がれると、どうしていいかさっぱりわからん。

俺は年齢が、そのまま彼女いない暦になる男だ。プライベートで親族以外の女性と話したことはない。

何の自慢にもならないが。

ダイニングで師匠へ事態の報告をすると、カイトと一緒に正座しながら、説教を受けるはめになった。

ネオンを脅えさせたのが悪かったらしい。

無理やり誘拐して、脅えさせないなんて、一体どうやるんだ。

理不尽を感じつつも文句は言えず、黙ってその場に座っていた。

第47話

瓦礫にまみれ、死体と血液が散乱した室内。その静寂を破りモラウが口を開いた

「オレは仕事を降りる」

全員の視線がモラウへ集中する。他の者たちはボロボロなのに、彼だけ傷が一つもない。

モラウが仕事を降りるのは、悪魔が残した台詞のせいだろう。キセルがなければ死活問題だと話した。

全身を見下ろし、自嘲する。私が倒れたのは正に、一瞬だった。壁が崩れたかと思ったら、壁に飛ばされて腹に足が振り下ろされた。

死神は長い金髪の男で、かなりの能力者だと思われる。攻撃は力強く、文字通り血反吐を吐いてのたうち回るハメになった。まだ唇からは出血し、腹は内臓出血をおこしている。

歴然とした差が死神と私の間に存在していた。死神がああを振るえば、私は今ここにいなかった。

情けない、こんな有様で蜘蛛に復讐が出来るのか。拳を握り締めて顔を上げる。まっすぐ前を見つめ、鎖を腹部にあてながら会話を静観した。

「まっ……待ってくれ！ 娘はどうなるんだ!？」

「殺されはしない。オレは魔王と交渉して、キセルを取りかえす」

「魔王が誰か知っていたのか!！」

「いや、戦闘中に気づいた」

「連絡を取る方法だけでもいい！！ 娘を取り戻したいんだ」

「無理だ、魔王は売れない」

カツと頭に血が昇った。この男は自分だけ良ければいいのか。わがまま放題の娘だが、か弱い少女だ。あんな悪魔たちに攫われて、無事なはずがない。

怒りのあまり、口から言葉が滑り落ちる。

「ボスを見捨てるのか」

「お前、甘いなあ。そういうのは嫌いじゃねえけどな」

「殺されなくても、死ぬ目に会わされる可能性がある」

「魔王はそんな人間じゃねえ。五体満足で帰ってくるさ」

「親しいのか？」

「会ったことはあるな。もういいだろ、話は終わりだ」

「待ってくれ！！」

ボスの父親の声が響いたが、モラウは振り返らない。割れた窓から身を躍らせ消えていった。

室内を気まずい雰囲気ですくされる。

父親は放心したように、床に膝を着いていた。

ため息をついて鎖を指へ絡ませる。父親は気に入らないが、娘は父親の犠牲になっただけだ。

能力は使いたくなかったが、いつまでも放っておくわけにもいかない。

「私が探しましょう。地図はありますか？」

目の前に大きな市内地図が用意された。

ダウジングチェーン導く薬指の鎖 を発動させ、ネオンの位置調査を開始するが、鎖がピクリとも反応しない。

もう、市内にはいないのか？

移動系を持っていたようだし、国内から出たのかもしれない。

今度は世界地図を広げ再び鎖を垂らす。鎖はまたもや小揺るぎもせず、一点に留まったままだ。

反応がない……今まで使用した時は、何も問題はなかった。私の能力の問題ではない。

ならば、悪魔の妨害工作に違いない。何らかの念能力で居場所を誤魔化せるのか。

おそらく、監禁場所を隠し追跡を避けるためだ。

予想が正しければ、魔王からの連絡を待つて交渉するか、悪魔が地獄から這い出るのを待つしかない。

父親を見つめ首を大きく振り、成果がなかったことを報告する。

「娘は！ 占いはどうなるんだ！！」

静かな室内には、欲にまみれた父親の叫びが大きく響き渡った。

「……………魔王？ 一体、何の冗談ですか」

説教終了後、師匠の携帯にどこからか電話がかかってきた。
緑茶を入れながら様子を観察する。

呆れた顔で会話を続けているが、漏れ聞こえている内容は意味不明だ。

やがて会話が終わり、師匠が俺たちの前に座りなおす。

「誰ですか？」

「狸じじいからですよ。モラウは仕事を降りたから、キセルを返せ
と言ってきました」

「気づくのが早いなあ」

「ノブさんとは、ジんさんの仕事関係で会ったことがある」

「なるほど、えらく遠回りだね。キセルの受け渡し方法は何と？」

「家に来ます。占い内容が大変興味深かったですね」

「興味深い？」

「私が魔王だそうですよ」

師匠が魔王……………妖怪じゃなくて？ なんか変な占い結果でも出て、
誘拐がわからなかったかな。

その割には階下にいたし、モラウさんも雇っていた。襲われると
でも思ったのか。

まあ、モラウさんが「コピ」を持参するようだし、それまで待つしかない。

モラウさんは三十分ほどで到着した。全身から汗が噴出し、肩を揺らして大きく呼吸をしている。

どれくらい急いで来たんだろうか。

床に適当に放り投げてあったキセルを抱きしめ、号泣しながら再会を喜んでいる。

正直に言うと、そうとうキモイ。師匠やカイトも同じく引いているのがわかる。

アイステイーと濡れタオルを差し出すと、ようやく人心地ついたようだ。

「盗られた時は世界が終わったかと思った」

「大げさな。さっそく、占いとやらを見せて下さい」

「指図すんじゃないやねえ！ お前のせいだろ！！」

「油断するモラウさんが悪いんです」

「悪魔らしい台詞だ」

全員で広げられた占いを覗き込む。

なるほど……これはわかりづらい。俺が誰か、師匠が誰か、あらかじめ知ってないと理解も回避も難しい。

占い内容はこんな感じで、八月最後の二週間分だ。

？ 大事な小鳥に悪魔が目をつけ？

? 死神と悪戯の檻を組み上げる?
? 交渉するなら魔王がいいだろう?
? 悪魔は魔王の膝元で踊るから?

? 貴方の鳥籠へと悪魔が死神に道を示す?
? 籠の底を食い破り小鳥の羽を筆るだろう?
? 欲望の頂点を求めてはいけない?
? 悪魔が魔王に小鳥を捧げるから?

悪魔が俺で、死神がカイト、魔王が師匠で、小鳥がネオン。
俺が悪魔なのは能力のせいだろう。

カイトが死神なのは、死神の円舞曲サイレントワルツの影響かな?

師匠が魔王……たしかに、俺は師匠アクマに逆らえない。マオウ

三週目の詩文は、俺がネオン誘拐計画を立てたことを示唆して
るだろう。

【悪戯の檻】が誘拐のことかな。閉じ込める算段ってことだ。

【交渉するなら魔王がいい】はそのまんまだね。師匠が本気で止め
れば、俺もカイトも諦める。

【悪魔は魔王の膝元で踊る】俺はまだ、師匠の庇護から抜け出てな
いってことかな。恥ずかしい。

最後の詩文は、とうとう誘拐が実行されると出てるな。

【鳥籠】がホテルで俺がカイトに【道】、つまり作戦を示して行く
ってことか。

ネオンの入った【籠の底】、部屋の床を壊して入ってきて、【小
鳥の羽】の護衛であるマフィアと能力者を傷つけることだろう。

【欲望の頂点】とはなんだろう、ネオンのことならオークションに
なる。

だが、これは父親の占いだ。父親はオークションを求めてない。父親の欲望は、ネオンの占いを使って権力を増大させること。占いをさせてはいけない？ それか権力を求めるな？

解釈が難しい。

俺の気持ちを考えれば、占いだ。占いを辞めて、それを知れば誘拐は中止になったのか？

疑いまくって、調査しまくりそうだな。情報サイトに軽く流せば防げたかも？

わからん。

【悪魔が魔王に小鳥を捧げる】は誘拐が実行されて、師匠に渡したってことだろ。

取り戻すには、魔王を見つけ出して、交渉しないといけないってことか。

俺たち以外が見たら、魔王が黒幕で誘拐を指示したように感じるな。

「なるほど、やっぱり頼っていい能力じゃないね」

「アイツら、この魔王が誰かって可哀相なくらいうるたえてたな」

「あらら、自業自得だね」

占いに踊らされていたんだろう。ミイラ取りがミイラになっている。

麻薬の売人は、麻薬に手を出さないルールを知らないんだろうか。

「何をするか知らんが、娘は無事に帰せよ」

「そのつもりですよ。モラウさんも九月の中頃には、理解できると
思います」

「その言葉、信じるからな。じゃあ、オレは帰るぞ」

「お疲れ様でしたー」

「嫌味か！」

モラウさんを見送り、改めて占い結果を眺める。内容は実に抽象
的で憶測で解釈するしかない。

予想したネオンのわがまま説ははずれていた。

ただ単に回避方法がわからなくて、警備を厳重にしただけだった
んだろう。

こんなモノに頼る人間たちの気持ちやさっぱりわからない。
人生を迷うだけな気がする。

「タローの言う通り、ロクでもなかったな」

「真実を知ってなければ、100%の的中率は確信できませんね」

「まあ、俺たちはこんなの無視して、頭で考えて動こうよ」

お茶を飲みながら、予定表を脳内から引っぱり出す。

次のスケジュールは、クラピカとゾルディックとワンコ救出か。

ワンコはまあ、飼い主が殺された後にでも救出すればいいだろう。

問題はクラピカとゾルディックだな。

クラピカの居場所はノストロードだ。

特定するのはたやすいが、ゴンたちの目に止まらないように、攫

う必要がある。

保存場所は定宿でいいだろう。拘束方法はシャルと同じでいける。今日中に支配人と話して、許可をもぎ取らないといけない。ワンコのこと話さないとな。

ゾルディックは常時、ピクシーの地図を展開していないとダメだろう。

円を少し狭くして、小さな地図で監視しながら行動するしかない。ヨークシン周辺ホテル各所に、かぼちゃらんたんを巻かないとな。

面倒だ。カイトが説教の予定なんぞ入れなければ、こんなハメにはならなかった。

とりあえず、ワンコとクラピカを監視しながら、ゾルディックを警戒していこう。

「ワンコ救出から始めよう」

「わかった。ランタンで送ってくれ」

「どこに？」

「どこでもいい、犬用品を買ってくる」

「パドキアでいいかな……」

パドキアは今最も、ゾルディックがいない地域だろう。皮肉な話だけ。

俺を狙うなら、以前と同じ規模で来るだろうしな。

ペットショップに移動し、大きなカートの中に次々と犬用品が放

り込まれていく。

ドックフードとドックタグ付首輪など、全種類制覇する勢いだ。カートはすぐに満杯になり、次のカートへ手を伸ばしている。

「ねえ、何匹いるか知ってるの？」

「六匹だとわかった」

いつの間に調べてたんだ！ そんなこと調べるなら、俺の調査手
伝ってくればよかったのに。

まったく、動物のことになると真面目に働くんだから。これだから、カイトは困る。

「全部は無理だよ？ ちゃんとした飼い主見つけるからさ」

「定宿は広いからいけるだろ。俺が面倒をみるしな」

「散歩とかどうするの？」

「ランタンで飛んで奥地に行けばいい」

「……………わかったよ」

ワンコ六匹と想像より多いが、カイトが世話をするというなら、
かまわない。

能力で使ってたんだし、躰もされてるだろう。

奥地の散歩は少し不安が残るが、カイトが守るに違いない。

定宿はハンター専用ホテルだから、ペットを飼ってる人もいる。
だが、六匹も許可が下りるとは考えにくい。

また、お金で解決か。

預金通帳の中身を思い出し、ため息がでた。
ジンさんから筆り取ったおかげで余裕はあるが、出来れば節約し
たかった。

「持ちきれん。往復してくれ」

「ハイハイ」

お菓子を取り出し、本のページをめくっていった。

第48話(前書き)

暴走警報発令中

第48話

まずはヨークシン各所のホテルを偽名で取り、かぼちゃらんたんを設置する。

ゾルディックに襲われたらまず定宿へ逃げ、ほとぼりが冷めた後にヨークシンへ戻る。

そのための布石だ。

野外地点にも隠すようにいくつか設置する。

ウボオーとクラピカが戦う予定だった荒野とか、蜘蛛の仮宿近くなど主要だと思っ地点に設置していく。

「次はどこへ設置するんだ？」

「ベーチクタクルホテルだね。ここは重要だったから」

「物語は変わったのにまだ拘るんだな」

「覚えやすいからね。イメージで飛ぶんだよ？」

「そういうことか」

俺たちはスーツを脱ぎ捨て、ダボつとしたストリート風ファッションで固めてる。

俺は髪を茶色く染め、ジャラジャラとアクセサリーをつけている。カイトはいつぞやの染め粉を手に入れ黒髪へ変えた。これで少しは時間が稼げるはずだ。

「あと、戦闘中の偽名を決めよう」

「間違えそうだな」

「占いの悪魔と死神を使おう！」

「……気が進まない」

「せっかくマフィアにケンカ売ったんだし、派手にこの名前を売る
う」

「なぜだ？」

「偽名の方を有名にするためだよ」

偽名が有名になれば、本名をぼかしてくれる。幻影旅団に対する
蜘蛛のようなものだ。

あれは偽名とはちょっと違うけど、似たようなもんだし。

それに偽名があったほうが情報が出回りやすい。名無しよりもね。
俺たちの本当の戸籍情報は、師匠やジンさんが秘匿してくれてる
から、調べるのは相当大変だろう。

ピクリと広げていた円に何かに触れた感触があった。視線を落と
すが、地図は現在最小サイズなので映ってない。

「何かいる。隠れよう」

「俺は感じなかったが」

裏路地へ入りマンホールを空けて下水へ潜り込む。少し臭うが現
代日本と同じで、しっかり処理されているから問題ない。

たまたに死体が浮いてるけど。

フタを閉めたところで、一気に円と地図大きく広げて索敵モードへ。

二人で目を素早く滑らせ、端から端まで確認していく。地図へ手を振って屋気楼を燻らせながら、建物の中まで確認していく。

すると、さっきまで俺たちが歩いていた道に、肩で風を切って歩く人影があった。

映っていたのは物語そっくりな不細工集団。一人は普通だけど。

「なんてわかりやすい」

「知ってるのか？」

「陰獣だろうね。ビックリしたよ、本当に良く似てる」

「やるか」

「一人だけ捕まえて話を聞こう」

「身体が鈍ってるから少し暴れないか？」

「んー……」

陰獣が探しているのは俺たちだろう。向こうはまだ気づいていないようだ。

陰獣が出てきたなら、十老頭がネオンを取り戻そうと送り込んできた、と見ていい。

ネオンのファンだろうな、すごい人気だ。

一人でいいから捕まえて尋問したい。どこまで命令が出ているのか、それが知りたい。

正直、陰獣を捕まえること事態に問題ないだろう。カイトの相手には力不足すぎる。

問題はカイトが暴れたいって言うてること。昨日のあれは暴れたうちに入らないのか。

名前を売るいいチャンスだし、ここはカイトの意見に乗っかるか。なら、服や髪を戻さないといけないし、一旦準備にもどろう。

「変更！ 昨日の服に着替えて派手にやろう」

「面白そうだ、武器は鎌がいいだろう」

「カイトは死神だしね。定宿に戻って準備しよう」

定宿に戻って急いで髪を染め直す。カイトはシャンプーするだけでいいから羨ましい。

髪を乾かしながら、スーツを引っ張りだして着替えていく。腕輪とサングラスを着け、髪を撫で付ければ変装完了。

いつもの注射器も何本かベルトに指しておく。イタズラ用も兼ねている。

修行場へ移ってスロットを回し、鎌を出してもらった。

捕獲場所は先ほど設置したホテルでいいだろう。バレても問題ないし、どうせ短時間だ。

「場所はウボオーの荒野でやろう」

「名前までついたな」

「うるさい。作戦は、俺が餌を釣り上げて罠になる」

「それで俺が鎌を振るうわけだな」

「そう！ いやー、楽しみだ」

「強いといいんだが」

カイトを荒野へ送った後、俺は下水道に飛んで、設置してたかぼちやを回収してから外へ出る。

円から感じる情報で、陰獣はまだ遠くには行っていないとわかった。

捕まえる男は梟か病犬やまごぬがベストだ。

他は、どうにも気持ち悪くて触りたくない。ミミズとか無理ゲイすぎるよ。

絶で気配を殺しながら、腕輪からワイヤーロープを引き出す。

電気が流れるので捕獲用だ。キルアほどではないけど、練習したのでそこそこ使える。研いでないのであの切れ味はないけど。悪魔全書は一旦消し、発見されないよう細心の注意を払う。

高めのビルに登って陰獣の配置を確認する。円は地下まで伸ばし、ミミズも探る。

歩いている陰獣は六人。

ミミズは蛭ひるの真下を移動していた。陰獣らしいメンバーの中に見覚えのない男がいる。

一旦戻った後、加わったのか。戦闘シーンがなかったから能力がわからない。

黒い大きなマントで身体全体を覆っている。

できればコイツを捕獲して餌にしたいが、メンバーの中心を歩いている。

サポート系か……物語に出た陰獣は強化系らしきヤツらが多かった。

一番後ろに梟がいるし、そういうわけではないのかもしれない。餌にしやすいのは梟だ。

決めた。梟を餌に釣る。

能力も捕獲にピッタリで少ししゃっかいだしな。

先行し、ビルの谷間で待ち伏せ、陰獣たちを少し待つ。

ビル影に隠れた俺のすぐ横を、陰獣たちが通りすぎていく。

今だ！

梟を背後から襲ってワイヤロープを巻きつけ、そのままビルの屋上へ飛び上がる。

華麗に決まる梟の一本釣り、そのまま電気を流してビリビリと痺れさせた。

騒ぎ出す陰獣を尻目にロープを縮め、円を展開してビルからビルへと移動していく。

梟がたまに障害物にあたっているが、気にしない。

「オイ、梟が！」

「バツツ、飛べー！」

バツツ？ 飛ぶ……だと。後ろを振り返ると黒マントの男が蝙蝠のような翼を広げ、こちらに向かってくる。

そのスピードは素早く、荷物を抱えたままでは追いつかれそうだ。サポート系じゃなくて長距離戦闘系なのか？ 何にせよ、急いで

荒野に行かないと捕まる。

梟を引きずりながら、手を掲げ悪魔全書を具現化する。

呼び出した悪魔はピクシー。

荷物がある以上、ランタンのとりかえっこは使えないので、速度を上げて距離を維持する。

本来の目的は囷なのだ。逃げ切ってしまったては、カイトの機嫌が急降下する。

一回目を発動した途端、間近にあった電柱が吹き飛んだ。

上空を見上げるとバツツという男が、口を開き俺を狙っている。

遠距離攻撃タイプで決定だ。

荒野に入り、遠くにカイトの姿が小さく見えてきた。

バツツの攻撃を背後から何度も受けながら、なんとかカイトの元に着いた。

「アレをお願い、梟を一旦ホテルへ運んでくる」

「ああ、まかせろ」

楽しげにニッコリ笑って、鎌を肩に担ぎ空を見上げている。

思う存分、暴れられるのが嬉しくてたまらないんだな。どうしようもないバトルジャンキーだよ。

ピクシーに戻ってもらい、ランタンを呼び出す。リバウンドのせいで身体に痛みが走るが、この感覚にはもうなれた。

痛いのは変わらないけど耐えられる。キルアの名言通りだ。

急いでヨークシン内のホテルへ飛ぶ。梟は許可がないので、定宿が使えない。

「グツ……お、お前」

「こんにちはー梟さん。悪魔だよ」

「俺たちに手を出して、タダですむと思うのか！」

シャルと同じこと言ってるけど全然迫力ないな。これが格の違いってやつか。

まあ、シャルクラスの殺気を受けることなんて普通はないしな。無視して注射を二本ほど打ち、鎖でぐるぐる巻きにして放置する。逃げられたら残念くらいの気持ちなので、かなり適当だ。

荒野に戻ると、目前に死神の鎌が迫っていた。カイトと位置を入れ替えなんとか回避する。

友達に殺されて死ぬなんて、絶対に嫌だぞ！

「危ないじゃない！ 気をつけてよ」

「すまない」

「笑顔で言われても、謝られてる気がしないよ」

「それよりアレがうざいから頼む」

カイトの視線を追っていくと、そこにいたのはミミズ。思わず、天を仰いだ。

どんなにヤツが弱くても絶対に戦いたくない。

ていうか、なんで全裸なのさ。服くらい着るといいたい。キモイ、ぬるぬるしてそう、触りたくない。

「ヤダ。死神がやってよ」

「鎌が汚れるからダメだ」

「俺のナイフだって汚れるよ！」

押し付け合いしてる間もカイトはくるくると円舞を踊り、陰獣たちへ向けて攻撃を続けている。

俺はとりかえっこを連続発動し、なんとかミミズを鎌の範囲内へ入れようと努力をしていた。

死神の鎌は高速で回転しているにも関わらず、ミミズだけは綺麗に避けている。

そんな俺たちにとつとつミミズがキレた。

「オイ！ 真剣にやれよ！！ バカにしてんのか」

「すまん、ちょっと待ってくれ。とにかく悪魔にまかせるから頼む」

「えー……俺ってサポートだし、やっぱりこういうのは死神がやるべきだよ」

「生理的に受け付けん」

「俺もだつつの！ もう、しょうがないな」

「さすが悪魔だ」

俺がミミズを引き受けると、カイトはバツツへ目標を変えた。

上空へ向けて次々と放たれていく衝撃波を避けきれないのか、バツツの翼が欠けていく。

あれはまかせて大丈夫だな。

さて、カイトがバツと楽しんでる以上、バツ以外の陰獣を近づけないのが俺の役目だ。

地中へ潜ろうとするミミズを嫌々蹴り飛ばし、ワイヤーで縛り付ける。

そのままハンマーのように他の陰獣たちへ振り下ろし、俺たちから距離を取らせた。

時間稼ぎは俺の得意技だ。

タイムンが終わるまで、延々それを繰り返して近づけさせない。

「悪魔、蝙蝠野郎が終わったぞ」

「りょーかい。次は病犬が行きまーす！」

「俺の名前を何で知ってる?!」

「さーねー、能力は神経毒を仕込んだ牙だよ。強化系だっけ？」

「……キサマ！ 絶対殺す!!」

「まず、死神を殺してから言ってね」

病犬にカイトが殺されるなんて、天地がひっくり返ってもありえないけど。

コイツらがウボオーに戦いを挑むなんて、意味がわからない。

どういふ思考回路してるんだらう。

多人数で殺れば勝てると思っただのか？ でも、周りに他の手足がいたよな。

タイムンで殺れる気だったのか……本気で意味不明だ。

俺なら蜘蛛が団体でいる時点で、速攻カイトを連れて逃走するぞ。クラピカに偉そうなこと言ってた癖に、流が遅い。戦闘系でオーラ移動が遅いのは致命的だ。

確実に能力に依存して、修行を怠っている。そして相手の実力も計れない。

だからウボォーに殺されたんだな。まあ、ビッグバンインパクト超破壊拳なんてくらったら、ほとんどの能力者が死ぬか。

夕日が沈む頃、ようやくカイトのタイマンが終わった。カイトは殺さないように戦ったようだ。

情けがあるのとはちよつと違うと思う。バツツは片足が切り飛ばされてるし、病犬なんて両手がない。

他の陰獣たちも似たような感じで、ボロボロというか念能力者でなかったら死んでいる。

ミミズは最後までハンマーと活躍してくれた。今日のMVPだ。キモイのは変わらないけど。

「どうする？」

「回復して落書きして写真を撮ってネットにアップ！」

「可哀相に、タローのおもちゃになるわけか」

「俺はこれが楽しいのー！」

どうせマフィアにケンカは売った事実は変わらない。それなら精一杯楽しまないと損だ。

ゾルディックもとつくの昔に来てるしな。これ以上に怖いのはメルエムだけだ。

また一旦戻り、カメラと油性マジックを持ってくる。
カイトが拾い集めていた部位だけをイヌガミで治して、睡眠薬を打っていく。

落書きと記念撮影が終わると、面倒なので転がしたまま放置する。

「あ！ 忘れてた」

「なんだ？」

「梟を放置したままだった。見に行こう」

すぐさまホテルへ戻り、鎖を解こうと足掻いていた梟の尋問を開始する。

先ほど取ってきた写真を見せて、同じような目に合わせてネットにアップする。

そう脅すと素直に吐いた。

やはり、十老頭からネオンの奪還と報復を指示されて、俺たちを追っていたらしい。

「うーん、なんてわかりやすい」

「お前ら、マフィアを敵に回すなんてバカなことしたな」

「もっとヤバイの敵に回してるから、マフィアなんて気にもしないよっ」

「家族まで凄惨な報復を受けるんだぞ！」

「脅しまで予想通りだね。やってみせてよ、楽しみにしてるから」

俺の魔王様をどうにかできると思うなら、ぜひやってみせてほしい。

カイトと一緒に、お弁当持参して見学に行くよ。

「悪魔、そろそろ聞きたいことは聞いただろう」

「じゃあ最後に記念撮影しないとね」

「同じ目には合わせないと言ったじゃないか！」

「うん、傷つけたりなんてしないよ」

「そつちじゃねえ！」

「落書きとネットアップだけにしてあげる」

「この悪魔め　　ッー！」

「褒めてくれてありがとう」

ニッコリ笑ってお礼をする。カイトが呆れ果ててるけど気にしない。

カイトが鼻を気絶させた後、鎖を解いてまたもや放置する。

このホテルは使えなくなるが、各所のホテルは全て違う名前で取っているので問題はない。

師匠の家に帰宅し、さっそくネットへのアップロードを開始する。武士の情けで、顔に目線を入れてあげた。

カイトにコテンパンにされたことで、ちょっと謙虚になれば生き残れるかもね。

所詮、マフィアだし無理だと思うけど。

ハンターサイトへついでに顔写真と共に情報を売っておいた。能力はさすがに売らない。

陰獣が怖いんじゃない、クロロが怖いからだ。

クロロに顔写真を売りつけてみるか、買ってくれるかもしれない。

「本当にアップしたのか……とんでもないな」

「俺はやると言ったらやるよ」

「タローだけは敵に回したくない」

「有言実行！ 素晴らしいでしょ」

その後、ネットにアップロードされた映像は世界を駆け巡ったとか。

マフィアコミュニティはこの件で、タローとカイトを全力で追い始めた。

月が沈んで、太陽が昇った。

蜘蛛が情眠から目覚めて動き始める。

そして運命のヨークシンオークションが開始された。

第48話（後書き）

【バッツ（オリジナル陰獣）】

ジーバース・クリーパーズ
【暗黒都市】変化系

オーラを蝙蝠のようなスーツに変化させる能力
スーツは全身用で事前に着用しておかなければ発動できない。
翼は鋭く、空を飛べる。

他に口から超音波を出す能力がある。

ちょっとだけしか出ないので、スルーして下さいorz

第49話(前書き)

九月一日

第49話

まだ空は暗く太陽が昇り始めた頃。

俺はキーボードを叩きながらパソコンを操作して次々と情報を集めていた。

調査対象はヨークシン水道局。

「調べ物か？」

「うん。昨日のアレで、移動に下水道を使おうと思いついてさ」

「ランタンがいるんだから地上でいいだろ」

「念には念だよ」

昨日は勢いで派手にやってしまったが、基本は隠密で作戦を進める必要がある。

以前の予定では地上移動を想定していた。

その場合ピクシーの地図が小さくなってしまい、映る人物は爪楊枝サイズで人相の判別が難しい。

この街に敵が多い俺たちには致命的だ。

その点下水道の場合、人目を気にせず特大サイズの地図がだせるので問題は解決する。

「臭いは気にならないが抵抗はあるな」

「しょうがないよ、ゾルディックも来そうだし」

「タローが復讐しなければ、彼らは来なかっただろうな」

「それはそれ、これはこれ。乗り切ったらなんとかなるから諦めてよ」

「飛べずに戦闘になったらどうする？」

「逃げれなかった時か……俺たちのことをどの程度知ってるんだろ」

「意味がわからんぞ」

俺たちは一緒に逃げる、互いを見捨てたりはしない。

それがゾルディックにバレていると、かなり苦しい逃亡戦になる。バレてないと信じたいが樂觀して足元をすくわれると死ぬ。

ペアで動いていることは掴んでいると思うし、バレている前提で考えた方がいいだろう。

天空闘技場の時は、彼らの行動から能力は知らなかったと考えられる。

だが、逃亡方法から能力を予想できたと思うので、ランタンの転移はバレていると判断する。

他の能力はどうだろうか。

でも、ゼノは物語の中であの短時間の間にクロロの能力を見抜いていた。

長年積み上げた経験から少ない情報をかき集め、マフィアに使った能力を調べて予測しているかもしれない。

ゼノのことを老獯ろうかいっていうんだろうな、本当に厄介この上ない。

「彼らはまず、俺たちの分断を狙ってくると思う」

「逃がさないためか」

「油断なんてしないだろうし、五体満足では逃げられないね。きっと」

「分断された場合は合流を最優先でいいか？」

「うん。最悪、命さえあればイヌガミでなんとかできる」

ゼノの能力は描かれてあつたけどシルバはわからないしな。

血筋から考えると変化系か……対クロ口の技は放出系っぽく見え
た。

能力ではない可能性もあるけど、何かに変化させて放出する混合
技と考えた方が妥当か。

ゼノも能力がわかるってだけで対策方法は気合しかない。

標的はおそらく俺だけだろうし、覚悟はしておいた方がいいかな。

……ダメだ、ゾルディックのことを考えるとドツポにはまる。

後ろ向きな思考に捕らわれていると、ダイニングから甲高い叫び
声が響いた。

「またか、よく飽きないな」

「無謀は若さの証明って言うけどね」

「殺されても行きたいとは理解できんな」

打ち合わせを中断してダイニングへ向かうと、予想通り発生源は
ネオンだった。

薬から目覚めた時ネオンは俺たちに脅えていた。

姿を見ただけで悲鳴を上げて卒倒したほどだ。

昨日一日師匠が付きつ切りで世話をしながら慰めたためか、べつたり懐いてくつついている。

俺たちが戻った頃にはすっかり恐怖はなくなったのか、物語通りのわがまま娘に変貌していた。

誘拐されたことを忘却の彼方へ追いやり、オークションに行きたいとひたすらダダをこねている。

俺たちが盗賊が来て殺されるとか、誘拐されたんだから外には出れないと何度も言っても聞く耳を持たない。

昨日に続きこんな早くから師匠にべつたり甘え、師匠もそれを許して猫可愛がりしている。

まあ、孫か子供ができたみたいに思ってるんだろうけど。

「終わったらすぐココに戻るから行かせてよー」

「死にたいんですか？ 殺されるのはきつと痛いですよ」

「死なないもん！ 落札してくるだけだから平気」

「いい子ですから諦めましょうね」

「ねえねえ、ちょっとだけでいいから！」

「落ち着いて一息入れましょう。銘柄は何がいいですか？」

「ダーズリンがいい！」

「ではお茶菓子はクッキーですね」

震えながら脅えてた方が楽だった気がする。

あれだけ何度も言い聞かせたのに、まだ熱病は治る気配がないよ
うだ。

蜘蛛に襲われても死なないという根拠を教えてもらいたい。

「ほつといて行くぞ」

「りょーかい」

師匠にまかせて良かった。

彼女がどんな無茶を言おうと根気良く話を聞いて、疲れてきたら
お茶を入れたりお菓子を食べさせたりと本当に頭が下がる思いだ。
俺なら一服盛って帰すまで放置していただろう。

「ずつるーい！ 二人は出かけるんだー」

「あのね、君は俺たちに誘拐されたんだよ？ 何度説明したら立場
を思い出すのさ」

「そんなの関係ないもん。絶対行くっいたら行くのー！」

「相手をするな」

「じめん」

素直に謝ってスーツに着替えるために自室へ戻る。

彼女に会って女性は理解不能な生き物だと確信した。俺はきつと
恋人はできないだろう。

カイトはたまに遊んでるけど。

準備を整えた後、街の中心部から少し離れたホテルへ移動し下水道へ進入した。

目的地はノストラード関係者が宿泊するホテルの真下。

今日、ゴンたちは大きく動くことはないと予想し、クラピカに張り付く予定だ。ワンコの様子も探れるしね。

どんな命令を受けるかと行動を共にするのか誰になるのかを調査する。

ネオン搜索の命令を受けて、俺たちを追うと予想しているが確実な情報が欲しい。

こちらとしては、物語のようにセンリツが共に行動しないよう祈りたい気持ちだ。

彼女の能力対策が思いつかない。

心臓の音は念ではない以上感知を防ぐことはできず、感知可能距離も広い。泣きたくなるほど厄介な能力だ。

ダウジングチェーン
導く薬指の鎖とのコンボを決められると、師匠の家に逃げるしか対策はとれないが、あわよくばここで捕まえておきたい気持ちもある。

「組むと考えて動けばいいだろ」

「カイトに夢や希望はないの……？」

「儚く消えそうな夢や希望なら捨てておけ」

涙ながらに肩を落としつつも、特大サイズの地図を広げてクラピカの様子を探る。

ベットがこんもりと膨らんでいる。早朝から出てきたせいはまだ就寝中のようだ。

「ホント、女の子みたいだね。知ってなきゃわからないよ」

「寝ているとキツイ部分が隠れるからな」

「しばらくは動かないだろうね。何かあったら起こすからカイトは寝てなよ」

「頼む」

ゴロンと横になったのを確認して視線を戻した。

ヨークシンにはゴンとキルアが街から出るまで滞在する。おそろく怒涛の日々が続くだろう。

まともな睡眠を取れるかわからないので、休める時に休んでおかないと何かあった時に困る。

俺が休む時は本が手から離れないようカイトに監視してもらおう。手から離れるとピクシーが戻ってしまい地図が消える。

地図の具現化にはオーラを使用するので、今出している特大サイズになると一日三回が限界だ。

いつ何が起こるかわからないのでオーラは常に節約していきたい。

動きがあったのはそれから五時間後、カイトを揺り起こして様子を伺う。

どうやらボスが召集をかけたようだ。

ノストロードに雇われている能力者全員がボスの部屋に集められている。

会議の様子を眺めていると一人足りないことに気がついた。

「ダルツオルネがいないね」

「誰かが足を切ったから歩けないんだろ」

「生きてさえいれば足なんて安いもんだよ！」

「一カ月は寝たきりだろうがな。これはなんだ？」

カイトの指先に視線を移動させると、何かを薄い物をテーブルの上に広げ覗き込んでいる姿が映っていた。

「書類かな？」

「それにしても大きいから図面じゃないか」

「なるほど地図かな？　ここまで細かいとよく見えないね」

円の範囲内に雇気楼のような地図を作り出すのがピクシーの能力である。

当たり前だが、音を聞くことは不可能だ。会話は唇を読んで予測するしかない。

そのまま観察を続けると、地図らしき紙の上にクラピカが手をかざし始めた。

「あー…手から垂れてるのは鎖だろうね」

「ダウジングか」

ネオンは師匠の家なので発見は無理だろうが、俺たちは確実に見つかる。

映像を眺めていると鎖はゆっくりと回転し、どこかの地点を指して止まった。

探索結果に彼らは目を見開いて慌てふためいている。

現在地点と同じ場所を指したから慌てている、そう考えていいだろう。

対象は俺たちで決まりだな。

「逃げて仕切りなおすか？」

「うーん、対応を見てから考えたい。ここで捕まえれば後が楽になるからね」

「どんな説教をするんだ？」

「身体に説教することにしたよ。カイト、よろしくね」

「なんでそうなるんだ。説教したいと言ったのはタローだろ」

「予定に入れると言ったのはカイトだよ。俺じゃボコボコにできないしね」

不満そうなカイトには悪いがやってもらおう。

カイトに叩き潰してもらって、この街での復讐は諦めさせたい。

それに今日捕まえておけば陰獣戦を見れないので、ウボオーが蜘蛛だとわかるのはもっと後になる。

ついでに携帯を奪って潰しておけば、ヒソカやゴンたちとの連絡も妨害できそうだな。

まあ、偽蜘蛛であることはクロロに教えたので、ヒソカが蜘蛛の生きた情報を流せるとは思えないけど。

アイツまだ蜘蛛にいるのかな？ 制裁を受けたと思うんだけど…
…シャルに確認だな。

ボスから何か命令を受けたのか慌しく動き始めた。

指揮はクラピカが取っているようだ。指示を飛ばし能力者を二つのグループに分けていく。
クラピカにはセンリツとバシヨウがつき、あとはスクワラがまとめるようだ。

一斉に顔を見合わせてスクワラたちがボスを囲み、クラピカたちが背後を守って移動している。

鎖を常に垂らして、俺たちを探りながら注意深く進んでいく。

ボスをここから退避させるのが命令で、俺たちを追って捕らえる気はないと予想する。

娘の命より己の命を取ったんだね。そういうの人間らしくて好きだな。

「チャンスだね。クラピカが殿だ^{しんがり}」

「追うのか？ センリツがいるぞ」

「バレるのも作戦のうちだよ」

「説明してくれ」

クラピカとセンリツがいる以上、追跡してもすぐバレるだろうし位置も把握される。

だが、彼らの使命はボスを逃がすこと、殿グループが足止めをしなければならぬ。

足止めを行えば三対二だが、センリツは戦闘は苦手だろうしバシヨウは筆を奪ってしまえば何もできない。

戦えるのはクラピカだけということになる。

「追いついたら、まずセンリツを潰してバシヨウを俺が足止めする。カイトはクラピカをお願い」

「センリツはどう潰すんだ？」

「いつものように取り替えるから、合図したら俺めがけて攻撃して」

「わかった」

「鎖で絡まれても気にせずやってね」

カイトが頷いたのを確認して、下水道を進みクラピカたちの追跡を開始する。

追うもの追われるもの、水面下で戦いはすでに始まっていた。

第50話(前書き)

九月一日

第50話

ノストロード勢は二台の車に分乗して中心街の大通りを進んでいく。

その後を地下の下水道を伝って走りながら追跡する。

地図でクラピカたちの影を目で捕らえつつ、下水管の配管図を指でたどっていく。

方向的に目的地は会場近くのホテルかな。

「この地点で地上に出よう」

「そこだと距離を取られるぞ」

「しょうがないよ。ここ以外だとマンホールが道路のど真ん中になる」

「別にかまわないだろ」

「かまうよ！ 目立ちたくない」

「今更だな」

正論だけど何故か殴りたくなる。

気を取り直し、頭の中で素早く予測を立てていく。

俺たちの来訪は読めてなかったと思うが、読めていた可能性も捨てきれない。

だとしたら、ネオンの父親は助っ人を呼ぶか雇つかするだろう。

ノストロードに手を差し出すのは同じマフィアの陰獣かな、俺たちに恨みもある。

そうなるかと逃亡行為自体が畏かもしれない。

昨日の戦闘で陰獣の多くは動けないが、残りは問題ない。

すぐ動ける陰獣は四人、物語では一ページしか出てこなかった。

能力はわからないし顔も覚えてない。

畏か……挟み撃ちを警戒すべきだな、ダウジングとセンリツの能力で位置はバレバレなはずだ。

仕掛けるタイミングは足止めにクラピカが立ち止まった時だろう。

「陰獣が来るかもね」

「来るかもか……円に感触は？」

「まだ何も。いくらなんでも絶はできるでしょ」

「顔は知らないのか」

「覚えてないから地図では確認できないよ」

「合計何人になったら諦めるんだ？」

「五人だね。それ以上は捌ききれないよ」

「タイミングは任せる」

「りょーかい」

合図を確認して再び地図へ視線を戻した。

どこでピクシーを戻してランタンを呼ぶかが重要になってくるな。ギリギリまで確認したいけど地図のことは知られたくない。

地上に出る寸前に交代させるしかないか。
幸いクラピカたちは絶を使っていない、円だけで追跡継続は可能だろう。

クラピカたちは予想した目的地手前の路地に車を止めた。

クラピカは車のすぐ傍に立ちバシヨウが路地裏に身を潜め、センリツはすぐ傍のビルを駆け上がっている。

屋上へ向かう気だろう。

クラピカ自身を囿にしてバシヨウが奇襲をしかけてくる気か。

センリツは連絡と索敵担当だろうな。

この配置ではセンリツを潰すのは断念するしかない。

「作戦変更、センリツは放置でいこう。バシヨウを入れ替える」

「殴り飛ばした後は変わらないか？」

「うん。陰獣が来たら、クラピカは後にして陰獣から倒そう」

「わかった」

ピクシーを戻してランタンを呼びだし、決めていた地点から地上へ出る。

現在の円は3km。

絶で隠れていても、攻撃してくる時にはオーラを練る必要がある。完全な奇襲を食らうことはないだろう。

円は余計な情報を一切排除して、オーラの流れのみに感触を集中させる。

クラピカたちの位置に変わりはない。

指でカイトに出るよう合図をしてビルの影を隠れながら伝っていく。

こちらが彼らの作戦に気づいていることを悟られるわけにはいかない。

しばらく進むと前方にクラピカの姿が肉眼で確認できた。

作戦開始の合図を送ろうとした時。

大きなオーラの揺らぎを感じてた。

いや、大きいなんてもんじゃない、肌にビリビリと突き刺すような強大なオーラ。

陰獣か……ありえない、こんなオーラ。

危険だと頭の中で警鐘が鳴り響く。

逃げよう、その声をかけようとした瞬間、カイト近くのビルが轟音と共に崩れ去った。

それと同時に、俺の背後から先ほどのオーラが塊となって放たれた。

崩れ落ちたビルの煙からカイトへ踊りかかった長い黒髪の青年。思わず目を見開いて凝視する。

イルミ・ゾルディック!!

やられた……クラピカを舐めてたかな。

そう思う間にも背後の塊はどんどん迫り間近まできている。ハッと振り返りその規模に目を剥いた。

こんなの避けれるか!

円を急激に収縮させ背中のみでオーラを集め、身体を丸めて頭と手足を胸に隠す。

ドスンという激しい衝撃と共に敵のオーラが路地裏を削り取りながら着弾した。

身体が後方から吹き飛ばされ目の前の建物が迫ってくる。

今度は前方へオーラを回して手を顔の前で交差した。

壁に叩きつけられ部屋を次々と突き抜けていく。

ようやく停止したかと思ったら、追い討ちをかけるように瓦礫や

ガラスが身体に降り注いだ。

このままだと圧死が確定する。

隙間に身体を転がし絶を使って気配を消す。

背中が焼けるようだ……全力で防御したというのに、肉は服ごと

抉り取られ胃から胃液と血液が逆流して呼吸を妨害する。

不安そうな顔をするランタンに笑顔を送って、状況を即座にまとめめる。

ノストロードとゾルディックが手を組んだのか。

クラピカに気を取られすぎていた。

あークソツ！ よりによってゾルディックを見落とすなんて。

俺たちがボスを襲うと予想したのか？ クラピカ目当てだと思っ
はずがない。

襲わなければそれでいい、居場所が掴めないから少しでも可能性
がある所に来た。

そんなところだろう。

ものの見事にハメられた。

さっきの攻撃は死ぬほど痛いけど即死する程じゃなかった、分断
を狙ったんだろな。

カイトを受け持ったのがイルミか。

ゾルディックは以前と同じ規模だろう。

イルミだけなら大丈夫だろうけど、カイトを担当するのがイルミ

一人なはずないよな。

俺はまだ誰かわからない……ゼノかシルバかそれともマハか、大穴でカルトもか。

カルトはまだ子供で未熟だ。あくまで、ゾルディックの立場で考えるだけでも。

今回逃がすとまた俺たちは潜って居場所がわからなくなる。

子供のミスで失敗したらやりきれないだろう。

彼を連れて来るとは思えないけど……自信はないな。

はてさてどうなるか。

誰でも殺される気がするけど、シルバとゼノはカンベンしてくれないかな。

とにかくクラピカにかまってる場合じゃない。

逃げ出さないと死ぬ。

思考している間にも血は流れ続け体力を奪っていく。

この怪我じゃまともに動けない、イヌガミ呼んで治した後合流だな。

逃亡にランタンを使うか、ピクシーを使うか……カイトはすでに囲まれてるだろう。

よし、決めた。

絶を解き、円を再び展開させながら素早く肉体を治療していく。

カイトまでは1kmくらいかな……随分飛ばされた。

拾った情報から建物の外に二名、カイトの傍に五名の能力者の気配を感じる。

外の二名は動かないな。やりにくい室内より外に出てきた所で殺る気か。

予想通りの人数だけど泣きたくなる。

治療がすむと円を止めて索敵から戦闘態勢に転じる。
状況がわからなくなるけど、円を展開させたままゾルディックか
らは逃げれない。

カイトなら絶対大丈夫、そう信じる。

頼むよピクシー、一回目だ。

ナイフを抜きつつ能力を発動させた。

効果終了後に食らうリバウンドなど気にしてられない。

この距離ならカイトにもかかる。俺が無事なのもわかっただろう。
逃亡のために選択した悪魔はランタンではなく、ピクシー。

いつもならランタンを選ぶけど、今回は相手の人数が多い上にゾ
ルディックだ。

カイトも激しい交戦の真っ最中だろう。

飛んだ瞬間、殺されてもおかしくない。

ピクシーならカイトに殺されることだけは避けられる。

速度を上げて合流した後、ヨークシン郊外師匠の家に逃亡する。

死ぬ気で走りぬければきっと逃げられる。

足にオーラを集中させて瓦礫から飛び出し脱出する。

世界が灰色から空色に変わると右後方から何者かが急速に近づい
てくる。

目線だけを移動させて姿を確認する。

口角をわずかに上げてこちらへ向かう、銀髪で体格がいい男。

俺の担当はシルバですか……誰か夢だと言ってくれ。

額から一滴汗が落ちた。

「俺を知っているようだな」

「知るわけないでしょ、いきなり何なのさ？」

「仕事だ」

手を鋭く尖らせて襲い掛かってくる。

心臓を狙う手刀をナイフで受け止め横へ滑らせ勢いを削ぐが、削ぎ切れずわき腹を掠め肉を抉り取られた。

もちろんシルバに傷はない。

無表情な顔が一瞬だけ柔らかく変化する。

「ほう、やるな」

あーもう、治したとこなのに。

掠めただけでこの威力とかありえん……ねえ、本当に人間なの？
シルバに両足をぶつけ足元からオーラを噴出、全身全霊で弾き飛ばし一気に距離を取るとカイトの方向にマハが立ちふさがった。

俺の担当はシルバとマハか……ならカイトにはイルミとゼノ、クラピカたちで決定だな。

カイトならピクシーの能力が効いてるし短時間なら五人でも捌き切れる。

チートの本領発揮に期待だな。

マハからの逃亡方法を組み立てようとした瞬間、ソワリと背筋に悪寒が走った。

かなり距離を取ったはずなのに、もうシルバが背後に回ろうと近づいて来る。

ちよっとは作戦を考える時間を下さいよ！

ビリつと身体を衝撃が伝い、速度上昇効果が重複された。

無言で囲いと狭めるシルバとマハ……前方、マハの横をすり抜けカイトと合流を試みる。

マハの足が迫るが俺がすり抜ける方が速かった。

さすが二回目、ゾルディックにも逃げ足だけなら勝てる。

絶対的な効果の代償に、一回目とは違って能力発動の最中にも負荷が身体を襲った。

足を前へ進める度に筋肉がブチブチと千切れて毛穴から体液が溢れ出す。

歯を食いしばり痛みには耐えながらカイトへ距離を縮めていった。

シルバとマハを突き放しようやく辿り着いた。

辺りを見回すと一面瓦礫の山が広がりとても街中とは思えない。

暗殺ですよ？ もっと忍べよ。

クラピカたちの姿は見えないカイトに倒されたか、それともゾルディックに追い払われたか。

気になるが、いないならその方が助かる。

ここまで状況が進んで出てこないってことは、やっぱりカルトはいないな。

カイトに視線を移すと、全身を赤く染めながらゼノとイルミの二人と戦闘中。

その手には三番の杖……^{ワンド}……なんとか当りが引けたのか。

カイトにゼノが接近戦をしかけイルミが鉾で遠距離から攻撃している。

鉾はゼノにも刺さっており、その本気度が窺い知れる。

イルミもカイトと似ような感じだが、ゼノは僅かに血が流れてい

る程度。

どんだけ化け物なんだ。

速度上昇のおかげでなんとか耐えきれている。

ゼノとイルミは俺たちの間へ割り込みカイトをこちらに寄せ付けない。

うーん、一緒じゃないと逃げないのはバレてるのか。

カイトへ近づこうとするとイルミがカイトへ飛び掛り、ゼノがオーラで龍を作り出し放ってくる。

が、龍は物語のように避けても曲がらずそのまま瓦礫へ突っ込んだ。

俺が離れるとまたカイトに攻撃対象を移す。

時間稼ぎだな。

やはり殺すことより、逃がさないことに重点を置いている。

俺の接近はけん制してくるが、攻撃は仕掛けてこないのがいい証拠だ。

シルバとマハの到着を待つてカタをつけるつもりだろう。
杖でイルミを殴りつけながら、カイトが叫ぶ。

「ピクシーに指示しろ!!」

「なっ 無茶だ!」

指示しろってことは三回目を使えって事か……一回だけじゃ無理だと判断したんだな。

発動するのはいいけど相当な賭けになるな。

三回目はほとんど発動したことがない。

以前試しに使用した時は、あまりの激痛に動くことさえ難しく効果終了後は半死半生だった。

腕を上げただけで、皮膚が破れて筋肉が剥き出しになってたよな。今回は逃亡戦、それより酷い事態になるのは確定だろう。

はあ、気合と根性でなんとかするしかないか。

「まだ何かあるんだ」

「厄介なヤツらじゃの」

「とつととかける!!」

「わかつたつてば!」

会話を聞いてゼノとイルミが警戒度を上げたのか、肉弾戦を止め距離を取って遠隔攻撃に変更してきた。

俺が引き離れた二人もすぐに到着するだろう。

なんて素敵な状況だ。

ピクシーが困惑した瞳で俺を見上げ、本当に発動するのかと問いかけてくる。

小さな頭をそつと指で撫でて安心させる。大丈夫だよ、死ぬつもりはないからね。

三回目!!

「グアアアア!!」

脳天から足先へ激痛と呼ぶにはあまりに生易しい程の苦痛が襲う。本が手から滑り落ちそうになる。

強く握り直してカイトとの合流を狙う。

俺の接近に気づいたイルミが鉾を投擲してするが、速度ははるかにこちらが上だ。

すぐさまカイトがイルミをゼノへ蹴り飛ばし、奇跡的に無事だったビルがガラガラと崩れていく。

ようやく合流を果たした。

「な……んで、こうなるのさ……」

「さてな、とにかく逃げるぞ」

言葉を交わすのすら苦痛だ、上手く口が動いてくれない。

こちらは必死で肉体に意識を繋ぎ止めているというのに、カイトは笑って話している。

こんなところにもチートの恩恵があるのか……どこまで反則なんだ。瓦礫からゼノとイルミが爆音を響かせ這い出して来た。

即座にビルからビルへ跳び、師匠の家へ一直線にカイトと向かう。全身が沸騰したように熱く心臓の鼓動が耳を打つ。

ゾルディックが追ってきているのか諦めたのかわからない。確認する余裕なんてとっくに吹き飛んでいた。

互いの皮膚が破れて断裂し筋肉が剥き出しになっていく。筋肉も神経さえも次々に千切れ跳び骨が見えてきそうだ。

残ったオーラを全て移動に回しているの、流れ出す血を止められない。

ようやく師匠の家が小さく見えてきた。

目が霞む……痛みは一定ラインを超えると感じなくなるって説は本当だったな。

イヌガミを呼べるはずがないし効果きれたら死ぬな。

ガクリと足が地面に沈んだ。とうとう両脚の筋肉全てが断裂したようだ。

ごめん……もう無理。

歩くことすら出来なくなり、身体が前へと地面に倒れ視界が徐々に黒く染まっっていく。

カイトだろうか、腰に僅かな温もりを感じる。

魂を迎えに来るのはランタンがいいな。

ふとそんな想いが浮かび意識はプツリと途切れた。

第51話(前書き)

悪魔は魔王の膝元で踊る

第51話

祖父と追跡していた標的が膝をついて地面に倒れこむのが見えた。かなり距離を取られてしまいが、あの足ではもう逃げられない。確実に殺ろうとスピードを上げて近づいた途端、祖父が腕を掴んで引き止めた。

なぜ？ 今なら殺せるのに。

疑問を込めた視線を祖父へ投げかけると、顎で標的を指し示す。祖父から標的へ視線を移すと、いつの間にか見たことのない男が背を向けて佇んでいる。

男は標的を抱えあげながら優しげに語りかけた。

「怖がりなのに無茶をして。まったく仕方のない子ですね」

「リーシャンさん！ タローは……タローは助かりますか！！」

「ええ、もう大丈夫ですよ。歩けますか？」

「……はい」

出血を止めるためか男は標的をオーラで包み込み始めた。

誰だコイツは……俺の視線に気づいたのか、男がこちらを興味なさげに振り返る。

男と目が合った瞬間、背筋が凍りついて身体が固まった。

攻撃されたわけじゃない……なのに身体が言うことを聞いてくれない。

仕掛けたら負けると訴える声が聞こえる。
本能が男には勝てないと必死に叫び続ける。

勝ち目のない敵とは戦うな。

家族に叩き込まれ、俺も弟たちへ叩き込んできたその言葉。
萎える両足に必死に命令を送る。

動け！ 動かないと逃げられない……逃げなければ死ぬしかない。
額から滝のように汗が噴出し、鋏を持つ手が僅かに震えた。

「……………妖怪」

「また会いましたね。ゾルディックの小僧」

「もう小僧と呼ばれる歳ではないんじゃないか」

「今も小僧で十分ですよ。また痛い目に合いたいんですか？」

この男が妖怪。

祖父が若かりし頃、梃子こじぎ摺らせる所か息も絶え絶えに逃げ帰らせた相手。

男の全身を素早く確認する。

祖父より年上だと聞いたのに10代後半にしか見えない。

昔、少年だった俺は父から教えられた。

妖怪には手を出すな。

隣にいる祖父の顔が引きつっている。

いつも何があるかと余裕を見せる祖父が、そんな顔するなんて信じられない。

どれほどの力があるのか、この妖怪と呼ばれる男は。

「わたしの標的は腕に抱えとる若いのじゃ」

「この子は僕の大事な弟子です。ゾルディックごときには渡せませんね」

「……………割りにあわん仕事じゃた」

「わかったなら手を引きなさい。今度は殺しますよ」

そう話した瞬間、妖怪の殺気が膨れ上がった。

固まっていた身体が自由を取り戻し、本能の赴くままに指令を送る。

飛びずさって距離を取り、物陰へ身を隠して震え続ける手を握り締めた。

鼓動は激しく打ち鳴らされ止まる気配がない。

どれくらい時間が経っただろうか。

「大丈夫か」

反射的に振り返った頬を叩かれる。

驚いて見上げるとそこには笑いを含んだ顔があった。

「イルミ、落ち着くんだ」

「……………オヤジ」

再び響いた父の声でようやく混乱していた意識が元に戻る。辺りを見回すと家族以外の姿はない。

「妖怪は？」

「帰った」

事態を把握すると羞恥心が湧き上がってくる。

「仕事中は冷静に……そう教えられていたのに精神を乱してしまっ
た。」

「情けない。」

項垂れて地面を見つめ手のひらを強く握り締める。

爪が深く食い込み血がポタポタと地表に吸い込まれていく。

「痛みで己を戒めることも出来ないなんて……訓練を受けた身体が
忌まわしい。」

「イルミ、気を落とさんでいい。ワシの命をかけても妖怪が守る人
間は殺れん。」

「……………仕事は全て達成してきたのに」

「標的が悪すぎた。お前のせいではない」

「そうじゃ、家族が欠けても殺れん仕事など割に合わんわ」

父が手を滑らせて髪を昔のように撫でてくれた。

「慰めてくれるのか。」

「懐かしい感触に荒んだ精神がだんだん和らぎ、自然と目が細まっ
た。」

「依頼主に達成不可能と伝えておけ」

「うん、わかった」

「破棄しても俺たちの評判は落ちない。仕事は腐るほど入ってくる」

「割りに合う仕事かの」

頷いて無線機で執事たちに連絡を取る。

違約金をゴトーに振り込むように伝えした後、ハツと思い出す。

そういえば依頼主はクロロだった……なんて説明しようか。

頭を傾げ思案するがいい考えは浮かばない。

殺せないでいいか。

話すのが面倒だしメールを送ろう。そう決めて携帯を取り出し操作する。

キルアとカルトにも伝えないといけない。

カルトは一緒に来たし、キルアはヨークシンにいるようだから会いに行こう。

タロー・タナカに手を出すな。

そう教える為に。

……お腹すいた。

空腹で意識が浮き上がり目蓋をゆつくりと開いていく。
寝転んだまま瞳を動かして様子を探る。

何度か瞬いて身体を起こして目元を手のひらで覆う。
ここは俺の部屋か、何でこんなところにいるんだっけ。

……あーそうか、クラピカにハメられてゾルディクにボコられた
んだった。

よく生きてたな、絶対悪魔が魂を持っていくと思ったのに。
ため息をつくとあの時の状況が脳裏に再生される。

バカだったな、いい気になってカイトにまで迷惑かけるなんて、
ホントどうしようもない。

自己嫌悪に浸っていると、ドアを開けカイトが入ってきた。

「目が覚めたんだな。起きれるか？」

「カイト……ごめん」

「何を謝るんだ」

「俺が見誤ったせいで死にかけた」

「死んでないからいいだろ。気にするな」

「でも！俺がクラピカを舐めてかかったから……！」

「俺も油断していた。お互い様だ」

「そんなことない……絶対に俺が悪いんだよ」

俺がゾルディックを見落とさなかったら、こんなことにはならなかった。

そもそもクラピカが罠を張っている可能性を考えてたのに、甘く見て舐めてかかったせいだ。

情報探査と作戦考案は俺の担当なのに、カイトの命を危険に晒した。

死なせたくないから傍にいるのに本末転倒もいいところだ。

「タロー、歯を食いしばれ」

「え？」

驚いて顔を上げると強烈な右ストレートが頬に綺麗に決まり、衝撃と共にベットに叩きつけられた。

身体は壊れたベットに埋まり木片が身体に突き刺さる。

ズキズキと痛みが走り、食いしばれなかった口内から血が零れ落ちた。

カーツと頭に血が上ってカイトを蹴り倒した。

「何すんだよ！ 痛いだろ！！」

「タローがうざいから殴った」

「んだと?!」

オーラを込めた足をカイトの腹へめり込ませ、床に押し付ける。

カイトもオーラを練って腹へ回し、一気に放出して足を吹き飛ばす。

チツ、器用なヤツめ。

戦闘体勢に入り、お互い睨み合ったまま相手の隙を伺う。

「落ち着け」

「落ち着けるか！ 理不尽すぎる」

「いいから聞け」

「……なんだよ」

「たった一回ハメられただけだろ」

「そーだよ、見事にハメられたよ」

「その程度で落ち込むような男と組んだ覚えはないぞ」

「なっ……おま、うーあー」

違う意味で血が上った。顔が熱くなり羞恥心が湧き出してくる。赤くなつた顔を隠すように頭を抱えて床を見つめた。恥ずかしい台詞を吐くんじゃねーよ。

「やられたらやりかえせばいい」

「あーまー……そうだね」

「クラピカをハメてやりかえそう」

「は？」

何をいきなり言い出すんだ。

呆気にとられカイトを見ると、笑いながら時計に向けて指を差しつつさらに続ける。

「あれから一日くらい経ってる」

そんなに寝てたのか。まあ、あの怪我じゃしょうがないよな。

目線を時計に移すと4:00と文字が浮かび上がっている……あれから一日ということは九月二日か。

二日に何があったけ？ 頭が混乱して自分で立てた予定表さえ思い出せない。

頭を捻り記憶を探る俺にカイトが助け舟を出した。

「ウボオーの荒野だ」

「ウボオー……ああ！ 思い出した」

「そこでやりかえそう」

「でもアレが起こるかわからないよ」

「そこは抜かりない。リーシャンさんが監視してくれてる」

「はっ？ 師匠を巻き込むなよ。俺たちの問題だろ」

「気にするな」

「気になるよ」

「まあ……アレだ。円で情報を調べてもらってるだけだ」

いくら師匠が妖怪だからって何でもかんでも頼るのは良くないと思う。

散々甘えて強請ってきた俺が訴えるのもおかしいけどさ。

まあ、もう頼んだのならしょうがないか。

怪我もすっかり治ってるってことは、師匠がお手製道具を使ってくれたんだらう。

詳しく話を聞くと、師匠の円で探った結果ウボオーの件は物語通り進んでるそう。

師匠が監視してくれてるならゾルディックは放置していいな。

今回の失敗でしばらく襲ってこないだらうし、位置を把握されるクラピカは復讐に目が眩んでる。

ウボオーの荒野にはかぼちゃんたんを設置してるから奇襲も簡単。

戦闘開始は、五時に開催される指名手配の競売が終わった後だからあまり時間がない。

ウボオーをどうするか……助けて恩を売るのはいいけどクロロが感謝するか疑問だな。

心の中では嬉しくても、外面は死んでも良かったとか平気で言いそう。

いつそウボオー個人に恩を売るのがいいか。

強化系だから約束破るのかって迫れば反論できないだらう。

個人で俺たちを狙わないことと、一回手伝えて約束させるか。蟻でなんか合ったら助けてもらえるしな。強いから頼りになりそう。

うだ。

クラピカは……ハメられたし本気でやりかえしたいな。

予定通り、カイトにボコボコにしてもらうか。

うん、面白そう。

悪魔の役に成りきってついでにプライドもスタボロにしてやる。
チートでイケメンだからっていい気になるなって教えてやる。
素敵な想像が脳内に浮かび顔が緩んで笑いが止まらない。

「楽しそうだな」

「うん、いいこと思いついた」

「今日のおもちゃはクラピカで決定か」

「一緒にやるうね」

「当たり前だ」

よし、悪戯開始だな。

さっそく用意してた道具を準備して、支配人に今日連れてくって
連絡しないとな。

あ！ 思い出した。ウボオーが死ななければ、ワンコの主人は死
なないんじゃない？

そうなるとカイトが楽しみにしてるワンコが来なくなるのか。
チラリと横目で見つめ様子を探る。

ワンコのことには気づいてないな……後で落ち込みそうだ。
説明が面倒だから黙っとこう。

「どうした？」

「あー、いやー何て言うか……お腹すいたなって！」

「そうだな、軽く作るから食べてから行くか」

「ふわとろオムライスでヨロシク」

「タローはソレがお気に入りだな」

「あのトロつとした舌触りがたまらんですよ」

くだらないことを話ながらダイニングへと向かうと、師匠とネオンがティータイムの真っ最中だった。

カイトが作ったオムライスを食べながら、ネオンの愚痴に耳を傾ける。

蜘蛛は無事と断言していいかわからないが、地下競売を襲って皆殺しにしたようだ。

その件を知って、ようやくオークションのことを諦めたみたいだが、次は買い物へ行きたいとタダをこねている。

通販でいいじゃないか、何でも揃うのに。そう言い返すと何故か三人から集中攻撃を食らった。

「理不尽だ。だいたい服の色とか形なんて適当でいいだろ」

「わかってな い！ そーゆーのを選びながら買い物するのが女の子の楽しみなんだから」

「ネットでも選んで買えるじゃない。わざわざ外に出なくてもさ」

「ちっが うっ！！」

「女心を少しは学べ」

「タローはまだ子供なんですよ」

「……意味がわからないよ」

女心は秋の空とかそういう意味なの？ わけがわからん。首を傾げていると師匠がカイトを誘ってキッチンへ消えていった。

何の話だろ……まあ、後で聞けばいいか。

オムライスを食べきるまでに悪戯を組み立てないといけない。

どのタイミングで割って入ろうか、ウボオーに恩を売りたいんだからギリギリじゃないとな。

でも、死んでからじゃ遅い。

あー、心臓が潰れても脳死しなければ、医学的には生きてるんじゃない？

潰れた心臓って回復できるのか……イヌガミを後で呼び出して聞いてみるか。

次々に悪巧みが浮かんでくる。

どの案を採用しようかとまた新たな悩みが沸いてくる。

まあ、どれを選んでもなんとかなるだろう。

カイトと俺が組めばきつと何だって出来るから。

第52話

オムライスを食べ終えて紅茶を飲んでいると、師匠とカイトがキッチンから戻ってきた。

カイトはソファに深く身体を沈め長い両足を組んで座りなおすと、面白そうに話しかけてきた。

「悪巧みはまとまったか？」

「うん、バッチリ」

イヌガミのもふもふとした毛皮を流れにそって撫でながら作戦を説明する。

基本方針はクラピカとウボオーの戦闘中に割って入り、クラピカを殴ってイジメてウボオーを助けると言うモノ。

割って入るタイミングはウボオーの心臓が破裂した時。

イヌガミに確認した所、一分以内なら治癒可能らしいのでその時間内に割り込む。

このタイミングはかなり迷ったが、一番恩を売れそうなのでこの時点に決めた。

イヌガミは除念を持っているので、鎖が心臓に巻きついた時でもいいかとも思った。

だが、この能力には除念後、念の強さに比例した期間イヌガミが召還できなくなるというデメリットが存在する。

クラピカの念はその執着心を考えると強力そうだ。

かなり長期間のデメリットを食らう可能性が高い。

イヌガミがいないと回復ができないのに、そんなリスクは背負えない。

「ギャンブルだな」

「失敗しても自業自得だ」

「タローって冷たい」

「あのね、殺したら殺されるのはしょうがないんだよ」

「正論だがネオンには理解できないぞ」

俺もカイトも師匠だって人を殺している。

いずれウボオーにとってのクラピカのような人間が現れるかもしれない。

復讐じゃなくても、誰かを殺したら自分も誰かに殺される覚悟をしないといけない。

その覚悟がないなら人を殺してはいけないと思う。

「おバカだもんね」

「バカじゃないもん！」

「タロー、話を戻せ」

「ああ、どこまで話したっけ？」

「心臓破裂を治すまでだ」

「えーっと」

心臓が破裂したら割って入りカイトにクラピカを押さえてもらう。クラピカはウボォーが死んだと思い込んでるだろうし、そこまで難しくはないはずだ。

カイトが押さえている間に、俺がウボォーを治療してウボォーと交渉して話をまとめる。

その後カイトがクラピカをボコって俺がイジメて遊ぶ。

「簡単に言うところな感じ」

「楽しそうですね」

「はい。とっても楽しみです」

「約束はどうやって取り付ける？」

「強化系だから口先三寸で丸め込むよ」

ククロだと騙すのは大変だがウボォーなら簡単だろう。

単純一途、大いに結構！ 素敵な性格だ。

渋ると思うが、彼が好みそうな言葉を選んで説得すればいい。

強化系は基本的に、言葉に隠された裏の意味など考えないだろう。

「実際やってみないと、どうなるかわからないけどね」

「私の占いでどうなるか調べてみれば？」

「はあ？ 必要ないよ。むしろ邪魔」

「ひっどーい！ 絶対に当たるもん」

「あー……わかってないんだね」

このわがまま娘は、自分の能力の問題点に気づいてもいないのか。ネオンの占いは確実に当たる。その事実こそが問題なのだ。毎月、占いに群がる中毒患者たちの紙束を見て疑問に思わないのか。

どうせ占いと引き換えに、欲しい物が貰える程度に考えてるんだろっ。

説得したいこともあるから説明するか。

このまま事実を伝えても頭が悪いから理解できなさそうだ。言葉を変えて彼女にも理解しやすいようそれらしいことを話して、煙に巻いて丸め込もう。

「占いつて迷った時の道しるべなんだよ」

「道しるべって何？」

道しるべがわからないのか。

うーん、どう言えばいいんだ。

「違う言い方をすると、占いは問題の答えへの道に迷って苦しんでいる人を助けるものかな」

「迷っつ？」

「うん、答えは一つじゃないからね。見つけても選ぶのを間違えたらどっしょっつって迷っちゃうんだよ」

「一つじゃない……」

「答えがたくさんあったら正解がどれかわからないだろ？ だから占いで選ぶ人もいる」

「選ぶ人も？」

「答えが正解かどうかなんて問題が終わってみないとわからない。ネオンの占いは最初に正解を出しちゃうからダメなんだよ」

「どこがいけないのよ。正解ならいいじゃない」

「基本的に答えは自分で探して見つけて選ぶモノなんだ。正解を教えると、過程を飛ばして正解だけを欲しがるようになるだろ？」

「正解だけを欲しがる……それはなんかわかる」

「ネオンみたいに最初から答えを教えてたら、その人は答えを探せなくなるよ」

ネオンは手を膝の上でスカートを握り締め、ジッと空中の一点を見つめたまま動かない。

「上手く丸め込めただろうか？」

故郷の占いに関する一般的な考え方を、ネオンの能力にあてはめるのは無理があつたかな。

俺の言葉を頭の中で整理しているようだけど、伝わっているかは不安が残る。

この説明の目的は、ネオンの占いを当分辞めさせること。

蜘蛛がヨークシンを去つたら彼女は実家に帰すつもりだ。

この街での能力窃盗を防いでも、実家に帰した後どこからか噂を聞きつけて盗みに来そうだ。

クロ口の能力への執着を考えるとその可能性は高い。

出来れば今後も彼女の能力は渡したくないので、占いを辞めさせてこれ以上噂が広がるの防ぎたい。

父親の欲望は醜い底なし沼だ……そこを押ししておくか。

「占いを辞めた時にきつとわかるよ」

占わないと聞いた中毒患者たちは、人間性などかなくなり捨て正解を求めて縊りつく。

権力を手にしたい父親は必ず、発狂して怒声を浴びせながらネオンに占えと迫るだろう。

そんな優しいパパをの姿を見れば理解できるに違いない。

また恐怖に震えるかもしれないが、いい人生経験になるさ。

「辞めてみたらわかるの？」

「うん、辞めて一度周りを見てごらんよ」

「皆、私に占えつつうるさいのに……タローって変」

「俺って変なんだ？」

「すっごく変！でも、嬉しい」

「えっ？」

「タローが言いたいことなんとなくわかった……ありがとう」

どうしてあの説明を聞いて嬉しくなるんだ。女の子の思考はさっぱりわからん。

なんとなくわかったか……不安だ、激しく不安だ。

実家に帰っても流されて不用意に占いをしないでくれよ。

うーん、負けないように師匠に鍛えてもらった方がいいか。

占い中毒者たちが自分で答えを見つけることなどできるはずがない。

欲望にまみれた大人たちはネオンが占いを辞めたら、洗脳してでも強制的に占いをさせそうだ。

念を知らないのに能力が使えることを考えると、ネオンもチートっぽい。

師匠に基本を叩き込んでもらえば父親を殴り飛ばして反抗できるだろう。

今までのようなわがままな買い物はできなくなるが、洋服やアクセサリー程度なら俺のポケットマネーから出してもいい。

さすがに人体は買い与えたくないけど。

師匠にどうお願いするかと頭をひねっていると、視線を感じた。

視線の方向に顔を向けると、カイトが凄い笑顔になってこちらを見ている。

こんな笑顔は今まで見たことない。

正直気持ち悪いからやめてくんないかな。

手を口元にあてて笑いを堪えるように肩を震わせている。

何かおかしいなことも言っただろうか。

紅茶を飲みながら、会話を反芻はんすうしたが思い当たるフシはない。

「タローは迷ったことあるの？」

姿勢を正し真剣な表情でネオンが問いかけてきた。
質問を聞いて脳内に怒涛のような人生が次々と再生されていく。

……迷ったことなら腐るほどあるな。

まあ、迷いのない人生など存在しないだろう。

「数え切れないほどあるね」

「なのに占いは必要ないの？」

「俺は自分で選びたいんだよ。誰かに選んでもらうんじゃないよ」

「私、迷うのが怖いよ……だって自分のことは占えないもん」

「まあ、その時は手伝うよ」

「ホントに？」

「うん、話を聞いて一緒に答えを探してあげる」

「……約束だからね」

ネオンはこぼれるような笑顔を見せた後、いそいそとティータイムを再開した。

強烈な視線を感じて隣を見ると、カイトの顔が更に凄惨なことになっていた。

一体全体、さっきからなんだっていうんだ！ 気持ち悪いを通り

越してかなりうざい。

俺をバカにでもしてるんだろうか。

「何？」

「いやな、やっと俺の助言が届いたなってな」

「意味わかんないよ」

「少し成長しましたね」

「ますます意味がわかりませんよ」

「ネオン、タローはどんな街にでも一瞬で連れて行ってくれるぞ」

「ホント?! いっぱい買いたい物があるんだよねー」

「ちょ! おまっ」

カイトは何を言い出すんだ。俺にネオンの運び屋になれとでも言う気が。

カンベンしてくれよ。

ネオンはカイトの台詞を聞いて、嬉しそうに指折り数えて買い物リストを挙げ始めた。

その数は膨大でどう考えても一つの街では終わらなし、何往復もしなければならぬ。

まさかとは思つが、全て買い終わるまで付き合わなければならぬのか。

「止めてよ! 俺は忙しいんだ」

「一回くらいつき合ってやれ」

何だよ……勝手に決めないで欲しい。これだからカイトは困る。古今東西、どの世界の女性でも買物物は長いに決まっている。それくらい俺でもわかる。

故郷で体験した母の買物物は、二度とついでに行かないと誓うに十分な内容だった。

俺にそんな暇はないし、そこまでの忍耐力もありはしない。絶対無理。

そう断るうとした時、円に反応があったと師匠が教えてくれた。

「タロー、接触しましたよ」

「ありがとうございます、師匠」

「行くか」

「うん、行ってきます」

「いってらっしゃーい！ お土産よろしく」

「気をつけて、怪我をしないようにしなさい」

荒野に行くのにどうやってお土産を用意するんだ……。

クラピカの緋の目を取って来いと言ってるのか？ さすがに嫌だ。そう思いつつ、師匠とネオンに手を振りながらランタンを呼んでカイトと定宿へ向う。

倉庫代わりの部屋へ入ると、必要と思われる道具を片っ端からバ

ツクに詰めていく。

今回は大荷物になった。

心臓を元に戻しても鼓動は止まったままなので、キルアが選ばなかった強力スタンガンを入れる。

呼吸も止まるので回復のためにポンプと酸素ボンベを持っていく。

マウストゥマウス

人工呼吸など激しく遠慮したい。

拘束用の腕輪やピアス、その穴を開けるために強化できる針など目についた物は全て突っ込んだ。

最後にバツクを肩から斜めに向け、長い鎖をカイトに持たせてカメラを首から下げる。

「着いたらすぐ地図を作って隠れながら観察しよう」

「それはなんだ？」

「見て分るでしょ。カメラだよ」

「予想はできるが何に使うんだ？」

「もちろん、クラピカの雄姿を納めるに決まってるじゃない」

「ジンさんにもらったヤツということは録画もするのか」

「俺の逆恨みは怖いってことだよ」

「自覚があるから余計厄介だな……」

「今日は遠慮しない」

「タローがおもちゃたちに遠慮したことがあったか？」

「ない！！」

呆れ果ててサジを投げたカイトの腕を掴んで、ウボオーの荒野へウキウキしながら転移した。

ランタンも悪戯をすると聞いて楽しそうにくるくる回っている。

そういえば、悪戯の準備期間が短くて作戦終了後のことは全く考えてない。

まあ、いつものことだけど。

遊ぶのは楽しいけど後始末は楽しくないんだよね。

「いたぞ。どうやら到着したとこだな」

「戦闘開始までに近づいて録画しなきゃ」

「地図を撮ればいいだろ」

「それだと音声録音できないよ。クラピカの黒歴史にならないから却下」

黙り込んだカイトの腕を引っ張りながら地図に映る悪戯会場に視線を落とす。

後始末なんて後で考えればいい。

また、チート共をからかうことができる。

そんな人生の幸せを一步、一步、かみ締めながら目的地へ歩いていった。

第53話

ウキウキ悪戯会場へ向かっていると、急にカイトの足がピタリと止まった。

「どしたの？」

「……これを見る」

いぶかしみながら地図に目をやると会場近くの崖に一人の男が立っていた。

細マツチヨの身体に短い金髪。

携帯で何かを話しながら会場を見下ろしている。

なんでこんな所にシャルがいるんだ？

そうか、物語でクラピカを探しあてたのはシャルだった。

一人で行かせずについてきたのだろうが、何故だ？

急に心配になった……いや、ありえん。

ウボオーがクラピカに負けるなんて欠片も思っはすがない。

クラピカが勝てたのはウボオーの慢心もあったが、ほとんど能力おかげだ。

本来は段違いにウボオーの方が強い。

「なんか、雲行きが怪しくなってきたね」

「他に隠れてないか調べるぞ」

「りょーかい」

ウキウキ気分が吹き飛んで肩がガツクリ落ちる。
今度も思い通りにはいかないようだ。

気を取り直し、二人で協力しながら地図に映る荒野をくまなく調査していく。

カイトは地図に鋭く視線を滑らせ、俺は集中し神経と体力を削りながら円を4kmまで広げて、範囲内にいる能力者の気配を探る。ゾルディックの二の舞を演じるのはごめんだ。

一通り探査が終わるとこれからを話し合う。
もちろん、組み立てていた悪巧みは変更しないとイケない。

「たぶん追加はシャルだけだね」

「ここまで探していないんだ。大丈夫だろ」

物語通りには進まない、そう予想していたはずだった。
なのにまた物語に囚われて足元をすくわれてる。
心の奥底から理不尽な展開に対する怒りが沸いてきた。

「あーもう！　なんでこう思い通りにいかないかな！！」

「落ち着け」

「師匠つてば絶対感じ取れたはずなのに！」

「リーシャンさんの悪戯にハメられたってことだな」

「今までで一番悔しい……」

俺は誰かをハメたいんであって、ハメられるのは嫌なのにな。師匠ならしょうがない、そう諦めて作戦を組みなおす。

物語と変わらないのはウボオーとクラピカの対決だけか。

仲間のタイムマンにシャルが介入すると思えないし、見学しに来ただけかもしれない。

疑問や仮定が止まらない。

ともかくにも、展開がどうなっているのか調べないと対応できないな。

会場へ近づいて、ウボオーとクラピカの会話を聞いてから判断するか。

今はそれしかないな。

「盗み聞きしに行くよ」

「俺たちも立派な盗賊になれそうだ」

「今でも十分盗賊だって蜘蛛が太鼓判押ししてくれるよ」

地図を消して絶で気配を断った後、急いでシャルとは反対方向にある崖を目指す。

少し遠回りになるが、事態を把握するまでシャルに見つかるわけにはいかない。

崖と崖の間にある隙間に身を滑らせ、二人の会話に聞き耳を立てる。

ウボオーがヒルの卵を出し終わった所のようにだ。どうでもいいことは変わらないんだね。

「待たせたな、一つ聞きたい」

「なんだ」

「お前の師匠に復讐のことを話したのか」

「……………復讐するとは言ったが相手までは話してない」

クラピカの師匠？　なんでそんなことを聞く必要があるんだ。

ウボォーは何故、クラピカの正体を問いたださないんだ。

調べて知っているよと読んだほうがいいな。そこが物語との差異か。

「そうか……………狙いはヒソカだと思ってたぜ。まあ、付き合ってたや」

「私の目的は蜘蛛全てだ。もちろん、ヒソカも殺る」

「アイツをだまくらかすとはな。結構単純なヤツなのか？」

「師匠は私を導いてくれた。貶すのは止める」

服の裾が引つ張られて振り返ると、カイトが眉を寄せながら腕を交差してバツを作っている。

うん、黒歴史になったのはこっちだね。

頷いて頭を押さえる……………悪戯は中止だ。

どうしてこうなった。

今すぐ回れ右をして全てを放り投げ帰りたい気分だ。

つまりこういうことだ。

俺たちはゴンとキルアに修行をつけた。それはクロロも知っている。

師匠は大げさだが間違っではない。

俺たちは蜘蛛にゴンとキルアがヒソカを殴りに行くから、殺すな

と依頼を出した。

だが、ゴンとキルアという男の子だと教えたけど、容姿は詳しく説明していない。

うん、忘れてたよ。

蜘蛛は色々あったが依頼を受領して、あの子たちを前提に入れて計画を立てた。

運命の九月一日、クラピカはウボォーが蜘蛛だと知って追い始める。

そして鎖でウボォーを捕まえた。

鎖で雁字搦めに囚われたウボォーを仲間たちが救出する。

その時のウボォーの様子は、俺がシャルを捕らえた時によく似ていたんだろう。

俺もシャルを鎖で縛って転がしたからな。

様子を聞いたクロロの脳内で、俺とクラピカがイコールで結ばる。

迷惑なことに俺たちが頼んだ子供だと判断されたんだ。

俺から聞いた話とは違うが、ウボォーと戦いたいなら相手をしてやれと指示したんだろう。

物語通り、クラピカが移動中に復讐だとぺらぺらしゃべってこんな会話になった。

そんなところだろう。

はあ、シャルはウボォーの監視兼ストッパーだな。
戦闘に熱くなったウボォーがクラピカを殺さないように。

カイトがメモにペンを滑らせた……筆談か。

『どっしするっ。』

『どっもっこうないね。止めないと蜘蛛に殺される』

恩を売るなんて、とてもじゃないができるはずがない。

クラピカが殺されるのは別にかまわないが、物語通りウボォーが殺されたら大変なことになる。

怒り狂った蜘蛛に俺たちだけじゃなくゴンやキルアも殺される。

カイトが持つ鎖に目配せした後、ランタンを再び呼び出して頭を撫でる。

ジャラリと鎖が鳴り俺に鎖が巻かれていく。

あーもう、絶対ボコボコじゃすませないからね。

そう心に誓って、逆恨みを積み上げる。

雁字搦めにされた俺をカイトが小脇にかかえて、クラピカへと走り出す。

「誰だ!!」

「……悪魔だよ。このクソガキめ、俺の邪魔ばっかしやがって」

「なっ！生きてたのか!？」

「うるさい。後で百万倍にして仕返しするからね」

驚愕に染まったクラピカは俺に位置を入れ替えられ、カイトの脇に収まった。

素早く二人の傍に寄りカイトへ地面へ降ろせと指示する。

お前のせいで俺の悪戯は台無しだ！！

一生懸命考えて組み上げたのに全部叩き潰しやがって……。今すぐ恨み言を投げつきたいが、シャルとウボオーの手前それはできない。

イケメン面を拳で一発殴り飛ばし、バックからスタンガンを取り出す。

「何をやる気だ！？」

「黙れ」

威力を最大に設定した後、バチバチと火花を放つスタンガンをつくりと押し付けた。

「グアアアアアア！！」

クラピカの全身を激しい電気が伝い痙攣し始める。

目を剥き泡を吹きながら気絶したのを確認して、耳に針を通してピアスを付けていく。

ウボオー用にと持ってきた念具も全て着用させて拘束した。最後に麻酔を投与して完了。

使用量にはかなり気を使った……そう簡単に死なせてたまるか。シャルがいつの間にか背後に移動して、俺たちの様子を眺めている。

俺たちの大事な子だと思っていたのに、扱いが酷いので表情が疑問でいっぱいだ。

「あれ？ タローの弟じゃなかったの？？」

「シャル……後で説明するからちょっと待って」

「いつもすまん」

カイトを残して定宿にクラピカを転がした後、再び舞い戻る。

逆恨みをぶつけるのは後回しにして、蜘蛛に事情を説明しないと命が危ない。

地面に座り込み胡坐をかいて見上げながら事情を伝える。

もちろん全ては話さない。

クラピカと俺たちは関係ないと言うこと、マフィアとは敵対してることだけを話した。

「そういう訳で、アレはあの子たちの友達だよ」

「なるほど、クロロは偽名かもしれないと言ってたよ」

クロロは偽名と判断したのか。

ただの勘違いだけど、偽名を使うのはよくあることなので責められない。

後はクラピカを蜘蛛から貰うだけだ。

蜘蛛に挑んだんだ、話をつけないとクロロから引渡し要求がくる。カイトは死なせたくないようなので、応じられない。

先手を打つ。

「俺が悪いんだけどさ、アレはこっちで制裁したいから任せてくれない？」

「わかった。でも、タローの制裁か……可哀相に同情するよ」

「当然だよ。あの子たちはそっちに行った？」

「来てないよ」

「そっか。迷惑かけるかもしれないけど、殺さないでね」

「わかってる」

ゴンとキルアの動向はほとんど調べてないのでわからない。
クラピカの問題が片付いたら調査しないと……競売に参加して蜘蛛を探してるところだろうか。

ヒソカは殴れたのかな？

偽蜘蛛の件はクロロに教えたので、所属しているとは思えないけど。

「ヒソカはまだ蜘蛛にいるの？」

「はあ?! 冗談じゃないよ」

「殺したの？」

「……………まだ」

シャルはぶすくくれた顔をしながらそっぽを向いた。

殺気が身体から立ち上り、その怒りと苛立ち具合がよくわかる。
蜘蛛全員の制裁から逃げ切ったのか。

さすがヒソカ、変態とはいえ世界最強だと名乗るだけはある。

ウボオーがシャルの背中を大きな手でバンバン叩きながら話します。

「シャルのせいで逃げられたんだぜ」

「あらら、それは残念だったね」

「俺だけのせいじゃない！ ウボォーも悪いくせに」

「元はと言えばシャルが邪魔したからだろ？」

「あの時、ウボォーがアンテナ避けなかったら殺れてたはずだよ！」

「なんだと?!」

「血気にはやった手足が連携をミスったんですね。わかります」

「殺す!!」

俺に凶星を突かれた二人が拳を振り上げて挑みかかってきた。

ニヤニヤ笑いながらカイトと共に臨戦態勢に入り応戦する。

ウボォーはカイトに任せ、緑のナイフでシャルを切りつけ傷を付けていく。

俺以外は全員本気じゃないが、俺は本気でやらないと殺される。

「また、そのナイフ？ ダルイんだけど」

「だってえ、俺って弱いしい」

「うぎ！ 早く死になよ」

「いやー、殺されるつつ」

しばらく四人で遊び続けお互いの服がボロボロになった頃、シャ

ルの携帯が鳴り出し中止になった。

その様子を眺めながら思考に耽る。

彼らの仕事は無事終わりそうだが、滞在期間はいつまでなんだろう。

とつとと帰ってくればいいんだけど。

物語では死者と占いで当初の計画とはかなりずれたはずだ。

昨日と今日の仕事内容もできれば聞き出して、どんな差異があるか参考にする。

マフィア共の動きも知りたい。

そんな事情からシャルに情報買取を持ちかけた。

「マフィアの方は問題ないね。蜘蛛の情報は団長に聞かないと答えられない」

「ダメならそれでいいよ。メール頂戴」

「わかった。でも意外だね、俺たちを監視してると思ってた」

「忙しかったんだよ」

「予想はつくよ。ゾルディックから連絡あったから」

「連絡？」

「依頼破棄だってね、オメデトウ」

シャルからの思いがけない情報に目を見開く。

苦節半年ほど……ようやく諦めてくれたのか。

助かった。これでヨークシンを大手を振って歩くことができる。

だとすると、ゴンとキルアが街を出るまで、クラピカを捕らえておいた方がいいな。

戦闘前に捕まえたので能力はバレてないし、仕切りなおせと言えばなんとかなるだろう。

だが監視までは手が回らない。

仕返し後麻酔を打ち続けて放置するか……定宿なら入室の許可は貰ったが、退出の許可は貰ってない。

たとえ俺たちの部屋から逃げ出せても、ホテルからは出れない。カイトと相談しないと。

そう思っただけでチラリとカイトを見ると、ウボォーと膝を突き合わせ何やら密談を交わしている。

本当に仲良くなるのが早いな。

クラピカとゾルディックの問題は片付いた。

これからはゴンとキルアを見学しつつ、ワンコの飼い主を探るか。

「タロー！ 酒を持ってきてくれ」

「は？ なんでさ」

「ここで酒盛りすることになった」

「殺されるから嫌」

「肝っ玉がちっこいな！ 殺さねーから気にすんな」

「頼む」

「はあ……わかったよ。他の手足は呼ばないでね」

どうしてこうなる………本当に予想外のことばかりだ。
いいや、もうどうにでもなれ。
ウボオーがそう言うなら今日は殺されないだろう。

パドキアの酒屋へ飛び片っ端から買いあさる。

ビールに焼酎、ワインはあまり高くないものだけをカートに突っ込んでいく。

つまみも必要かと陳列棚を空にする勢いで購入していった。

ウボオーは酒豪っぽいし、カイトも似たようなものだ。

シャルもかなり飲むに違いない。

会計を頼む頃にはダンボールの山が築きあがっていた。

その量は店員が目丸くして支払いは大丈夫かと確認してくるくらいだ。

積み上げた山をランタンのマントで包んで戻ると、信じられない光景が広がっていた。

ウボオーとシャルだけじゃなく、蜘蛛が全員勢ぞろいしている。

意味わかんない………死ねってことなの?!

「どーゆーこと!?! 他の手足は呼ぶなって言ったよね!?!」

「すまん。いつの間にな」

「カイトのバカ!?!」

「情報を買いたいそうだな」

「団長直々に売却するって言われてね」

「だからって全員連れてくんない!?! お前ら仕事はどーしたんだ?」

！」

「今日の分は終わった」

殴りたいけど殴れない。

この状況でクロロを殴ったら即死する。

怒りを抑えてダンボールを開いて、自分用に購入してきた紅茶のペットボトルだけを手に取り、カイトの後ろを陣取る。

ランタンを頭に乗せていつでも逃亡できる体勢を整えた。

今すぐ逃亡したいが、カイトが楽しそうにウボオーと飲み交わしてるので実行できない。

諦めて会話に加わり、酒をラツパ飲みしているウボオーを誘導して情報を引き出していく。

「へえ、陰鬱ってそんな能力持ってたんだ」

「全員ぶつ殺したけどな」

「ウボオーは物凄く強いんだね。尊敬しちゃうよ」

「ガハハハハハ」

「それで、仕事の首尾はどうだったの？」

「ああ、上手くいったぜ。得にな……」

「ウボオー、黙れ」

情報を漏らそうとしていたウボオーの口がピタリと閉じた。

チツ、上手く聞きだせそうだったのに。

酒を飲んだウボオーの口は緩みまくっているが、クロロがいるとこれ以上は無理か。

仕事内容は売ってくれそうにないから、聞き出したかったのに。こうなると予想したからクロロは来たのかもしれないな。

「楽しく話してるだけじゃない」

「みえみえだ」

その後も蜘蛛とカイトは飲み続け、ダンボールの山は次々と消費されていく。

足りないから盗ってこいと当たり前のように命令され、追加を買いに行くハメになった。

シャルをワイヤーで捕まえ何回も酒屋と荒野を往復する。

酒屋がカンベンして下さいと泣きついた頃、ようやくお開きとなった。

地平線に朝日が昇ってきた。

荒野には一面に泥酔した蜘蛛の屍が転がっている。

今なら俺でも簡単に殺せそう。

カイトもとつくに潰れており、今立っているのは俺とクロロだけだ。

クロロはあまり飲んでいなかったのか、平気な顔をして手足たちを眺めている。

「情報は？」

「後でメールを送る」

「まあ、いいけどさ。これで今日の仕事は大丈夫なの？」

「仕事は夜だからな」

「まー、そうだけどね」

どう見ても二日酔いに悩まされるのは確実だが、クロロがそう言うなら大丈夫なのだろう。

陰獣やクラピカもいない今、蜘蛛を阻む人間はいない。

ゴンとキルアには俺たちが話をつければいいだろう。

死亡が確定したマフィアたちに手を合わせ冥福を祈っておく。

苦しまずに死ねるといいね。

カイトの腕を掴み師匠の家に帰ろうとすると、クロロが待ったをかけた。

「嫌だよ」

「まだ何も言っていない」

「簡単に予想がつくよ。絶対やらない」

「仮宿に触媒を置いてきた」

「やらないってばー!」

「俺たちの仕事結果も売ってやる」

「……………本当に嫌なヤツだよ」

「褒め言葉だな」

部外者に仮宿を教えるなっつーの。

不平不満を言いつつも断れないので、屍を仮宿へと運んでいく。女性陣も見事に潰れて大の字になって転がっている。

シズクはキツチリしたズボンとシャツなので大丈夫だが、マチは着物の胸元がはだけて今にも見えそうさ。

パクノダに至ってはシャツのボタンが全て取れ、スカートは捲くれ上がり下着が見えている。

貴方たちの性別は女だよな？

男なのでこの光景を見て嬉しくないとは言わないが、背後で恐ろしい保護者が監視している。

「ねえ、女の方はクロクごと運ぶから抱えてよ」

「パクに触りたくないのか？」

「……………意識のない女性に触りたくないんだ」

本当に嫌なヤツだ！ その通りだよ！！

こちらをジッと観察して、俺がどこまで知っているのか見極めようとしている。

これだから蜘蛛に関わりたくないんだ。

ようやく運び終わり自室に戻ると、カイトは床に放置してベットにダイブした。

やんなきゃいけないことがあるけどもういい。

疲れた……………ひたすら眠い。

目覚まし時計をセットして布団に沈んでいった。

第54話

ジリリリと目覚まし時計の音が頭に響き渡り、愛しい布団から身体を起こす。

現在朝の十時。

あまり寝ていないせいか、目蓋がくつついてうまく開かない。

目を擦りながら時計を止めてベットから降りると、足裏に柔らかな感触を感じた。

見下ろすとまだ屍状態のカイトがいる。

「まだ復活してないのか」

あれだけ飲んだのだから当たり前だけど、このままだと風邪を引きそうだ。

今まで寝ていたベットにカイトを寝かせると、熱いシャワーで意識を覚醒させてからダイニングへ向かう。

師匠とネオンはもう起きていて、朝の軽い勉強会が開かれている。頭の悪さに師匠の堪忍袋の尾が切れたのだろう。

ネオンは涙目になりながらも真面目に勉強している。やっぱり師匠は凄い。

「おはようございます。師匠にネオン」

「おはよう、タロー」

「おっはよー。タロー、助けて！」

「無理」

ネオンが騒ぎ始めたが放置して、持ち込んだノートパソコンを開いてメールを確認する。

クロ口はあの後すぐにメールを送ってくれたようだ。

膨大な量の情報と一緒に請求書も添えられている。

シャルが話していた値段より大分安い。まあ、シャルが足元見て吹っかけてたんだけど。

妥当な値段だったので携帯を操作して早速振り込んでおく。

金銭のやり取りは素早く正確に、仕事の基本だ。

蜘蛛の情報と物語を比較しながら、内容を確認していく。

感想としては……蜘蛛は平和でいいな、かな。

何事も問題なく大暴れして盗みを行っているようだ。昨日のは祝杯も兼ねてたのかもね。

本当にウボォーとクラピカの件以外はほぼ変わらない。

俺たちは大変だったのに……。

問題と言えばクラピカはどうしようか。

カイトが生き返ったら定宿に確認しに行かないとダメだな。

俺の鎖や念具を抜ける力はまだないだろうし、麻酔も効いている。確認はもう少し後でもいい。

時間が経てばゴンが心配するな。

いずれは開放しなければいけないが、そうすると蜘蛛に殴りこむ。麻酔を打ち続けて放置がベストだけどカイトが必ず反対してくるだろう。

物凄く面倒だ。クラピカ一人のために何でこんなに悩まないといけないんだ。

ヨークシンが終わったら、キメラアント討伐の準備が始まる。

片付けないといけない事柄や問題は多く、彼一人に構っていられない。

ああ、キメラアントと言えばいい能力を持つてるヤツがいたじゃないか。

アイツを引つ張り込んでクラピカを戦闘不能にすればいい。それなら開放しても問題ないし、蜘蛛にも突っ込んでいかないだろう。

師匠におねだりして……ネオンのことも頼まない。

「師匠、お願いがあるんですけど」

「聞けることならいいですよ」

「モラウさんの連絡先教えて下さい。後、ネオンに念の基本を叩き込んで欲しいです」

「ねん？ なにそれ」

俺が念のことを説明して修行が必要だと話すと、予想通り嫌そうな顔になった。

ネオンは努力とか根性とかが大嫌いなタイプだ。

人生、楽しんで面白おかしく暮らして生きたいのだろう。俺もそんな人生を送りたいよ。

だけど、父親に対抗するために念の基本くらいはマスターしてもらわないとこっちが困る。

ネオンの反応はすでに織り込み済みだ。

こちらには切り札があるんだ、絶対に修行してもらおう。

「師匠っていくつくらいに見える？」

「んーと、タローの師匠だから見た目通りじゃないよね……三十歳くらいかな？」

「ハズレ」

「えーっ！ もっと下なの？ タローは二十歳くらいでしょ」

ああ、いい。この素直な反応。

クロロに少しでいいから分けてやりたい。

「俺は四十歳で、師匠は俺の倍以上生きてるよ」

「ええ

！！！」

いやー、楽しい。

目を見開いたまま固まった姿を鑑賞しながら思う。

ネオンのいいところはこういうところだな。

イジリがあつて本当にいい子だ。さて、最後の一押しだ。

「念を覚えるとずっと若いままでいられるよ。修行してみない？」

「絶対やるわ！」

チヨロイ。頬を緩めながら師匠に目をやるとニッコリと頷いてくれた。

俺は若返ったからだし師匠は膨大なオーラのせいだから、ネオンにも効くかどうかはわからない。

まあ、多少の効果はあるはずだ。それに騙されたと気づくまで十年はかかる。

ネオンの問題はこれで解決だ。

蜘蛛のヨークシン滞在期間はわからないが、それは解決策を思いついた。

帰ってこないなら帰らせればいい。発想の転換だね。

「モラウの連絡先はどんな意味があるんです？」

「モラウさんには直接用はないんですよ。彼の弟子に頼みごとがあつて」

「弟子？」

「あー、カイトにも聞かせたいので起こしてきます」

キッチンに向かってボウルを手に取り冷凍庫から出した氷を入れる。

ボウルを持ったまま自室へ向かい、ベットで幸せそうに眠るカイトの背中と服の間へ氷を落とし込んだ。

「うわ！」

「おはよう、カイト。話があるからダイニングに来てよ」

「……ヒドイ起こし方だな」

カイトにだけは言われたくないよ。

蹴り飛ばして起こすよりよっぽど優しいと思う。

ダイニングに戻って師匠が作った朝食をつついていると、髪から

ぼたぼたと雫を滴らせながらカイトが入ってきた。
シャワーで無理やり目覚めたようだが、まだ頭を抑えてうめき声を上げている。

このままじゃ話をしても意味がないな。

再びキッチンへ行って師匠直伝の酔い覚ましドリンクを作成する。
レシピの基本は青汁。

それに念で作られたマズイと噂の薬液を注入、生卵を三個追加してミキサーにかける。

正直、死んでも飲みたくないがコレがまたよく効く。

案の定、カイトは俺が持つドリンクを見た途端逃げ出した。

このドリンクは昨日の仕返しも兼ねている。絶対飲んでもらうよ。

「師匠、お願いします」

「覚悟を決めなさい」

「タロー！ 裏切ったな！！」

「そんな人聞きの悪いこと言わないでよ」

師匠に押さえつけられたカイトの鼻を摘んで、口元にタオルを添えながらドリンクを流し込む。

声にならない絶叫を効きながら全て飲ませると、カイトはテーブルに突っ伏してまた屍に変化した。

いい加減に復活してほしい。

「カイトは大げさだね」

「……………お前も飲め」

「俺はお酒を飲まないからね」

酔い覚ましを飲みたくないならお酒を飲まなきゃいいのに。

そう言つと、酒を飲まないなんて人生の損失だとわけのわからない理論を展開させた。

カイトからどす黒いオーラが発せられているが気にしない。

「そろそろ相談していいかな？」

「……………ああ、大丈夫だ」

「クラピカのことなんだけど」

ぶっちゃけるとナツクル^{ハコラレ}「バインの天上不知唯我独損だ。

ナツクルに頼んでポットクリンをクラピカにつけてもらって、トリタテンに変化させて三十日間の強制的な絶状態へ追い込む。

嫌がるだろうが、クラピカの生い立ちをお涙頂戴で語れば落ちるだろう。

これなら監禁の必要はなくなり、開放しても念が使えないので蜘蛛に殴り込むことはない。

「どう？ これならカイトの希望に合うでしょ」

「やっぱりタローは頼もしいな」

「モラウが弟子を紹介するかわかりませんか？」

「そこは任せて下さい。脅して説得します」

「さすが悪魔だ」

「褒めてくれてありがとう」

極上の笑みをカイトへ送った。

師匠にネテロ会長と連絡を取ってもらいモラウの連絡先を聞き出した。

ネテロ会長がまた恨み言を零したらしいが、上に立つ者のさだめだ。

諦めて欲しい。

モラウに早速連絡して事情を話してナツクルと会いたいと頼むと、問答無用で断ってきた。

予想通り過ぎて涙が出そうだよ。

「モラウさん、誰に負けてキセルを取られたんですっけ？」

『……ダメだ。アレはそう簡単に使っていない能力じゃない』

「アレのことはよく分かっていますよ。でもね、彼を止めるにはそれしかないんです」

『どうしてアレを知ってた？ 使うのをかなり制限してるんだぞ』

当然だな……効果は強力だが対処方法がわかりやすい上に除念もできる。

所謂切り札的な能力で、使えば使うほど秘密が知られて自分の首を絞める。

まあ、どんな能力にでも言えるけどその傾向が強い。
秘密が漏れないように、師匠であるモラウが使用を制限するのは
当たり前と言っている。

「ナツクルさんのだけじゃなくモラウさんのも、シユートさんのも
知ってますよ」

脅しをかけると電話の向こうから怒気が発せられた。
能力を知られる……それは能力者にとって命を握られたに等しい。
だからこそ脅しになるんだけど。

『……………答えになってねえぞ』

「三人まとめて、いやノブさんのもつけて情報流してもいいんです
けど」

『殺されたいのか』

「脅すなんてヒドいなあ」

『テメエが言うな』

「ねえ、モラウさん。紹介してもらっただけでいいんです。彼が俺の
話を聞いて、ダメだと断れば諦めます」

ナツクルを落とす自信はある。

彼は優しいから必ずクラピカに同情して、復讐なんかで散らせる
ものかと思うだろう。

俺の考え方がおかしいだけだ。

『本当だな』

「一言はありません」

『……わかった』

「ありがとうございます」

モラウがつけた条件は三つ。

モラウ、シユートの二人を同席させること。

クラピカも話し合いに加えること。

話し合いはモラウが提供した場所で行うこと。

特に問題点はない、いい条件でまとまったというべきだろう。

クラピカを説得する必要があるが出てきたが問題ない。

電話を切るとカイトにモラウの条件を話してから、クラピカの説得を頼んだ。

「何故だ？ 交渉はタローの方が向いてる」

「言葉に悪意が混じるよ。腹立ってるからね」

「俺に説得を頼むなら、おもちゃにするのは諦める」

「何それ！ ヒドイよ！…！」

「諦めないなら説得はしない」

「わかった」

「交渉成立だな」

「やっぱりカイトの方が向いてる」

「そうは思わないな。失敗しても怒るなよ」

「カイトなら成功するよ」

逆恨みはまだ燻っているし、ゴンやキルアを危険な目に合わせる彼の行動は大嫌いだ。

俺は好きに復讐に生きて死ねばいいと思っている。

だけど、カイトは優しいから助けたいし救いたがっている。

その思いが必ず言葉に表れる。

クラピカは頭がいいから、必ず言葉に込められた想いに気づくだろう。

俺の説得は彼の心に欠片も影響をあたえない。

カイトの説得なら復讐という考えを変えることはできなくても、きつと何か心が響いて残る。

俺はカイトに救われたから、クラピカもカイトに救われるといい。

それで少しは変わるだろう。

さて、定宿に行くか。

「じゃあ、頼むね」

「まかされた」

ランタンのマントがゆっくりと広がって俺たちを包み込んでいった。

第54話（後書き）

感想受付始めました。
よろしければお願いします。

第55話

マントを閉じて確認すると、クラピカはまだ床に転がって気絶したままだった。

まあ、当然か。

ウボォーを拘束できるほどの念具だけでも十分気絶できるだろう。カイトはクラピカの様子に眉に皺を寄せてため息をついた。

「頼むから全部外してやってくれ」

「……………外したら暴れるからダメ」

「必ずなんとかする。だから頼む」

拘束した時は何も言わなかったくせに、今更そんな態度とらないでほしい。

ブツブツ文句を言いながらも全ての拘束を外して、空き部屋に寝かせてやった。

クラピカの具合は確かに悪い。

スタンガンの電流を食らって念具で拘束された上に麻酔を限界ギリギリまで打たれたのだ。

顔からは血の気が失せており、熱が出てのか服は寝汗で濡れている。

カイトはジッとクラピカを見下ろし、額に張り付いた髪をそつとかきあげゆつくりと撫でていく。

その表情は不安に染まり、死なないと理解しているはずなのに心配そうだ。

拳を握り締め、理不尽な展開に盛大に愚痴を吐く。

俺が悪者みたいじゃないか！

舌打ちして倉庫部屋に向かい、予備の寝巻きと薬品箱を引っつきみ、キッチンで濡れタオルと氷枕を準備する。

これだからカイトは困る……どうせ諦める約束をしなくても、止めるつもりだったんだろう。

俺の楽しみを奪うくせに、いつも好き勝手行動して反対しても聞きやしない。

カイトの所に戻ると氷枕を投げつけ、薬品箱からアンプルを取り出し注射器で吸い上げる。

「ホラ！ どいてよ」

布団からクラピカの腕を引き出し、ゴムチューブを巻きつけ血管へ解熱剤を投与した後、服を全て脱がせて身体を拭き寝巻きを着せた。

「まったく、なんで俺がこんなことやらなきゃいけないんだよ。」

カイトにやらせたいが、ジンさんに育てられたせいでこういう発想はない。

「タローは優しいな」

「目が腐ったの？ まあ、今回は引くけど次は諦めないからね」

「わかった。次は止めない」

今は嘘じゃないだろうけど、次回になったらその言葉を覆すに違いない。コイツはそういうヤツだ。

もう知らん！ 放置だ。

大きく足音を響かせながらダイニングへ移動して、ソファヘッドス
ンと身体を沈め両足をテーブルに載せた。

クラピカは当分目を覚まさないだろうし、モラウと会うのは夜だ。
持ってきたノートパソコンを膝に乗せて、イライラ気分を癒すた
めにゴンたちの情報を探り始める。

ゴンとキルアにはジンさん名義の携帯電話をプレゼントした。

普通に借りた携帯とは違い、限られた人物だけしか情報にアクセ
ス出来ない。

もちろん通常に使う分には何の問題もない。

まずGPS機能を使い位置を特定して周囲の監視カメラをハッキ
ングしていく。

監視カメラを巡回して探し始めるとすぐに発見できた。

喫茶店で食事をしながら何やら相談しているようだ。

ゴンとキルアをストーカーして癒されていると、カイトが背後に
回り覗き込んできた。

「ゴンか」

「……お姫様のお世話をしなくていいの？」

「そろそろ機嫌を直してくれ。まだ子供なんだ、広い心で接してや
ればいい」

「俺の心はすつこく狭いの。彼が入る隙間は全くないよ」

「やれやれ。タローは頑固だな」

カイトに言われたくないよ。一度決めるとテコでも意見を変えな

いくせにさ。

また愚痴と文句を言いたくなってきた。
頭を振ってクラピカを忘却の彼方へ追いやり、ゴンたちの観察に戻る。

物語通り競売に参加したのか、手配書らしき物を眺めながら真剣に話し合っている。

これから蜘蛛を探すのだろう。

クラピカの件はまだ気づいてないのかな？

捕えたとは言わずに、一緒にいるとでも伝えないと心配して暴走しそうだ。

ヒソカのこと話さないと……ヒソカはどうせ俺も探すから交換条件で蜘蛛を追うなと話すか。

そう思って携帯に手を伸ばした時、カイトの口から信じられない台詞がこぼれた。

「ああ、そういうえば……」

「また何か問題でもあるの？」

「キルアからメールが来てたな」

「はあ?! 何で教えてくれなかったの!」

「忘れてた」

固まって目を見開きながらバカの姿を凝視してしまう。
何考えてんだ! そんな大事なことを忘れるなんて。

カイトのポケットに手をつ込み携帯を引きずり出し、勝手に電源を入れて操作する。

暗証番号なんかつけやがってメンドクサイな。

カイトの暗証番号はゴンの誕生日、とてつもなく簡単だ。

正直意味ないと思う。

俺の暗証番号はカイトの誕生日なので人のことは言えないが。

メールボックスを確認するとキルアから大量のメールが来ていた。特に昨日、俺たちが眠ってからその頻度が増えている。

作戦行動時は電源を落としているので、メールで送ってきたんだろつ。

【カイトへ。　ヨークシンについた。暇だったらゴンが会いたいてさ】

一番最初のメールは普通の内容で特に問題はなさそうだ。

古い物から新しい物へ読み進めていくとだんだん内容に焦りが混じってきた。

【電話かけても繋がらないんだけど】

【カイト、連絡取りたい。気づいたら電話くれよ】

【メールでいいからくれよ】

【とつと何でもいいから連絡よこせ！】

【カイトと話したいってゴンが言ってるんだ。頼むから連絡入れてくれよ】

思わず絶句して頭を抑えた。ズキズキと血管が疼く。

カイトは筆不精だし、機械類が苦手だから携帯なんてほとんど触

ってないんだろう。

どうせ、最初のメールにしか目を通してないんだろ！
んで、電源切りっぱなしだったんだよな？！

そう予想できたが、許せるはずがない。

カイトを振り向き腕を掴んで一本背負いを決めた後、頭をぐりぐりと踏みつける。

「何考えてんだ、コラ」

「悪かった」

「前さ、俺に何も言わないって怒ったよね？ カイトも同じことしてるじゃない」

「忘れてたんだ。仕方ないだろ」

「このバカ！！」

キルアもキルアだ。何で俺に連絡取らないんだ！

俺なら電源を落としていても、一日一回は確認してるから連絡はすぐ取れたはずだ。

アイツも会ったら殴り飛ばさないとな。

頭をガシガシとかきながら自分の携帯を開いてボタンを押す。

本当に危ない時にだけ連絡しろ。

ゴンとキルアには別れる時にそう伝えた。

最初のメールはまだしも、その後のメールは何か解決できない問

題が発生したから送ってきたんだろう。

シャルは来てないと言っていた……仕事で嘘をつくようなヤツじゃない。

俺たちをハメる理由もないし、殺したいなら昨日殺せてた。

蜘蛛以外で危ないことといえばヒソカか。

映像を見る限り大きな怪我などないように見える。

ヒソカめ、ゴンたちに何しやがった……とっとと殺しておけばよかったな。

ようやく呼び出し音に気づいたのが、画面でキルアが慌てて取り出すのが確認できた。

『……タロー？』

「キルア、何も言わずに席を立ってトイレに行って」

『なっ……どっから見ただ！』

「いいから移動して。すぐに飛ぶ」

言いたいことだけ言って通話を切り、画面を見つめてキルアが移動するのを待つ。

様々な不安や憶測が次々と頭に浮かんでは沈んでいく。

キルアはすぐ席を立て移動しているが、それすら待ちきれない。身体中に手を這わせて、装備や持ち物の確認をしつつ飛ぶ瞬間に備える。

カイトも俺の様子でようやく事態が理解できたのか、腰に刀を差しながら準備を整えている。

ランタンに目をやると、喫茶店に行くのが嬉しいのかくるくる回転していた。

……お前はいつでもものんきだね。

気が抜けてピリピリとした緊張感が少し薄れてくる。

キルアがトイレのドアを開けた瞬間、カイトの腕を掴んで転移した。

「うわ！いきなりかよ」

「説明してよ」

「元気にしてたか？」

「アンタら……」

何故か呆れているキルアを引きずって席へ行くと、ゴンが弾丸のようにカイトの胸に突っ込んだ。

カイトが頭を撫でてから引き剥がそうとしたが、胸に顔を埋めたまま離れようとしなない。

その肩が震えているのを見て自然と顔が緩んでくる。

ゴンは怒るだろうが、そんなところが可愛くてしょうがない。

笑いながらカイトに顎でトイレのドアを示してから、キルアの正面に座って詳しい話を聞く。

キルアは真剣な表情で連絡した理由を話してくれるが、その内容は俺が思っていたのと全く違っていた。

心配して損した。

思わず気が抜けてテーブルに突っ伏した。

「……………アンタら何やったんだよ」

「んーと、婦女誘拐かな？」

「はあ?!」

キルアの罵声を聞きながら手配書を眺める。

ここにも物語と差異があったのか。でも、こんなことであんなに焦るなんて可愛いな。

キルアが連絡を取ってきた理由は、物語にあった賞金首の競売。

対象をコミュニティに差し出せば一人につき二十億の報酬が支払われる。

もちろん生死は問わない。

そこに俺とカイトの写真が追加されてるだけだ。うん、どうでもいいね。

「なあ、大丈夫なのか？」

「問題ないよ」

「またそれかよ」

「ゴンが来たら話すよ。あつ、おねーさん！ 注文いいですか？」

「自由すぎだろ……………オレが殺したくなってきた」

ゾルディックのキルアが言うと洒落にならないからやめてほしい。あきれ果てて魂が抜けかけているキルアは放置して、ウエイトレスを捕まえケーキとアイスティーを注文する。

どうやら、ゴンは手配書を見てかなり心配してたようだ。

円を広げて周辺を調査すると、確かに街中かなりの数の能力者たちが集まっている。

「キルア。何で俺に連絡取らなかったの？ 一緒にいるのは知ってたよね」

「あー……なんつうか、ゴンがカイトと連絡取れってうるさかったからっつーか」

「忘れてたんだね」

ゴンがカイト大好きなのはよく知ってるけど、俺の存在を忘れないで頂きたい。

ため息をついて肩を落とすと、キルアが慰めにもならない言葉を送ってくれた。

「今日！ 今日ダメだったらタローに連絡取ろうと思って！」

「嘘はダメだよ」

「ゴメン」

注文した品物が運ばれてくると同時にゴンを抱えたカイトが戻ってきた。

カイトは隣に座ると、俺との間にゴンを座らせお絞りで目元を冷やしている。

癒される……この光景。

ランタンを膝に乗せフォークを渡しながら、何故手配されているのかを説明していく。

「つまりね、俺たち彼女を誘拐してマフィアにケンカを売ったんだよ」

「彼女はタローの師匠に面倒をってもらってる。怪我一つしてない」

「どうしてそんなことしたの？」

「んー……何ていうか」

「はつきりしろよ」

「内緒かな」

納得できないと騒ぎ出す子供たちを放置して、ゴンの質問の答えを探してみる。

どうしてネオンを誘拐したのか。

ゴンたちを死なせたくないから俺たちは動き始めた。

ネオンを誘拐したことが、直接それに繋がるかと言つとちよつと違う。

クラピカは蜘蛛に挑み、ゴンたちは巻き込まれる。

それを前提にして計画を立てていったから、目的の一つに蜘蛛に占いを渡さないことが加わった。

物語とは違ってウボオーは死ななかつたしヒソカもないので、状況は変わってきている。

なにより現在クラピカは俺たちに囚われている事実がある。

彼を捕えた事で話し合いが失敗に終わったとしても、俺はこの街で蜘蛛に挑ませないと決めている。

物語にあったクロク誘拐が起こる可能性はゼロだ。

これから説得するので、ゴンたちが蜘蛛に関わるかも怪しい。

なのにネオンを捕らえ続けているのは、クロクに占いを渡したくないからだ。

あの複雑怪奇な詩文をクロクなら解読して理解できると思った。

これからも蜘蛛と不本意ながら関わっていきそうだから、盗まれと厄介極まりない。

それに今は本気でネオンに父親の本質を見せたいと思う。

最初の捕らえる目的から、現在の捕らえている目的はズレている。

そもそもこうなるなら、蜘蛛への依頼は必要なかった気がしないでもない。

依頼のせいで勘違いされたんだし。

でも、前提条件から考えると必要だと思ったんだよな。

あー……またドツポにはまりそうだ。

「心配しないでいいよ。殺されないからさ」

「ゾルディックも手を引いたしな」

「アニキから聞いたけど本当だったんだ」

「お兄さんが来たんだ？」

「ああ、変なこと言ってたぜ。タローにはようかつんぐ」

いきなりカイトがキルア口元を手のひらで覆い耳元で何やら囁き始めた。

キルアは血の気が引いたのか、顔を青くしてひたすら頭を上下に振って頷いている。

ゴンと二人で啞然としながら見ているとカイトが咳払いをして口を開いた。

「タローから話があるそうだ」

「え？ 話??」

「アレのこと話さないといけないだろ」

「アレ？ あー……アレか」

「聞いてやるから話せよ！ 早くしろ!!」

カイトにこの件は話してないのに……なんで知ってるの？

急な話題転換に頭が混乱しながらも、確かに話したいことがあったので話始める

ヒソカが蜘蛛から追い出され、もうこの街にいない可能性が高いことを伝えた。

昨日の飲み会で蜘蛛たちはヒソカの愚痴を零すことが多かった。シャルも見つからないと口を尖らせていたし、街から出て行った

と考えていいだろう。

ヒソカの居場所を見つけて殴るのを手伝うから、手配書の人間は危ないから追わないで欲しいと頼んだ。

「手伝ってくれんのか？」

「うん、こっちも探す理由ができたからね」

「この約束は必ず守ってくれ」

「わーっ たよ」

「うん」

「コイツら全員強いからね。本気でヤバイよ」

「そんなに？」

「うん、二人だと危ないからね」

「カイトはこの人たちに勝てるの？」

「勝つの定義によるかな？」

「難しいこというな！」

またキルアの機嫌が急降下したので、ケーキを口の中に押し込んで黙らせる。

勝つねえ……。

殺すだけならネテロ会長がメルエムにやった方法のように、手段

を選ばなければどうとでもなる。

勝つと殺すは違う。

爆弾を抱えて爆死したが、会長は勝つたと確信してたと思う。

ランタンを使って蜘蛛に悪戯させた時に俺は勝つたと思ったが、周りから見たらただの負け犬の遠吠えだ。

こんな理論を話してもキルアに理解できるのだろうか。無理だろ
うな。

しばらくして時計に目をやるとかなり時間が経過している。

子供たちと話が弾み、クラピカのことをすっかり忘れていた。

ああ、クラピカのこと話さない。

「クラピカは知ってるよね」

「うん、友達だよ」

「ちょっと俺たちと一緒にいるから、連絡取れないと思うけど心配
しないでね」

「アンタ……何企んでんだ」

「人聞き悪いこと言わないでよ」

「性格悪そーだからな」

そもそも説教の予定を入れろって言ったのはカイトなのに！
そう叫びたい気持ちを抑え頬を膨らませてそっぽを向く。

俺はカイトの頼みを聞いて動いているだけなのに、なんで全部が全部俺のせいになるんだ。

理不尽だ。

確かに手段は選ばないしついでに悪戯したりもするけどさ。

どうせやらなきゃいけないなら、楽しまなきゃ損じゃないか。

ゴンもキルアもカイトを良く見すぎている。実態はネオン並のわがまま野郎だぞ。

「とにかくそういうことだから！ 質問は許さないから！！」

「キレんなよ……」

「オレ、クラピカと話したい」

「俺たちも話をしたいんだよ。だからちょっとだけ待ってて」

「でもオレの友達だよ」

「話が終わったら必ず連絡するから待っててよ。ね？ お願い」

唇を噛んでうつむくゴンに両手を合わせて頭を下げるが、表情は硬く変わる気配がない。

それから言葉を尽くして説得するが頷いてくれない。

だが、鶴カイトの一声で全てが解決した。

「俺たちを信じろ」

「カイト……」

「約束は必ず守る」

「わかった。待ってる」

カイトに勝てないと思うのはこんな時だ。

俺の薄っぺらい言葉は脅しや交渉には効果があるが、こんな説得の時には全く無力だ。

わかっけていても落ち込んでしまう。

ゴンとキルアに用事があるから帰ることを伝え、席を立って会計を済ませに行く。

レジでキーを幾つかテイクアウトしてから席へ戻ると、カイトはまだ二人に捕まって話を聞いている。

「ごめんね。そろそろ時間がヤバイ」

「すまん」

「携帯の電源入れとけよな」

「連絡待ってるね」

まだカイトと話をしたそうな二人と別れてトイレのドアを開けて中へと入る。

結局三時間近く経ってしまったので、クラピカの意識は戻っているだろう。

パソコンなどの機械類はロックしてあるので大丈夫だが、倉庫部屋には鍵がかかっていない。

かなり厄介な道具もあるので利用されると手を焼きそうだ。

「たぶん起きてると思う。なんとかするんだよね？」

「ああ、大丈夫だ」

「任せたらね」

そう言ってケーキの箱に釘付けになったランタンを叩いて能力を
発動する。

「マントが閉じた途端、こちらへと向かってくる鎖を避けて後ろへ
下がる。」

壁にもたれ目前で繰り広げられる戦闘風景を眺め始めた。

第56話（前書き）

読む前にこれだけ読んでください。

クラピカが蜘蛛以外に使うと死ぬのは……束縛チエーンジエイルする中指の鎖だけです。

第56話

鎖が縦横無尽に逃げ回るカイトを後ろから追尾して狙う。

クラピカを見ると起きてからそれほど時間が経っていないのか俺が着替えさせた寝巻きのままで、鎖を操つる表情は青く肩が上下に揺れてすでに息が上がっている。

壁にもたれながらクラピカの手のひらに視線を移すと全ての鎖が具現化していた。

ダウジングチェーン
導く薬指の鎖か……束縛する中指の鎖を使われるとマズイな。

「あのさー、俺たち蜘蛛じゃないから中指は使わないほうがいいよ」

「……何故知っている?!」

「内緒。蜘蛛がハンター試験官に選ばれると思う? 大人しく忠告を聞きなよ」

「顔色が良くないな。動き回らず座ってる」

「お前たちがやったんだろう!!」

「正確に言えば俺がやったね」

茶々を入れるとクラピカから鋭い殺気が飛んできた。

俺に対してかなりの恨みを持っているらしく目が合っただけで殺されそうだ。

スタンガン程度で下げさなヤツだな……以前俺が食らったキルアの電気罫はもつと酷かったぞ。

肩を竦めてケーキの箱を開けると、呼び出したままだったランタ

ンがいそいそ寄ってきた。

ケーキをランタンの口に放り込みながら優雅に観戦を継続する。カイトから攻撃を仕掛ける様子はなく、ひたすら追ってくる鎖から逃げ続け根を上げるのを待っている。

復讐相手である蜘蛛の強さゆえに、クラピカの能力はタイマンに特化されていると言っている。

対蜘蛛専用である束縛する中指の鎖チエインジエイル以外の鎖も、一人で戦うことを想定して具現化したと思われる。

だからこそ物語の中で、本来敵わないはずのウボォーを圧倒することが出来た。

だがカイトは蜘蛛ではない上に力量も離れている。

強制絶状態にして拘束する束縛する中指の鎖チエインジエイルは使えないし、体調不良で絶対時間エンペラータイムの使用も難しいだろう。

鎖を操るクラピカの顔には殺されるとでも思っているのか焦燥が浮かんでいた。

頭がいい割にバカなんだな……殺すならとつくに殺してるし、ベツトに寝かせて治療までしてやったのに。

まあ、彼にしてみればいくら憎んでもたりない俺たちは憎悪の対象だろう。

ハンター試験の時はともかく、雇い主であるネオンを襲って誘拐したし雇われ仲間を殺したり傷つけている。

果ては念願だった蜘蛛との決闘に割り込み拘束されて連れて来られた。

恨まれる覚えが死ぬほどあるが、今は時間がない。

早く説得を済ませないとモラウたちとの約束に間に合わなくなってしまう。

「ねえ、いい加減に話をしようよ。俺たちから逃げられないことはわかってるんでしょ」

「あんな目に合わされた相手と話しなどできるか！」

「君の意思はこの際関係ないね。意地を張るのを止めて座らないと蜘蛛に君の能力教えるよ？」

ハンターサイトに流すのもいいね、そう脅しを追加すると鎖が滑り落ち身体から力が抜けたがまだ座ろうとはしない。

ため息をつき落ちた鎖を引っ張って強引にソファに押し付けた。ようやくこれでまともに会話ができる。

冷蔵庫からペットボトルを取り出しテーブルの上に並べていく。クラピカが手をつけるとは思ってない、俺が飲みたいんだ。

キャップを回し喉へ流し込んでいるとカイトが口を開いた。

「自己紹介から始めよう。覚えているかもしれないが、俺がカイトでこっちがタローだ」

「……クラピカだ」

「クラピカ、君を攫ったのは戦いを止めたかったからだ。死なせたくなかった」

「ありがた迷惑だ。第一、邪魔されなければ私が勝っていた」

「いや、殺されたはずだ」

「そんなことはない！」

シャルの存在には気づいていなかったようだ。
物語とは違い、あの時ウボォーを倒せてもシャルに殺されていた。
たとえその場で殺されなかったとしても、顔や能力の秘密を蜘蛛
に知られたらどう。

君は口が軽いようだからとそうカイトが語ると苦々しく顔を背け
た。

「だから攫って助けたんだ」

「……お前たちと会ったのは数える程しかない。何故だ？」

「君はゴンの友人だ。死ねばゴンが悲しむ」

「蜘蛛への復讐は私の問題だ、ゴンは関係ない」

「死ねば嘆き悲しむ人がいるのに君だけの問題なのか？」

「やめてくれ！ お前たちに言われたくない！！」

うん、クラピカの意見に賛成だ。

復讐を止めさせることはできないと、耳にタコが出来る程聞かせ
たはずなのにまだ諦めてなかったのか。

これは俺が脅して説得した方が良かったのか？ でも、それだと
話し合いの時に抵抗されると思うんだよな。

俺はカイトと違い、ヨークシンで復讐しなければそれでいいと思
っている。

その後クラピカが蜘蛛に挑んで死のうが生きようが、それは彼の
選んだ道だ

論点を変えないと堂々巡りになると考え話に加わる。

「カイト、話が違つよ」

「どうしても言いたかつたんだ」

「……意見が分かれているのか？」

「うん、さっきのはカイトの君への想いだ。俺は勝手に復讐でも何でもして死ねばいいと思ってるよ」

「タロー……！」

「怒らないでよ。どうせ成功するはずないしさ」

「何故そう思う？ 私は必ずやりとげる」

「君は非情になれないからだよ」

「私は蜘蛛をこの世から消す為なら何でもやる！」

無理だつっの。

物語で復讐よりゴンとキルアの命を取ったクラピカが非情になれるはずなどない。

ウボォーとパクノダを倒しクロロを鎖で縛ったがあれは運が良かっただけだし、アレ以上の成果はどう足掻いても見込めないだろう。あの後挑んでも、能力はバレたしクロロに性格の甘さも知られたからには返り討ちに会うだけだ。

まあ、物語のことは起こらないしどれだけ言葉を尽くしても彼には届かない。

ここは『非情』という言葉の意味を教えることにしよう。

「じゃあ、俺が蜘蛛を全滅させる方法を教えてあげるよ。たぶん一ヶ月あれば簡単に達成出来るよ」

「そんな方法があるのか?!」

「おー、簡単に食いついてきた。」

意地の悪い笑みを浮かべながらパソコンを操作して東ゴルドーの軍事データを画面に表示させる。

やれるものならやってみよう、俺が考えてた復讐方法を教えてあげるからさ。

「蜘蛛は流星街の出身が多くてさ、彼らの本拠地もそこにある」

「流星街……」

「タロー、止める」

カイトを無視して立ち上がりパソコンを回転させてクラブカへ向けると、地図や軍事施設の詳細などを次々と表示させながら説明する。

「俺が蜘蛛がいつ集結するかは調べてあげるからさ、君はこの軍事施設を制圧してきて」

「これは……」

へえ、さすがだね……データをみただけで内容を把握できたんだ。

青さを通り越して白くなった表情は硬く、唇を震わせながら怒り

を含めた瞳で画面を凝視している。

今見せているのは核開発と実験を行っている軍事施設。

そう、つまり俺が考えた方法とは軍事施設を制圧して、核の雨を降らせ流星街ごと蜘蛛を焼き殺すこと。

ネテロ会長と故郷の方法の組み合わせだ。

機器類の知識や拷問など学ばなければいけないこともあるが、蜘蛛を消すことに比べたら軽いモンだろ。

「施設を守っているのはほとんど一般人だから、君に倒せない人間はいないよ。皆殺しにして核ミサイルのスイッチを押せばいい」

「……そんなことをすれば大量の犠牲者が出る」

「大量どころか流星街全滅じゃないかな！。しかも致死量の放射能に汚染されて百年は誰も住めないだろうね」

「お前には慈悲や情けはないのか！。こんな非人道的なマネを私にしろと！？」

「そんなモノ復讐には必要ない。ねえ、クラブカ。これが蜘蛛を全滅させる方法だよ。やれるよね？」

「出来るわけがない！！」

「どうして出来ないの？。何でもするって言ったじゃない」

「クツ、だがそんなことが出来る人間がいるはずがない！」

核兵器を作ったのは人間なんだよ？。バカだね。

スイッチを押した人間がいるから犠牲者がいるんだ。熱くなって

そんなこともわからないのか。

目的のためなら手段を選ばない人間は多いんだ……俺みたいだね。

「俺は出来る。もしカイトが蜘蛛に殺されたら必ずスイッチを押すよ」

そんな目で見ないでよ……クラピカには俺が化け物か何かに見えるのだろうか。

君の価値観で他人を判断しちゃダメだよ？

世の中には、君と違って心の底までどす黒く染まった人間なんて吐いて捨てるほどいる。

「私が間違っていたようだ……お前は人間とは呼べない。あの時名乗った通りの悪魔だ」

「褒めてくれてありがとう」

最上級の笑みを浮かべて勝ち誇り、感情が高ぶったせいか瞳を潤ませ震えているクラピカを見下ろす。

ちよつとすつきりした。

少しイジメちゃったけど『非情』の意味はこれで理解できただろう。

俺は本気でここまでやらなければ、蜘蛛を全滅させるなど不可能だと思っている。

数人ならクラピカ一人でも倒せると思うが、途中でクロロが必ず何らかの対策を打ってくるに違いない。

全滅させるにはクロロが考えつかない方法で一氣にカタをつける必要がある。

また、バカのせいで話題がずれてるな。

本来の目的を伝えないといつまで経っても話が終わらない。

「さて、ずれた話を戻すよ」

クラピカに天上^{ハレツ}不知唯我独損で強制的に絶にすると宣言した。

その為に行われるモラウたちとの話し合いにクラピカを同席させるので、話し合いが終わるまで素直に話を聞くこと。

もし話し合いが失敗に終わっても、ヨークシンで蜘蛛に挑ませるつもりはないとを伝えた。

「受け入れられない」

「そんなこと言える立場だと思ってるんだー？ ある意味尊敬するよ」

「どこまで私を侮辱すれば満足するんだ！」

「侮辱？ どうしてそうなるのさ。現実を教えてあげただけじゃない」

「タロー、そろそろ黙れ。俺に任せただろ」

「ちょっと説教したくなつてさ」

「そんな説教の仕方をするな」

「あーハイハイ、黙りますよ」

肩を竦めて指を右から左に動かしチャックを閉めるしぐさをする。そもそもカイトが無駄な説得をしたからなのに。

俺が黙つたのを確認するとカイトは静かにクラピカの瞳を見つめながら語り始めた。

「君には時間が必要だと思う」

「時間？」

「そうだ。止めるとはもう言わない。だから、じっくり時間をかけて考えてほしい」

「時間はすでに十分過ぎるほどかけている」

「復讐を決めた時に君が大事だと、死なせたくないと思う……そんな人たちは傍にいたのか？」

「家族を……一族が、全て蜘蛛に殺されたんだ………いるはずないだろう！」

「でも今はいるはずだ。そうだろう？」

クラピカは真剣な眼差しから逃げようと顔を横に逸らそうとするが、カイトが両手で強引に頬を挟みそれを許さない。

瞳を彷徨わせてなんとか逃れようと足掻くが、頬に添えられた手は外れることはなかった。

そんなクラピカの瞳をしばらく見つめた後、カイトの口から万感の想いを込めた懇願が零れ落ちた。

「頼むからゴンのことを忘れないでやってくれ。君が、君たちが始めて出来た友達なんだ」

「いきなり何をっ」

「頼む聞いてくれ。ヨークシンにいる間だけでいい、復讐を忘れてゴンと過ごしてくれないか……ゴンに君の時間を分けてやってほしい」

カイトはクラピカに昔俺にも教えてくれた生い立ちを語る。

カイトは幼い頃に実の家族に捨てられ孤児になった。

己以外は全て敵で信じられるモノなどあるはずもなく、街の片隅で殺しや盗みを犯しながら何かを食べて呼吸していた。

そんな自分をジンさんはケタ外れな方法ではあるが拾い育て、産みの親すら与えなかった惜しみない愛情を注いでくれた。

拾われた当初はジンさんを信じることができず、抵抗して暴れ続けていた自分を決して見捨てず頭を撫で抱きしめて眠ってくれた。

ジンさんは師匠であり親でもあり、ジンさんの息子であるゴンは実の家族のように想っているとそう告げる。

そしてジンさんとの修行途中に出会った俺のことを話し出す。

「タローは生まれて初めての友達だ」

思わず顔を上げてカイトの顔を見つめる。

初耳だ。カイトの知り合いは多い、友達もきつと多いだろうと思っていた。

……カイトはいつも明るく飄々としていてアニキ肌で……俺とは違い優しくしていつも暖かい。

これまで一緒に過ごしてきた日々が頭を駆け巡り、瞳から熱い何かが零れそうになる。

「こんな俺に友達になろうと言ってくれた。タローが死ぬなんて俺は絶対耐えられない。ゴンも同じはずなんだ。頼む……頼む、クラ

ピカ」

「無理だ……復讐を諦めることは出来ない」

「諦めなくていい。そんなことはもう言わない。だからゴンに君と過ごす時間を与えてやってくれ」

後はひたすらカイトは頼むとクラピカへ繰り返す。

そんな言葉に打たれながらクラピカはジツと沈黙して考え込んでいる

全く、これだから困る。

頭をガシガシかきながら内心に沸いた照れくさを振り払い、ため息を一つ吐いて閉じていた口を開く。

「カイトの言いたいことはわかった？」

「ああ」

「なんて言うか、カイトはもう信じられるよね？」

「ああ」

「カイトの言う通りにしてやってよ。蜘蛛がヨークシンから去ったら、君に付けた能力は解除するって約束するから」

「ああ……いや、だが私は」

クラピカの返答を遮り更に言葉を重ねる。
君が何を心配してるかはわかってる。

「カイトはともかく、俺が約束を守るか信じられないんだろ？ だったらその小指の鎖を使えばいい」

「なっ……その言葉の意味を理解しているのか!？」

「もちろん、約束破ったら心臓破裂だろ？」

「何故！ 何故そこまでするんだ……勝手に死ねと言っただろう！」

「今もそう思ってる。でもね、カイトは俺の友達なんだよ」

だからしょうがないよ。笑いながらそう話す俺にしばらく逡巡した後ゆっくりと頷いてくれた。

緋の目が怪しく輝き約束を破るなと宣言された後、鎖が俺の心臓へ巻きついていく。

思ったより苦しくて心臓に添えられた刃の感触がやけにリアルだ。こんな付けたまま暮らせるなんてコイツ実はマゾなんじゃないか。

「まだ時間あるからさ。カイトともう少し話しをしてやってよ」

「ああ、私も彼と話したい」

「俺は時間まで寝るよ」

カイトを小突いてからそう声をかけ自室に向かう。

相変わらずカイトに勝てないとか説得を任せるんじゃないかとか、そんな思いが駆け巡るが後悔はない。

約束を守れば死なないしね。

話し合いの席に無理やり着かせるだけでよかったのに、なんでこんなことになっちゃうんだか。

枕元の時計を見ると約束の時間まで後二時間ほど。

間に合うかな？ そう思いながら、自室にあるパソコンの電源を入れてキーボードを叩き始めた。

第57話(前書き)

遅れて申し訳ありませんでしたorz

第57話

「何をしてるんだ？」

背後から声をかけられて振り返るとカイトが画面を覗き込んでいた。

「ゴンたちは何とかかなりそうだからさ、次のことをちょっとね。クラピカは？」

「ああ、風呂に入りたいと言ってな。タローの服を貸したぞ」

体調悪いのに風呂に入って大丈夫なのか？　そういうところホント気が回らないよね。

呆れながらも手は止めず作業を続ける。

クラピカの問題が片付いたことでゴンたちの命はほぼ守りきれたと言っていいだろう。

相変わらず蜘蛛は好き勝手やっているようだが、俺たちには関係ない。

カイトが気にしているワンコの動向を追ってみたが、飼い主であるスクワラはネオン探索に回されていてやはり死ぬことはなさそうだ。

こんなところかな、イスにグツと体重を預け大きく伸びをして時計に目をやると待ち合わせまで後三十分。

「あ、そうだ」

「なんだ」

「ヒソカ殺すけどいいよね？」

「使う武器は俺に選ばせる」

さすが俺の親友、ゴンを泣かせたヒソカを許す気など欠片もないらしい。

天空闘技場の件から俺はヒソカを殺すと決めていたが、色々忙しくてなかなか機会がなかった。

蜘蛛たちに殺されることを期待していたがもの見事に制裁から逃亡したようだし、ここでしつかりケリをつけておきたい。

ヒソカ殺害方法をカイトに説明すると苦々しく表情を歪め、気が進まないと言われしに反対を主張してきた。

「これが確実なんだよ。諦めて」

「何故だ？俺たちだけでも殺せるだろ」

「スジを通さないとうるさい人たちがいるからさ」

「黙っておけばいい」

「絶対バレると思うんだけどなあ……。まあ、時間がないしこの件は明日また話そう」

不満そうなカイトの背中を押してダイニングに戻るとクラピカが丁度風呂から上がった所だった。

原作で着用していた民族衣装のイメージが強いからか、ジーンズにTシャツを着た姿に違和感を感じる。

何を着てもイケメンには変わりがないので、また存在しない神とやらに愚痴を零してしまいたいそうになる。

ティーテーブルで葉っぱを蒸らしつつ紅茶を入れる準備をしていると、クラピカがネオンを家に帰すように迫ってきた。

「ネオン？ まだ帰す気ないよ」

「ボスを手放すのが惜しいのか!？」

「はあ？ 何でそうなるのさ」

呆れる俺にさらにネオンを利用するなと迫ってくる。

あー、なるほど……俺がそんなことの為に攫ったと考えているのか。失礼なヤツだ。

あんな夕チの悪い麻薬に手を出すわけないだろう。

だが、利用してないと話してしてもクラピカが納得するとは思えない。

どうせゴンと一緒にいてもらう為にはマフィアの仕事を辞める必要がある。

ネオンと話をさせるか。

家に帰りたいなんて言わないだろう、外出はできないが師匠に懐いているし占いをしろと言われることもない。

ランタンのごとく自由きままに暮らしている。

仕事の件はネオンに首にすると一筆書かせれば簡単だろう。

携帯のボタンを押し紅茶をクラピカに運ぶよう指示しているとすぐに師匠が電話口に出た。

「あ、タローです。師匠、ネオンに代わってもらえますか？」

「お仕置き中です。当分話せませんね」

「……………何やらかしたんですか」

『僕から逃げようとしたんですよ』

夜にかけ直すと伝え通話を切り、頭を抑える。わずかに頭痛を感じた……どうせ勉強が嫌で逃亡を計ったんだろう。

バカだな、師匠から逃げ切れるはずがないのに。

お仕置き中なら今はクラピカと話せない。

風呂に入ってるから話せないとクラピカに伝え、後で会わせるとを約束して無理やり話題を打ち切った。

ネオンの餌は何にするかな……買ひ物の付き合いは論外だしシヤルから何か横流してもらおうか。

そう決めて紅茶を喉に流し込み、カイトとクラピカを連れてモラウたちとの待ち合わせ場所へ向う。

到着すると思いがけない人物が追加されており、目を見開き驚愕した。

確かに話し合いの場所はモラウに任せただけ、こんな場所にする必要があるのか。

動揺を見せないよう感情を押さえつけにこやかに握手を交わす。

「初めまして、ノブと申します」

「……試験の時はお世話になりました。俺がタローで隣がカイトです」

「よう、悪魔。問題ねーよな？」

「もちろんです」

話し合いにモラウが用意したのはノブの4次元マンション

ハイドアンドシーク

ノブは話し合いには加わらず扉を開けるだけらしいので反論を唱えることはできない。

俺を一体どんな人間だと思ってるんだ……ここまで慎重になる必要はないだろ。

一旦ホテルに移動して扉を潜り用意されたイスに全員で座ると、こちらから話を切り出し計画の変更から伝える。

当初の予定ではトリタテンをつけて三十日間放置しようと思っていたが、それでは約束を守れず心臓が破裂してしまう。

なので約束の期日になったらイヌガミでトリタテンを除念する。イヌガミが召還不能になるのは正直痛い。

だが、今まで使用したことがなかったし、除念のリスク期間を知るためにも丁度いいだろう。

そう計画変更を伝え終わるとモラウたちが絶句してしまった。

「オメエ、除念だと……何でそこまで詳しく知ってた……」

「念でできたマスコットなら除念できて当たり前ですよ。それよりこの方法でいいですね？」

「問題ねエけどよ……」

「じゃあ、俺とナツクルさんだけで話をしますから、外野は黙っていて下さいね」

ナツクルはモラウから俺の本性を聞かされていたのか、胡散臭い目で俺を観察している。

モラウを脅して説得したんだから当たり前だが、そんなことは最初から織り込み済みだ。

物語のおかげでナツクルが情に弱く涙もろい人間だということはわかってる。

フランダースの犬を見せれば一発で号泣するタイプだ。

真剣な表情を作りナツクルの両手を握り締めながら、脳裏にはピトーにやられたカイトの死に様を思い浮かべる。

そうして両目に涙を溜めナツクルの顔を見つめながらクラピカの生い立ちを聞かせていく。

幸せに両親と一族の集落で生活して毎日森を走り回り遊んでいた幼少時代。

突然現れた蜘蛛は愛していた両親や一族たちの目を抉り取り惨たらしく殺害した。

クラピカが蜘蛛に復讐を誓ったのは仕方ない、そう生きなければ前に進めなかつたんだとナツクルに涙ながらに語り、死なせたくないと言え。

「復讐したい。そう願う彼の気持ちは痛い程良くわかるんです」

「オ、オレもわかる。胸が締め付けられそうだ……」

「幻影旅団はとてつもなく強い、彼が殺されるのは目に見えています。でもね、ナツクルさん。俺は彼を死なせたくないんです！」

「オメエ、聞いてたようなヤツじゃねエ……勘違いしてたぜ」

「俺のことなんてどうでもいい！ クラピカのことだけを考えてやって下さい」

「ああ、わかった」

「このままだと彼は殺されてしまう……」

一旦台詞を途切れさせ悲しそうに目蓋を伏せた後、顔を上げてもう一度ナツクルと目を合わせた。

俺の瞳から涙が滝のように流れ続けナツクルの心を揺さぶる。

「お願いします……彼を救えるのはナツクルさん、貴方しかいないんです！ 助けてやって下さい！！」

最後の一押しを突きつけるとナツクルの両目からも涙が零れ落ちていく。

溢れた涙を隠すように腕を眼前で交差させ叫ぶように望む答えを吐き出した。

「まかせとけ！ オレが絶対助けてやつからよ！！」

「ありがとうございます」

顔を伏せて緩みそうになる頬を必死に押さえつける。

チヨロイ。

簡単に落ちたな……予想通りの展開すぎて大笑いしそうだ。

ナツクルから視線を外して周りを見ると、シートはタオルに顔を埋め泣いている。

ブルータス、お前もか。

モラウやクラピカは言葉が出てこないのか、パクパクと口を開閉させて俺を指差しながら固まっていた。

笑い出しそうなカイトからタオルを受け取り、顔についた涙の跡を拭いっつナツクルへクラピカを放り投げた。

「じゃあ、ナツクルさん。彼をお願いします」

「おう！　今から殴るけど痛くねエから動くんじゃねーぞ」

呆気にとられたままのクラピカをナツクルが殴る様子を眺めながら、久々に得られた充実感に身を浸す。

最近思い通りにことが進まず、溜まっていた鬱憤がナツクルのおかげで急速に溶け出している。

彼と友達になりたい……ネオン以上の逸材だ、ぜひお近づきになってイジリ倒そう。

後で連絡先を聞こう、そう思っていると、視界にモラウが全身から殺気が立ち上らせこちらを睨み付ける姿が映った。

「ご不満でも？　条件はお互い納得して決めただけですよ」

「何でこうなるんだ」

「それは俺の責任じゃないですよ？　ナツクルさんに言うて下さいよ」

「クソッ！！」

「アハハハハ！　終わり良ければ全て良しですよ」

「どこがだ！　悪魔だと教えたのにアツサリ籠絡されやがって！！」

こんな交渉で本性を見せるはずないだろう。

モラウは俺に愚痴をぶつける前に、自分自身にも今回の責任があることを思い出してほしい。

ナツクルが情に弱いことくらいわかっていたはずだ。

そこが彼の長所でもあり短所でもあるから矯正しなかったんだろ

うけど。

「そりゃ、猫かぶってるからですよ。悔しいですか？ 今、どんな気持ちですか？」

「 殺してやる！！」

向かってくるモラウを避けながら、あの時のようにランタンを呼び出しキセルを奪う。

鬼のような形相になったモラウをからかい続けている俺にカイトが呆れた声で静止をかけた。

「タロー、遊ぶな」

「りょーかい」

キセルを投げてカイトの元へ戻るがモラウは殺気を放つのを止めようとはしない。

いい加減大人気ないマネは止めてほしい、そう零すと何故かカイトからアツパーを食らった。

理不尽なヤツめ。

しばらく待ち無事ナツクルからタコ殴りにされたクラピカを受け取り、トリタテンの礼を言う俺にナツクルは連絡先を交換しないと提案してきた。

どうやら除念に立会いたいようだ。

「実は除念されたことがねーんだ。一回見ておきたい」

「問題ないです」

ナツクルから連絡先の交換を提案され、思わず顔に笑みが広がる。どうやってモラウの目を盗むか思案していた所だし丁度いい。

ナツクルとついでにシュートとも連絡先を交換して、別れの挨拶を交わす。

クラピカはまだ放心しているのか、最後の最後まで彼の身を心配するナツクルに押されている。

「強く生きるんだぞ！ 困ったことがあったら電話かけてこい！！」

「は、はい」

「タロー、クラピカを頼んだぞ」

「任せて下さい。絶対に死なせませんから」

「オメエ、本当は優しい男なんだな」

また泣き出しそうなナツクルを慰めていると、モラウがにじり寄ってきた。

その顔は鬼のような形相から全ての感情をなくしたような無表情に変わっているが、殺気はいまだ溢れ続け怒りは収まっていない。

「……ナツクル、話がある」

「なんすか？」

「あ！ じゃあ俺たちはこれで」

これはヤバイ……そう思い慌ててランタンのマントを広げて逃亡した。

定宿に戻り魂が抜けているクラピカを空き部屋に放置して、紅茶と緑茶を入れた後ダイニングのソファに座る。

ナツクルの能力ははずれ役に立つ時が来るかもしれない。

除念した後もマメに連絡を取って繋がりを強化していく必要があるだろう。

モラウが邪魔するかもしれないが無視していれば問題ないし、態度はアレだが弟子が強く望めば強くは出れないタイプだ。

ナツクルに本性を見せる気はないので、俺の猫にこの先も騙されるに違いない。

そう思いつつ転移したご褒美のお菓子をランタンに与えていると、カイトが笑いながら話しかけてきた。

「楽しそうだな」

「うん、ナツクルさんっていい人だね」

「いいおもちゃの間違いだろ。ほどほどにな」

「カイトは俺のこと本当に良くわかってるね」

「何年一緒にいると思ってるんだ」

紅茶を含みながらカイトとの安らぎの時間を過ごし始めた途端、携帯が鳴り出した。

画面を見ると師匠の名前が表示されている。どうやらお仕置きが終了したみたいだ。

次から次へ……自分で手配したことだけど全く嫌になってくる。

だが、今日でクラピカの件は終わらせておきたい。

早速、ネオンに代わってもらって説得を開始する。
クラピカにネオンから首だと宣告して契約解除する旨の書類にサインしろと話す。

予想した通りギャーギャー騒いで渋り出した

『ヤダー！ 面倒だもん』

「そっかー、残念だな。欲しがってた競売品が手に入りそうだったのに」

『ホント?!』

「でも受けてくれないなら、断らないと」

『やる！ やるから!! えっとね、欲しいのは』

「それは後で聞くよ。とりあえず迎えに行くから用意してて」

準備が終わったらまた連絡が欲しい、そう師匠に頼んでから電話を切り顔を上げるとカイトがニヤニヤとこちらを見ている。

またその顔か。

何故か知らないが、俺がネオンと会話を交わすのが嬉しくてしょうがないようだ。

問い詰めても曖昧な答えしか返ってこないことは経験からわかっている。

諦めて殴りつけゴンとキルアへの連絡を頼む。

二人に話が終わったら連絡をすると約束したし現状を説明しないといけない。

甚だ不満だが、念が使えないので守ってもらう必要がある。

ゴンはカイトが大好きだしすぐに返事をくれるはずだ。

「今すぐやってよ。また忘れたら殴るからね」

「わかった」

携帯を操作し始めたカイトを横目で見ながら、ノートパソコンを立ち上げて契約解除の書類を作成する。

ハンターサイトでマフィア関連の情報を漁って、契約書類データを買い取り目を通すとその内容に目を剥いた。

契約書に記されているのは、報酬と保護対象であるネオンの名前と命の保障はないという項目のみ。

契約期間が全く記されていない……思わず頭を抑えて唸ってしまった。

こんな書類にサインするなんて信じられない。

ズキズキと痛む頭痛に耐えつつキーボードを打つ作業に戻る。

どうせ口頭で説明を受けた後、よく読みもせずにサインしたんだろう。

でも、前向きに考えれば契約を破棄した時の罰則事項も書かれていないし、簡単に辞めれると思っただけ。

千耳会を敵に回したくはない、慎重に書類を作成してクラピカの不利にならないよう作っていく。

「タロー」

「んー、ゴンとキルアは何て返事してきたの？」

「電話帳の開き方がわからん」

「……………貸して」

さらに増した頭痛を無視して携帯を奪い取る。

俺と組む前は操作できていたはずだ。

ということは俺と組んでからほぼ携帯さわってないな……………後で説明書を叩き付けなと。

明日になったらアスピリンを買いに行こう、そう考えながらゴンとキルアにメールを送信した

第58話(前書き)

修正完了

第58話

メールを返してきたゴンとキルアに後でそちらに転移すると再びメールを送り、カイトの携帯電話をパターンと閉じる。

俺が引つ張り出した説明書を熟読している頭を軽く叩いて出かけると話した。

「どこに行くんだ？」

「ネオンを迎えに行ってくるよ」

「こつちに連れてきて大丈夫なのか？」

「問題ないよ」

言外にクラピカと会わせる気かと問いかけるカイトに答えを返し、ランタンにお菓子を投げて呼び寄せる。

無用な心配だ。

短い付き合いだが、彼女が己の容姿に自信を持っているのはわかっている。

この四十年、数えきれない程の本を読んできた。

どんな物語でもネオンのような女は時間が過ぎゆくのを恐れ、老いて崩れていく容姿に絶望していた。

ネオンもきつと同じ恐怖を抱いていると思う。

そんな彼女が若さを保つ秘訣を捨てて帰るなんて考えられない。

「ネオンは必ず師匠を選ぶよ」

「タローを選ぶとは言わないのか」

「俺？　なんでさ、念を教えってるのは師匠だよ？」

「タローはネオンを……いや、なんでもない。忘れてくれ」

「意味わかんないよ？」

手を振って言葉を切ったカイトを不思議そうに眺めつつ、マントを巻きつける。

カイトはネオンが絡むと少しおかしい……もしかして好きになっただとか？

この予測が当たってたら趣味が悪いとしか言えないけど。

師匠の家に着いたがまだネオンの仕度は整ってなかった。

与えた部屋にいると伝えられたので扉の前まで行ってノックする。入室の許可を待つて扉を開けた途端、身体に電気が走って硬直した。

なんだこの部屋は………俺は悪夢でも見ているのか。

目前に広がる光景が女性の部屋のモノだとは思えない。

壁には人体模型が立てかけられウロコ状になった皮膚が天井から垂れ下がっている。

チェストの上にはミイラ化した手足が並び、どこのホラーハウスだと問い詰めた気分だ。

ネオンの趣味は理解しているが、こんな短期間にどうやって手に入れたのか。

「……ねえ、これどうしたの？」

「コレって？」

「この気色の悪いコレクションだよ」

「気色悪くないもん！ 綺麗だもん！ んとねー、師匠にお願いしたの」

思わず頭を押さえた。俺の脳はそのうち破裂するんじゃないかと本気で心配になる。

強請られたからってこんなモノを買い与えないでほしい。

そういえば……脳内から過去を掘り起こしてみると、師匠が俺のおねだりを断ったことはなかった。

日記帳しかり、ハンターになる為の修行しかり。

アレか、師匠はおねだりされると嫌と言えないタイプなのか。

「えーと、まあいいや。行くよ」

「待って！ まだ着る服が決まってないの」

「そのままでもいいよ」

「これパジャマだもん」

「誰もそんなの気にしないって」

「私が気にするの！」

「はあ？ わかった、ダイニングで待つてるね」

着替える女性の部屋に居座るわけにもいかないの、ダイニングへ戻ってカイトへ時間がかかると電話を入れる。

ネオンの部屋の話を話すとまたあの笑顔を浮かべている気配がした。

疲れる……そのままボタンを押して通話を切った。

ため息を吐いて床に寝転がり冷たい床に懐く。

そのままだらだらしていると師匠が優しく声を掛けてくれた。

「疲れているようですね」

「師匠のせいです」

「僕の？」

「ネオンにあんなモノを与えないで下さい！」

「あんな？ ああ、標本ですか」

確かに師匠の家だから俺がとやかく言えないが、アレはいくらなんでも酷い。

標本じゃないのもあった、この家に気色の悪い物をあんな大量に置かないで欲しい。

そう訴える俺に笑いながら構わないでしょうと答えた。

「タローは怖がりですからね」

「勘違いはやめて下さい。アレを目に入れたくないんです」

「少しくらい我慢しなさい。部屋の外には持ち出さないように言うておきますから」

「……ハイ」

アレが少しには全く見えないが、師匠には逆らえない。涙を飲んで諦め、もうネオンの部屋には一生入らないと誓った。

ネオンが部屋から出てきたのは、それから1時間も経ってからだ。った。

なんで服を着替えるだけでこんなにかかるんだ。着てきた服は確かに可愛いと思う。

柔らかく広がるピンクのワンピースに白いシヨールを羽織り、真っ赤なバツクを持っている。

だが、転移してクラピカに首を言い渡してもらっただけだ。そんなにめかし込む必要がどこにあるんだと言いたい。

だが、そう言うともた煩く騒ぎ立てるだろう……諦めてネオンに書類を手渡しサインをするよう促す。

「これでいい？」

「うん、ありがと。次は飛ぶから首を言い渡してね」

「ねえねえ、クルタ族なんでしょ？ 生の緋の目が見た い」

「本人に頼んでよ」

「楽しみー！」

生、生の緋の目と即興で歌い出したネオンの腕を掴んで定宿へ飛

ぶ。
見せてくれないだろうが、クラピカがネオンを見捨てるいい切欠になるはずだ。

ネオンは定宿でクラピカの姿を発見するといきなり首だと宣言し、そのまま緋の目を見せると強固にダダをこね始めた。

ああ、頭痛がしてきた。

確かに飛んだら伝えろといったけどさ……。
まだクラピカにはマフィアを辞めろと伝えていない。
それを伝えてからネオンに首だと伝えてもらおうと思っていたのだ。

まあ、ネオンだからしょうがない。
頭を振って頭痛を振り払うと視線を感じた。
その方向に目を向けると、クラピカが俺に助けを求めるような視線を送ってきている。

あのクラピカが俺にだ。

彼の混乱具合が簡単に想像できて笑い出しそうになった。
これはこれで中々楽しい光景だが放っておく訳にもいかない。
今日はまだ予定がある。
事態の收拾する為、ネオンに制止をかけて引き剥がす。

「本人に頼めって言ったじゃない！」

「話が終わってからにしてよ」

「むっ　　っ」

口を尖らせるネオンの肩を掴んでソファに押し付け無理やり座らた後、クラピカにネオンの向かい側へ座るよう手のひらで示して促した。

そっぽを向いて膨れたままのネオンの顔を無理やり正面へ向ける。

「まず、俺の用件からいいかな？」

「あ、ああ」

クラピカに千耳会の契約書と作成した契約解除の書類をテーブルに並べ、内容を詳しく説明していく。

契約書類には解除の際の罰則がないこと。

雇い主であるネオンが契約解除に同意しているので、書類にサインさえすれば問題なく離職できることを伝えた。

説明が終わり書類から顔を上げると説明中に精神を落ち着かせたのか、もう動揺は見られず真剣な表情で書類を覗き込んでいる。

「で、ここにサインして貰えば完了かな」

「……本当に問題はないのか？」

「だから雇い主のネオンを連れてきたんだ。君が会いたがったってのもあるけどね」

「サインをしよう。だが、先にボスと話をしたい」

「わかった。俺は口を出さない」

「メンドクサイ。首って伝えるだけって言ったじゃない」

ネオンは気に入らないのか不平を漏らしソファに足を乗せそこに顔を埋めた。

聞く気がないネオンの態度に、クラピカは瞳を揺らし何か戸惑うような仕草を見せた後、大きく息を吸い込んで口を開いた。

「……ボス、真面目に話をしませんか」

「……何よー？」

「ボスが攫われてからというもの、ボスのお父様は憔悴しきっています」

「パパが？ どうして？」

「ボスがこの男に攫われたからです」

思わず、占いを失ったからじゃないかと言いたくなった。

口から出そうになった言葉を気合で飲み込み、ジッと二人の話に聞き入る。

「今は帰らない。パパにもそう言うておいて」

クラピカは彼にとっては想像もしてなかったネオンの返答を聞いて固まった。

怒りを燃え上がらせ俺を指差した。

「この男が何をしたか忘れたんですか！」

「えーっと、何かしたっけ？」

「なっ！」

口を出さないと言ったものの、このままでは話が前に進みそうにない。

クラピカに視線を送ると苦々しい表情のままこちらを睨んでいる。ネオンが忘れているのは俺のせいじゃないのに……嘘偽り無く、誘拐後は何もしていない。

「黙ってるって言ったけどさ、少しだけ加わってもいい？」

頷いたのを確認した後、ネオンへ誘拐した時の状況について実際に起こった通り説明していく。

あの時の恐怖を思い出したのかわずかに身体が震えた。クラピカに続きを促して再び口を閉じる。

「思い出しましたか？」

「……うん。でもね、あの後は何もされてないよ？ 師匠も優しいかもん」

「師匠？」

「うん、なんっていうのを教わってるの」

「なっ……、貴様……！」

胸倉を掴みあげられ怒りが込められた拳が俺へと向かう。痛い思いをしたくはない。

すぐさま位置を入れ替えクラピカが座っていたソファへ移動する。

「話が進まないね」

「貴様のせいだろう！」

「彼女の為になると思ったんだ」

「ボスの為だと?! どうせ貴様もボスの能力を利用したいだけだ」

「ネオンに占いをさせたことはないよ」

「嘘をつくな!!」

「ホントだもん」

声が出た方を見ると、それまでの面倒そうな態度は消えうせ、真剣な表情になったネオンがいた。

膝に埋めた顔を上げるとクラピカを見つめて話し出す。

「タローはね。ホントに占いをしろって言ってないよ。占い止めるって言ったの」

「止める?」

「うん、初めて言われたよ。ちょっと嬉しかったな」

「そうか」

俺が占いをさせてないことは信じてくれたようだ。

だが、唾を飛ばす勢いで俺がいかにも非道な男かを話した後、父親の元へ連れて行く言い出した。

「えー！ 私、帰りたくない」

「戻るべきです。こんな男の元にいれば危険だ」

「絶対ヤダ」

「何故です！」

「帰りたくないのは師匠がいるからなの」

ネオンは誘拐されてからの生活を嬉しそうに語り出した。

内容は師匠のことばかり。

一緒にクッキーを焼いたり紅茶を飲んだこと、勉強が嫌で逃げ出した時のこと。

今までの生活とは全く違う毎日が新鮮で楽しいとそう話した。

「それでね、傍にいてくれるの」

「傍に？」

「パパは変な女のとこばっかいてめったに会えないんだ。だから、帰りたくないの」

「そうですか……」

クラピカはそれ以上何も言わずペンを握り書類へ名前を記入していく。

あれで納得できたのか……まあ、引き下がってくれるなら助かる。でもこの様子だと念を覚えても帰らないかもしれない。

「あ！ 緋の目見せてー」

「……嫌だ」

「え　　っ！！」

さっきのいい雰囲気はどこへやら、すっかりわがまま娘に戻ってしまった。

ため息をついて頭を抱えたクラピカの肩を叩き、ランタンのマントを広げる。

更に騒ぎ始めたネオンに迎えに来るからと言い残して轉移した。

ゴンたちの元に着くとすぐにクラピカの現状を伝える。

ゴンは素直に頷いてくれた。

元々復讐に賛成ではなかったし、蜘蛛がこの街にいる期間はそう長くないと俺が教えたのも効いたようだ。

ゴンは黙り込むクラピカへニッコリ笑いかけて、一緒に旅をしようとする。

「クラピカが一緒ならきつと楽しいよ」

「ゴン、私は……」

「カイトが言ってた、俺たちはまだ弱いんだって。一緒に強くなる
っよ」

「そうだが、強くなってから旅団をぶっ飛ばせばいい」

「キルア……わかった、一緒に強くなる」

クラピカの返答を聞いて隣に立つカイトから力が抜けた。

説得してもまだ心配していたようだ。

友を横目で見ながら心の中で懇願する。

他人に優しくする余裕があるなら自分自身をもう少し大
事にしてほしい。

見えていて少しハラハラする。

そういえば戦うことより自然と触れ合う方が好きだったな……。

気にかける他人がこれ以上増えないように、全て片付いたらカイトを連れて奥地に引っ込もうか。

そう考えているとキルアが思いがけない台詞を吐いた。

「ついでに、コイツもぶん殴ればいいじゃん」

「はあ？　なんで俺も入るのさ」

「ぜってークラピカをイジメただろ」

「俺がそんなことするはずないじゃない」

目を見開いて心外だと否定するとクラピカとキルアが叫んだ。

「「嘘だー!!」」

「……タロー、どうしてそんなことしたの？」

汚れた心にゴンの無垢な瞳がクリティカルヒットした。
思わず胸を押さえて蹲る……その目は反則だ。

ゴンからの更なる追求が飛び、やがて床へと沈んだ俺にカイトが
口を開く。

「タローの負けだな。殴らせてやれ」

「うっ……」

どうやらクラピカに殴られることが決定したらしい。
理不尽だ。

誰の為にここまで動いてやったと思ってるんだ。

全く、俺ばかり悪者にして……カイトは少しも悪くないと思
っているのか。

まあ、キルアと違って付き合う必要はないだろう。逃げ続ければ
問題ない。

身を起こしながら咳払いをして気を取り直し、クラピカに蜘蛛が
街を去ったらゴンに連絡を入れると話した。

「ヒソカの件もあるしね。またすぐ連絡するよ」

「ゴン、クラピカがバカな真似をしたらぶっ飛ばすんだぞ」

「わかった!」

「じゃー、帰るね。バイバイ」

「またな」

手を振って定宿にUターンした後ネオンを拾い師匠の家に転移する。

今日は転移にオーラを使いすぎた……。

揺れる身体に鞭を打ち自室に戻り蜘蛛専用パソコンを立ち上げる。

休息を取りたいがまだやることは終わってない。

ネオンが作ったりリストを見ながら、取捨選択して買取希望のメールを送信する。

今頃蜘蛛たちは仕事だろう。

全く平和そうで羨ましい限りだ。

ヨークシンでいくら稼ぎ出すのか……少し分けてほしいくらいだ。

蜘蛛専用パソコンを落として次はメインに電源を入れると、カイトが夜食を持って入ってきた。

美味しそうなオムライスにつられてお腹がぐーっという音を鳴らす。

「助かるよー」

「お疲れ。今日は大活躍だったな」

「そう言ってくれるのはカイトだけだよ」

オムライスを頬張りながらキーボードとマウスを操作する。

またもや後ろから覗いてくるが気にしない。カイトに隠すことなど何も無い。

今調べてるのはヒソカの所在。

隠れ家をいくつか探し出したのだがそのどこにも帰っていないよ
うだ。

もしかしたらあのメイクを落として逃げているのかもしれない。
少し厄介だが問題はないだろう。

彼が殺人衝動を抑えられるはずがない。

今は我慢できているようだが、いずれ耐え切れず通り魔を繰り返
すはずだ。

今日は九月三日だから十日までにはなんとか見つけ出し、ゴンに
殴らせた後殺したい。

「タロー」

「わかってる、俺たちで殺したいんでしょ？」

「タロー、頼む。どうしてもアイツだけはこの手で殺したいんだ」

「んー……難しいね」

「なんとかならないのか」

難しい理由は蜘蛛だ。

アイツらもカイトと同じように自分たちの手で殺したいと思っ
ている。

俺としては誰が殺してもいいけど蜘蛛に恨まれるのだけは避け
たい。

俺たちだけでやるならクロロと話をつける必要があると語り、問
題を先送りした。

「今は連絡が取れないんだよ」

「結局明日か」

「そうなるね」

「なら今日は寝るしかないな」

「だね、おやすみ」

カイトを見送った後再び画面に目を移して情報を漁っていく。

あの様子だとクロロがダメだと判断しても、無茶を言いそうだ。

蜘蛛を敵に回すのか……気が進まない。

またドツボに嵌りそうな思考を振り払って画面に意識を集中した。

第59話 修正完了(前書き)

大幅に書き直しました。

第59話 修正完了

「……おはようございます」

「おはよう、紅茶を入れましょうか？」

「顔色が悪いな。朝食は食べれるか？」

「食べる。師匠、コーヒーをお願いします」

ソファに座ってボーっと宙を見つめる。

あの後朝方まで情報収集を続けたせいで、シャワーを浴びたというのにまだ頭がはつきりしない。

目前で手のひらがひらひらと左右に揺れた。

ハツとして見渡すと、いつの間にかテーブルの上に朝食とコーヒーが並び湯気を立てていた。

「起きてるか？」

「あー、うん。起きた」

頬を軽く叩き意識をはつきりさせて食べ始める。

今日の朝食はイギリス風、スクランブルエッグをつつきながら苦いコーヒーを流し込む。

二杯目のコーヒーを飲み始めた頃、ジャージを着たネオンが入ってきた。

顔は赤く上気して汗が額から流れ落ちている、どうやら地下にある修行場で走りこんできたらしい。

意外だ……念修行はとまかく体力作りまでやるとは思わなかった。そう疑問をぶつけると更に予想外な返答が返ってきた。

「理想のスタイルになりたいそうですよ」

「理想？」

「この人みたいになりたいの」

ネオンが差し出したのはハンター世界で有名なファッション専門誌。

表紙にはグラマラスな美女が怪しいポーズをとる様子が印刷されている。

もしかしてこの人のことか？

表紙からネオンへ視線を移し頭の前からつま先までじっくり眺めた。

無理だろ……あまりにもかけ離れすぎている。

ため息をついてネオンへ感想を話す。

「幻想は捨てた方がいいと思うよ」

「そんなことないもん！」

「えー、だってさ……」

語尾を濁したが目はネオンの胸元に注目していく、そこには表紙の美女より大分ささやかな膨らみがあった。

視線で俺の言いたいことがわかったのか、プクッと頬を膨らませ俺の頭を叩き部屋へと走っていく。

「タローのバカ!！」

走り去るネオンを見送り顔を正面に戻すと、師匠とカイトが呆れた表情でこちらを見ていた。

あー、また何かやっちゃったのかな。

「デリカシーを持ってと言っただろ」

「ごめん。どこが不味かったの？」

「女性の身体的特徴を指摘してはいけません」

「ネオンから言い出したのに」

「話題を変えればいいんですよ」

「はあ……」

身体的特徴ねえ……なんとなくわかったが、どう努力してもネオンがあノスタイルになれるとは到底思えない。タイプが違うんだから、可愛い系のモデルを目標に据えればいいのに。

そう思うが言えない、これも身体的特徴だ。

パソコンを開いて今日もヒソカ関連の情報収集を続ける。

カイトとは今日は別行動だ、コミュニティの動向を探ってもらう為に街へ出てもらった。

多少心配ではあるが、ゾルディックはもう襲ってこないし、マフイアはすでに陰獣という戦闘力を失っている。

問題ないだろう。

それに何かあれば携帯ですぐ連絡するようにと伝えてある。

どれくらい時間がたったのか……薫り高い匂いが鼻を擽るのを感じた。

画面から顔を上げると紅茶を盆に載せたネオンが立っている。

師匠に持つていくように言われたのだろうか？

疑問に思いながら置かれた紅茶に口をつけると蒸らす時間が長すぎたのか、舌を滑る味は匂いに反して苦味が強い。

師匠はプロ並の腕を持っている、ネオンだろう。

「師匠に教わったの？」

「うん、美味しいですよ」

ぶつちやけ香りはいいが美味しくない。

だがそんなことを言えば朝の二の舞だろう、俺も少しは学習した。

要は女性には思ったことと反対の台詞を伝えればいいのだ。

「美味しいよ。ありがとう」

「ホント?! 私って天才かも」

「もしかして始めて入れたの？」

「ソーだよ」

ネオンの言葉を聞いて目を見開いた。

手順さえ守れば誰でもそこそこ美味しく入れられるが、彼女は基本的にアバウトで細かいことに気は回らない。

この紅茶もきつと目分量で適当に作ったんだろう。
たった二回でここまで出来るなら才能があるのかもしれない。
ウキウキと師匠へ報告に行く彼女にもう一度お礼を言ってから見
送った。

ふとカップに目をやると表面に何かの花びらが浮いている。

綺麗だ。

口角を上げ首を回してから意識を画面に戻す。

そのまま画面に集中し電子の海へ沈んでいった。

夕方になりカイトが戻ると集めた情報を交換しまとめていく。

蜘蛛暗殺をゾルディックに依頼してないのか、物語と違い十老頭
は未だ健在のようだ。

コミュニティ深部にも潜入して十老頭周辺を調べたので確からし
い。

気にはなるが特に問題はないと判断して、こちらの情報を教える。
ヒソカは相変わらず痕跡すら掴めず収穫はゼロだった、そう伝え
ると眉を寄せて顔をしかめた。

「情報サイトだけで見つけるのは無理かもしれないね」

「どつするんだ？」

「地道に足で探すか、奥の手を使うかだね」

「足はわかるが奥の手は何だ？」

「んー、何ていうかギャンブルみたいな方法かな」

「意味がわからんぞ」

「成功するか五分五分でさ」

「えらく回りくどいな」

はつきりしない態度にカイトの機嫌が急降下したのを感じ、慌てて奥の手を説明していく。

ヒソカはハンター試験でゴンを殴った際、俺が与えていた触媒かほちやらんだんのキーホルダーを奪っている。

元仲間たちから聞いてなければ、今も持っているかもしれない。つまり方法とはヒソカの元ヘランタンで転移すること。

だが、転移場所は触媒であるキーホルダーの真上に落ちるので、高確率でヒソカから攻撃を受ける。

飛んだ瞬間殺されてはシャレにならないので、出来れば使いたくないのだ、

「なるほど……厄介だな」

「隠れ家のない都市を、ピクシーの地図で探すのが一番安全だと思う」

「時間がかかりそうだ」

「一ヶ月以上は必要だろうね」

「話にならない」

「俺もそう思う。次の予定もあるしね」

「次の予定か……」

俺たちはあまり時間がない。

何故なら最大の目標であるキメラアント討伐準備に、半年はかかるの見積もっているからだ。

ミテネ連邦NGL自治国はその創設理念に基づき、情報の全てが紙で記されネットで調べられない。

中心部に進入することは難しくはないが、情報を調べ出すのに膨大な時間がかかるだろう。

カイトは俺が話したことを思い出したのか顎に手をあてて考え込んでしまった。

これはチャンスかもしれない……丸め込んで二人で殺るのを諦めてもらおう。

二人でも殺せないこともないがもっと確実な方法を取りたい。そう考え説得を開始する。

「奥の手を使うなら準備がいるし、俺たちで殺すのは無理があると思っ」

「だが……」

「わかってる。だから代わりに殺してもらおうよ」

「蜘蛛か」

「正解。それにこの方法なら仕事を中断してホームに帰ると思うんだ」

「仮宿ではまた逃げられる可能性があるか」

「その通り。今回は諦めてよ」

「……わかった。俺が引く」

「決まりだね」

勝ったと心の中でガッツポーズを決め詳細な打ち合わせに入る。

俺が薄ドッキリテクスチャーつぺらな嘘の秘密をクロロに教えたせいで、ヒソカが制裁を受けるハメになった。

まず、その事実をヒソカが知ってるかどうかをシャルに確認をする必要がある。

知らないと確信できたら転移してヒソカの元へ飛ぶ。

何とか話し合いの場を持ち、交渉してゴンとのタイマンを受けてもらいたい。

餌にはクロロかカイトのタイマンを提示するつもりだ、約束を守る気は全くないので気前よくいく。

正直交渉を成功させる自信はないがやってみるしかない。

「色々用意しないといけないし、準備に最低でも五日くらいかかるね」

「俺は何をすればいい？」

「道具類の確認や手入れと交渉の付き添いかな」

「定宿にあるやつか？」

「うん、すぐ送るからお願い」

「リストを作ってくれ」

頷いてすぐにペンを滑らせ、書き上げたリストを渡して定宿へ送る。

しばらく別行動になるがお互い安全な場所なので問題ないだろう。俺は携帯を取り出してシャルへとメールを送り、得意先の職人へ連絡を入れる。

在庫の確認と以前追加で頼んでいた服の催促をする為だ。

相手はヒソカだ、最初の転移で殺されないよう出来る限りの対策をとりたい。

職人からはすぐに返答がきた、在庫はないが頼んでいた服はまもなく仕上がるらしい。

仕上がり次第速達で送ってもらうよう頼んだ。ギリギリ間に合うだろう。

一段落がつくとお腹が空いてきた、冷蔵庫を漁りにキッチンへ向かうとネオンがコンロの前に立っていた。

紅茶の次は料理か？ そう思って覗き込んでみると一心不乱に鍋をかき混ぜている。

「何作ってるの？」

「カレーだよー」

鍋の中を見るととろみがついた液体入っており色も茶色っぽい、なるほど確かにカレーだ。

普通に見えるのに何故か言いようもない不安を感じる。

頭を捻り辺りを見回すとすぐその理由に気づいた。

そうか！ 師匠が傍にいないんだ。
紅茶は師匠から教わったと言っていた……もしかして料理は実家でやっていたのか？

「あー、ネオン」

「なーにー？」

「料理やったことあるの？」

「ううん、初めて！」

「そっ……そうなんだ」

「すぐ出来るからあっちで待ってて」

ネオンの台詞が耳に入った途端、脳天からつま先へ電気が走り硬直した。

俺が食うことは決定なのか！！

その後どうやってテーブルについたか覚えてない。

気がつくとかレーが置かれ湯気を立てていた……何このデジャブ。

「ネ、ネオン……まだお腹が空いてないからさ」

「一口でいいから食べてみてよ。絶対美味しいもん」

顔から血の気が引き青くなるのが自分でもわかった。

救いを求めるように視線を彷徨わせた先にあっただのは師匠の姿。

「師匠！ あの……」

「諦めなさい」

青い顔をした俺に死刑宣告が下った。

カイトは定宿で助けは望めない……唾を飲み込み覚悟を決めてカレーを凝視する。

震える手でスプーンを握り深呼吸をしてカレーを口へ運ぶ。

「
ッ！！」

筆舌に尽くし難い味が口内全体に広がっていく。

不味いなんてレベルじゃない。

えずく口元を押さえ吐き出さないように必死に耐える。

両目から生理的な涙が溢れ頬を伝っていく。

ネオンが作ったのはカレーのはずだ……なのに何でジャリジャリしてるんだ？！

恐る恐るルーをかき分けると出てきたのは生まれたままの魚。

この感触はうるこを処理しないで投入していたのが原因か。

少しほぐしてみると赤い半生の身が現れた……煮込みが足りなかったようだ。

「美味しい？」

「んなわけ……」

「タロー」

不味いとネオンにぶつけようとした途端、師匠が制止をかけた。驚愕して師匠を見ると俺に冷やかな視線を送っている。

まさか！ 美味しいと言えと？！

視線で真意を問うとゆっくりと頷いた……マジですか。
こればかりは従いたくない、美味しいと一言でも言えばまた作るに
違いない。

そして実験台は俺だろう。

無理だと視線で懇願するが師匠は表情を崩さない。
終わった。

唇を震わせネオンへ彼女が望んでいる言葉を贈る。

「お、オ……オイシイヨ」

「ホント?!」

「……ウン」

「やっぱり私って天才だわ」

両手を握り締め感動しているネオンが悪魔に見えた。

確信に近い予言が頭をよぎる……ネオンに一刻も早く帰ってもら
わないと命が風前の灯だ。

頭を巡らせ回避策を模索する俺へ更なる追撃が襲った。

「これから毎日作ってあげるね！」

ヒソカに殺られる前にネオンに毒殺される。

その日の深夜、師匠とネオンの目を盗み定宿へ逃走するタローの
姿があったとかなんとか。

第60話(前書き)

58話と59話を大幅に書き換えました。
よければ目を通していただけるとありがたいです。

第60話

機械は便利だが信用はできない。

防御策を取っていても、腕のいい人間がやる気になれば簡単に所有者を裏切る。

正直、蜘蛛と直接会うのは避けたいが、今回の内容を絶対に漏らすわけにはいかない。

昨日、シャルへのメールには【厄介を持ち込みたい】とだけ書いて送信した。

これでクロロと話したいという意味は伝わるはずだ。

深夜のうちに届いた蜘蛛からの返答を読んでから、今度はキルアへメールを送る。

作戦の要であるイルミとの橋渡しを頼むためだ。

作戦の簡単な内容は、かほちゃらんたん触媒を持ったヒソカの元へ飛び交渉してゴーンに殴らせる。

そして直後に蜘蛛たちの元へ運び殺してもらおうというもの。

最初の条件である触媒を持っていなければ頓挫してしまうが、今からそれを言っていては始まらない。

作戦は最初から最後まで一日以内に行う。

ヒソカは気まぐれだ……交渉した時はその気でも次の日にはやる気がなくなるかもしれない。

頓挫する可能性があっても、上手くいった場合に備えて準備を整えていなければならぬ。

交渉の餌はカイトかクロロとのタイマン……ヒソカは必ず事前に餌を見せろと要求してくるだろう。

カイトの場合は問題ないがクロロの場合は多少細工が必要になる。
神の左手悪魔の右手でクロロのコピーを作りだしそれを使うかとも考えたが、死体なのがネックだ。

クロロに何故コルトピの能力を知っているか突っ込まれても困るしね。

そこでイルミを雇い能力でカイトをクロロへ変えてもらう。

服はクロロから実際に着用している物を借りれば短時間は騙せるだろう。

物語に能力の詳細は書いてなかったが描写は多かった。

ヒソカに化けて身代わりをしてたし声や体格もたぶんいけるんじゃないかなと思う。

オーラまでは真似出来ないがそこは考えてある。

送信完了画面を確認して顔を上げると丁度カイトが自室から出てきた。

「いつの間にかここに来たんだ？」

「あー……昨日の夜だよ」

「しばらく向こうにいるかと思ってた。何かあったのか？」

「まあ、色々あってね」

「答えになってないぞ」

「正直思い出したいくないんだ」

悪魔ネオンに毒殺されかけたなんて……。

あの味を思い浮かべただけで身体が震える、あれは人類最終兵器

クラスだ。

腕を擦って鳥肌を治め、昼になったら蜘蛛と会うので準備してほしいと伝える。

「場所は？」

「中心街のホテルだよ。髪と服を替えておいて」

「またか……」

「今日はマフィアに絡まれたくないからね」

肩を落としたカイトが自室へ消えたのを確認して俺も準備をすませに行く。

作戦内容の打ち合わせをした後ホテルへ向かった。

約束の二時間前に予定通り到着し、ピクシーを呼び出して念の為ホテル内部や周囲を確認する。

今回はロビーで待つのではなくクロロたちが現われてから部屋へ向かう。

メールに今回は三名で行くとわざわざ書いてあった。

クロロがシャル以外に誰を連れてくるのか確かめたい……まあ、だいたい予想はついてるんだけど。

「誰だと思うんだ？」

「パクノダじゃないかなー……」

「厄介だな」

「読まれたって問題ないけど気分的には複雑だね」

依頼程度なら使わないだろうが、今回の場合は必ず読ませろと要求するはずだ。

蜘蛛の安全がかかってるしね。

手が乗っている間、余計な質問をされないか警戒し続けられないといけない。

今から気が重い。

一時間程待つとロビーに見知った影が映った。

人数は宣言通り三人、タイトなスーツを身につけた女性がクロロを守るように寄り添っている。

予想的中……エレベーターに乗り込む蜘蛛を見ながら心の中ではやいた。

嫌な予想ほどよく当たる。

目蓋を閉じ脳内の情報を整理してから部屋へと向かう。

入口の自動ドアを潜ると同時にゼリーののような感触を感じた。

誰かが円を張っているようだ……クロロかな？

全身を纏いつくオーラに精神が苛立つ、他人の範囲に入るの是不快だ。

足早に非常階段を登り目当てのドアを叩く。

「久しぶり」

「こんにちはわ、シャル」

「元気そうだな」

「まーね。入ってよ」

ボーイの真似をしているのかシャルは腰を優雅に曲げ奥へと腕を伸ばした。

部屋はスタンダードなダブル、ベットのすぐ傍にテーブルとイスが置かれ五人で使うには少々狭い。

二つしかないイスにクロロが座り背後にパクノダ、シャルはベツトだ。

残ったイスに腰を落とすと単刀直入にクロロが切り出した。

「今回は面白いのか？」

「面白いんじゃないかな」

「詳しく話せ」

心臓が脈打つ音を聞きながらテーブルに肘を乗せて手を組み視線を合わせる。

「ヒソカをハメるんだ。そのお誘いをしたくてさ」

俺の台詞にクロロの眉が上がった……最初のハードルは突破できたらしい。

顎で続きを促され詳しい作戦内容を説明していく。

興味なさげだったパクノダの表情が真剣な物へと変わり、シャルも身を乗り出してくる。

嘘偽りは自分の首を絞める。

全てを語り終わるとクロロは瞳を閉じて考え込んだ。

成功するかどうかシミュレーションしているんだろう。

組んだ手に力が入りじんわりと汗が滲んだ。閻魔の裁判を受けている気分がする

ぶっちゃけ作戦に穴は多い。

だが失敗したとしても蜘蛛が被る不利益は仕事の件だけのはず。やがて目蓋が上がり唇が動き出した。

「上手くいくと思っているのか？」

「上手くいかせる」

「前提条件が多すぎる」

「そこはなんとかするよ」

「なんとかする……か」

もし触媒を持っていなくても居場所を調べる方法は幾つかあるが、どれも時間がかかる。

それにここでクロロが拒否すれば、殺害は諦めなければならない。

「失敗したとしても俺が死ぬだけだよ」

「確かにな。最終地点はどこにするんだ」

「それはまかせせるよ。触媒さえ置いてくれればいい」

「……条件がある」

クロロが後ろを振り向き、パクノダを指し示した。やっぱりそうなりますか。

肩を竦めて姿勢を正すと頭にたおやかな手が乗せられた。

「マナーは守ってよ」

「俺たちは何時でも紳士的だ」

どこの世界にマフィア相手に暴れまわる紳士がいるんだ。

そう言いたいのがグツと堪えカイトへ視線を送る……パクノダが余計な質問をしないよう見張ってもらおう。

カイトとパクノダが睨み合う。

「パクノダさん、主語はちゃんとつけてね」

作戦内容だけ聞かれてはたまらない。

「怯えているのかしら」

「俺は怖がりなんだよ」

「そんな風には見えないわ」

「猫を被ってるだけだよ。内心はガクガク震えてる」

「……パク、ヒソカをハメる方法を聞け」

パクノダがクロロの言葉をそのまま繰り返かえして記憶を探っていく。

質問をしてすぐにパクノダが説明のままだと振り返った。

「蜘蛛に敵対する気はないか？」

「どうなの?」

「ないよ、ってか他にも聞くわけ?」

「大事な確認事項だ」

「わかったよ。余計な質問だと思ったら拒否するからね」

「今はないようね」

「今後もないよ」

ニッコリ笑いかけるとパクノダの顔が嫌そうに歪んだ。その反応は傷つくんですけど。

まるで芋虫でもみるような瞳に気分が落ち込んだ瞬間、クロクの口から思いがけない質問が飛び出した。

「流星街を更地にする方法を教えろ」

「なっ!!」

驚愕してイスから跳ね退き、空いた空間にカイトの拳がめり込む。腹を押さえて吹っ飛んだパクノダをシャルが慌てて受け止めた。

クソッ! やられた。

読まれたかどうかはわからない。

物語では頭に触れて質問していたがそう見せかけてた可能性がある。

読まれてなくても、更地にする方法があるのはバレただろう。
クラピカに教えた方法が知られるとホームを移動するかもしれない。
い。

「どこが紳士的だよ！ 騙しうちじゃないか」

「報酬の先払いだ」

「なら誘いに乗るんだね！？」

「ああ、今回は当たりのようだしな」

全身から溢れ出す殺気を止めることができない。

クロロが憎いんじゃない、わかっていたのに油断した自分が憎い。
握りしめた手のひらに爪が食い込みわずかな血の匂いがした。

「……………帰る。準備が整ったらメール頂戴」

「いいだろう。三日以内に送る」

決行時期などを軽く打ち合わせとつとマントを広げて逃げる体勢に入る。

毎回、毎回どうしてこうなるんだ！

イライラしてカイトの腕を掴み満面の笑みを浮かべるクロロを睨みつける。

「次回もぜひ誘ってくれ」

「もうないよー！」

捨て台詞を吐き定宿へと帰還した。

何時もの景色が目に入ると、床へのた打ち回りハメられた悔しさを発散する。

できることなら時間を巻き戻してやり直したい。

「いい加減落ち着け」

「……………」

木目を数え精神を沈めてからソファへ這い上がる。
過ぎたことは忘れよう。うん、それしかない。
無理やり納得させて乾いた喉を潤すためにキッチンへと向かう。
冷蔵庫を開けた途端ポケットが震えた。

キルアか。

通話ボタンを押して携帯を耳にあてる。

「もしもし?」

『アンタ、用件だけ書いて送んなよ』

「ごめんごめん、大したことじゃないんだ。イルミさんを紹介してほしくてさ」

『誰を殺すんだ?』

依頼と殺人をイコールで結ばないでほしい……………ゾルディックだからしょうがないけど。

物語の中でイルミは死んだ十老頭を操ったり、ヒソカの身代わりをしたりと殺人以外の依頼も受けていた。

依頼を入れるのは初めてだが、キルアの口添えがあれば受けられるだろう。

何なら修行中のビデオを差し出して交渉すればいい。

殺人ではなく手伝ってほしいことがあるだけだとキルアに伝える。

『……すっげー嫌なんだけど』

「そこを何とかお願い」

『しゃーねーな。言っとく』

「さすが頼りになるね、ありがとう」

キルアから俺の番号をイルミに伝えてくれるようだ。

多少待つことになるが問題ない。

携帯を閉じ再びポケットにしまってジューズを取り出すとカイトが何かを俺に放り投げた。

反射的に受け取り目を落としてみるとそこには意外な物が。

「何これ」

「俺の携帯だ」

「それはわかるけど……」

「リーシャンさんからだ」

師匠が電話をかけてくるなんて滅多にない。

何の用だろう？

不思議に思っただけ保留を解除し耳にあてる。

「もしもし？」

『タロー、携帯が繋がりませんよ』

「すみません、通話中だったんですよ。それより何かあったんですか？」

『夕飯ができたそうです』

思わず通話を切りカイトへ投げ飛ばした。

身体中から冷汗が流れ落ちて足元が揺れ立つことすらおぼつかない。

明るいう着信音が聞こえてくる。

どうやって逃げようか……頭を巡らせるが思いつかない。

そう考えている間に会話が終わったのか、カイトがこちらへと近づいてきた。

「無理！ 絶対いやだ！！」

「たかが料理だろう？ それくらい食ってやれ」

「いやーだー」

やがて抵抗もむなしく、引きずられネオンの元へと召喚される」ととなった。

第61話

「ほっんとくに食うんだな!？」

「ああ、わかったって」

カイトによってネオンに差し出された俺は当然のごとく夕食を拒否した。

二人も食べるなら食べると主張するとカイトや師匠は簡単に頷いた。

「おまたせー！ 今日ポトフを作ってみたのー」

ネオンが特製ポトフを手ずからテーブルへと並べていく。

ポトフ……また煮込み系か。

野菜と肉類をコトコト煮込むだけの普通なら失敗しようがない料理だが、ネオンだしどこに罠があるかわからない。

目前に置かれた白い深皿を見つめる。

予想通り記憶にあるポトフとは全く違う。

スープの色は本来透明のはずだが味噌汁のように茶色く濁っている。

見た目からして口に入れたくない。

スプーンを手に持ちゆっくりと濁ったスープをかき混ぜ、変な物体がないか調べていく。

煮込みすぎて蕩けたのか野菜は一欠けらも発見できず、肉の代わりにアサリに似た貝が混入されていた。

色々突っ込み所が満載だ。

「何だ、食べれるじゃないか。あんなに嫌がるからどれ程ヒドイのかと思っていたが」

「でしょー？ タローって大げさすぎ」

「全くですね。ネオンの努力を認めるべきです」

俺より先にポトフを味わった二人から一斉に攻められた。理不尽すぎる。

っていうかネオン……食べられるって褒め言葉じゃないぞ。不味いが我慢できるって意味だから。

そう突っ込みたいが師匠やカイトが言わせないだろう。

そして二人が食べている以上俺も食べないわけにはいかない。

ジンさんの影響でカイトのハードルは恐ろしく低い、スラム育ちでもあるしこの程度なら気にならないのかもしれない。

でもまあ、昨日のカレーよりはかなりマシなようだ。

あれは毒薬だったが今回は腹下しくらいで済むだろう。

こっそりランタンを呼び出し膝の上に待機させ、胃薬を予め水で流し込む。

たかが夕食に何でここまで準備しなけりゃなんのか……。頭を振って諦めスプーンを握って覚悟を決める。

「ッ！」

口に入れた瞬間鳥肌が立ったが、嘔吐感がこみ上げてくるレベルではない

バケツに吐き出したいと思うけど。

ザラザラとした粘着質なスープで、味は何と言うか梅干のように

酸っぱい。

酸っぱい原因はわからないがざらざらしたのは恐らく砂だろう。アサリもどきの砂抜きを行わずそのまま投入したに違いない。肝心のアサリもどきは火を通しすぎてゴムへ変化している。

確かに食べれなくはないが、食べたくはない。

スプーンを置いて顔を上げるとネオンが期待込めた瞳でこちらを見つめている。

……仕方ないか。

「昨日のカレーよりは美味しいよ」

「ホント?! このまま練習したら美食ハンターになれる?」

「まあ、努力すればいけるんじゃない」

多少は進歩したと思うし、夢を見るのは個人の自由だ。

ネオンが美食ハンターになったらメンチさん辺りに殺されるかもしれないけど。

「ネオンこれ味見たの?」

「うん! もちろんしてるよ」

思わずひっくり返りそうになった。

本気で美味しい料理を作ったと思っっているようだ。

そうか……味覚が常人よりかなり独創的なんだな。

「ねえ、コレのどこが美味しいと思うの?」

「んーとね、コリコリしててねっとりなと」

「コリコリ？ …… ネオン、書庫にある料理の本を読みながら作ってよ」

「えー、メンドクサイ。美味しいからいいじゃない」

「あのね、これは食べられるだけでおいしいとは言え……」

「「タロー！！」」

真実を伝えて目を覚ましてやりたかったのに、師匠とカイトが制止をかけてきた。

正気とは思えないが、ネオンの好きにさせたいようだ。

その証拠に二人の皿は綺麗になっていて、目線で完食しろと迫ってくる。

カンベンして下さい。

正直、一口でもかなりがんばったと思う。これ以上は無理だ。

「あれ？ ネオン背中に何かついてるよ」

「え??？」

ネオンが振り返っている隙に、ランタンの口へ残ったポトフを全て流し込む。

「しびやー」

「おやつあげるから我慢して」

「マズイ

「!?!」

絶叫を上げながらジタバタ暴れるランタンをお菓子で釣ってなだめる。

師匠とカイトは呆れているがそんなの無視だ。

こんなの全部食べたら俺の味覚も破壊される。

口直しに甘めに入れた紅茶を飲んでみるとポケットから振動が伝ってきた。

画面を見るとそこには知らない番号が表示されている。

恐らくイルミだろう。

立ち上がって自室に戻りドアを閉めた後通話ボタンを押す。

「こんばんわ」

『依頼したといってキルから聞いたんだけど、どういう関係なわけ？』

第一声がソレですか……本当に過保護なんですね。

心の中だけで突っ込みつつイルミにキルアと出会った経緯を語っていく。

思い出しながら答える俺に、抑揚のない声で鋭い質問を飛ばしてくる。

修行の内容や目的を質問するのは当たり前だと思うが、毎日の食事やおやつの種類やカロリーなんか聞かないでほしい。

覚えてないと正直に言うとかバカにしたように鼻で笑った。

『君って使えないね』

「はあ……スイマセン」

『今の内容をレポートにして送ってよ。それで依頼って何？』

「あー……それはですね」

勢いに押されつつもカイトをクロ口に変えてほしいと話す。

能力についてはハンター試験を見て推測したと説明した。

案の定詳細を見せたくないためか、顔以外は無理だと言ってきた。

『残念ながら不可能だ』

「顔を変化させる為には骨格や筋肉を変える必要がありますよね？

なら体格や声も可能だと思っただんですが」

『……推測にすぎない』

人前で堂々とバキボキ変身したんだ……今更言い逃れはやめてほしい。

「お得意先のことなら気にする必要はありません。何ならクロ口に直接確かめて頂いてかまいませんよ」

イルミには作戦内容について詳しく話すつもりはない。

ヒソカを敵に回したくないようだしヒソカもクロ口と同じ得意先だろう。

『知り合いだったんだ？』

俺の発言に驚いたのか間を空けて問いただしてきた。

話し方に抑揚というモノがないので、声で感情を推し量ることは

できない。

「ええ、そうです。貴方に依頼することは伝えてありますので問題ありません」

『なら請けてもいい。何時頃やればいいわけ?』

後四日程で準備が整う。そう伝えて依頼の詳細を詰めていく。依頼金は二億……天下のゾルディックだ、安い方だと思う。四日後までならヨークシンに滞在できるらしいので、それまでの滞在費を支払うことや前金の一億」を通話後振り込むことなどを約束した。

依頼金の中に経費は含まれていないらしい。

『じゃ、当日電話してよ』

「あ、待って下さい」

依頼の話が終わると即通話を切ろうとするイルミに待ったをかける。

『何?』

「レポートの送信先を教えてください」

俺の質問に電話口の向こうで少し考えるそぶりをみせた後、名刺を依頼時に渡すと答えた。

イルミの名刺か……かなりありがたいな。

『振込みよろしく』

「はい、必ず」

通話が切れたのを確認するとすぐにパソコンを操作して、教えられた口座に前金を振り込む。

イルミがヒソカにこの件を漏らすことはないはずだ。

敵に回したくないとはいえ仕事内容について話すとは思えない。

電源を落としてダイニングに戻ると、ネオンがソファに寝転がりながら念修行中だった。

目をつぶりリラックスした状態で師匠のオーラに全身を包まれて
いる。

纏てんの修行かな？ 昔懐かしい方法だ。

「もう精孔せいこうが開いたんですか。早いですね」

「ネオンは開きかけでしたからね。纏てんの流れも綺麗ですから伸びる
うです」

「そうなんですか」

念を知らないのに発を使えてたから予想はしてたけど……やつぱり
チートだったんだね。

凝ぎやうで確かめてみると昔の俺のような凹凸感ぼつこは全くなく、纏てんの滑ら
かさだけなら初期のゴンやキルアよりも上だ。

若さに対する執着もあるんだろっけ。

「ねえねえ、タロー。私ってどう？」

「どつって言われても困るよ。始めたばかりじゃない」

「今見た感じでいいから！」

「そうだね。念の才能【は】あると思うよ」

「キヤー！ やっぱり私って天才だわー」

自画自賛してはしやぎ回るネオンにドツと疲れが押し寄せってくる。嫌味に気づいてくれない。

言葉の裏の裏まで読めとは言わないが、ここまで単純だと将来騙されやしないかと心配になってくる。

ただでさえ占いのせいで悪い大人が寄ってくるのに。

まだ飛び跳ねて喜んでるネオンを強引にソファへ座らせ、子供に言い聞かせるように忠告する。

「いいかい？ 世の中汚いヤツがいっぱいいるんだから、知らない人に会ったら警戒しなよ」

「警戒？」

「うん、洋服とか買ってあげるからって言われてもついて行っちゃダメだよ？」

「そんなことしないもん！..」

「しそうだから言ってるの」

物語でクロロの外面に騙されてホイホイついて行っただし、信用できない。

いい人に見えても必ず疑え相手が執拗だったら俺か師匠に電話しろと、更に言い聞かせると頬を膨らませて拗ねてしまった。

「子供じゃないもん！　しないうてば！！」

「絶対だね？　約束破ったらお仕置きするよ」

「そんなのヒドイわ！！」

「ネオンが守れば問題ないよ？」

「むう　　っ」

「約束できないのー？」

「タローのバカ！！」

追い込みすぎたのか、キレたネオンがギャーギャー叫びながら辺りにあるものを片っ端から投げつけてくる。

男たち三人で宥めながら飛んできた物体を受け止めていると、更に暴れて手がつけられなくなった。

　　気絶させて黙らせよう。

　　そう思い、ネオンのみぞおちを狙って踵を繰り出す。

「「タロー！！」」

もう少しであたる。そう確信した瞬間、師匠がネオンを抱えて飛び上がり、カイトの拳が後頭部に直撃し壁に激突した。

「何するのさー！」

すぐさま起き上がり蹴りを繰り出して反撃に移るが、足首を捕ま
れ放り投げられた。

また壁に激突する！

背中にオーラを集め衝撃に備えていたのに激突した先はどこか柔
らかかった。

不思議に思つて見上げた先にあつたのは……般若へと変化した師
匠の顔。

「タロー……そこに正座しなさい」

女性に暴力を振るつてはいけません。

その言葉から始まった師匠の説教は朝方まで続いた。

第61話（後書き）

カイトや師匠のネオンに対する行動理由は次話で書くつもりです。

第62話

あれからずっと正座をしながら師匠のお説教を受けていた。

すでに窓の外は白み始め鳥の鳴き声がわずかに聞こえ、夜というより早朝でももちろんネオンはとつくにベツトで夢の中。

暴れまわったネオンが悪いのに何で俺がここまで叱られないといけないんだ。

そう思っているのが態度に出ていたのかカイトが心底呆れたように言う。

「お前、全然わかってないな」

「何がだよ」

「止めた理由だ」

理由？ そんなの女性を殴ったらダメだからなんだろ。

どうせ反論した所でこの状態から開放されるわけがない。

「タローはネオンと同じところがあるからな」

「は？ ありえないよ」

「ある。さっきも面倒だから殴って黙らせようとしただろ」

確かにその通りだ。

だが、あんな風に暴れてたら気絶させて黙らせる以外にどうしろと言っただ。

ネオンを心配したからこそ忠告していたのに、キレて暴れだす方

が悪いだろ。

思い出すとまたフツフツと怒りが湧き上がってきた。

無理やり手料理を食べるハメになったのも理不尽だと思ってるのだ。

「もう少し真剣に聞きなさい」

ぶすくれ始めた俺の隣に腰を下ろし言い聞かせるような口調で話し出した。

「タローはネオンを頭が悪いと決め付けていませんか？」

「……実際悪いですよ」

「育ちのせいで自己中心的でヒステリーを起こしやすいですが、聞く耳は持っているし理解力もあります」

「頭は悪くないにしても問題点ばかりですね」

一応ネオンのダメな所は知っているわけか……改めて聞くと物凄いい性格だ。

まあ、確かに暴れてなければ話を聞く意思や理解力はそこそこあるだろう。

以前話した占いの件はまじめに聞いていたし自分なりに解釈したようだった。

「ネオンのヒステリーは一種の病です」

「病気？」

「わかりやすく言えば、三歳児程度に幼児返りしてるんです」

「なるほど」

そちらの方が病気よりはわかりやすい。

幼児返りか……ネオンのアレはただの我がままだと思っていた。

師匠の話す通り病気だとすれば発病の切欠は父親か。どこまでもネオンの癌だな。

「あの時気絶させたとして、それが根本的な解決になりますか？」

「なりません……」

扱いがわからないから、気絶させて放置しようと思ってました。

「あの状態では会話すら成り立ちません。まずは落ち着かせて理路整然に言い聞かせるべきです。殴ろうとしたタローはネオンと同じ暴れる幼児です」

思い通りにならないから暴力を振るうのですから……そう師匠は続けた。

師匠の言葉一つ一つが胸に突き刺さってくる、俺が全面的に悪い。
頭いぶをたれて反省するしかない。

「それに一度ヒステリー状態になってしまえば、ネオンにも制御できなと思いますよ」

そこまでヒドイ症状だと判断したのか……物語でも破壊しつくすまで止まらずボロボロの室内で疲れて眠っていた。

病気といえば医者だがさすがに躊躇ちゅうちゅうしてしまう。

暴れなければごく普通の女の子だ。

日常のことでも料理さえ作らなければ特に不満はないのだ。

「あの件については俺が全面的に悪かったです。でも料理だけは止めて欲しいんですけど」

あの料理だけは反論したいことがたくさんある。

心の奥底に溜まりに溜まった不満を全て師匠やカイトにぶつけていく。

いつの間にか興奮していたらしく、語り終わった頃には息が上がっていた。

「タローの気持ちは理解できましたが、ネオンを止める気は僕にはありませんよ」

「何故ですか!?!」

落ち着きなさいと師匠の手が背中をさすっていく。

恥ずかしい……さっき言われたばかりになのにやってしまった。

「そうですね……ネオンに興味を持っていることは何だと思えますか?」

「料理や人体収集とか面白い物ですね」

「概ね正解です。その三つの違いがわかりますか?」

「趣味がいいか悪いか?」

「不正解ですね。対象がネオン自身であるか、それとも他人である

かです」

なるほど……人体収集や買い物は自分の為にやっていることで、料理は他人の為にやっていること。

実験台にされている感覚しかないし滅茶苦茶マズイけど、ネオンは俺に食べさせる為に料理をしている。

だから師匠は止めないし食べると言うのか。

理解はできるが納得するのは難しい、何せ対象は俺だ。

正直な感想を話すとそうでしょうねと返され思わ転げ落ちそうになった。

「タローはネオンに占いを止めさせました。タローもネオンの為に何かすべきではありませんか？」

正論すぎてぐうの音も出ない。

占いを止めさせたのは俺の勝手な都合が理由だった。今は少し違うが丸め込んだ時点では俺の我がままだろう。

まあ、ポトフレベルなら何とか我慢して食べてもいいが、カレーレベルは本気で無理だ。

食べようと思ってても身体が受け付けない。

「まだ二回目ですから失敗して当然です。それにポトフの時は横で見えていましたよ」

「あれで?!」

「昔、最初から出来る人間はいないと言いませんでしたか？ それに一から十まで指示して作らせてはネオンが料理嫌いになりますよ」

アレでもかなりの間違いを正していたらしい。

おそるおそるどんな間違いか質問して内容を聞くと師匠に土下座して感謝した。

野菜を洗剤で洗おうとしたり、辛いのが好きだからと豆板醤をピンごと入れようとしていたらしい。

うん、食べたら死ぬる。

師匠が見ていたからこそあのポトフレベルになったんだろつ。

「一先ずの目標は食べられることです。その意味では上出来です」

「恐ろしくハードルが低いんですが……」

「低い所から始めるものです」

「がんばります……」

「言い方も変えてみるといいでしょう。不味いは禁句です」

料理関連の書籍を読んでみなさいと締め括り師匠の説教は終わった。

寝室に戻っていく師匠を見送った後ソファに座りジッと考え込む。俺がネオンの為に来ること。

料理を食べて批評するのは当然だが、あの味を少しは改善しないと耐え切れないだろう。

「わかったか？」

「……うん、俺って子供だったね」

「そこがタローのいいところでもあるが、何事も限度があるってことだ」

「反省したよ」

「それならいいさ」

「カイトはネオンをどう思ってるの?」

「子猫みたいな子だな」

「気まぐれってこと?」

「それもあるが、世話を焼かれるのが当たり前だと考えてるところだな。毛づくろいが気持ちいいから撫でると主張してくる」

「だいたい師匠が感じてたことと同じか。」

「カイトはネオンのあしらいが上手いけど何かコツでもあるんだろうか。」

「ネオンみたいな女性は多いぞ」

「マジで?!」

「思わず驚愕して立ち上がりカイトを凝視する。」

「かなり特殊な性格だと思っていた……世界にはネオンが溢れていてるってことなのか。」

「対処がわかれば扱いやすい性格だな。後はそつだな……怒っている女性には反論しない方がいい」

「何で?」

「重要な事でもないかぎり、男が折れた方がいいんだ」

「そうなの？」

「そうだ。怒らせたなら負けるから怒らせないようにしてみる」

わかったようなわからんような……師匠みたいにネオンと接すればいいってことなのか。

怒らせないように話せてことだろう。

ネオンは何故怒り出したのか？ 記憶を呼び覚まし原因を探してみる。

んー……頭が悪いから理解できない、そう思い込んで満足に説明せず命令してたからだろう。

バカな子供扱いしてたし言い方もかなり悪かった。謝ってもう一度話し合ってみよう。

「あ！ そうだ。何でアレが食べれたの？」

「アレ？ ポトフか。食べれるから問題ないだろ」

「俺にはキツイよ」

「タローは舌が肥えすぎてるんだろ」

「そういう問題なんだ……」

「修行時代はアレよりヒドイ物ばかり食べてたぞ」

以前聞いた話は一部だったようだ。

基本的に食事は自分で作れと言われていたらしいが、それまでカイトは料理なんてしたことがなかった。

血抜きされてない生肉はまだいい方で、ヒドイ物になると幻覚キノコや毒カエルなども食べたことがあったようだ。

それと比べていたのでネオンの料理をマシだと判断したらしい。

「不味かったはずだが、ジンさんは一欠けらも残さず完食してくれた。上手かったって言ってたな」

「そうなんだ」

「だから俺も食べるし不味いなんて言わない」

カイトが完食した理由は予想通りか。

料理が不味かった理由はそれしか食べる物がなかったんだろうが、突っ込んでみしようがない。

ジンさんは……ジンさんだからだろう。

説教と相談の後、書庫に箆り料理関係の書籍を読んですごした。気づくともう昼で慌てて階段を駆け降りダイニングへ向かう。

カイトに道具の手入れを頼んでいたのに定宿に送るのを忘れていたのだ。

到着すると丁度三人でテーブルを囲みつつ和やかな雰囲気ですぐ昼食をとっていた。

「ごめん、送るの忘れてた」

「気にするな。食うか？」

テーブルに目をやると師匠が作ったらしき料理が並んでいた。頷いて腰を降ろした後、ネオンに視線を移して様子を伺う。

ニコニコと師匠と笑いながら話している……どうやら昨日の怒りは消えているようだ。

姿勢を正し座り直して大きく息を吸った。

「ネオン、ちょっといい？」

「なにー？」

「昨日はごめん。殴ろうとして」

頭を床に下げる俺をジッと見つめ黙ったまま答えない。

許してくれないのだろうか、そう思い顔を上げてるとそっぽを向いて照れくさそうに零す。

「もういいよ………私も悪かったもん」

ネオンが謝るなんて………転地が引っくり返ってもありえないと思っていた。

師匠が何か言ったのかと視線を送ってみるが、表情からは何も読めない。

まあ、いいか。許してくれたんだし気にしないでおう。

「ネオン、今日も料理作るの？」

「うん！ 晩御飯作るよー。何がいい？」

そう来るとは予想してなかった………何にしよう？

カレーにしてもポトフにしても基本的な知識も技術も足りていな

かった。

アレか、ネオンでも出来そうなモノを要求すればいいのか？

誰でも出来る簡単な料理。

おにぎりくらいなら握るだけだしネオンでもできそうだ。

米を研ぐ時点で躓くかもしれないが、師匠が見てってくれるだろう。

「おにぎり作ってよ」

「何それ？」

「えーつとね」

ペンを握っておにぎりの作り方を絵に描きながら説明していく。
ネオンは簡単すぎる料理に不満を持っていたようだが、俺が好きな料理なんだと言い張ると最後には了承してくれた。

よろしく頼むと言い残してカイトを連れて定宿に移動する。

「その顔止めてよ」

またあの笑顔だ。

バカにされてるとしか思えないので殴りたくなる。

「気にするな」

「気にするよ」

「夕飯が楽しみだな」

「まあ、大丈夫じゃないかな」

あれなら誰でも出来るし失敗する要素がない。

ちゃんとした形にはなっていないだろうが、食べれるだろう。

第63話

「これに念を込めるのか？」

「うん、この紙に書いてある通り刻んで」

今カイトに見せているのは新しいヒソカの檻で、耐久性の高い薄い金属の板だ。

故郷にあつた湯船の蓋みたいな構造で折り畳み可能。

これに俺が乗ってヒソカと入れ替わる。

神字を込めた道具は機械と同じ仕組みだ。

元になる道具に神字という部品を回路のように張り巡らせ、念と
言うエネルギーを充電する。

刻む部品や組み立てた回路によって様々な効果を発揮する念具に
なる。

刻むのはいつもの拘束罫だが、今までのようにハメる場所を俺た
ちで選べないのでこんな形になった。

金属の厚みが薄いので残念ながら高い効果は期待できない。
念を込めすぎると割れてしまうのだ。

ヒソカを捕まえておける時間はよくて3分程度、俺の予想では1
分を少し超える程度。

かなりの短時間だが拘束時間なんて30秒もあれば十分だ。

「使うまで服に隠すし、見破るのは難しいんじゃないかな」

「大丈夫なのか？」

「服にも仕込みをするから大丈夫。まあ、出来上がったら確かめてみてよ。理論上は問題ないはずだよ」

師匠いわくこんな念具は見ることがないらしいが、思いついても作らなかつただけだと思う。

持ち運ぶるとはいえ作成に手間がかかるし、効果は弱い上に使い捨て。

カイトが不安になるのも仕方がない。

こんな道具で拘束しなくても蜘蛛の元へ運ぶという目的は達成可能だが、その方法だと飛んだ瞬間ヒソカに首を落とされる可能性がある。

動けない状態で蜘蛛に引き渡せば俺の命は安全だ。

「具体的な流れはどうなるんだ？」

「それは……」

まず、ランタンで転移してヒソカの元へ行き、交渉してゴンとのタイムマンを了承させる。

交渉の餌にクロロとのタイムマンを提示する。

ヒソカは餌を確認しないと納得しないはずなので、クロロに化けたカイトを見せる。

交渉がまとまったら、ヒソカの元へゴンを連れて行きタイムマンさせる。

タイムマンが終わったら蜘蛛の元へご案内。

「こんな感じ」

「交渉は一人でやるのか？」

「うん。まあ、何とかするよ」

「わかった」

神字を刻み始めたのを確認すると携帯を取り出しつつランタンを呼び出す。

「俺はシャルと打ち合わせしてくる」

「手伝わないのか」

「忙しいんだよ」

不満そうに言わないでほしい。

作戦当日までに蜘蛛と詳細をすり合わせたり、ゴンに殴る準備をしてほしいと伝えたりと予定がびっしり詰まっている。

それに蜘蛛はまもなくヨークシンから去っていくので、ナックルさんに連絡を取ってクラピカを除念しないと心臓破裂だ。

中心街に飛びシャルと待ち合わせたカフェに向かう。

人目につく場所なので情報漏えいが心配だが、重要な案件を話し合うわけではない。

マフィアも俺たちより蜘蛛探しに夢中になっている。

歩いているとたまに賞金稼ぎに襲われたりするが、念も使えないような輩が多い。

気絶させて裏路地に転がせば問題ない。

ゴンにメールを送信しながらカフェに着くとシャルはテラスで優雅にカップを傾けていた。

オーラを少し練って到着を知らせると顔を上げて大きく手を振っ

てくる。

「遅い！ 俺の仕事を増やしたんだから早めにきてよ」

「ごめん。それで頼まれた件だけど」

寄って来たウェイトレスに紅茶を一つ注文して書類を取り出し打ち合わせを開始する。

シャルから頼まれたのは足の調達。

何時もなら通常運行されている飛行船や船で移動するらしいが、派手にやりすぎたせいで蜘蛛の面が一部知られたので使えない。

蜘蛛らしく皆殺しにして乗っ取らないのかと聞いたが、面倒だと返ってきた。

乗っ取るとシャルが操作しないといけないらしい。

「チャーターした飛行船はここ。運転手も一緒に乗ってる」

「オツケー、今日中に出るから三日以内に殺れるよ」

「一応準備できたらメールもらえるかな？」

チャーターした飛行船や運転手の費用は蜘蛛に出させた。

俺がやったのは実際に存在している人物名で貸切、金第一主義な運転手を雇って配置したこと。

運転手は帰れないだろうが、命の保障はしないと伝えてあるし諦めてもらう。

心の中で手を合わせ無事を祈っておく。気まぐれで生き残れる可能性もある。

「タローが頼んだのはこの袋に入れてあるよ」

「ありがとう。それじゃ、もう行くよ」

「この支払いよろしく」

「……わかった」

変なところでケチくさいな……差し出された伝票と紙袋を受け取り
会計を済ませにいく。

小銭をポケットに突っ込み定宿へUターンして自室に戻ると、早
速紙袋から服を取り出しハンガーへかけながらチェックする。

何というか物語で見たのと全く同じデザインだ。

なるべく長く着用していた仕事着。

そう注文をつけたので袖や裾に所々血痕が付着しており、二の腕
付近は少し破れている。

軽くブラシをかけビニールを被せて保護した後、ゴンたちの元へ
飛ぶ。

転移して周りを見渡すと驚いたのが全員壁に張り付いている。

「またいきなりかよ！」

「いめんねー」

「謝り方に誠意が見られない」

「ちゃんとメールしたじゃない」

「来る前にもしろっつーの」

「まーまー、コレあげるから許してよ」

「チヨコロボ君だ!」

「ポテチもあるよ」

ギヤーギヤー騒ぎ出した子供たちをお菓子で釣って黙らせ、クラピカに蜘蛛が街を出るので明日すぐに除念すると伝える。

聞いた途端表情が悔しそうに歪んだが約束は守ってくれるようだ。

「ナツクルさんをここに連れてきてもいいかな?」

「いいけど、どんな人なの?」

君を物語でボコボコにする人です……とは言えない。

「暑い人かな?」

「それじゃわかんねーよ!」

「まあ、クラピカに聞くといいよ」

「何故私が!」

「ヒソカを殴る準備もしておいてー」

「待て! 逃げんな!」

用件だけ伝えマントを広げて逃亡体勢に入ると、足首に何か巻

きつてきた。

目線を足元に移すとワイヤーが絡みついている。どうやら研いでいない物らしく切断には至ってないが、これでは転移できない。

「帰りたいんだけど」

「説明しろよ」

言葉と共に電気がワイヤーを伝って流され、のた打ち回って悶絶するハメになった。

電流は少し動けなくなる程度に調整されている。

さすがゾルディック。

燻る身体をイヌガミで治療しながら恨み言を零す。

「幾らなんでもひどくない？」

「逃げようとしたアンタが悪い」

「キルア、やり過ぎだよ」

「コイツはこれくらいしないとダメなんだ」

その理論はおかしいと思う。

ゴンが味方についてくれたが反省なんてするはずもなく、これ以上電気を食らいたくなければ全部説明しろと脅してきた。

説明するって言ってもなー……クラピカがいる以上作戦内容を詳細には話せない。

ゴンも殴るならともかく殺すとなると難色を示すだろう。

殴った後の事柄は伏せて殴る前のことだけを伝える。

「そんな感じでヒソカと交渉するから準備しておいてよ」

「うん、わかった」

「……待てよ。アニキが出てこなかったぞ」

「お兄さんがどうかした？」

「アニキに手伝わせるってこのことじゃないのか？」

そこまで突っ込まれると思わなかった。

当日ヒソカに余計なことを言われては困る、舌の油を増やして丸め込む。

「殴るのは別件だよ」

「別件って……また何か企んでるのか？」

「企むとか人聞き悪いこと言わないで。カイトも知ってるから安心してよ」

「ホントかよ」

「殺しの依頼はしないって言ったよね？」

カイトの名前を出したのでゴンとクラピカは納得したようだが、キルアはまだ疑っているらしく俺の意図を見透かそうと睨み付けてくる。

頭を巡らせ俺の言葉に隠された意味に気づいたのか、ハッと顔を

上げた。

「……アニキには殺らせないってことか？」

「意味がわかんないよ」

「依頼は殺しの手伝いだろ！」

正解へ辿り着かれ背中に冷や汗が流れ落ちていく。

どうしてこんなに疑ってくるんだ……カイトに任せの方がよかつたか？

ため息をついて顔を引き締め真剣な表情を作り出し目と目を合わせる。

「神に誓って俺たち【は】殺さない」

「ホントだな？」

「ああ、嘘だったら殴っていいよ」

「……信じてやる」

やっと納得してくれたか。

俺たちの手ではヒソカを殺さない予定だから嘘は言ってない……言葉の綾ってヤツだ。

ゴンたちは蜘蛛がこの作戦に参加するの知らないから、ここま
で言えば疑いは晴れただろう。

どうせヒソカが死のうが生きようがキルアはどうでもいいくせに。

「じゃあ、明日また来るよ」

「待ってるね」

ゴンの素直さを煎じてキルアに飲ませてやりたい。
ランタンにチョコバーを放り投げ、マントを広げさせ定宿へカイトを拾いに戻る。

時間が過ぎるのはあつという間でもう空は暗くなり始めている……ネオンが手料理を作って俺を待っている。

リクエストした料理はおにぎり。

失敗しても食べれるはずだ……そう拒否反応で震える身体を叱咤してカイトを連れ師匠の家へと向かう。

別にカイトを連れて行く必要はないが隣にいと心強いし、料理を片付けるのを手伝ってくれるはずだ。

ダイニングのテーブルに着くと、すぐにネオンが大皿に山盛り積みまれたおにぎりを運んできた。

おにぎりを見た瞬間、思わず頭を押さえる……ネオンを甘く見すぎた。

目前にあるのは極彩色の塊。

色は食紅でつけたのだろう。

ネオンの感覚はやっぱりおかしい……ドピンクや真っ青な物体に食欲が沸くと思っているのか。

頭を振って気を取り直す。

問題は味だ、色なんてこの際どうでもいい。

「いっぱい食べてね！」

「いただきます……」

まずは頂上にある緑色のおにぎりから攻略していく。
形は団子のようなだが、バラバラにならずしっかりくっついていて、
覚悟を決めて歯を立てるとゴリッと豪快な音が辺りに響いた。

岩かよ!!

ちゃんと水で煮て柔らかくするって言ったよな?!
味は何もついてないただ米だ。しいていうなら食紅の味か。
歯にオーラを込め噛み砕いていくと中から納豆が現れた。

「タローはソレが好きなんでしょ?」

「うん……好きだね」

「腐った豆が好きなんてタローって変」

「腐ってないよ、これはこういう食品なんだ」

首をかしげるネオンを放置して納豆入りおにぎりを全て噛み砕き
水で流し込む。

テーブルに置いたコップを見ると中に入った水が緑に染まってい
た。

おにぎりを持っていた手をひっくり返してみるとやはり同様に染
まっている。

見なかったフリをして次のおにぎりへ手を伸ばしていく。
今度はドピンクだ。

「ぐっ！！」

噛み砕いた途端、舌に激痛が走った。

気合で飲み下し中を割って調べると入っていたのは生の唐辛子。
何このロシアブルーレット。

「ネオン、辛いダメ」

「そーなの？」

「うん、苦手なんだ」

「もう！ 我がままなんだから」

どっちがだよ！

言い返したいのをグツと堪え説得して、唐辛子は食べなくてもいいとお許しを頂いた。

喉が焼けるようだ……こっそりイヌガミを呼び出し口内を癒しながら食べ続ける。

途中でおにぎりの色で中身が違うとわかったので、ドピンクは力イトに押し付けそれ以外を片付けていく。

真っ青なおにぎりの中身は劇甘な果物で、歯茎が痙攣するかと思っただ。

全てのおにぎりを食べつくし最後の一口を飲み込んだ後、手を会わせる。

「ごちそうさまでした」

師匠とカイトに手伝ってもらったおかげで、何とか完食できた。

まあ、味は悪くなかった。食べれたし吐き気もない。

「美味しかった？」

「美味しかったけどちょっと硬かった」

「そう？」

「うん、俺の説明が足りなかったね」

次はご飯を炊いてから握ってほしい……後で炊飯器を注文しておこう。

師匠は鍋を使っていたが、ネオンに鍋で炊けなんて要求できない。あー、炊きたてに手を突っ込んで火傷しそうだ。

故郷にあつたおにぎりの型はこちらにもあるんだろうか？

アレなら触る必要がないから火傷しないだろう。

味はこのままでいい……ヒドイ方向に変わっては困る。

至急道具を用意するから、しばらく夕食はおにぎりがいいと要求すると頬を膨らませた。

「つまんなーい！」

「美味しかったからさ。また食べたいんだよ」

「ホント?!」

「ぜひ明日も作ってほしいな」

「まかせて!!」

勝利は我が手中にあり……ネオンに見えないテーブルの影で小さ

くガッツポーズを決める。

何か間違えてるような気もしないではないが、これで生き残れる。キッチンに移動して空になった皿を洗っていると、カイトがボトルを差し出してきた。

「何コレ？」

「強力洗剤だ」

顔を近づけてよく見るとボトルのラベルに【頑固な汚れもスツキリ】とつたい文句が書かれていた。

確かに必要だろう。手のひらはおにぎりのせいでドドメ色に染まっている。

たわしにつけゴシゴシ擦って汚れを落としていく。

一時間も続けるとすっかり綺麗になったが、力を入れすぎたせいか血が滲んでいる。

「薬を塗っておくか？」

「イヌガミに頼むから大丈夫」

イヌガミに差し出して治療していると、携帯が震えた。

画面を開いて確認してみると、イルミからメールが来ていた。

疑問に思いながらもメールに目を通し、読み終わると身体が固まった。

「よくない知らせか？」

「……………うん」

「見せてみる」

携帯を渡しながら必死に頭を巡らせ解決方法を模索する。

「ただの連絡事項じゃないか。明日にでも切ってくる」

「ダメだ!!」

「何故だ？」

「ダメだったらダメ!!」

カイトの肩を強く揺さぶって絶対にするなと説得する。
メールに書かれてた内容は以下の通り。

【髪型は変えられるけど長さは変えれないから、切るかカツラを用意して】

物語でヒソカに変身してた時はカツラを着用していたのだろう。
予想外だ……今からカツラを調達して果たして間に合うのか？

「カツラをかぶるより切った方が早いだろ」

「勝手に切ったら縁も切るから」

ポカンと口を開き啞然としているカイトは放置し、急いで自室に戻ってパソコンを開く。

絶対に何とかする。

今までにない気迫を込め次々ページをめくっていった。

第64話

翌朝、またもやカイトを定宿に放置して単独行動をとる。

朝食にと師匠が持たせてくれたサンドイッチを頬張りながら、待ち合わせ場所でナツクルを待つ。

食べ終わって時計に目をやるとすでに約束した時間は過ぎていた。時間にルーズだとは思えない……：トラブルかな？

除念する現場に立ち会わせると約束をしたが、クラピカに心臓を握られている以上長くは待てない。

キルアへ後30分で来なかったら諦めてそちらに向かうとメールに書いて送信する。

それから20分がたった頃ようやくナツクルが現れた。

「おーい！」

「……遅すぎますよ」

「すまん」

ため息をついてナツクルの腕を引っ張り人気のない場所へ移動していく。

必死に謝罪してくれるが遅刻理由については一切口を割ろうとしない。

「どうして理由を話してくれないんですか？」

「いや……寝坊して」

瞳は動揺したように左右に揺らぎ額には汗が滲んでいる。

明らかに嘘だ。

首を振って無言で足を進めるとナツクルは地面に座り込み頭を擦り付けた。

「許してくれ！ この通りだ！！」

「わかりましたから止めて下さい」

人目につきたくないのに周囲に野次馬が集まり始めている。

慌ててナツクルを立たせた途端、彼の上着から何かが落下した。

反射的に受け止めた物体の感触はふわふわ柔らかい……目線を落としてみるとそこには灰色に薄汚れやせ細った子猫がいた。

三ヶ月くらいかな？

そう言えば小動物に弱いんだっただか。

物語でも捨てられたペットたちに餌をやっていた。

遅刻の理由はこれだ……きっと見捨てられずに拾ってきたのだらう。

「円らかな瞳に負けたんですね」

「あ……いや、オレはよう」

ナツクルが焦っている間に子猫を懐へ優しく入れる。

スクワラ生存が確定したので、カイトが楽しみにしていた犬たちはやってこない。

弱っているようだが何とかするだろう。

「お……おい！」

「うちに専門家がいますので貰っていきます」

「ま、待て」

「大切に育てますよ」

猫なら散歩の必要はないし、ご飯とトイレを用意すれば好き勝手に暮らすだろう。

部屋を空けることの多い俺たちにはぴったりだ。

準備はまもなく終わる……多少時間を割いても問題ない。

定宿に寄って子猫をカイトに渡してからゴンたちのホテルへ移動すると、またもや全員が壁に張り付いている。

不思議に思いながら見ていると、キルアが唾を飛ばしつつ詰め寄ってきた。

「アンタ……昨日の今日でもう忘れたのかよ！」

「何を？」

首を傾げて記憶を探ってみる……ナツクルやヒソカのことを話しただけだ。

他は何も話してないよな？

「来る前にメールしろって言っただろ！！」

「ああ！ ごめん」

そっぴやそっぴだ……すっかり忘れてた。

両手を合わせて謝罪するとキルアは疲れたように入たりこむ。

「もついい……」

バックからチョコロボ君を取り出し侘びとして差し出すを受け取るうとしない。

具合でも悪いのかな？

眼前で手をひらひら振ると大きく口を開けて噛み付こうとしてきた。

「まるで猛獣だ」

「うっせー！ 早く帰れ！！」

「今帰ったら死ぬって」

無茶を言わないでほしい。

チョコロボ君を開け、いつものように騒ぎ出したキルアの口内へ中身を放り込む。

ようやく静かになった。

ジェスチャーでクラピカを招きよせイヌガミを呼び出す。

「んじゃ、ソレを除念するね」

「わかった。終わったら私も鎖を解こう」

除念のデメリットである召還不能期間がどの程度になるかはわからない。

身体に巻きついているイヌガミの毛皮を撫で耳の後ろを搔いてやると、目を細め大丈夫だと鼻の頭を舐めてきた。

最後に毛並みに顔を埋めてからナツクルに視線を送る。

「少し待ってやってもいいぜ」

「……いや、もういいよ」

大きく息を吸い込んで魂食いを発動するよう命令を下す。

イヌガミの牙が突き刺さりトリタテンの身体を次々食いちぎりながら飲み込んでいく。

……その様子はまさに捕食。

意思などないはずなのに悲鳴が聞こえてくるようだ。

自分で指示しておいてアレだがこれは相当惨い。

ナツクルは自らの爪を噛んで怒りを堪えている、除念だとわかっていても止めたくなるのだろう。

やがてトリタテンを食い尽くしたイヌガミは悪魔全書のページへ吸い込まれた。

いつもと違い、異次元に帰還するのではなく本に封印されるようだ。

ページは真っ黒に染まり端に小さな白い文字で【40】と記されている。

召還不能期間を表しているのだろう。

40日か……思ったより長い。

ページをめくりランタン呼び出してから顔を上げる。

「戻った？」

「ああ、絶状態は解除されたようだ」

「こっちもお願ひするよ」

クラピカは頷いて俺の胸に手を当て鎖を引き抜いていく。わずかに心臓付近に痛みが走り眉をしかめた。

全ての鎖が抜き取られ一息つく……これで心臓破裂は回避できた。

「ありがとう。すっきりした」

「……私も礼を言おう」

「は?!」

「お前にではない! カイトにだ」

天変地異でも起きたのかと思った。

クラピカはこちらに背を向けてしまい表情を読み取ることはできない。

全身で質問を拒否されてる気がする。

肩をすくめてナツクルに意識を移すと顔から血の気が引き冷や汗が噴出していた。

心なしか息も荒い。

「どうかした? 顔色が良くない」

「わかんねえ……アイツが食われたらこうなった」

額に手をあてて体温を確認する……熱はない。

俺かナツクルどちらに原因があるかは不明だが、状況的に考えて除念が原因だろう。

ゴンにベットを借りナツクルを寝かせてからモラウに連絡を取る。

『お前！ 俺の弟子に何しやがった！！』

「直接には何もしていません」

興奮しているモラウを落ち着かせ状況を説明した後迎えに来るよう伝える。

『今は仕事で行けねえ。近くにシユートがいたはずだ』

「わかりました」

通話を切り即座にシユートに連絡を入れ同様に状況を話す。どうやら触媒かたまりを設置しているホテルの近くにいたようだ。ホテル名と部屋番号を伝えすぐに迎えに来るよう頼む。念の為メールで地図を送信してからナツクルを抱えあげた。

「すぐに来てくれるらしいから送ってくるよ」

「彼は大丈夫か？」

「しばらく安静にしていれば問題ないと思う」

「そうか……」

「俺はこのまま帰るよ」

「今度来る時はメール忘れんなよ」

「気をつけて」

約束したホテルへ飛びベットカバーを外してからナックルを寝かせる。

入室しないようホテル側に要求しているので、ホコリが溜まっているのだ。

備え付けのタオルで部屋全体を拭き掃除して多少はマシに見えるようにする。

室内があらかた綺麗になった頃、全力疾走してきたのか汗だくになったシュートがやってきた。

さすが弟子……キセルを取りに来たモラウとそっくりだ。

俺の襟ぐりを掴みながら、親友の容態を心配するシュートに部屋を好きに使うよう伝える。

「しばらく寝てれば回復しますよ」

「絶対だな!!」

「連絡をくれればすぐ飛んできますから」

何とか説得に成功した頃にはぐったりと疲れ果てていた。

似たもの師弟め……。

心の中で悪態をつきさっさと定宿に帰還する。

ダイニングに行き回りを見渡してみるがカイトに渡したはずの子猫の姿がない。

「子猫は？」

「そこだ」

カイトの指した方向を見ると、部屋の隅にある薄暗い場所に小さなダンボールが置かれ布が被せてあった。

あそこが子猫の住処になったのか。

カメラを手に持ちいそいそ近づくとカイトがストップをかけた。

「写真を撮るだけだよ？」

「ダメだ。慣れるまで放っておけ」

急激に変化した環境に怯えているらしい。

ああいう状態の時はあまり構うな、そう続けられ諦めて子猫の様子を聞く。

「ノミはいなかったが栄養状態が悪い」

「ご飯は食べたの？」

「食欲は旺盛だった。体重が戻れば問題ないだろう」

「なら良かった。で……どっち？」

「何がだ」

「男の子か女の子かだよ」

「メスだ」

女の子か……名前はなにしようか。

カイトが作成している念具の進行状況を確認してから倉庫へ向か

う。
生活に少し潤いができたな、そう思いながら決戦に使う道具に念をこめ始めた。

一方蜘蛛。

「穴を埋める」

ホームへ向かう飛行船の中、クロロは手足を集め話し出した。
ヒソカ殺害の為タローたちと手を組んだことは全員が承知しているが、簡潔すぎる内容にポカンとクロロを見つめる。

「……どうやるんだい？」

「マチ、お前はヒソカにメールを送れ」

「何であたしが!!」

「団長命令だ」

マチの反論を防ぎシャルへ顔を向けハンターサイトに広告を載せると命令を下した。

その後も矢継ぎ早に手足へ指令だけを出し、理由を説明しないクロロに手足たちは啞然を通り越し困惑している。

「私たちはやれと言われればやるわ。でも……」

「わかっている。今から話す」

手足たちの視線が集中する。

クロロは手を胸の前で組み手足たちを見渡した後、ゆっくりと語りだした。

「悪巧みの最大の不安要素はヒソカがタローの提案に乗るかだ」

「それはわかるけどよ……」

「不安要素を取り除く為に俺は行方不明になる」

「なっ!!」

「騒ぐな。振りだ」

ヒソカにクロロが【また】タローに誘拐されたと思込ませる。

その為の布石を打っていく……そうクロロは語った。

「マチ、直接的な言葉は使つな。あくまで遠まわしに何をしてるか聞け」

「あいよ」

「シャル、金額は最大まで吊り上げる。対象はわかるな？」

「了解」

「お前は最後の要だ」

「へマはしないよ」

「残ったヤツらは知り合い全てに人を探していると話を持ち込め」

「まかせてくれ！」

手足が動き出したのを確認して立ち上がり、壊れた窓から夜空を見上げる。

ここまで俺にやらせたんだ……失敗したらどうしてやるうか。

決戦まで残り三日。

温かな血液の感触を思い出しながら嬉しそうに表情を崩した。

第64話（後書き）

彼女はおまけ程度にしか出ないと思います。

第65話

除念から二日後の夜、自室で最終確認をしているとシャルから準備完了のメールが届いた。

内容に軽く目を通した後、念具が入った箱を持ってダイニングへ向かう。

「明日、決行するよ」

「予定通りか」

ダイニングで寛ぐカイトの髪を見た途端、ため息を付きそうになった。

あれからカツラを必死に探し回ったが結局見つからず、髪は短く切り揃えられ黒く染まっている。

短期間で入手できるカツラは到底使えるレベルではなかったのだ。

何度見ても違和感が拭えない。

物語と長年の付き合いから、カイトは長髪という固定観念が深く根付いている。

元に戻るまでこの違和感は付きまとうに違いない。

「どうしたんだ？」

「……何でもない」

「変なヤツだな」

「うるさい……さて、これが明日使う念具だよ」

追求を無視して、試験的に拘束用念具を取り出しながら効果を説明していく。

捕まえたフリをする以上、ククロに化けたカイトを拘束する必要がある。

首、手足に枷を嵌め、天井から鎖を垂らし身体に巻きつけつつ順に繋いでいく。

「練で外れるよう設定してある」

「常に絶でいろってことか」

「うん」

「俺はどうすればいいんだ？」

「ククロらしく座ってて」

「難しそうだな」

「……黙ってカメラを見てればいいよ」

餌の提示方法は写真とネット映像だ。タイマンまで直接会わせる気はない。

話しているうちに取り付けが終わった。連結部位を引っ張り強度を確認する。

「オーラを練ってみて」

「わかった」

カイトがオーラを練ると念具が乾いた音と共に床へ落ちた。
全て綺麗に外れている。

「大丈夫みたいだね」

「ああ、明日は何時に動き出す？」

「うーん、10時かな」

「了解」

念具を箱に戻していると部屋の隅から物音がかすかに聞こえた。
発生源に目を移す……どうやら子猫が起床したようだ。
うちに来てから彼女はお城ダンボールに籠りつきりで、一向に姿を見せない。
食事やトイレは俺たちがいない隙に済ませているらしい。

「お目覚めだね」

「部屋に戻るか。俺たちがいたら食べないからな」

「寝坊しないでよ」

「誰に言っている」

排泄物を検査した結果、健康状態は問題なかった。
籠城中なのは単に人間が怖いのだろう、自ら出てくるまでは放つ
ておくしかない。

翌朝。

起床しシャワーを浴びた後、頭から黒いタートルネックを被り同色のツナギを着用する。

腰にナイフホルダーを締めバックを斜めに下げたら準備完了。朝食を流し込んでから、カイトを連れイルミの元に向かう。

「やあ」

「おはよう、早速お願いするよ」

イルミはカイトの全身をくまなく眺めてから、上着を脱げと要求した。

鋏を背中に刺して変化させるようだ……サイズは攻撃用とは違って細く短い。

イルミは背骨のラインを指で確認しながら慎重に打っていく。最後の一本がうなじに吸い込まれると変化が始まった。

「うわ……」

ベキゴキと骨や筋肉が軋み、全身が波打つ。

何ていうか、人間に見えない。スライムみたいだ。

あまりのグロさに目を背けてしまう。

うっ……音だけでもかなりのダメージを受ける。

「終わったよ。後はメイク」

視線を戻すと、そこにはクロロがいた。

これは見事だ……本人にしか見えない。

イルミは何やら道具を取り出し額の刺青を描き始めた。

凹凸まで忠実に再現されていく。
絵の具にありがちな匂いは全くしない……ゾルディックの特製かな？

「大丈夫？」

「ああ、これはキツイな」

「……声までそっくりだねー」

「君がそう依頼したんじゃない」

まあ、そうなんですけどね。想像と現実は全く違うと言っか。カイトだと頭では理解しているのに、本能が戦闘体勢を取りそう
だ。

「ここで待ってればいい？」

「うん、明日までには終わるよ」

当たり前だが依頼内容には鉾の除去も含まれている。

定宿に戻りカイトを着替えさせている間に、放送の準備にかかる。空き部屋に布を張り巡らせ暗室にしてから真ん中にイスを設置。三脚でカメラを固定しパソコンへ接続していく。スポットライトをあてコードを全て繋ぎ終わった頃、カイトが入ってきた。

腕や足をぐるぐると回している。

「身体がギシギシするんだが」

「それはしょうがないよ」

身長はカイトの方が高い。

深く考えるのは怖いが色々捻じ曲がってそつだ。

「すぐ行くのか？」

「もう少し経ってからいくよ」

キッチンで緑茶と紅茶を入れ一息つく。

カイトは手渡したカップを眺めながら、ポツリと零した。

「……ちゃんと帰ってくるんだぞ」

「いきなりだね」

「少し不安だな」

不安か……俺が殺されないか、交渉は上手くいくか心配なんだろ
う。

根拠もなしに何とかなるって言った訳じゃないのに。

「急所に直撃しない限り、転移した瞬間に死ぬことはないよ」

「何故だ？」

「うーん、何て言うか……」

紅茶を一気に喉へ流し込んでから説明を開始する。

ヒソカは俺が転移してくるなんて思ってた。最初の一撃は条件反射的なモノになるはずだ。

咄嗟の攻撃は無意識の行動……オーラを意図的に込めれない。

よくある身体が勝手に動いたってヤツだね。

その後は交渉に持ち込めるまで逃げ回ればいい。

「だから、大丈夫だよ」

「ヤツが逃げたらどうするんだ？」

「ありえないね」

「……タローが格下だからか」

「うん、世界最強だって自画自賛してるくらいだよ？」

驕れる者久しからず……自分の耳まで痛くなりそうな言葉だ。

時計に目をやると開始まであとわずか。

カイトをイスに座らせ手早く念具取り付けた後、最後の仕上げに右手に力を込める。

俺の意図に気づいたのだろう。顔を横に向け頬を差し出してきた。

「食いしばらないでね」

「無茶を言つな」

オーラは込めず殴りつける。天井から垂れた鎖が大きく揺れた。

唇の端に血がわずかに滲んでいる……上出来だ。

こんな小細工は必要ないかもしれないが、念には念を。

ポラロイドを一枚とり懐に入れる。

「じゃあ、行ってくるねー」

「早く帰って来い。暇だ」

座ってるだけなのに文句を言わないでほしい。

円を展開させて緑のナイフを腰から抜く。

大きく深呼吸をした後、ヒソカを脳裏に描き転移の指示を出した。

ヒソカは触媒かほちやんたんを持っていたようだ

目の前が暗黒に染まりふわっと身体が宙に浮く。

案の定、マントから出た途端、右手後方から何かが飛んでくるのを感じた。

ナイフの柄で弾き返しつつ、床を蹴って勢いをつけ距離をとる。

円でヒソカの様子を探りながら周囲を見渡す。

外ではなく、どこかの室内だろう。

薄暗いので肉眼ではよく見ないが、かなり広そうだ。

「やあ、ヒソカ。久しぶりだね」

返事の代わりに激しい殺気が返ってきた。

ピリピリと皮膚があわ立ち脳内で警鐘が鳴り響く。

「話をしに来たんだ。物騒なオーラはしまってもらえないかな」

再び声をかけると今度は数枚のトランプが向かってきた。

最初とは違い、かなりのオーラが込められている。

ナイフでは弾けない。

飛来したトランプを全て本で受け止めると強く引っ張られた。

バンジーガムか。

ナイフを振り下ろし、ガムを切断する。

あー、もしかして戦闘モード入っちゃってる？

嫌な予感に冷や汗を流しつつ、本に刺さったトランプを抜いていく。

「言葉を忘れたのかな？」

「……ボクを馬鹿にしてるのかい」

やっとまともな返事が返ってきた。

「まさか！ そんな恐ろしいマネは出来ないよ」

「今日は一人なのかい？ 試験官」

「いつも一緒にいるわけじゃないよ」

「……用件は？」

ヒソカが一步一步近づいてくる。目を凝らし見つめているとようやく肉眼で確認できた。

あの趣味の悪いピエロルックではない……濃紺のスラックスに白いYシャツを着用している。
メイクなしのすっぴんだ。

ハンター世界ってイケメン多すぎじゃね？

強くて美形だなんて恵まれすぎだろ……アレか、その反動で性格が歪みまくったのか。

そう思わないとやってられん。

「ハンター試験の後、天空闘技場でゴンに会ってね。四次試験のことを聞いたよ」

ゴンの名前を出した途端、ヒソカの表情が狂気に染まった。目を爛々と輝かせ楽しそうに笑う。

「クツクツクツ……」

さつきとは別の意味で鳥肌が立った。

色んな意味で終わってるヤツだな。

ヒソカの笑いが収まるのを待ってから、再び口を開く。

「その時に頼まれたんだ。君を殴る為に強くなりたいてね」

「へえ、ボクの為に……」

「あー、んで、ゴンの修行をつけてさ」

「どんな修行をしたんだい？」

「詳細はこのディスクを見て」

懐から取り出したCD-Rを投げつける。

都合のいい所だけ切り張りしたヒソカ専用ゴンのビデオだ。

「修行が終わって、ゴンは強くなったのに君は行方不明だろ？ 困
ってたよ」

「なるほど」

「これが俺のお目当てさ。殺さずに気絶するまで相手をしてやって
ほしい」

「んー……嫌だね」

うん、予想通りの返答だ。

ヒソカが拒否する理由は蜘蛛に追われている身であること、話を
持ってきたのが俺であること、この二つだろう。

でもそんなことはとつくに織り込み済みだ。

わざとらしくため息をつき、額に手をあて大きく頭を振る。

「そっかーとつても残念だ。土産を用意してきたけど無駄になっ
ちやっとなあ」

「土産？」

俺の台詞を聞いた途端、ヒソカの眉がピクリと動いた。

ヒソカに見せ付けるように懐に手を入れ、来る前に撮影したポラ
ロイドを取り出す。

写真をペラペラ振りながらニッコリ笑顔を浮かべた。

「これさ」

ヒソカの目線が写真を捕らえた瞬間、表情が薄気味悪いモノから
真剣なモノへと変わった。

喉から手が出るほど欲しいだろう？
空気中に充満していた殺気が消えた。
頬がだらしなく緩む。

「……どうやったんだい？」

「それは企業秘密だよ」

痛いほどの視線が肌に突き刺さる。

偽りを見抜こうとしても無駄だ。俺はまだ嘘をついていない。

沈黙が支配する中、ふと視界の端に光が掠めた。

窓か……考え込んでいるようだがそろそろ頃合だ。

床に落ちているトランプを拾いつつ、ゆっくり窓へ近づく。

「俺は一旦失礼するよ」

ペンを取り出し、トランプにサイトのアドレスと俺の携帯番号を
記入していく。

「このサイトで手土産を生放送中なんだ。二時間後までに電話で返
事を聞かせてよ」

「また嫌だと言ったら？」

「君以外の誰かに手土産を持っていくだけさ。コレを欲しがると
は腐るほどいる」

窓を開けトランプをヒソカへ投げ返す。

「一分でも過ぎたらこの話は無しだ」

そう言い残し、地上へ身を躍らせた。

明るい外へ出た途端、周りの景色に啞然としてしまった。

遠くから野鳥の鳴き声が聞こえてくる、寂れた農村といった風情だ。

今までいた場所を見上げる……小学校だろうか。

円を広げてみるがヒソカ以外の人間は引つかからない。

過疎化が進んで廃村になった村だろう。

なるほど見つからないはずだ……こんな所には監視カメラも人目もない。

一先ず村はずれにある一軒家を勝手に借り、ピクシーを呼び出して地図を作成する。

ヒソカはまだ動きそうにない。

そう判断して、囲炉裏の灰へ触媒を隠し次の家に向かう。かほぢやんたん

電話が鳴るまで留まるつもりだし、タイムン場所も出来ればここがいい。

村のあちこちに設置し終わると監視に戻った。

ヒソカはビデオを見ているようだ。

表情が元に戻ってしまっている……いや、先ほどより酷い。

溜まりに溜まった欲求が爆発しそうなんだろう。

俺が調べた限り、ヒソカは九月以降殺しを一切していない。

彼の殺し方はとてつもなく目立つし特徴があるのだ。

まあ、蜘蛛の制裁から逃げれたと言っても無傷ではなかったのだらう。

この村に隠れ傷を癒していたのかもしれない。

パソコンを操作し始めた。サイトを覗く気だろう。

画面にクロク^{カイト}の姿が映った途端、天井を見上げ大口を開けて目を見開き何かを叫びだした。

この能力は音声は拾えない。だが、喜んでいることは何となくわかる。

足の間がヤバくなってるしね……。

正直、もう見たくない。

ランタンを召還して定宿へ戻ると丁度よく携帯が鳴った。

ボタンを押しつつ扉を開けイスの後ろへ回る。

正面のレンズを見つめわかりきった返答を尋ねた。

「やあ、ヒソカ。返事を聞かせてよ」

第66話

「話を？」

『かまわないだろう？』

ヒソカは返答前にクロロとの対話を要求してきた。
偽者である可能性を疑っているのだろう。

正直嫌だ……カイトは嘘がつけない。

だが、要求を断れば疑って下さいと言ってるようなものだ。
画面を指差しながらクロロへ囁く。

「ラブコールだよ」

そつとクロロを伺う。俺のアドバイス通り、カメラを見つめ黙つたまま微動だにしない。

大丈夫かな……心配だが、全て任せて天に祈るしかない。
携帯をクロロの耳元に押しあて聞き耳を立てる。

ダメだ。

何も聞こえない。

試しに耳へオーラを集め凝もどきを行ってみるが、効果は得られなかった。

諦めるか……そう思った時、絶対零度の声色でクロロが呟いた。

「……そんなに死にたいのか？」

ぞくりと震えた……慌てて目元を手で覆い隠し、表情を隠す。

偽者だなんて思えない。正にクロロそのものだ。
カイトは役者になれるな。

ヒソカも同じ思いのようで、狂ったような叫び声が漏れ聞こえてきた。

疑念はこれで吹き飛んだろう……自分の耳元に携帯を戻す。

「さて、答えを聞かせてもらえるかな？」

『クックククツ……イエスだよ。但し条件がある』

ヒソカが隠れ住んでいた廃村。その中心部にある広場をタイムン場所に指定してきた。

願ってもない、こちらの望み通りだ。

「いいよ。君の望む通りにしよう」

『それからもう一つ。彼と一緒に連れてくるコト』

「……悪いけど戦闘が始まってから持っていくよ」

『何故だい？』

「これは君のストッパーだ。手の届く範囲に置くはずないだろう？」

『約束は守るよ。ボクが信用出来ないのかい？』

「出来ないね」

さらっと嘘をつくな。理由がわからないなら自分の胸に聞いてみる。

「コレが欲しいなら君は」

『フェアじゃないね』

怒りのあまり携帯を叩き付けそうになった。

フェアとか信用とか……お前の口から出ると虫唾が走る。

交渉は感情的になった方が負ける。目を閉じて素数を数え精神を落ち着かせた。

「これでもかなり譲歩しているんだ。嫌なら嫌と言ってくれないかな？」

気に入らなければ話は終わりだ。そう暗に伝えるとヒソカは黙り込んだ。

どうやら効いたようだ。

ここまできたら決裂してもかまわない。

ヒソカがタイマンを受け入れようが受け入れまいが、居場所がわかった以上結末は変わらないからだ。

鎖を引っ張りつつ更に脅しを重ねた。

「この念具は一定の条件が満たされない限り外れない。例えば俺からコレを奪ったとしても、念は使えないよ」

『 負けたよ』

交渉は成立した。開始時刻は三十分後、通話を切ってからカメラの電源を落とす。

全く、一筋縄じゃないヤツだ。

カイトと最終確認をした後、キルアへメールを送りゴンの元へ飛ぶ。

子供たちは呆れたような顔を浮かべ壁に張り付いていた。

「アンタ！ いい加減にしろよ！！」

「うるさいよ、キルア。ちゃんとメールしたでしょ」

「今着信音が鳴ったとこだったのー！！」

お菓子を口に突っ込むとゴンへヒソカの件を伝える。

「今すぐ？」

「うん、悪いけど時間がないんだ」

「自分勝手なヤツだな」

「俺はそう言う人間だよ」

俺が尻を叩いて促すとようやく動き出した。

キルアはついてくる気満々で用意をしているが、今回彼は連れて行かない。

ヒソカから守りきれるのは一人が限界だ。

ゴンの準備が出来た頃を見計らい、そっとゴンの傍に近寄り腕を取る。

「タロー？」

「キルア、後で謝るから」

「お前！！」

キルアが慌ててワイヤーを伸ばしてくるが、間に合わない。無常にも届く寸前でマントは閉じ、二人の姿はきえた。

飛んだ場所は待ち合わせ場所とは違う、村はずれ。

ゴンへ細かい説明をしながら、カイトが書いた手紙を渡す。

「これを読んだらあっちへ向かって」

「ヒソカがそこに……」

「うん、一人でいけるよね？」

子ども扱いする俺の台詞に、むっとした表情を浮かべながらも頷いた。

頭を撫でて激励の言葉を送る。

「思いつきりぶん殴っておいで」

「うん！ 絶対取り返すんだ」

走り出した後ろ姿を確認してカイトを連れに一旦戻り、先ほどとは反対側の村はずれへ。

円を展開して鎖でぐるぐる巻きにした身体を抱えあげる。

かなり急いだのに、もうゴンはヒソカの元へ到着しそうだ。

足へオーラを流してスピードを上げ、廃校の屋上へ登り地上を見下ろす。

ここから約束の場所は近い。

ヒソカがこちらに気づいた。

ククロ口を柵の傍に寄せ、その喉元にナイフを押し当てる。

意図は伝わったはずだ。しつこいようだが、アイツにはこれくらい必要だろう。

ゴンが到着してしばらくは二人で何事が話をしていた。

修行の話でも聞いているのかな？

気になるがこれ以上近づくとゴンにバレる可能性がある。

妙に勘がいい……絶をしても無駄だろう。

やがて話が終わると距離をとって向かい合う。

ゴンは目蓋を閉じてゆっくり時間をかけてオーラを練っていく。

広げた円を食われそうだ……ククロ口も真剣な表情で見つめている。

ゴングの音が聞こえたきがした。

第67話

最初に動いたのはゴン、練りに練ったオーラを使い、ロケットのようにヒソカへ飛びかかる。

一打、二打と激しい連打を浴びせるが、ヒソカはニヤニヤ笑いながら全てを受け流していく。

さすがヒソカ……流が恐ろしく洗練されている。

移動速度も対応量も完璧だ。オーラも必要最低限しか練っていない。

背筋に悪寒が走った……俺が正面から向かっていったら一分持たないかも。

ナイフに切断効果があると言っても、あの速度で堅を厚くされたら傷を与えるのは難しいだろう。

攻め続けていたゴンの体勢がわずかに崩れた。

その隙をヒソカが見逃すはずはなく、眉間に手刀を入れられ地面に叩きつけられる。

立ち上がるうと両手をついた瞬間ゴンの右腕が大きく持ち上がった。

バンジーガムか。

身体が宙に浮き、再び地面へ叩きつけられた。

まだ始まって五分しか経っていない。

なのにゴンは既に血だらけでボロボロになっている。

対してヒソカは余裕綽綽。己からは攻めず、手招きまでしてゴンを挑発している。

厳しい修行で強くなっているはずだが、物語時以上に苦戦してい

る。

子供と大人……リーチ差が大きすぎるのだろう。
殴る為には懐に潜りこまねばならない。

それに己の肉体を武器にしている以上、バンジーガムが大きな脅威となつて立ちふさがる。

相性最悪だ。

その後もゴンは倒れても倒れても立ち上がり、愚直なまてに向かつていく。

傷を負い体力も削られているはずだ。なのに攻撃の度に精度は研ぎ澄まされ、練られるオーラに陰りは見えない。

戦いながら成長している、そして戦いに歓喜している。

そんなゴンに刺激されたのかヒソカ心底楽しそうに笑った。

彼の代名詞とも言える狂気は微塵もない、無垢な笑顔。

思わず自分の目を疑ってしまう。

信じられない……こんな一面があつたのか。

性根まで腐りきつた快樂殺人者。そう思っていた。

というか、彼を知る人間が見たら同じように頬を抓りたくなるだろう。

カイトはどう思ってるのか……声をかけようとした時。

「作戦タイム!!」

いきなりゴンが待ったをかけた。

遠く離れた俺たちにまで聞こえる程の大声だ。

呆気に取られたヒソカを勢いで了承させると、胡坐を組んで考え込んだ。

どうする気だ？

屋上の鉄柵を握り締め身を乗り出す。

ゴンに取れる戦法は限られている。

物語の石床のように周りにあるものを利用するのか？

だが、近場の物体ではあの時のような効果は期待できない。

鎖を引っ張り声を抑えて問いかける

「……………どう思う？」

「ゴンらしいな」

そういう意味で聞いたんじゃないんだけど……………ヒソカの手前長話は出来ない。

会話を諦め意識を戻す。

しばらくするとゴンが立ち上がった。

作戦が決まったようだ。

全身全霊で強大なオーラを練り、右手に集中させていく。

ジャジャン拳のグーか……………捨て身で突っ込む気か！

額から冷や汗が流れ落ちる。

これだからフリークスは困るんだ。

全てのオーラを右拳へ集め終わると真正面から殴りかかった。ヒソカはカウンターを繰り出し迎撃する。

「くらえ！…！」

骨が碎ける鈍い音が響き、拳と拳がぶつかり合う。

読み間違えたのか、オーラ量ではゴンが上回っていたようだ。痛みよりも驚愕でヒソカの動きが止まる。

その隙をつき、もう片方の拳でヒソカの頬を殴り飛ばした。

念なしの攻撃だ。顔が正面から90度移動した程度の威力しかない。

だが、ヒソカは潰れた手を見つめたまま動かない。何が起こったのかまだ把握できていないのだろう。

目前に手のひらが突き出され、ようやく硬直が解けた。

ヒソカがキーホルダーを乗せると、力尽きたのか意識を失った。その表情は満ち足りて笑っているように見える。

さて、これからは俺たちの戦いだ。

転移してカイトを地面に下ろし、ゴンの具合を観察する。

額が割れ、骨が折れているが生命の危険はなさそうだ……気絶したのはオーラを使い切ったせいだろう。

問題なしと判断して顔を上げる。

「ありがとう、ヒソカ」

殺さなかったこと、そして成長させてくれたことに対して心から感謝を送る。

少しだけ罪悪感が生まれた。思いがけない一面を発見したからかもしれない。

だがどんな心情を持とうと、ヒソカはやっぱりヒソカだった。腕にこびりついた血液を舐め、興奮したように笑い出す。

「クツクツクツ……礼はいらないよ」

「そうなの？」

「収穫するにはまだ早い！ 二年、いや三年後には！！」

思わず膝が崩れ落ちそうになった。一時前の自分を殴りたい。足に力を入れて気を取り直しゴンを肩へ抱えあげる。カイトと視線を合わせた後、その背中を押す。

「一つ、言い忘れたんだけど」

「何だい？」

大きく息を吸い込み、ニツコリ笑いかける。

「……コレ、クロロじゃないんだ」

暴露すると同時に、カイトがオーラを練って念具を外し俺の腰からナイフを抜き取る。

「騙したんだね……」

「勘違いしたのは君だ。俺は一言も本物だとは言っていないよ」

「いい度胸だ」

怒りに燃えたヒソカは一目散にこちらに向かってくる。よほど俺が憎いらしい。

すかさずカイトが間に入りナイフで切りかかった。

「行け！」

「頼むね」

足止めを任せ、近くにある民家へ逃げ込む。

押入れにゴンを隠し、神字を刻んだ鉄板を取り出す。ヒソカ専用
に作成した折りたたみ式の檻だ。

不備がないか確認しつつ、カイトの様子を円で探る。

変化のせいかいつもより動きが鈍い……片腕しか使えないヒソカ
に押されている。

シャルヘメールを送り、急いで元の場所に戻る。

「カイト！」

常人ならば目視できない程のスピードで攻防が繰り広げられてい
た。

速すぎて能力を発動するタイミングが掴めない。

かと言って、俺が参戦してもカイトの邪魔になるだけだ。

焦る気持ちを押さえつけ、地面に鉄板を広げ何時でも乗れる準備
を整える。

少し……ほんの少しでいい。ヒソカの動きが止まれば罠にハマれ
る。

「用意できたよ！」

「わかった」

何かある、そう気づいたヒソカがトランプをありったけ投げつ逃

亡を図る。

判断は正しいよ。でも甘いね。

カイトはフリークスに影響されまくっている。戦い方や考え方がそっくりなんだ。

まあ、ヒソカは知らないからしょうがないか。

「ッ！」

予想通り、カイトは降り注ぐトランプをもとめせず突っ込んでいった。

回避する意思など全くない。次々と身体中にトランプが刺さっていく。

ヒソカは慌てて蹴りを浴びせ接近を阻止しようとするが、繰り出した足をカイトに取られ地面に叩きつけられた。

「グッ！」

動きが止まった。

すぐさま鉄板の上に乗る罠を発動させる。神字が肌を這い回りきつく拘束していく。

瞳に映ったヒソカを目標に据え、位置を入れ替えた。

「チェックメイト」

檻にかかった獲物を見下ろし悠然と微笑む。

ヒソカは何とか逃れようとあがいている。

檻の耐久時間は短い。壊れる前に運ばないとこっちが殺される。

「届けてくるからゴンを見せて」

「俺たちだけで殺れた気がするんだが」

「不平は後で聞くよ」

全身血まみれで言われても説得力が全くない。せめて刺さったトランプを抜いてから言ってほしい。

あのまま戦ったらよくて相打ちだったろう。

ヒソカの腕を取り蜘蛛のホームへ飛ぶ。

マントが開き辺りを視認できた途端、手足に囲まれた。

全員殺気立ち、裏切り者を睨み付けている。

「俺を巻き込まないでよ」

「ああ、ご苦労だったな」

珍しくクロロから労いの言葉をもらった。明日は嵐に違いない。

「シャル、やれ」

「オツケー！」

シャルがヒソカの背後へ回った。

アンテナが刺さる様子を感じ深く眺める……この能力ってかなり厄介だよな。

一度操作されてしまえば、世界最強だろうと手も足も出ない。メルエムでさえ抗えないだろう。

あの甲羅に刺さるのかという問題を無しに考えればだけど。

「そろそろ帰るね」

「見ていかないのか？」

「遠慮しとくよ」

ヒソカが死んだら矛先がこっちに来るかもしれない。
好奇心は猫を殺す、いらぬ欲は出さないに限る。

「バイバイ、ヒソカ」

最後の別れを済ませ転移した。

民家へ戻り扉を開けるとカイトが甲斐甲斐しくゴンの世話をしていた。

思わずため息がこぼれる。血まみれのままやらないでほしい。

こういつ配慮が足りないんだよね、カイトって。

「どうだった？」

「ちゃんと配達してきた。それより定宿に飛ばさずよ」

定宿の方が薬はそろっている。

「この包帯が巻き終わったらな」

こういつ時、イヌガミがない辛いを実感する。あのこがいたら
こんなのちよちよいのちよいなのに。

あーっていうか、キルアに何て言おう。

傷だらけのままゴンを帰したら確実に電気を食らいそうだな。

ゴンが動けるようになるまで預かって、一人で帰ってもらおうか。うん、そうしよう。ホテルの前まで送ればいい。

「終わったぞ」

考え事をしている間に治療は大方終わったらしい。

「りょーかい」

「これも何とかしないとな」

「ああ、そうか。ゴンがビックリするもんね」

戻ったらまずイルミに電話だな……それからキルアにメールをしよう。

これが終わったら次の準備も始めないと。

まだまだ忙しい日々は続いていく。

第68話

あの後、ゴンが目覚める前にイルミの元へ向かい、鉾を抜いてもらった。シャワーを浴び髪も金色に戻ったが、元に戻らない物もある。

ゴンも起きた直後、カイトを見て固まっていた。気持ちはよくわかる。

ゴンの怪我は骨折以外大したことはなかった。フリークスだし、絶を使えば全治一ヶ月といった所だろう。

もしかしたらもっと早く治るかもしれない。

三日くらいは看病しようと思っていたが、キルアが猛然と反対した。

騙まし討ちで連れて行った手前何も言えない。

ゴンを届けるのはカイトに任せ、長年かけて調べ上げた資料を纏めていく。

第一目標はNGL不法入国。

理由は触媒かほちやんたんを持ち込む為。普通に入国したのでは絶対取り上げられる。

第二目標は女王上陸地点の特定。

一番の不安要素。

詳しい日時がわからないし、正確な場所も不明。

小国とはいえNGLは九州よりも広い、海岸線全てを監視するなど不可能だ。

予想と憶測で決めるしかないだろう。

第三目標は第二と平行して行う。NGLから俺たち以外のハンタ

―を締め出すこと。

第二目標が達成できなかった場合の保険だ。

他のハンターたちには悪いが他の国で頑張ってもらおう。

その方が安全だ。

最終目標はキメラアントの駆逐。

理由は言うまでもない。一匹残らず死滅させる。

終わったら通常サイズも全て探し出し、この世から絶滅させる。

今回取る手法は結構面倒だがこれ以外方法が思いつかなかった。

資料はだいたい集め終わったし、後はカイトの意見を聞きながら纏めていくしかない。

ファイリングしつつ説明手順を考えていると携帯が鳴った。

カイトからだ。無事送り届け師匠の家に着いたらしい。

すぐに迎えに行くと言え返事を返しランタンを呼び出した。

ネオンから今日の夕食を受け取りカイトを連れ定宿にとんぼ返りする。

ちなみにまだおにぎりは続いている。炊飯器の効果は絶大で味はかなり改善された。

色がアレなのは変わらないがそこは諦めるしかない。

このまま一生作り続けてくれないかと、密かに祈っている。

カイトが用意したファイルを読んでいる間に、緑茶を入れておにぎりを口に放り込む。

鬼のようにしょっぱい……どうやら塩を使うことを覚えたようだ。岩塩を使っているらしく噛むたびにガリガリと音がする。

旦那になるヤツは成人病確定だな。

完食してネオンにメールを打っているとカイトが資料から顔を上げた。

「飛行船で侵入するんじゃないのか？」

「あー、事情が変わってね……」

「その方が簡単だと言ってただろ」

「うん、そう思ってたんだけど」

問題は大陸一帯の天気だ。今年はどうやら台風の当たり年らしく、十月までは荒れ模様が続く。

飛行船は悪天候に弱い。最悪途中で墜落する。無理に実行すれば乗組員が危ない、そう話すと納得してくれた。

「空がダメなら海か陸か」

バルサ諸島地域の地図を広げ指で示す。

「海も同じ条件でダメだよ。ロカリオ共和国から陸路で向かおう」

「国境の大河はどうする？」

「小型ボートを使う」

ロカリオ共和国には触媒を持ち込める。購入してランタンで運べばいい。

ボートは速度重視で選び、対岸についたら大河に沈めればいい。

「無事入国したら締め出しを開始するよ」

「……片っ端から攫って放り出すのか？」

一人や二人ならともかく、何十人もハンターを拘束するなんて非現実的だ。

「何でそうなるのさ」

「誘拐は十八番だろう」

いつの間にそうなった。

悔しいがここ最近の行動を思い返すと言いつい訳が思いつかない。自業自得か。

頭を振って気分を変え話を戻す。

「んー……俺たちがやることを他のハンターのせいにするんだ」

「悪事を押し付けるのか？」

「そんな酷いことするはずないじゃない」

どう説明すればいいのか……基本的なことから話していくしかない。

「カイトはNGLをどう思う？」

「麻薬を潰してトップが代われれば問題ないだろう」

「きつと変わらないよ」

「そうか？」

「うん、根本が腐ってるからね。俺はNGLはカルト団体だと思っている。故郷にも似たような人たちがいたけど」

古いキリスト教の教えを信じ文明の利器を捨て十六世紀さながらの生活している。

物語を読んだ時、共通点の多さに驚いたものだ。

だが医療を受けられるし、子供は十六歳になれば親元から離れて暮らし世俗を体験して自分で将来を選べる。

大人だってその気になれば団体を抜けるし、それは咎められることじゃない。

「彼らとNGLの違いがカルトたるゆえんだね」

国家を作り権力を集約した時点でカルトですと宣伝してるようなモノだ。

幹部連中はジャイロと同類……根本を何とかしないと次の独裁者が産まれるだけだろう。

「それが締め出しと何の関係があるんだ？」

「大有りだよ。俺たちだけでは不可能だからね。ジャイロに手伝ってもらおう」

「ヤツと関係を持つなんてごめんだ」

全面的に同意する。

「手を組む必要なんてないよ。締め出さなきゃいけない状況を作ればいいんだ」

「回りくどい。はつきり言え」

こちらに来てからNGLについて情報を集められる限り集めたつもりだ。

電脳ページには批判はほとんどなく、賞賛の声ばかり。

住んでいる国民たちも一部を除き裏など知らず、その教義を守って生きている。

ハンター世界の人たちはカルトを脅威だと思っていない。だからこそNGLが建国できたとも言える。

「カルト国家の独裁者であるジャイロ。彼が一番恐れているのは何だと思う？」

「実態を知られること…… スキャンダルだな」

「その通り、外からヤツの作り上げた綺麗ごとをぶち壊す」

NGL内部に侵入し真実を白日の下に晒す。ついでにジャイロや幹部連中の経歴を顔写真付きで流せば完璧だ。

機材を持ち込み撮影できる人間は少ない、NGL国内にいるハンターが真っ先に疑われる。

良くて国外退去処分だろう。

「悪ければ命はないか」

「ヤツらは武器を持っていても使えない。怪我はするかもしれない

けど逃げれるよ」

支持母体である国民に知られたら全てが水の泡。外部からの情報を全て遮断しなければならぬ。

ハンターだけではなく一般人の入国も拒否するはずだ。

鎖国理由はいくらでも捏造できる、そう話すとカイトが苦虫を噛み潰す。

「胸糞悪い連中だ」

「そう？ 俺は大好きだよ」

彼らは単純明快で読みやすい。

「皮肉はやめろ」

「まあ、これがハンターを締め出す方法だね。麻薬工場は女王を殺した後に処理しよう」

物語で見た工場は相当大掛かりだった。在庫もきつと大量にストックされているだろう。

処理方法を間違えれば周囲一帯に中毒患者が大発生だ。

「時間をかけて少しずつやるしかないな」

「うん。それにもっと厄介なものもあるぞうだ」

「厄介？」

ニッコリ笑って試算した現在までの麻薬の売り上げ予想金額を見

せる。

パドキアの国家予算の約十倍だ。

「ジャイロはこの金で何を買ってるんだろっね」

ヤツにとつてNGLは世界に悪意を広める為の手段にすぎない。
麻薬はただの資金稼ぎ……深部には悪意に満ちた道具が隠されて
いるに違いない。

「単純に考えるなら武器か」

「俺もそう思う。まあ、今は目先のことから考えようよ」

「わかった。まずは詳細な侵入方法からだな」

地図には国境監視所や検問所を記入してある。
それを元にカイトがルートを選定して、俺が宿や移動手段などの
手配を行う。

一旦入国すれば、安全な場所を確保できるまで戻ってこれない。
野宿の用意も必要か……大荷物になりそうだ。

「車も買った方がいいかな？」

「いや、全行程は徒歩で突破する。車なんて目立つだけだ」
なら荷物は最小限か。

俺たちも原始的な生活を送ることになりそうだ。

せめて水浴びできる場所がありますように、そう祈りつつ準備を
進めていった。

第69話

カイトと共に倉庫の在庫を確認しながら購入品リストを作っている。

足りない物は高速ボートを始め盗聴器や爆弾、暗視スコープに水・食料・医薬品、携帯が使えない時の為にトランシーバーなど多岐にわたる。

性能や耐久性を考えると道具類は軍用がベストだし、早急に出発したい事情もある。

時間がかかる通販より買いに行った方がいいだろう。

ヨークシンなら簡単に手に入る、一応追われている身だ。できれば違う街がいい。

そう思ってハンターサイトで検索をかけると簡単に見つかった。出てきた中からパドキアの港町にある店を選ぶ。ハーバーが近くにあって丁度いい。

ボートはさすがに定宿に置けるサイズではないので係留場所を借りる。

翌朝、師匠の家で朝食をとりながらカイトと予定を話し合っていると、ネオンが食いついてきた。

「私も行く!」

今更外に出るなとは言わないが……時間がかかりそうだしちょっと面倒だ。

付き合わされた拳句、予定してた物品がそろいませんでしたでは困る。

「予定が詰まってるから、用がある店にしか行かないよ」

「えー！　ここだけ寄ろうよ」

ネオンは嬉々として愛読書であるファッション誌を差し出してきた。

手にとってページをめくる。

巻頭にでかかど【幸せを呼ぶピンクパール】という歌い文句が踊り、その下には購入者らしき女性の体験談がのっている。

よくある、買ってからいいことばかり起こる様に！　ってやつだ。うさんくさい……思わず眉根がよった。

「コレ……？」

「うん、ラッキーが続くだって」

本店があこの港町にあるらしい。

俺は信じられないがこんな大きく特集が組んであるんだ。能力者が製造しているのかもしれない。

真珠にはお手ごろな値段だ。お土産にすればいいだろう。

「じゃあ、買ってくるから着いてくるのは諦めてよ」

「絶対行くの！」

いつも通り手足をバタバタさせ駄々を捏ねる。

毎回毎回、ワンパターンすぎる。

どう説得するか、頭を悩ませているとカイトが助け舟を出してくれた。

「ネオン、今日は諦める」

「もう！　ずーっと家ばっかでつままない。たまには外に出たいのに」

駄々を捏ねるのはやめてくれたが、頬はふくらんだまま。

まあ、ネオンの言い分はもつともだ。

今まで真面目に……とまでは言えないが、ちゃんと修行してくれただ。

「ご褒美くらいあげてもいいかな。」

「明日なら好きな町に連れて行ってあげるよ」

「ホント?!」

「でもヨークシンはダメだからね」

「わかってるってば!」

ネオンは飛びあがって喜び、どこの町にしようか思案し始めた。

正直、長時間のショッピングに付き合うのは憂鬱だが、たまにはいいだろう。

これから忙しくてネオンに割ける時間は少なくなる。

「あつ。アクセはちゃんと買ってきてね」

思わず転びそうになった。意外とちゃっかりしてる……まあ、いいけどな。

希望と違う物を買ってくるとうるさそうだ。欲しいアクセサリ

に印をつけてもらい、雑誌ごと借りていくことにした。

朝食を食べ終わるとすぐにパドキアの港町に飛んだ。

まずはハーバーに向かい係留場所を借りようとしたが、高級会員制クラブだったらしく店員に追い出されそうになった。

普段着で来たのがまずかったようだ。

ハンター証をちらつかせると店員の態度が180度変わった。

こういう時は本当に便利だ。

無事会員になり場所を借りると船はどこだと質問された。

「これから買う予定なんだ」

「さようでございますか。ぶしつけですが、私どもの所有しているシヨールームが隣にございまして……」

店員が示した方向を見るとガラス張りの建物があった。

本当に近い。別の店で購入するつもりだったが、系列店なら多少の無理も通るだろう。

「どつするっ？」

「俺はどこでもいいぞ」

店員に案内させシヨールームに入る。

ボートの運転はカイトがする予定なので選ぶのを任せてある。俺が口を出すのは色とサイズくらいだ。

店員は次々、ボートを紹介してくるがカイトはなかなか頷かない。高級店というだけあって、内装や装飾が派手すぎるんだろう。

値段もネックになっているのかもしれない。一度使えば爆破しち

やうしね。

「カイト、さくつと決めてよ」

「ああ……」

ショールームを泳いでいたカイトの視線が一点で止まった。

何だろう……顔を向けるとそこにあつたのは薄汚れたゴムボート。

店員に詳しく話を聞くと他の客が処分してくれと置いていった物らしい。

実用一辺倒なボートで余計なモノは一切なく、エンジンが後ろについているだけだ。

「これにする」

案の定、店員は渋ったがハンター証と札束で頬を叩き無理やり納得させた。

明日までにメンテナンスと清掃を頼み、とつとと店を出る。

背後から店員の怨嗟の声が聞こえた気がした。

次は裏路地にある何でも屋。ハンター世界で有名な死の商人が営んでいて、その名の通り金さえあれば何でも手に入る。

店主に希望の品を伝え商品を出してもらおう。

ここで買う物は決まっている。

性能と使用方法だけ聞き、次々と床に積み上げる俺をカイトが不思議そうに見ている。

「そんなに買うのか？」

「消耗品だからね」

爆弾はもちろん、盗聴器も大量に必要なだ。

映像はピクシーの地図でとれるがそれでは弱い。世界を巻き込む大スキャンダルに発展させる為には音声は必須だろう。

物騒な物ばかり買う俺たちに店主は何も言わない所か、もみ手をしながら俺たちが欲しがりそうな品を出してくる。

カイトもなんだかんだ言いつつ、店主が出した剣を興味深く眺めている。

ようやく全て購入し終わった頃には日が暮れそうになっていた。

マズイ……急がないとお土産が買えない。

慌ててカイトに水や食料などを頼み、一旦定宿に購入した道具類を運んでからショップに向かう。

懸命に走り続けるとショップが見えてきた。

だが、様子がおかしい。店舗の前に人だかりができ騒ぎが起きている。

何だあれは？ 少し速度を落とすしゆっくり近づく。

人だかりを作っているのは全て女性だった。

もしかして売り切れたのか？ 騒いでいる女性の肩を掴んで話を

聞くと疑問が一気に解けた。

アクセサリーは効果だけでなく、使っていた真珠も偽者だったらしい。

騒いでいる女性たちは全て客で金を返せと詰め寄っている所だった。

店は扉を閉じていて人がいる気配はしない。

お土産に買って帰るって約束したのだ。このまま帰れるわけがな

い。

集まった客たちに声をかけ、返品したいアクセサリーを全て買い取ると宣言する。

予算オーバーだが、悪し様に罵られるよりはマシだ。

その後、アクセサリーを抱えつつカイトを拾って師匠家に飛ぶ。カイトが何か言いたげだが気にしない。

「うわ！ いっぱいだー」

ネオンにアクセサリーを渡すと早速首や耳に付けていく。パチモノだと発覚しているが満足しているようだ。

信じる者は救われる。効果があると思えばきつと幸せになれるに違いない。

俺たちがいない間にネオンは買い物リストを作っていた。

渡された分厚い紙束に目を通していくと色んな街のショップが書き込んである。

こんなに回る気なのか！ 不満が湧き出したがぐつと我慢する。一つの街だと言わなかった俺が悪い。

どうやら明日は世界横断買い物ツアーになりそうだ。

触媒の場所を思い出しつつ肩を落とした。

第70話(前書き)

簡単な地図です。参考程度に。

<http://3962.mitemin.net/i31209/>

第70話

翌日、約束通り世界横断ショッピング弾丸ツアーに出発した。ネオンのテンションは凄まじく文字通り振り回されている。

「キヤー！ 可愛い！！」

「ねえ、その店リストに入っていないよね……？」

「赤って微妙ー。白かピンクがいいなー」

「聞いちゃいねえ……ため息をつき、ずり下がったバックを抱えなおす。」

「出発してからすでに三時間、なのにまだ一つ目のショッピングモールにいる。」

「予定していた店以外にも片っ端から寄りまくるので、一向に次へ行けないのだ。」

「この調子ではリストにあるショップを全て回るなど不可能だが、ネオンは楽しそうにしているし、後で文句を言われることはないだろう。」

「ただ……。」

「タロー。これどう？」

「ネオンは二枚のピンクのシャツを交互に身体にあてつつ、どちらがいいか聞いてきた。」

「問題はこれだ。自慢じゃないが俺にはセンスなんて欠片もない。ぶっちゃけ同じに見える。」

「来る前、カイトに渡された紙を取り出す。いわゆるカンペだ。」

絶対に言っではいけない台詞を筆頭に、こつ聞かれたらこつ答えるなどネオンを怒らせない為の方法が細かく箇条書きにされている。

カンペいわく、この場合片方を適当に選べばいいらしい。どつちでもいいは禁句だと書き添えてあった。

「左がいいんじゃない」

「そう？　じゃあこつちにするね」

差し出されたシャツを受け取り会計を済まし、抱えた紙バックに放り込む。

四次元ポケットが欲しい。切実な願いが頭を掠める。

今まで収納系の能力が欲しいと思ったことはない。あれば便利だろうなくらいの感覚だった。

ランタンがいるしね。

意外だったのは手当たり次第欲しい物を買ったりしないこと。

自分に似合うかどうか吟味に吟味を重ね、気に入らなければ何も買わずに店を出る。

そうは言っても予想したよりは少ないだけで、普通に考えたら十分多いのだが。

昼時になりお腹が減ってきた。

ネオンお勧めのレストランに入り昼食をとる。

イタリア風だろうか？　メニューに書いてある料理には全てトマトが使われているようだ。

「チキンが美味しいから食べてみて」

そう言われ注文したのはネオンと同じチキンステーキ。
香ばしい匂いにつられ口に入れた途端、舌を強烈な刺激が襲った。
辛い！ ひたすら辛い。

涙目になりつつ水で流し込む。

顔を上げてネオンを見る、驚いたことに備え付けの唐辛子を振りかけて食べていた。

「辛くないの？」

「ちょっと刺激が足りないくらいだよー」

「そ……そうなんだ」

あれだ、きっとネオンと俺とでは食生活が違いすぎるんだ。
ネオンの料理をヒドイと思っていたが、当たり前前の味だったのか
もしれない。

生煮えの魚だけは頂けないが。

昼食を食べ終えた後もショッピングツアーは続いた。

思った通りリスト消化はできず、結局回れた街は三つ。

最後の街で夕食を食べてから師匠の家に戻った。

ネオンは帰り着くなりダイニングで戦利品を広げている。

「お疲れさん」

カイトが紅茶を差し出しながら労わりの言葉をかけてくれた。

「本当に疲れたよ」

体力的にはなく精神的に。待っている時間がきつかった。ネオンが選んでいる間ボーッと突っ立っているしかないしね。

「タロー、また行こうねー」

「……考えとくよ」

悪いがもう行く気はない。

ネオンのショッピングに付き合うくらいならククロ口と舌戦する方が絶対マシだ。

それから二日たち、NGLへ不法入国する為の準備が整った。

荷物は必要最低限、一日分の着替えと水、食料だけだ。

補給は一日一回。子猫の世話をする時に行く。

カメラや盗聴器などは橋頭堡を作り上げてから持ってきてくればいい。

「んじゃ、行こう」

「まずはパドキアか」

パドキアから飛行船で北上しハス共和国を経由してロカリオのセトル市に向かう。

なるべくNGLに近い街がよかったが、台風接近の関係上欠航便が多く選択肢がこれしかなかった。

飛行船で三日。もし旅客機がハンター世界にあつたなら半日で来れただろう。

核兵器があるのに何故飛行機がないのか。俺的ハンター世界七不思議の一つだ。

自動車や高速ボートが存在しているんだ。原油や技術が足りないわけではないだろう。

セトル市に到着した。

飛行場を出て人気のない場所まで向かい、携帯を取り出す。

GPSで現在地を確認してゴーグルをつける。

ここからNGLの国境にあるドーリ市まで走って向かう。

ロカリオ国内を横断する時くらい車で移動したい。ルートを決める際、カイトにそう言ってみたが、走った方が速いとぼっさり切り捨てられた。

市街地を出ると荒野が延々と続く。

ロカリオは国土の大部分が砂漠と荒野だ。限られた地域でしか農業を行っていない。

その為食料自給率が低く輸入に頼りきっている。

川が多いし水路を整えればいいのに……疑問を口に出すとカイトが笑った。

「何で笑うのさ」

「すまん、川があっても使えないんだ」

使えない……飲めないとかそういう意味だろうか。

だが農業用水なら多少汚れていても問題ないはずだ。

「どつという意味？」

「土を舐めてみる」

少しだけ立ち止まり言う通りにしてみる。

土はかなりしょっぱかった。

「塩分が多いね」

「深く掘れば掘るほど濃度が高くなるんだ」

なるほど、これでは水を引いても無駄だ。交配や遺伝子組み換えで塩に強い作物を作ったとしても限度がある。

それにこの土壌では水にも塩分が多量に含まれているだろう。

「厳しい国土だね」

「原油のおかげで豊かになったようだが、昔は毎年餓死者が出るほど貧しかったらしい」

カイトの講釈を聞きながら再び走り出す。

二時間ほど経つと起伏の激しい山岳地帯が見えてきた。

あの山が車より走る方が速い理由だ。魔獣が多く生息している為、正規ルートは山を迂回するように作られている。

当然迂回するより山を突破した方が速い。

生息する魔獣はCクラスからAクラス。襲ってくる魔獣だけを倒しながら突破していく。

ジンさんのおかげでこういうことは慣れている。

三つ目の山頂で昼食タイム。カイトが捕ってきたウサギに舌鼓を打つ。

その後特に問題が発生することなく、一日でドーリ市に到着した。

市内でホテルを取りシャワーを浴びて休息をとった。

不法入国者を防ぐ為、ここからNGLの国境まで要所要所に警備隊が配置されている。

暗くなるのを待ち兵士を避けつつ大河へ向かう。
残念ながら兵士の巡回ルートはネットでは手に入らなかった。円で警戒しながら進むしかない。

目立たないよう黒服に着替え闇夜を走る。

大河につくのは簡単だと思っていたが甘かったようだ。

リーダーでも装備していたのだろう、あっさり発見され辺りに銃声が響きわたる。

絶は念能力者は騙せても機械は騙せない。

腐っても念能力者。銃ごときでは死なないが、目的がバレたのは厄介だ。

一旦岩肌に身を隠す。

「どうする？」

「うーん、気絶させるか無視して進むか……」

作戦を考えている間にもどんどん兵士たちは集まってくる。

無視して進めば国境を固められるだろうし、気絶させるには数が多すぎる。

殺せば簡単だがそこまでする程ではない。

「リーダーを潰して街の方向に走ろう」

街に戻るフリをしてからNGLに再び向かう作戦だ。

「顔を見られるぞ」

「問題はそれなんだよね」

仮面なんて都合のいい物は持ってきてない。仕方がないので着替えの服を裂き顔に巻く。

視界がなくなってしまうが円を展開すればいいだろう。作戦を伝え早速動き出す。

岩陰から出た途端、一斉にマシンガンが発射された。まさに弾幕。あたれば痛そうだ。

カイトが傍にあった巨大な岩をいくつも投げつけ弾丸を防ぎ、俺は銃器を持った兵士を気絶させていく。軍用車の扉を壊し兵士を引きずり出してからリーダーだけを壊す。ついでにナイフでタイヤを傷つけてから次の車へ向かう。

兵士たちの怒号が聞こえてきた。

面倒になったのか、カイトが直接岩を軍用車に投擲し始めたのだ。そんなに大きな岩ではないし、高く放り投げているので逃げる時間はある。

全てのリーダーを壊した後、ドーリ市へ走りだす。後ろから無事だった車に乗り兵士たちが追ってくる気配がした。市外に到着するまでは距離を維持し、見失われないよう気をつける。

街に逃げ込んだと思ってもらわないと困るのだ。

街の明かりが見えてくると一気にスピードを上げ追跡をまく。下水道に隠れピクシーを呼び出す。

ヨークシンと違い死体は浮いてないが死ぬほど臭い。

「予定が狂っちゃったね」

「これくらい仕方ないだろ。何事も完璧には無理だ」

「まあね」

俺は完璧にやりたいんだけどな。そう思いつつ地図に目を落とす。地上ではサイレンが鳴り響き、兵士たちが無遠慮に建物へ押し入り俺たちを探している。

今は夜中なのに……迷惑なヤツらだ。

「またリーダーを持ち出されたら厄介だ。急ぐぞ」

「りょーかい」

太陽が昇ってしまえば一日待たなくてはいけなくなる。下水道から地上に出て大河を目指す。円を使い警備隊を避けながら進む。

夜明けが近い午前四時になってようやく渡河ポイントに到着した。予定通り、ランタンを召還してパドキアの港町に行き購入しておいたボートと共に転移する。

ゴムボートとはいえかなりの大きさだ。

ごっそりオーラが削られ少しふらついてしまった。

「大丈夫か？」

「……問題ないよ」

貧血みたいなモノだ。少し休めば直る。

心配してくれるのは嬉しいが今は時間がない。
ボートに乗り込みエンジンを始動させる。

「思ったよりエンジン音がでかいな」

「三km以内に俺たち以外の人間はいないよ」

「ならすぐにはバレないか」

カイトがハンドルを握って操縦する。

対岸までは五km程度。もつと川幅の狭いポイントもあるが、そういう場所には国境警備隊が常駐している。

渡っている途中、水中から何かが浮き上がってくる気配を感じた。人間のはずがない。動物だろう。

ワイヤーを伸ばし襲ってきた物体に巻きつけ引っ張りあげる。
釣れたのはカエルみたいな両生類。

粘膜だろうか、ヌメヌメした液体が手元に垂れてきた。

「キモ！」

電気を流し水面に放り投げた。

「タロー、今すぐ手を洗え」

「え？」

「あの粘膜には毒がある。放っておくとかぶれるぞ」

「マジで……」

カイトが動物関連で間違ったことを言うはずがない。

慌ててボートに備え付けのバケツで水を汲み、手とワイヤーを洗う。

その後も何回か襲われた。

触れずに倒す為、近寄ってくるカエルもときには同じく備え付けのオールを使い殴り飛ばした。

弧を描き飛んでいく。その姿を見て思わずホームランと叫びたくなった。

「俺、野球選手になれるかも」

「野球？」

「故郷にあったスポーツだよ」

「よくわからんが、なりたいならなれるだろ」

「……かもね」

確かに念を覚えハンターになった今ならなりたいモノになれる。

見た目は相変わらず変わらないし寿命もきつと長いだろう。

キメラアント討伐が終わったらか。こちらに来てから十年、ずっとこの為に生きてきた。

「どうした？」

「全部終わったらどうしようかなくて」

「どうするも何も変わらんだろ」

「変わらない？」

どういう意味だろう。不思議そうに聞き返した俺を見つめ、カイトは指折り数えながら話す。

「目標を決め方策を考え達成する」

「……あのさ、最初の目標が思いつかないんだよ？」

「なら俺が決めてやる」

カイトの言葉がストンと心に落ちた。そうだ、俺が決められないならカイトが決めればいい。

思い悩んだのがバカみたいだ。

「カイトは終わったら何をやりたい？」

「そうだな、ヌメーレ湿原が面白かった。また行きたい」

「生態調査？」

「ああ、ついでに地質も調べたいな」

「カイトらしいね」

「タローは気にならなかったのか？」

と言うより、ハンター世界の生物は全て気になる。

こちらに来たばかりの頃、図鑑で見る度どうしてそうなったと疑問符でいっぱいだった。

進化の過程が無茶苦茶なのだ。

百年前、果物類を主食にしていた鳥類が現在では肉食に変化してたりする。

環境が激変した訳でもない……発狂する学者が出ないのが不思議なくらいだ。

故郷にはない念が原因なのだろうか？

「ちょっとワクワクしてきたよ」

「だろう」

調査方法を話し合っているうちに対岸についた。

一旦相談を中断してボートから降り、予め積んであった爆弾をセツトしてロカリオ側に向かわせる。

ボートが対岸についたと同時にスイッチを押し爆発させた。

赤々と燃え上がり川底に沈んでいく。

ランタンで港に戻せばこんな手間をかける必要はないが、なるべくオーラは温存しておきたいのだ。

「さて、逃げようか」

「向こうに森が見えるな」

「りょーかい」

絶を使い、カイトが見つけた森へ急ぐ。

NGLの詳しい地図はネット上には存在しなかった。入国者には監視がつくし、地図の持ち出しが重罪だからだろう。

「橋頭堡はどこにするんだ？」

「人気ひとけのない洞窟がいいね」

不法入国した以上、街は論外だ。NGL国内にいる間他の人間との接触は極力避ける。

森に入り慎重に探索する。

中ほどまで来た辺りでカイトが洞窟を見つけた。うっそうとした草が茂り一見したただけでは入り口はわからない。

雰囲気はばつちりだ。

—先ずこの洞窟に腰を落ち着けることにした。

ピクシーを呼び出し最大サイズの地図を作成し、二人で覗き込む。

「ありゃ、奥に魔獣がいるね」

「この位置ならすぐには襲ってこないだろう」

こちらから出向く必要はないだろう。襲ってきたら倒せばいい。

「んじゃ、人が来るか確かめたいし1日ここに居座ろう」

「来るはずないだろう。魔獣がいるんだぞ」

「念には念だよ」

話ながら時計に目を落とす……そろそろ夜が明ける。

万が一発見されたら厄介だ。そう説明し携帯食料を頼張りながら監視を続ける。

まだまだ先は長い。交代で休息をとると決め、まずカイトに横になってもらう。

「何かあったら起こすよ」

「頼む」

疲れていたのかすぐに寝息が聞こえた。俺も今すぐ休みたい気分だが見張りは必要だ。

ここを橋頭堡に出来ればいいんだけど……そう思いつつ地図をジッと見つめた。

第71話

「タロー、起きろ」

ガンツと背中に鈍い痛みが走り、夢の世界から引きずり出された。

「……んー」

「三時間経ったぞ」

あまり寝てないせいかわ意識がハッキリしない。

荒っぽい起こし方と硬い地面のせいで身体がギシギシ悲鳴を上げている。

時計の針は真上を指していた。もう昼の12時か。

水で軽く濡らしたタオルで顔を拭くと大分目が覚めた。

「魔獣は？」

「まだこちらに気づいてないな」

なるほど……この洞窟は広い、蟻の巣のような構造で出口も複数ある。

なら、やるべきことは一つだろう。

襲ってきてから倒してもいいが触媒に被害が出ると困る。

それに住処に勝手に侵入したのは俺たちだ。見つかってないならこの状態を維持すればいいだろう。

よって俺たちと魔獣との間にある通路を分断する。

だが、天然の洞窟なのでやりすぎると全体が崩落するかもしれないな

い。

「外にある木で支えを作ればいい」

「支えかあ……」

「ないよりはマシだろう？」

それもそうか。カイトの意見を採用しまずは補給の為に定宿へ飛ぶ。

子猫のトイレを掃除して餌をやった後、パソコンやスキャナーとそのバッテリーを持ち出す。もちろん水食料もだ。

最後に縄のロープを抱え再び洞窟へ戻る。

一旦荷物を全て洞窟の外に出し、木を切り倒し中に運んでいく。

つつかえ棒のように通路にハメこみ、それと横木とをロープで結ぶ作業を続ける。

二時間程で出来あがった。浮き出た汗を拭いつつ完成した支柱を眺める。

まあ、これで生き埋めは回避できるだろう。

「本当にないよりマシだね」

「まあな、じゃあ壊すぞ」

「おっけー」

カイトが天井を殴りガラガラと通路が崩れていく。土煙が上がり無事通路が塞がった。

コンクリートがあればよかったかもな……後で注文しておくか。

その後、俺は荷物を中に戻しピックアップの地図で人間が近づかないか監視して、カイトには持ってきた機器類の取り扱い説明書を熟読してもらおう。

この後、夜になったら検問所に忍び込む予定だ。

目的は詳細な地図とNGL国内にいる外国人の情報の入手だ。出来れば戸籍情報を管理している政府庁舎の場所も知りたい。

その場で全て読むことは不可能なので、片っ端からスキヤナーでパソコンにデータを詰め込む。

「頭痛がしてきたんだが……」

「俺一人じゃ作業が間に合わないんだ。諦めて」

うんうん唸っているカイトを見ながら思う。

何故か最近、カイトはハイテク機器に異常な拒否反応を示す。

コンビを組む前は使ってたのに……不思議だ。

そもそも最新式を用意したから、昨日運転したボートより簡単に操作できるはずだ。

夜まで監視を続けたがカイトの予想通り、洞窟付近に他の人間が近づくことはなかった。

入り口を草や木でカモフラージュしてから国境にある検問所に向かう。

現地に到着し建物内を探る。もう遅い時間だと言うのに十五人ほどの人間が残っていた。

夜なら人が少ないだろうと思っていたんだけど……これは困った。

「うーん……思ったより多いなあ」

「国境検問所だぞ？ これくらい当然だろう」

「まあ、そうなんだけど」

ピクシーの地図を作り資料室を探す。二階の右端にある棚が並んだ部屋がそれっぽい。

その部屋に人影はないが隣にある休憩所らしき場所で五人の男女が休憩をとっている。

「二階に監視カメラはないね」

「ありがたい話だな」

検問所は大河の上に立てられている。大河の上はNGL国内ではない為、例外的に最新機器類が揃えられ入国審査などに使われている。

だが、その機器類の種類も限定されているのだろう。国境側の入り口には監視カメラがあるがNGL側には存在しない。

内からの侵入者を想定していないのだろう。カイトの言う通り本当に助かる。

「橋の上にいる警備員はどうしようか？」

気絶させたら侵入がバれる。そう思って眉にシワを寄せるとカイトが指で地面を指しながら笑った。

「下からいけばいい」

「は？」

地面に潜る？ そんなの無理だ。ここに下水道はない。

「橋の上じゃなく、下からいくぞ」

「無茶言わないでよ！」

「やれるぞ」

当たり前のことだがパソコン類は水に弱い、ミスって大河に落ちたりしたら壊れてしまう。

それに水中にはあの気持ち悪いカエルもどきが生息しているし、他にも危険生物がいる可能性もある。

全力で遠慮したい。

頭脳をフル回転させて違う方法を探す。だが、カイトはもう決めたのかスタスタと橋の下へ歩いて行ってしまった。

「ちよっ！ ビニール袋とか持ってきてないんだよ？！」

「橋脚を掴んで渡ればいい」

それこそ無茶苦茶だ！ 橋脚は細くどう考えても男一人の体重を支えられそうにない。

カイトは出来るんだろうさ……だが俺がマネしたら確実に橋脚は折れ、音で気づかれてしまうに違いない。

けどと言っても無駄なんだろうな……肩を落としてため息をつき、悪魔全書を消してシャツを脱ぎ荷物をくるんでいく。

所々太い部分はあるし、そこを利用しつつ橋の天井に張り付くしかない。

まあ、失敗してもまた来ればいいだけの話だ。うん、前向きにい

こう。

俺の気持ちを知ってか知らずか、カイトは軽業師のようにヒョイヒョイと渡っていく。

ああ、そつだ！ 荷物をカイトに持たせればよかつたじゃないか！！

俺のバカ……何で気づかなかつたんだ。

悔しいが仕方がない。頬を軽く叩き気分を入れ替え慎重に橋脚を渡る。

渡りきつた時には神経が擦り減り、精神的にかなり疲れきつていた。

特に警備員の下を通つた時、緊張して手のひらに汗が溜まり、橋脚を掴みそこね真つ逆さまに落下しそうになった。

何とかリカバーして事なきをえたが、つい恨みがましい目をカイトに向けてしまう。

「どうした？」

「……何でもないよ。とつと中に入ろう」

どうせ理由を話しても、何とかなつただらう、で終わるんだ。

不思議がるカイトを放置して二階の窓を開け内部へ侵入する。絶を使って気配を消し廊下を進む。

ノブを回すと鍵がかかっていたが問題はない。

カイトにピッキング道具を渡して開けるよう促す。

「頼むね」

「犯罪者に戻った気分だ」

「今更だね」

忘れないで欲しい、俺たちはすでに立派な犯罪者だ。

もし今までやってきたことがバレたら、賞金首として必ず手配されるだろう。

蜘蛛並みのA級は無理かもしれないがB級はいけると思う。

よく考えたら、不法入国はNGL以外でも数えきれない程やってるしね。

室内に入るとすぐに地図は見つかった。何てことはない、壁に飾られていたのだ。

思わず拍子抜けしてしまった。

さっそくパソコン機器をセットしてスキャナーでデータを読み込む。

「タローの予想通り、棚の中は書類だな」

「じゃあ、俺はこっちからやるからカイトはあっちをお願い」

「わかった」

ここで読みながら内容を選別してスキャンすることはできない。何せ量が膨大だ。

自然回帰は国家としてやるとこういう問題が発生する。

国家という形態をとっている以上、戸籍情報や税収、他国とのやり取りなど記録に残さなければならぬ事柄が多い。

探したい情報を見つけるのも大変だし、保存場所もとる。ぶっちゃけ無駄だ。

この部屋に入ってる書類をディスクにまとめれば一枚で済むだろうしね。

「内容確かめるのは後からか」

「うん、定宿に籠って調べるしかないね」

「字が汚くて読めないのがあるんだが……」

「こつちには特殊言語の書類があるよ」

「翻訳ソフトにかけれないのか？」

「手書きだからね。たぶん無理じゃないかな」

「厄介そうだな」

「それは最初から覚悟してるよ」

取り出しスキャンし終わった書類は丁寧に元の場所に戻していく。一応棚に分類分けの為にラベルが貼られているのだが、入国者の書類を置いてある棚に国際関係の書類があったりするので、信用は全く出来ない。

担当者が目の前にいたら怒鳴りつけたい気分だ。

朝までかかってようやくスキャンが終わった。ランタンを呼び出し定宿へ飛ぶ。

パソコンを開き盗ってきたデータをディスクにコピーしてから内容を読み込んでいく。

「俺はどうすればいいんだ？」

何を言ってるんだ……カイトにも手伝ってもらうに決まってるじゃないか。

そう言いながら予備のノートパソコンを投げつけるとカイトは苦い顔をして俯いた。

「また頭痛がしそうだ」

「とりあえず、目的の書類がそうでないかで分けてくれればいいよ」

渋々頷いたのを確認すると再び画面に目線を戻す。

カイトには言えないが、実はこれで戸籍データに辿りつけても無駄になる可能性が高い。

戸籍データ取得の目的は最初に女王に食われた兄妹を発見することだからだ。

名前覚えてないもん……NGLの人口はそう多くないが似たような兄妹は何組もいるだろう。

だが糸口はそれしかないのだから仕方がない。
数が少ないことを天に祈るしかないんだよね。

まあ、しばらくカイトの頭痛は続くはずだ。

せめて緑茶でも飲んでリラックスしてもらおう……そう思いながらキッチンへ向かっていった。

第72話

それから一週間、定宿に籠りきり盗んできた書類の分析を進めた。結果をまとめた画面を見ながら思う……先は暗くて長そうだ。

目的である外国人の入国情報や戸籍がある政府庁舎の場所は判明したが、入手した地図は詳細とは言いがたかった。

街や村が十数個程度しか載ってないのだ。いくらなんでも少なすぎる。

NGLは九州ほどの広さがある。それに特殊言語地区や未開部族が住んでいる地域もあるのだ。

少なくとも五十以上の集落があると考えていいだろう。

「うーん、次に情報を盗みにいく庁舎でまた地図をコピーするしかないね」

「いつ頃行くんだ？」

「明日にでも」

「そうか……ならシロはまた留守番だな」

「猫だし気にしないんじゃない？」

「まあ、一日中寝てるだけだろうしな」

カイトはそう言いながら優しくシロ、子猫の喉を撫でる。

彼を悩ませた書類の分類自体は三日で終わった。分析に忙しい俺とは違い、暇になったカイトは警戒心が消えた子猫をすっかり懐かせてしまった。

今では我が物顔でソファのど真ん中に寝そべり腹を見せている。

……お前の野生はどこにいったんだ？

「ご飯とトイレの時以外ほぼ寝ているので心配になったが、カイトから子猫の平均睡眠時間は二十時間と聞いて安心した。」

「ごく普通のことだったようだ。」

翌日夕方、庁舎へ侵入する為NGLの洞窟へ飛ぶ。前回と同じ荷物に暗視スコープを一つずつ持った。

NGLには電気がない。真つ暗な室内で求める情報を探し出すには明かりが必須だが、懐中電灯など使えば一発でバレてしまう。

庁舎まで50km程度。機器類を詰め込んだリュックを背負い、カイトに先頭をまかせGPSとコピーした地図で位置を確認しながら進む。

10kmほど走った所で腕を掴まれた。

「何？」

「あれを見る」

指で示された方向へ目を凝らすと広大な田園地帯が見えた。

村か何かだろうが地図には記されていない。

ペンを取り出し現在地を印をつける。

「近くに村があるんだろう」

「じゃあ、ついでに何人いるのか調べていこうよ。少し観察もしてみたいし」

「時間は大丈夫なのか？」

「ペースを上げれば問題ないよ」

円を一時的に大きく広げて村の場所を探る。そう提案するとカイトは頭を左右に振った。

「必要ない」

「何で？」

「向こうから煙の匂いがする」

どんな嗅覚してるんだ……円は常に展開させている。つまり3km以内には人家はない。

カイトが話した方向に行くと煙突から煙を上げている人家があった。

ありえん。昔からチートだとは思っていたけど……もしかしてフリークスは伝染するのか。

バカなことを考えつつ人口を調べ村を観察する。村人を見た途端目を剥いた。

「主要作物は芋のようだな」

「……荒地にぴったりだね」

正直作物はどうでもいい。問題は村人たちの服装だ。

皆同じようなデザインで色も濃さは違うが白か藍で統一されている。

相違点は施された刺繍くらいか。

遊ぶ子供たちを眺めていると鋭い頭痛が襲った。

「表情が暗いな」

「誰だってそうなるよ」

子供たちの服装は物語に出てきた兄妹の物とそっくりそのまま。目の前が絶望に染まりそうだ。

「何とかなるさ。今までだってそうだっただろ？」

明るく笑うカイトに背中を軽く叩かれた。

「全く羨ましいよ」

いつも前向きで明るくて樂觀論の塊だ。しかも強いし顔やスタイルもいい。

自分との違いに打ちのめされその場にへたり込んだ。

「バカなこと言っていないで行くぞ、時間がないんだろ？」

「……りょーかい」

手を引つ張られ立ち上がり本来の目的地に向かった。

村を出発した後もいくつか同じような村があったが、今度は足は止めず地図にマークだけつけていく。

速度を上げたおかげか予定通りの時間に到着した。

庁舎はレンガを積み上げた三階建ての建物だ。

検問所とは違い警備が緩い。というか営業時間が終了すると建物内に人がなくなった。

「簡単すぎるな。畏じゃないのか？」

「ただ単に電気がないからさ」

暗視スコープをつけ慣れた手つきで窓を開ける。

NGLの理念で許される明かりは松明や蝋燭みたいな物しかない。当たり前だがここは紙だらけ。おいそれとは持ち込めない。

「真つ暗になつたら仕事はできないからね。帰るしかないんだよ」

侵入を果たすと二手に別れ目当ての部屋を探す。カイトには地図探しを頼んだ。

戸籍課の部屋はすぐに見つかった。機材をセットして作業を始める。

行程が三分の一程進んだ頃、カイトが扉を開けて入ってきた。地図が入った額縁を掲げながら話す。

「タローこれでいいか？」

「素晴らしいね。どこにあったの？」

「偉そうなとこだ」

所長か何かの部屋かな。地図は一部を除きかなり詳細に記されている。

「助かるよ。次はこつちをお願い」

「気が重い」

「これで終わりだから頑張つてよ」

情報を集め終わるとすぐに定宿に戻った。

分析作業は徹夜で行い、三日後には終わらせた。

寝てないせいか少しふらつく。

濃いコーヒーを流しこみ、大きく引き伸ばした地図をダイニングの壁に張る。

「休まなくていいのか？」

「説明が終わつたら休むよ」

まずはまとめた情報を渡し地図を見るよう促す。

第一の目的は女王上陸地点を絞りこむ為に物語で出てきた兄妹を探すこと。

「兄はゴンと同じ年頃だと予想した。俺の勝手な考えだけどね」

「十二歳くらいか。妹は？」

「たぶん六歳から八歳くらいじゃないかな」

兄は妹を守ることに執着していたし、身長差もあった。年頃が近いとは考えにくい。

女の子の方が成長が早いしね。

「他の兄弟はいないと判断して絞り込んだ。該当したのは三百五十組」

「多すぎるな」

「同感だよ。更に海岸まで歩いていける距離に住んでいるかどうかで絞り込んだ」

その数は八十組、これでもまだまだ多いが実物を見ればもう少し減らさるだろう。

地図に該当する村に赤丸をつけていく。

「次は麻薬工場」

こっちは簡単だった。物語の描写から山岳地帯に洞窟を掘っていることはわかっている。

それに露骨な隠ぺい工作もしていた。予想した地域に大きな花丸を描く。

「ここが怪しい」

「何故そう思う？」

「情報がほとんどないこと、周囲に人が住んでいないことが理由だね」

近くに川が流れ森もあって食料は豊富そうなのに、政府はこの地域に一人も移住者を送り込んでいない。

何か理由があるにしろ様子見くらいはするはずだ。その偵察記録もない。

他の地域と違って地図の書き込みが極端に少ない事実もある。

「人を近づかせたくない、見られたくない物がここにあるはずだよ」

「それが工場だってわけか。村と工場どっちから行くんだ？」

「村からだね。北から海岸線に沿ってぐるっと回って南に……んで最後にここに寄ろう」

「決まりだな」

ポンと膝を打ちシロを抱えてカイトが立ち上がる。

「シロを構うのもいいけど明日までに戸籍情報を覚えてよ」

「わかった。タローもそろそろネオンに連絡しろよ？」

「何でネオンが出てくるのさ」

意味がわからない。ネオンには忙しくなるからしばらく夕食は要らないと伝えてある。

今連絡取る必要はないはずだ。

「女は拗ねると煩いぞ」

「だから何でそうなるのさ」

カイトはニヤニヤ笑いメールくらいは送れと言い残して自室に消えていった。

返事になってないんだけど……今ネオンの夕食を食べると俺死ぬかも。

というか食事をとるより寝たい。

でもまあ、忠告には従っておくか。

携帯を取り出しネオンへ近況を聞くメールを作成して送信した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577v/>

田中太郎 IN HUNTER×HUNTER

2011年9月19日23時51分発行